明治三十九年四月十五日發行
每月一回五日發行
明治三十三年二月十五日
第三種郵便物認可

女學世界臨時增刊

女玉手箋

第六巻第六號



博文館發行

女學世界定期增刊

女玉手箱

第六巻第六號

口繪

寫眞版

大日本女學會

●本會が十年來女學の通信教授に盡せる事畏くも　皇后宮の懿聞に達し特に御歌下賜の恩命を蒙りたり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す會則希望者は葉書又は電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢　束修四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎭子）○教育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歴史（大森金五郎）○萬國歴史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事敎育（三輪田眞佐子）○家事經濟（後閑菊野子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）附錄機關雜誌「なでしこ」

●簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢　束修貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎭子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歴史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

目下六卷迄發行　入會の好時機

東京麹町區下三番町三七　**大日本女學會**　電話番町一三三〇

女（甲の一）

女（甲の二）

東京府立職工學校長 今景彦先生監修

繪入 五行讀本

人生にとりて極めて必要なものでありながら其ものが餘りに近く吾人に接觸しておるが爲に反て屢々等閑視されておるものがあります。木火土金水の如きは其最も大なるものではあるまいか。本書は即ち此等五つのものに就いて其自然美から利用厚生の途に至るまで或は之を詩的に或は之を科學的に極めて廣義に極めて平易に極めて愉快に極めて流暢に記述したるものなり。

全部五冊

菊判美麗畫表紙 口繪寫眞銅版挿入 正價各拾五錢 郵税各四錢

((續刊))

- 火の巻……笠原留女君著
- 木の巻……今景彦君著
- 金の巻……今景彦君著
- 土の巻……河村精一君著

水の巻目次

水の性狀
空中の逍遙
地下の潜行
地上の旅行
動植物體内の巡行
機關内の運行

既成發賣

巖谷小波君著

世界お伽噺第八拾貳編 木馬物語

むかしギリシヤの人とトロヤの人と戰爭をしましたが長らくの間トロヤの城が落ちないので流石のグリシヤ人持て餘して居りました所へカルラッハと云ふ名僧の知惠を借り王のオデクフイスは好い計略を思ひ付き大きな木馬を拵へ腹の中に十二勇士を隱し巧く敵をあざむいて城の中に引入れさせ敵に油斷をさせて城を落しました則ち木馬の計略と云ふて世界のお伽噺中有名な極く面白き御話しであります

正價壹冊金八錢郵税貳錢宛 六冊四拾五錢 十二冊八拾五錢 廿五冊壹圓六拾五錢 五十冊參圓貳拾錢 全部百冊六圓廿錢

((續刊豫告))

- 第八拾參編……三ツの王冠
- 第八拾四編……馬の首
- 第八拾五編……馬の裁判
- 第八拾六編……甲良武者

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女(甲の三)

カメリヤは時代の要求により
生れたる最新最良の洗粉なり

カメリヤ洗粉

あらひこ



カメリヤは一家傳來的なる陳腐の原料を用ひて製せるものと全然趣きを異にす

カメリヤは温和なる香氣を有するも一度之を用ゆれば花香芬々として爽快忘る能はず唯に色を白くしつやをよくするのみならず殊に肌を滑かならしむる點に於て全く他品に見る能はざる一大特長を有す社交を重んじ衛生に注意せらるゝ貴紳淑女の化粧料として日常缺くべからざる佳品なり

定價一個
瓶入十二錢袋入五錢

◉本舖 東京 カメリヤ商會

◉聯合發賣元 本舖 ライオン齒磨 東京神田柳原川岸 小林富次郎

(甲の四)

春郊



市川秀方筆

（乙の二）

文學博士大槻文彦君序文
文學士物集高量君
文學士長連恒君共編
（新刊發賣）

韻文散文 美文辭彙

全壹冊
洋装總クロース
三六版美本紙數壹千餘頁
正價金壹圓貳拾錢
郵税拾錢

▲四月三十日迄の御注文に限……特價金九拾錢郵税拾錢

文章は其辭の推敲を要するのみならず、又想をも鍛錬せざるべからず、從來世に出でたる此種の書籍は辭の佳麗なるに專らにして其想を度外にしたるもの〻如し、本書は其辭の佳麗なるのみならず想の以て作文の資となすに足るべきものを古今數百種の書籍を涉獵して此を拔摘し一題目每に部を戲曲、謠曲、新體詩、和歌、俳句、俗謠、美文の七大部門に分ち、且つ逐一出典をも附記したれば、直に以て文章の上に引用し得べし。苟も文を學ばんと欲する者は此書に依りて多大の利益を享くべきのみならず、事に操觚に從ふの士と雖も此書を坐右にして其便益する所必ずや尠少にあらず、大槻文學博士序して曰く『此書百家の文より其華を拔き類を以て分ち收めて索引閲讀に便ならしむ文を學ばむ者一たび此書を繙かば左右其原に逢はむ之を索め得て朗讀玩味せば巧妙なるを得むこと俯して地芥を拾ふが如くなるべし』と以て此書が如何に作文壇上の好書なるかを見るべし。

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

伊藤左千夫作

小説 野菊の墓

小説 野菊の墓
小説 野菊の墓
小説 野菊の墓

中村不折畫

▲野菊の墓は曩に雑誌ホトトギス新年號の巻頭を飾れる小説にして、時流を拔きたる傑作として歓迎せられ、ヱノック、アーデンの俤ありと推稱せられたる出色の文字也、今や更に增補訂正せられて一冊子を成すに至れり。

▲野菊の墓は其の名の示す如く、可憐なる、清新なる、田園趣味に富みたる物語にして、著者の悲しき實歴談也。其の一字一句皆涙を以てものせらる。民子の哀れなる一生には何人も同情を禁じ得ざるべし。

▲總振假名 ▲高尚美本 ▲正價 金參拾錢 ▲郵稅 四錢

女(乙の三)

東京市京橋區築地二丁目十五番地 俳書堂 電話新橋二八八番

《書籍目錄》…………無代進呈致候…………《石齋十種目錄》



ゼム一粒の
馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる

ゼム一粒は
煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる

ゼム三粒は
音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる

ゼム五粒を
食前食後に用ふれば食慾を増進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる

ゼム十粒は
異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる

ゼム定價

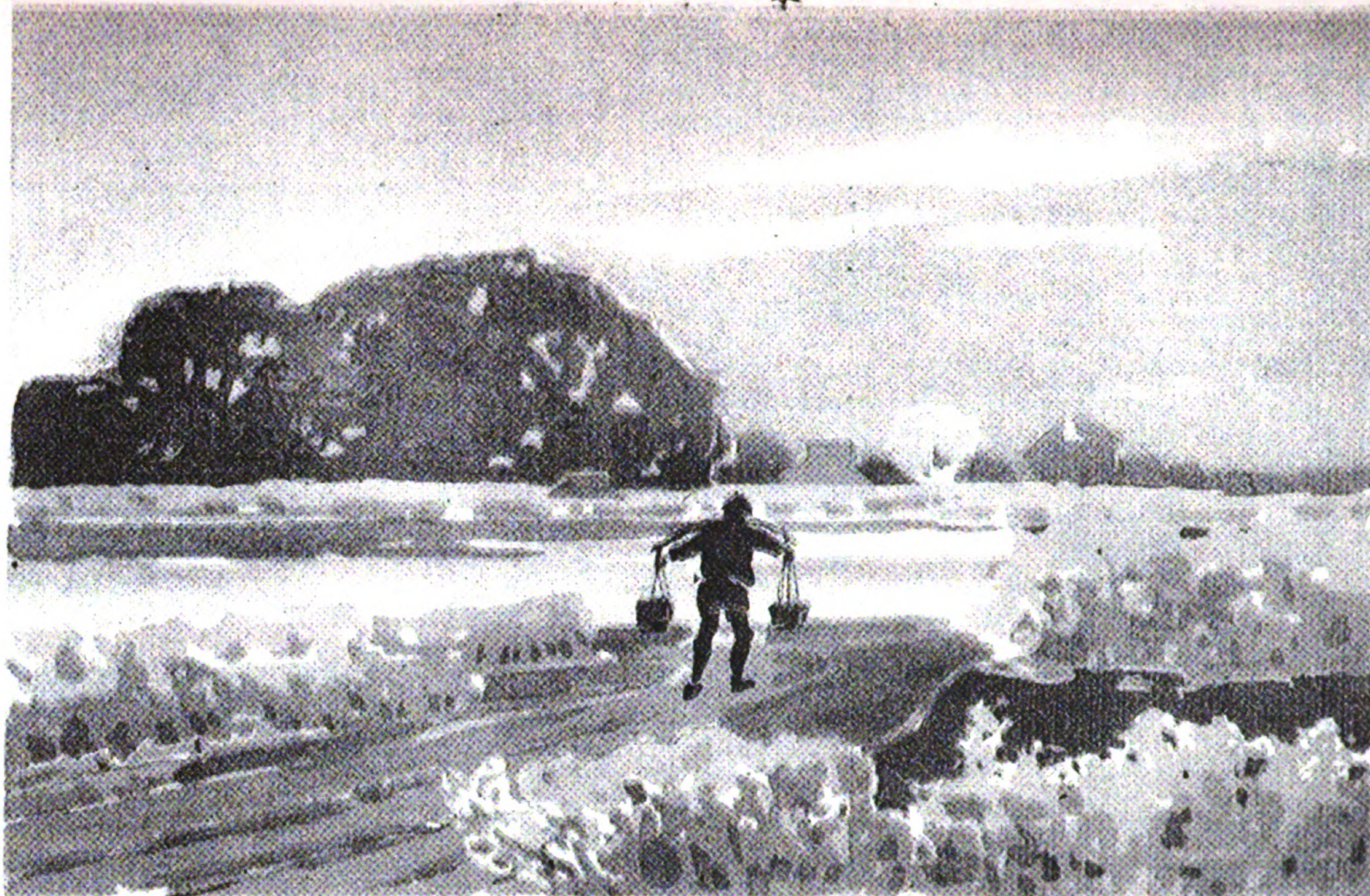
七十五粒入十錢	百六十粒入廿錢
四百卅粒入五十錢	九百粒入一圓
容器入ゼム	二十錢

日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎

支舖 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會

其他賣捌は全國各地賣藥化粧店にあり

菜花千里



織田東禹筆

根治確證

わきが

新治療藥ラヒヨン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ内

價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

原名ヘグネス

有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●わけ毛落毛を止めはへざわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

化學製品

色の白くなる

防ハンドコロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女紳士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

月やくをろし

メソルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は效能極て烈強なるも毒も身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

●專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

根治確證 新治療藥

梅毒

ギネール GINEL

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとり●●如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこねかんそ骨うつき其他如何なる惡性の梅毒も必根治す

輕症は半劑惡性重症も二劑用よ誓て奏效す世間種々雜多の無效なる驅黴藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑參圓郵劵代用一割增

らい病

新治療藥 ダービン

本劑は最近歐洲諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣弊館幾多の調劑の實驗に鑑み丸劑となしたる者にて其有效確實なる本劑に優る者なし試に壹劑分丈けも用ひ見よ必ず大効あり壹劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵劵三錢送れば說明書進呈す

獨逸撰方 效驗一夜に顯る

りん病

新治療藥キーロン

本劑は最新の文明的有力藥にして如何程頑固劇烈なる淋病しよかちも一夜に輕快を覺へ膿血速に止り痛を止め輕きは一劑分重きは二劑分如何なる惡性の頑固慢性症も特製を用よ忽ち根治の目的を達す本劑は內服すれば一種の化學的變化を起し強度の殺菌防腐液となり小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を根底より驅逐し人に知られず居ながら文明的新治療を受るを得速に用て病根を斷絶し苦惱を脫せよ

日本一手發賣本舖 藥價一劑輕症用六十五錢二劑重症用壹圓卅錢特製惡性頑固症用貳圓卅錢

●專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

（丙の一）

文學博士　高山林次郎君遺稿

文學博士姉崎正治君　文學士齋藤信策君共輯

樗牛全集第五巻 想華及消息

△口繪——樗牛先生墳墓の圖(コロタイプ版)及樗牛先生原稿筆蹟(寫眞銅版)挿入

樗牛一代の論評及び研究の外、別に一天地を成せるもの是れ彼れが創作の想華と消息文となり樗牛の天眞を發輝するもの却て彼に非らずして此にあるもの又た多からん今や最終の巻に至つて此最も趣味多豐なる消息數百餘通を收めたり全集を讀了し來つて讀者又た此別乾坤を見る豈妙ならずや

全一冊洋裝
金縁金模樣
頗美本紙數
約六百頁
近日發行

樗牛全集第一巻 美學及美術史

全

第一部美學上の研究
第二部日本美術史
●總論●奈良朝以前の美術●天平時代●平安時代

洋裝大判美本
正價壹圓五拾錢
小包料拾五錢

樗牛全集第二巻 文藝及史傳

上編

本編收むる所の主なるものは巣林子評論、運命と悲劇歷史的精神、桐一葉と牧の方、社會小說論、英雄論、理想的人物の表現、文明批評家としての文學者其他

洋裝大判美本
正價壹圓五拾錢
小包料貳拾錢

樗牛全集第三巻 文藝及史傳

下編

▲釋迦▲平相國、平家雜感、清盛骨相考▲菅公傳、菅公年表、▲史傳雜纂、南歐美術論、ナポレオン三世外八項▲文藝評論補遺三十一種

洋裝大判美本
正價壹圓五拾錢
小包料拾五錢

樗牛全集第四巻 時勢及思索

全

▲第一期(倫理問題研究の時代)▲第二期(家主義の時代)歷史と人種外八拾餘目▲第三期(信仰覺醒の時代)雜篇(學説と人格、人々自ら悟らざるべからず外五十餘目

洋裝大判美本
正價壹圓五拾錢
小包料貳拾錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(丙の二)

出でたり!! 最新最良の婦人玉手箱

婦人の重寶

西谷龍顯君編著

◎大阪美本　價五拾錢　◎郵稅六錢

內容

(一)家事の重寶　△掃除法△洗濯法△磨き法△釘拔法△銹を去る法△臭氣を去る法△家具しみぬき法△家具保存法△靴の取扱△接合法△洋燈の注意△虫退治法

(二)臺所の重寶　△玉子料理と飲料△肉料理△穀類野菜の調理△菓子と果物△臺所の心得△物の貯藏法△物の試驗法△廢物の利用

(三)育兒の重寶　△幼兒の保育△初生兒の營養△齒の注意△小兒と睡眠△小兒取扱上の注意

(四)醫療の重寶　△救急の手當△中毒の手當△飲食物の注意及藥品△病時の注意△病氣傳染豫防△凍瘡の手當△種々の手當△用具の手置

(五)衣服の重寶　△白色もの丶取扱△フランネルの手置△メリンスの取扱△黑色もの丶取扱△手皮の手置△面布の取扱△毛糸もの丶扱△靴下の注意△羽毛の手當△しみ拔き法△染色法△裁縫の要

(六)化粧の重寶　△色を美しくする法△髮毛を美しくする法△眉毛の手入△齒の養生

(七)ナフキンの折方(一々繪圖を入れて說明す)

◎以上を各數百項目に細別して通俗平易に說明してあります▲女子や細君の知つてゐなければならぬ細かい事は數千もあるのです此を大體心得て置かぬと婦人の役が勤まらないのに大抵の婦人は其百分の一も御存じない。▲それを知らない爲に良人に疎ぜられ小供を病はせ又朋輩から笑はれて居るのをも御存じないのです。▲それでは大變といふので著者は數年間苦心して此細かい數千の心得を一々實驗家に聞たゞして誰にでも分る樣出來る樣に拵へたのが此本です。▲こんな親切な重寶な本は外にはありません

娘に與へたる母の書翰

堀內新泉君著(新刊)

大阪美本　價四拾錢　郵稅六錢

是れ文辭の優雅、思想の穩健を以て有名なる堀內新泉君苦心の述作にして、世才と經驗とに富める賢母が遊學中の愛娘に向て春夏秋冬隨時長大の書信を發して、修學の心得より、卒業後處世上の要訣を敎へたるもの、眞情流露、熱誠滿幅、血と淚とは紙上に淋漓たり蓋し婦人の美性を修養し、嫁して後良妻賢母となる資格を養成するには本書に若くものなし、惟ふに學校敎育の及ばざる所は本書に依て始めて補ふを得べく、實に婦人界の爲めに最新最良の一大福音也。

東京市京橋區南紺屋町十二番地　**實業之日本社**　(電話新橋八七四番)

賣捌　全國各地書店

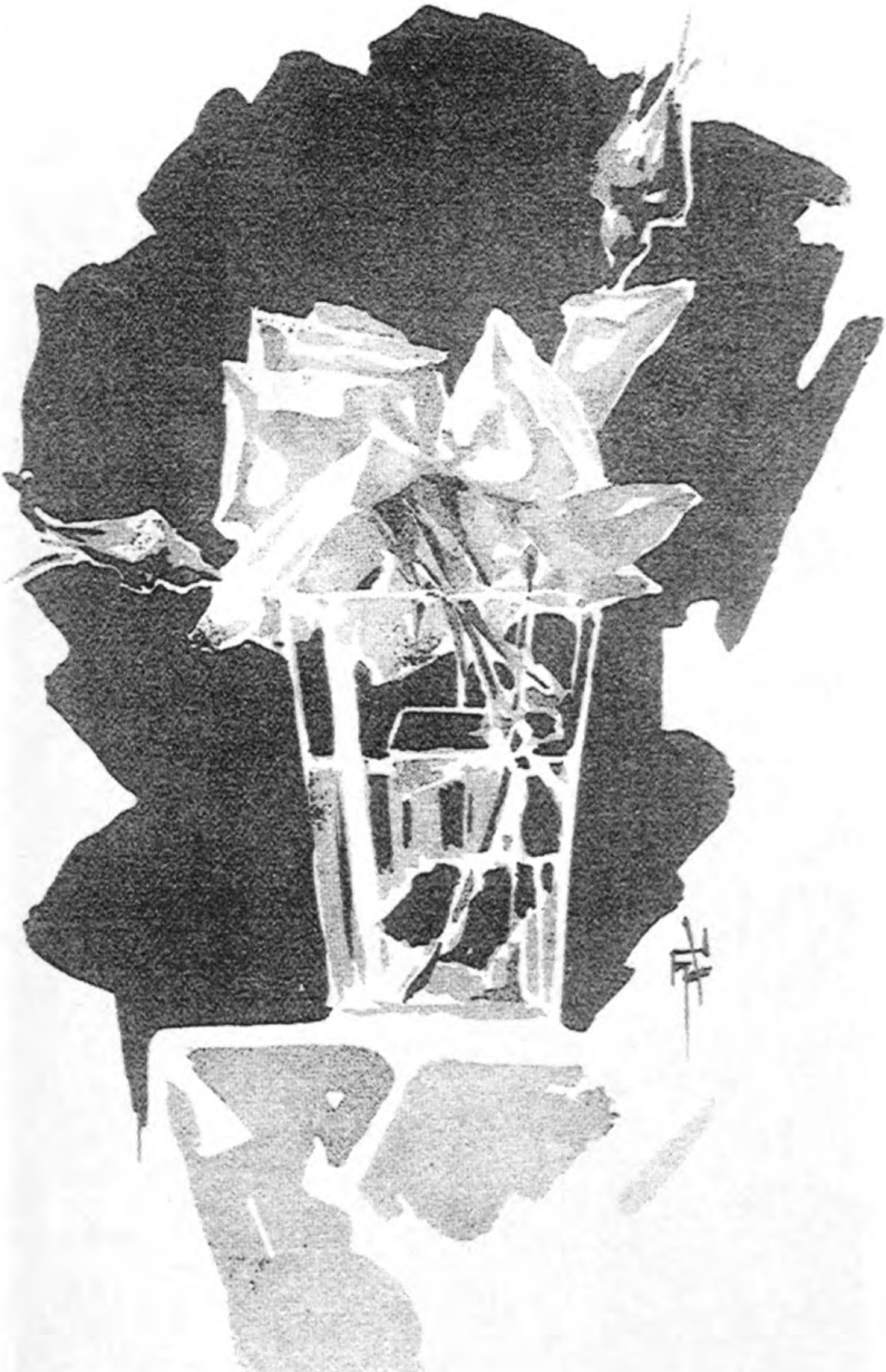
女(丙の三)

詠歌



一條成美筆

白ばら



一條成美筆



各女學校御用

附屬品並に造花器械類一式

東京市日本橋區横山町一丁目十六番地

天野卯兵衛

電話(長)浪花一六四三番

(切取線)

營業目錄御入用ナレバ此切取ヲ添ヘ御申越被下度候

縣　郡　町村

女學世界 第六卷六號

女(丁の一)

女（丁の三）

女(丁の四)

伏見若宮博恭王妃經子殿下



妖艶



（泰西美人の新装）

春



泰西名畫　ボッチチエリ筆

櫻の名所



羽後國湯澤愛宕神社女山道の櫻花

ロングオース氏

アリス嬢と其新郎



第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

登録商標 壽美禮おしろい

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
サヴイオレツト煉製
陶甕附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい



◉壽美禮おしろい◉

れり製 價定 大壜 二十錢 小壜 十二錢



すみれ水おしろい ヴワイオレツト水製

水製 價定 大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢

すみれ白粉は
菫おしろいは
壽美禮白粉は
歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て調製しあるを以て總てを艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に望みて衛生上良好の逸品なり高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◉壽美禮あらひ粉◉

綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入 三錢
罐詰 六錢五厘 袋 壹錢

◉弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美しくなす
◉常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生せず又半襟ハンカチーフ絹綿等に用て能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり
◉使用法は普通あらひ粉の半分にて宜し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

登録商標

西洋色美くなるあらい粉
SUMIRE
WASHNG POWDER

壽美禮あらひ粉



製造本舗 東京市兩國 元町兩國橋際 壽美禮堂謹製

販賣所ハ全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ

女(戊の一)

既刊

文學博士 高山林次郎君著
●文藝評論
全一册洋上製 小判四八〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

内田不知庵君著
●文藝小品
全一册洋上製 小判六一〇頁 實價貳拾五錢 郵税六錢

文學士 大町桂月君著
●學生訓
全一册洋上製 小判二四八頁 正價貳拾錢 郵税四錢

文學士 大町桂月君著
●續學生訓
全一册洋上製 小判二五六頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

太陽記者 長谷川天溪君新著

文學訓

全一册袖珍美本
紙數約三百頁

近刊

文學の眞義を究め、清新の文章を作らんと欲する諸子試みに本書を繙け。似而非文學の雲霧を拂ひ、如何にせば眞正なる文學の光彩を發揮し得べきかを簡潔明瞭に說述す。これ純正文學の說明也。文學者の心理的解剖也。而して文學鑑評の標準也。

發兌元
東京 博文館 本町

類書

文學士 大町桂月君著
●大絃小絃
全一册洋上製 小判四二〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

大和田建樹君著
●新文林
全一册洋上製 小判四三二頁 正價貳拾四錢 郵税六錢

文學士 大町桂月君著
●青年訓
全一册洋上製 小判三一八頁 正價貳拾八錢 郵税四錢

文學博士 高山林次郎君著
●時代管見
全一册洋上製 小判五二〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

女(戊の二)

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を强壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的姑式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進步せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全に消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入 美容料 肉體

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥　**專賣元**　東京市神田五軒町拾九番地　**日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を奏み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢　着金即刻送藥す　郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥　**專賣元**　東京市神田五軒町拾九番地　**日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女（戊の三）

各國帝室及王家御用

ネッスレス
ミルクフウド



歐洲諸國及び本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ
小兒病者又タ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ
◉最モ盛カンニ藥舖洋酒食料品店ニ販賣ス

釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

天下一品
最上醬油

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

（戊の四）

北京の豫教女學堂



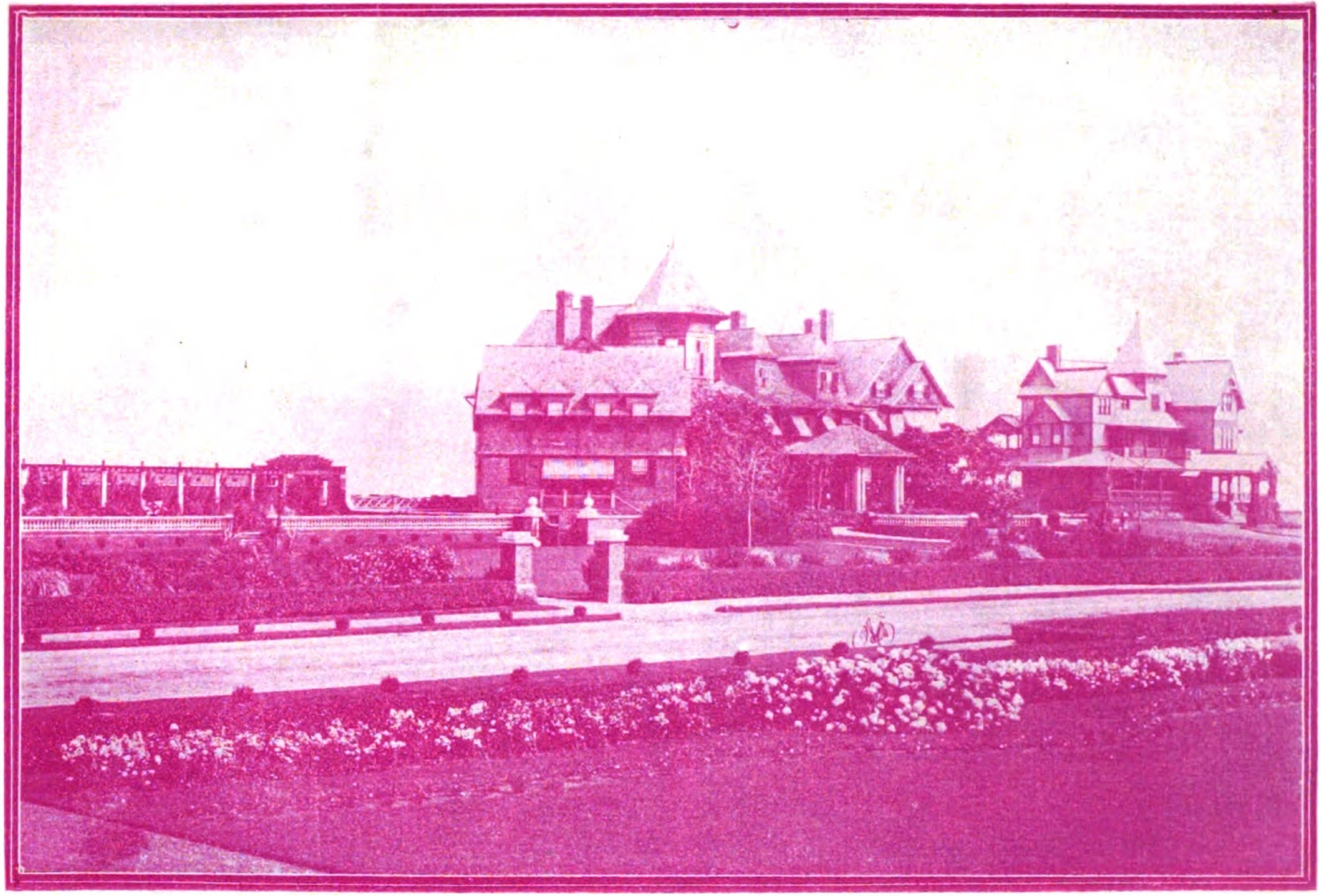
北京大學總教習服部博士夫人及滿人沈鈞氏夫人の經營にかゝり專ら貴族の淑女を教育する學校にして、清國女學校の嚆矢なり、第二列正面布袴を着せるは、服部博士夫人にして、其の右に居らるゝは、沈氏の夫人なり。

秋穗割烹會

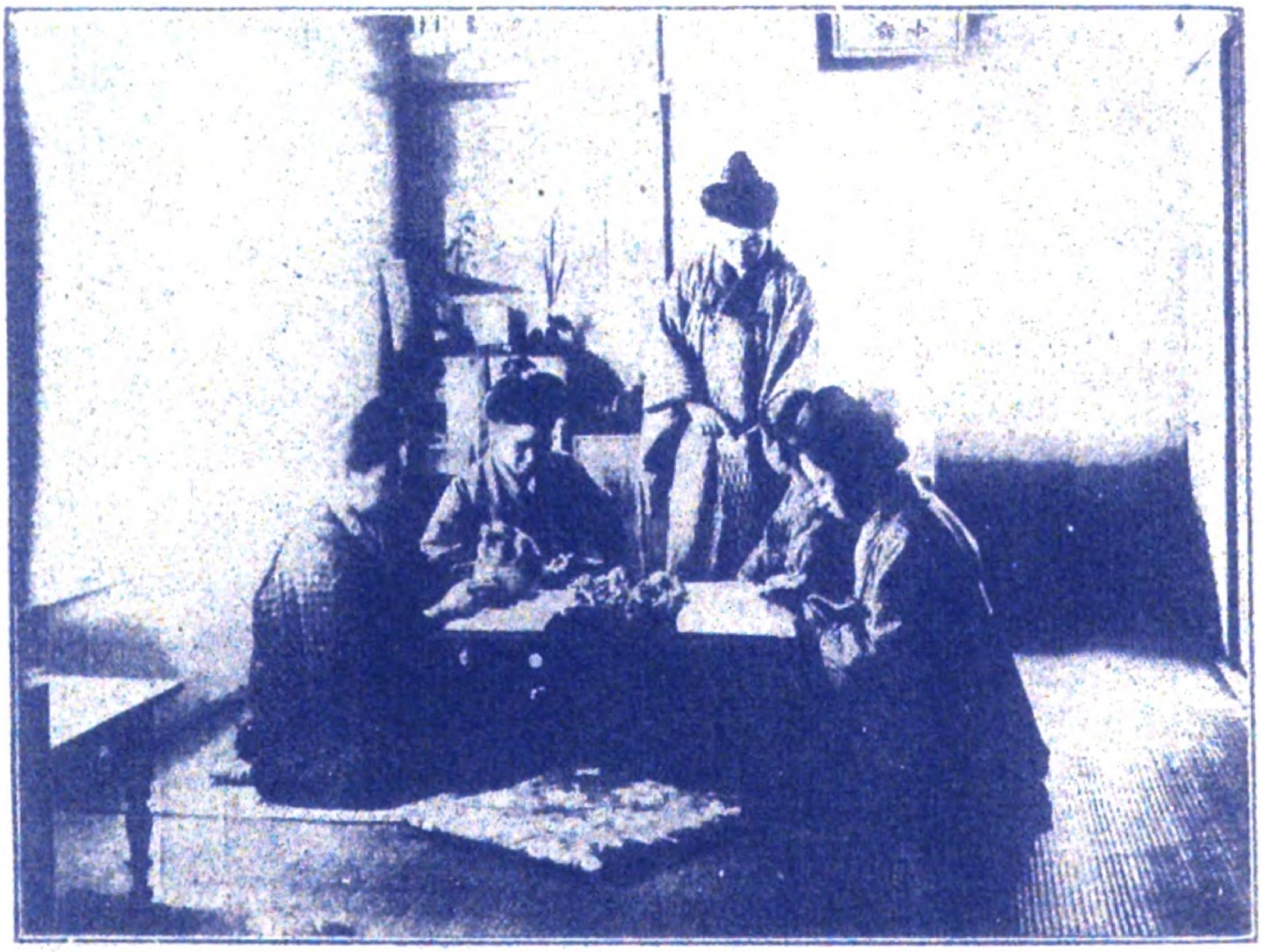


（神田三崎町）

米國富豪の別莊



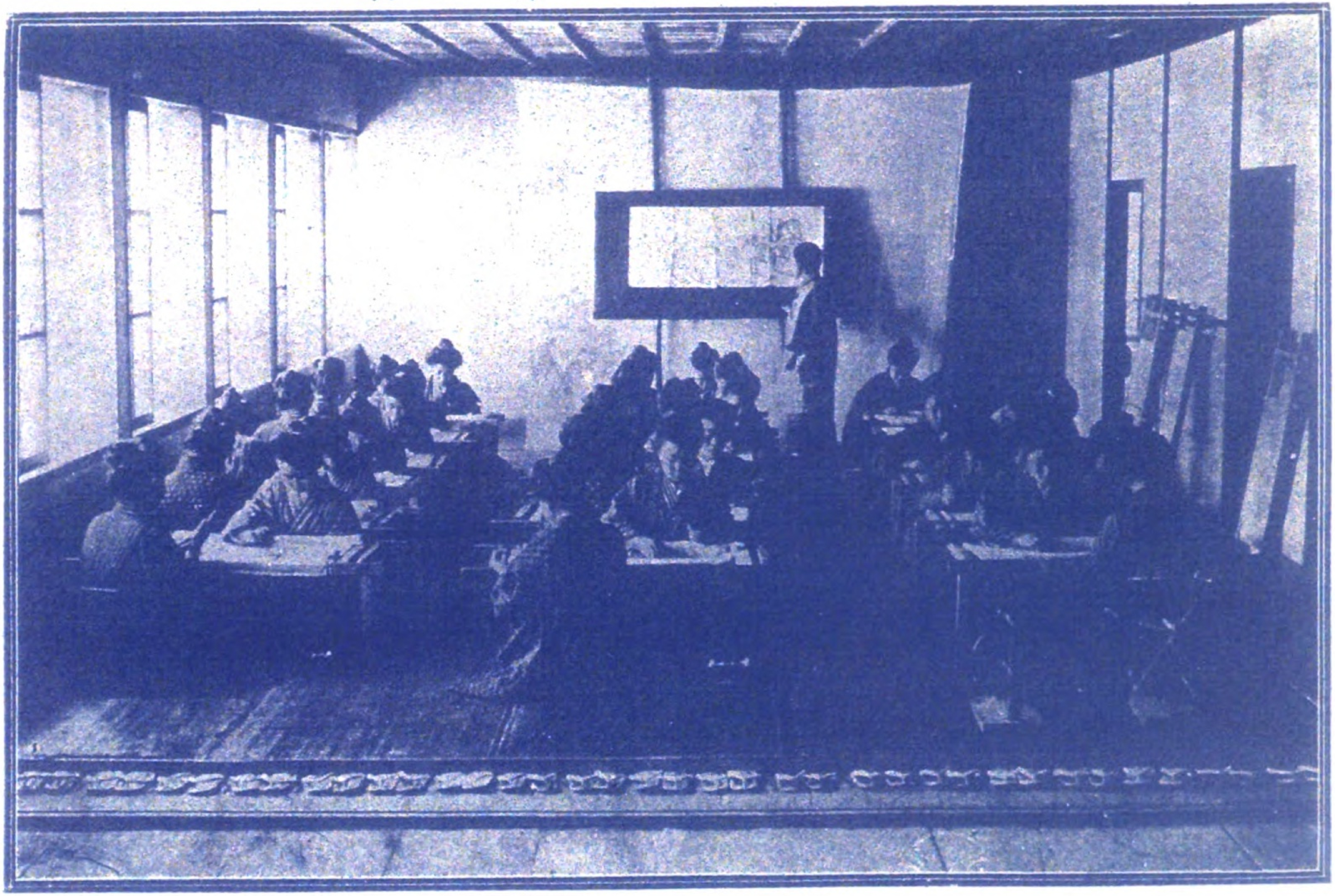
東京女醫學校自修室の骨學研究





同上外科手術演習

刺繍の練習



海軍主計中監窪田重式君著

少年必携 **最近海軍** 附 海軍職工

全一冊三六版 紙數二百頁 正價參拾錢 郵稅四錢

日露戰後の日本は世界の列強と對峙すべき必要上海軍擴張が刻下の急務たることは、何人も首肯する所なり玆に窪田主計中監が未來の海將たるべき少年子弟が海軍入門の楷梯たらしめんが爲多年の蘊蓄を傾注して編纂せし本書は筆を列强の海軍力に起して兵學校の入學軍艦の說明艦內の勤務服裝の區別等苟も將來國防の要職に當りて五大洋上に馳驅し以てネルソン提督たり東鄕大將たらしめんと欲する者のために無二の良師友なりとす。

發兌元 東京市日本橋 博文館

●女醫學生募集●

●前期生二百名●後期生五十名

新領土の發展は益々女醫養成の必要を感せしむるに至れり、本校は此趨勢に應せん爲め此際規模を擴張し講堂を新築し來る五月一日より新學期を開始し入學を許す四月二十五日迄に願書を提出すべし

詳細の規則は郵劵三錢を要す

東京市麹町區飯田町四丁目九番地

東京女醫學校事務所

▲婦女必讀雜著

松原岩五郞君著 ●**女學生の栞** 正價參拾五錢 郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著 ●**婦女家庭訓** 正價參拾五錢 郵稅八錢

千河岸櫻所君評釋 ●**女訓評釋** 正價六拾錢 郵稅拾錢

千河岸櫻所君編 木版綿繪口繪挿入 ●**日本女子立志編**（全二冊） 正價一冊六拾錢 郵稅一冊八錢

東京女學館講師西田敬止君著 ●**帝國女子修身鑑**（全四冊） 正價一冊拾錢 郵稅一冊貳錢

發兌元 東京 博文館

文學士 大町桂月君著

女學生訓

全一冊洋裝 正價貳拾五錢 郵稅四錢

家庭以外學校以外の女子教育家桂月先生が獨特の奇警なる觀察を寓し趣味津々として乾燥無味なる小言の比にあらず讀んで面白きが上女子百般の事に關して適切なる訓戒を垂れて女子教育上の指南車たり又木鐸たり世上の女子は更なり娘を有せらるゝ父母も必ず一本を備へ玉はざるべからず

發兌元 東京日本橋本町 博文館

女(己の一)

帝國百科全書

第百四拾六編

文學士 德谷豊之助君著

近世心理學

（新刊發賣）

上製五拾五錢 郵税拾錢
並製四拾錢 郵税八錢

文藝復興以來學術討究の精神は勃然として起り爾來萬般の現象は鋭意碩學によりて研鑽を遂げられて吾人々類の智的發達の顯著を見ること往昔の比にあらざるなり就中心理學の如きは近世期に於て長足の進歩を爲し的確精緻の體系を形成するに至れり本書は斯學近代の狀況を精述するに足らずと雖ども大體上史的眼光を以て之れが概景を描出し以て物的科學の歷程と關繫せしめ併せて哲學宗教乃至一切の精神的諸科學と交錯連關せしめたり

第百四拾七編

文學士 中村寅松君著

最新教育學

（新刊發賣）

上製五拾五錢 郵税拾錢
並製四拾錢 郵税八錢

教育なるものは社會的個人を教化して文明の催進を謀るに他ならず而して此目的を達するにも先づ個人と社會との有機的關係に注目し又た個人及び社會の進化發展を考慮するを要す故に教育學の組織は啻に個人心理學及個人倫理學に據るのみならず社會心理學社會倫理學及び社會學にも據らざるべからず新教育學の基礎は此見地に依て定めらる本書の零細なる素より斯學の蘊奥を盡すものに非ざれども新教育學の概要は之に由つて領知するを得るなり

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（己の二）

帝國百科全書

第百四拾八編

文學士 鈴木暢幸君著

日本口語文典

（既成發賣）

上製五拾五錢 郵税拾錢
並製四拾錢 郵税八錢

教育の普及と共に國語の統一は宿昔の問題にして且つ目下の急務、殊に戰後の國民的發展の基礎として世界の舞臺に飛躍せんとするに當つてはまづわが國語の普及より初めざるべからず、國語の普通はまた必ず口語の研究を以つて第一着手とすべし、本書は氏が多年の研究によりてわが國語の本質及び運用を忠實に闡明し叙述したるもの、まづわが口語に存する言音を音韻學的に説き發音機關の調整を指導して方言の矯正其の他發音教授の便に備へ品詞の叙述に於いては文章語との差異を説明して文語教授の參考に資す、特に詞章の綜合法に至つては著者の獨創によりて新式なる文典の模範を示したり。

第百四拾九編

文學士 蜷川龍夫君著

佛教倫理學

（近日發行）

上製五拾五錢 郵税拾錢
並製四拾錢 郵税八錢

二十世紀式に依て佛教を知らんとする者頻りに繁殖し、此要求に應じて、或は哲學的に佛教を論ずるものあり、或は歴史的佛教を説くものあり、或は宗教的鼓吹に勉むるあり、然れども概して未だ堅確なる佛教の眞髄を發揮すること能はずして、其或者は空論に流れ或は病的迷信的に墮し、人生社會の全般に活用するを得ず、斯の如きの缺陥と時代の要求とは遂に佛教倫理學を産み出せり、佛教を倫理的に叙するもの從來皆無なるにはあらざるも、悉く之れ斷片的にして固より取るに足るべきなし、然るに今や本書は秩然たる組織に由つて其全豹を盡せり、實踐的佛教は之に由つて始めて其光を發せり、實際的人生に不可拔底の根底を與へ、社會の現實上に活躍すべき宗教は本書に於て漸く其消息を洩せり、宗教家教育家は勿論、苟も人生問題に志ある者一讀せずして可ならんや。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（己の三）

明治畸人傳

洋裝大判正價廿五錢郵税貳錢五厘　四月十五日發行

來る十五日發刊の本誌定期增刊は左に記せる明治の畸人を傳せんとす。讀者は開卷其奇に驚き案を拍つて快哉を絶叫せらるゝや必せり。其記事の奇なるに加へて、各名家が筆を呵せる文の妙あり。蓋し出版界未曾有の一大奇書にして洛陽の紙價爲めに貴からむ賣切れざる内愛誦を賜へ。

◉畸字辨

▲渡邊國武子　▲中根香亭氏　▲副島種臣伯　▲田中正造氏　▲中江篤介氏　▲中井弘氏　▲矢野次郎氏　▲守田勘彌　▲古河默阿彌　▲先代中村芝翫　▲林鈴二翁

▲田中館愛橘氏　▲田尻稻次郎氏　▲河村清雄氏　▲根本通明氏　▲和田垣謙三氏　▲佐田介石氏　▲西行庵小文師（京都）　▲田村宗立氏（京都）　▲大雅堂定亮氏（京都）　▲眞清水藏六氏（京都）　▲割烹鋪魚樂（京都）　▲天田愚庵師

▲松迺舍露八　▲松野眞維翁（大阪）　▲中島芳梅氏（大阪）　▲吉田玉造（大阪）　▲尾上多見造（大阪）　▲前波與兵衛　▲長谷川勘兵衛　▲志村次郎氏　▲能勢覺之丞氏　▲林豐旗氏　▲木村春溪氏　▲柴田芳洲氏　以下畧す

（己の四）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館



女學世界定期增刊

女玉手箱

第六卷第六號

—(四月十五日發行)—



書籍は精神の糧なり、人苟くも其心に慰安を得んと欲せば、須らく之を書籍に求めざるべからず。書は善良の友なり、務めて之れと交はらざるべからず、書は福音を齎らす天使なり、虔んで其の教を受けざるべからず、人にして書籍を有せざるは貧窮の地獄に陥りたるものなり。故に家庭は縦令其の食堂を缺ぐも讀書室は設けざるべからず、是れを設けて出來得る限り善良なる書籍を蒐集せしめよ。

天意人書

△失戀の快感

戀を得たるものは一時の滿足に止まる、然れども失戀の人は永久に這の快感を維持す、蓋し前者には心象に煩悶なし、故に其興味は一時的にしてやがて索然たるべし、然れども失ひたる戀は、恍惚として悟寐これを忘るゝ事なく想像の範圍いよ〳〵廣くして、其の心理は恰も百花の爛熳たるが如く其の想像の花より滴たり落つる甘露を味ひ〳〵て人生無限の快感を催ふすべければなり。されば戀を得て幸福を全ふしたりと言ひ戀を失ふて不幸に沈みたりとは徒らに其形を云々するのみにて未だ其の心の奥に說き及ばざるものゝ言なり。

△淚の價

この世界に於て最も純潔、神聖にして而かも浮世の砂漠を潤ほす淸き泉のありとせば、そは淚なり、淚は實に人情の異なるものなり、見よ小兒の淚は其中心に慈母を慕ふものにあらずや、見よ母の淚は其の中心に子を懷ふの厚きものにあらずや、美人の紅淚、英雄の悲淚、いづれか眞實の誠意の形に顯はれたるものにあらずや、詩人は淚を以てダイヤモンドに譬へたり、至人一滴の悲淚は千萬金のダイヤモンドよりも尊きものと知るべし。

△金銀珠玉

金銀珠玉を以て小兒を裝飾すること勿れ、若し斯くの如く爲す時は其の小兒は必らず驕兒となりて成長の後世に立つこと能はざるべし、凡そ人が金銀を以て身を飾るは一生に一度の婚儀の時か、然らざれば俳優の舞臺

に立つの時にあるべきのみ。人生の常時にはなき事なり、常識あるものゝせぬ事なり。

△私語勿聽

耳を傾けて人の私語を竊聽することなかれ。人若し之れを爲す時は私語の前後を想像して兎角は善き事を思はぬものなり。餘計な想像を心に描きて果ては我が心を苦しむるに至るものなり。他人の缺點を聞かんとして却つて我身の心緒を亂すものなり。

△大人の襟度

人の詐りを知りても之れを說き破ぶらざるだけの度量と忍耐あるを要す、詐りは必らず曝露するの時あるべし、曝露して其の自から愧づるの時を待ちて可なり、是れ大人の襟度なり。

△驕る人

人驕る時は志昏らく志昏ければ計自から短なるべく、計短なれば爲す事は必らず破るべし、故に人の驕るを見ては決して憎むべからず、寧ろ憐れむべきのみ。

△常勝と常樂

常に勝たんとする者は爭はず、智慮ある者は必らず一歩を退く、常に樂まんとする者は足る事を知る、富める者の頭は富まざる者のそれよりも常低し。

△得意と窮厄

窮厄の背後には榮達の神ありて是れを護るものなれば、決して憂ふべきものにあらず、得意の背後には呪ひの鬼ありて是れを嘲るものなれば油斷はなし難きものなり。

△照心の鏡

容貌を飾りて人を欺くなかれ、汝の面前には心を照らす鏡ありて、その姸醜は細かに映つるものなり。

△良妻と愚妻

愚妻は夫の勤勉勞苦を知らずして唯其の金錢を讀むを知るのみ、良妻はよく夫の品性を知りて其の貧富窮達を意に介せず。

△小人と君子

小人は專ら人に恩を望むも恩過ぐれは更に感せず、君子は輕々しく人に恩を受けず受くれば即ち忘れ難し。

△與にする人

言に動き易き人と深計を與にすること勿れ、喜怒し易き人と遠謀を與にすることなかれ、便宜を好む人と財物を與にする事勿れ、狐疑多き人と事を與にすることなかるべし。

△流行の衣裳

若き婦人、血ある婦人、熱ある婦人、意志ある婦人、負けぬ氣の婦人、外觀を張る婦人をして當世流行の呉服店の陳列室に立たしむるは、劍を以て其人の喉吭を刺し貫くよりも一層罪深き業なり、彼等にして若し其の希望を滿足せしめんと欲せば、其の家產の多分を傾くるにあらざれば、其良人をして世俗の奴隷たらしむるの外なし、嗚呼罪なるかな、當世流行嗚呼罪なるかな當世流行。

百花の爛漫たるにも譬ふべき今日の女學界の盛運を見るにつけ吾人はこゝに忘るべからざる三個の恩人あることを認む、恩人とは誰れぞ、曰く跡見女史、曰く棚橋女史、曰く三輪田女史是れなり、明治の初年女子教育草創の際に當りて力を婦女の教養に致されたる人尠からずと雖も以上三女史の如きは稀なり、三女史共に其の經歷に於て、其の人格に於て、將た其の德望、伎倆に於て相若けり、而かも三女史等しく常人の企て及ばざる辛苦と忍耐とを以て一意專心其の目的に向つて進み、以て今日の時運を作り今日の地歩を開拓されしは吾人の等しく欣慕し措かざる處ろなり、蓋し明治の女子教育界に於て不朽の功を樹てられしものといふべし、今こゝに三女史の經歷談を掲げて其の一斑を剔發せしむ亦後進を稗益するの大なるを思へばなり。



跡見花蹊女史教育實驗談

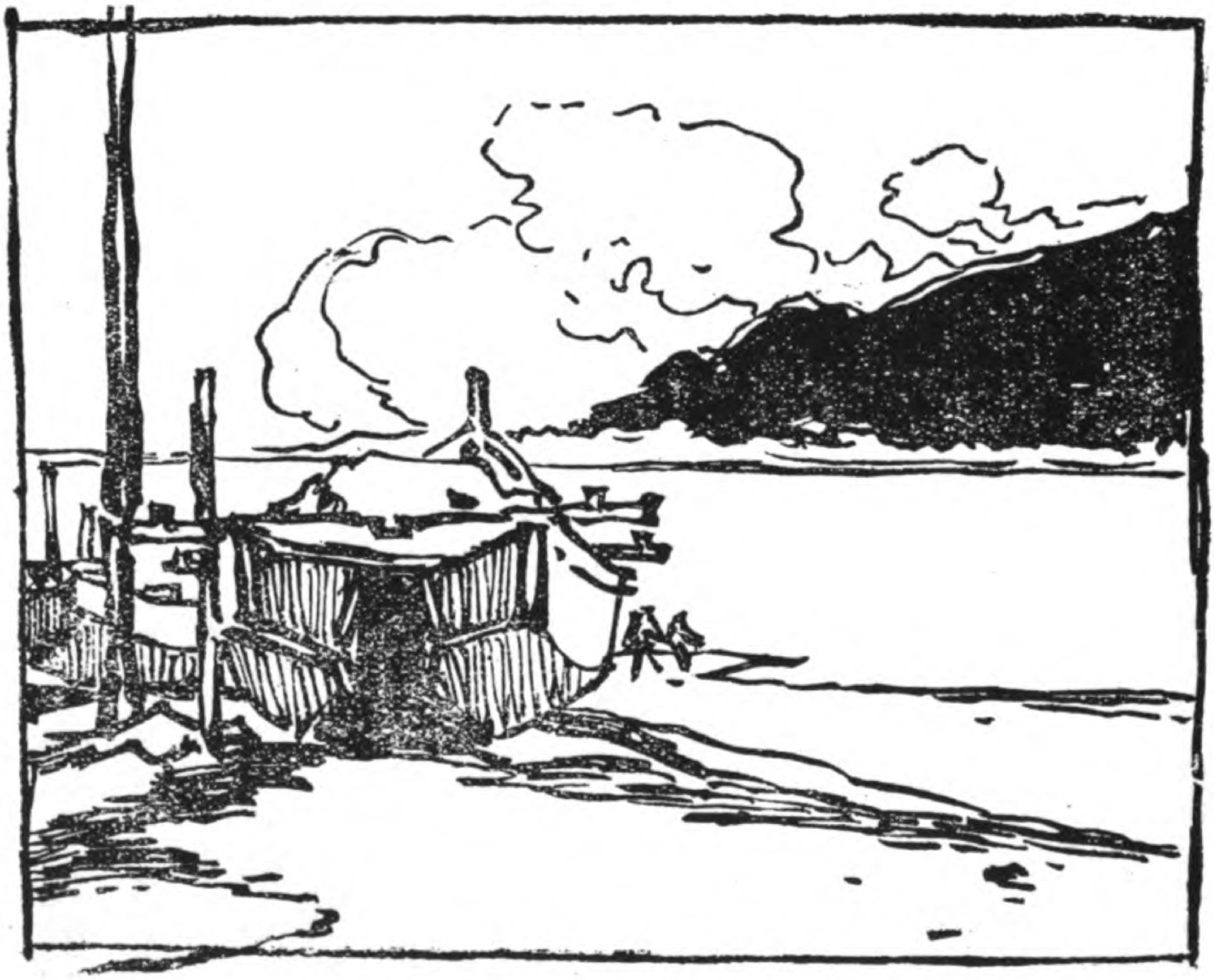
中村鈴子

跡見花蹊先生は、現今女子教育界の第一流に位す。滔々たる凡俗教育家の如きは、或は眼高くして手腕伴はず、或は手腕練達して眼識なし。花蹊先生は手眼共に高く、實に教育術の達人なり。是れ其教育實驗談の最も敬聽すべき所以。

▲母親の責任

女子を完全に教育するのは學校も勿論必要ですが全く母親に在りますネ。娘さんの性質如何に依つて其母親はどんな人であるかは直に分ります。確乎とせぬ母親は娘を學校に寄宿させて置いても、物見遊山とか、或は些細な用事のために、屢々家へ呼び寄せる風があり、自然不規律に陥らせる基を作りますが、是は極宜しくないと思ひます。女子教育に就ては樣々な主義がありませうが、一家を治め子供を教育する、此責任を全くするの婦人を養成いたすのが一番切要であらうと存じます。彼の亞米利加式に社會に活動することを教へると、如

何しても家の治め方が忽せにならうと思ひます。而して華美〲しく飛び廻るのは教へずとも誰れにでも出來易い事でせうし、交際なぞ別に稽古せずとも誠心を以て人に接すれば自然美しい友垣を結べる譯です。外皮斗りの交際は永遠に保つことは出來ません。品性を善く修養し、眞實の愛を以て交際さへ致せば宜しからうと思ふのです。又女子の獨立と申す事は、一個人に就て種々な事情もありませ



うが、畢竟良妻賢母と云ふ貴い天職を盡す事が出來ない不幸の人と申すべきで、望んで此地位に立つのは國家のため祝すべきことで御坐いません。家に良妻賢母あつてこそ、ゑらい國民も出來る、日本の發展も出來る、女子教育は此點を基礎として方針を定めねばならぬと存じます。

▲嫁の選擇

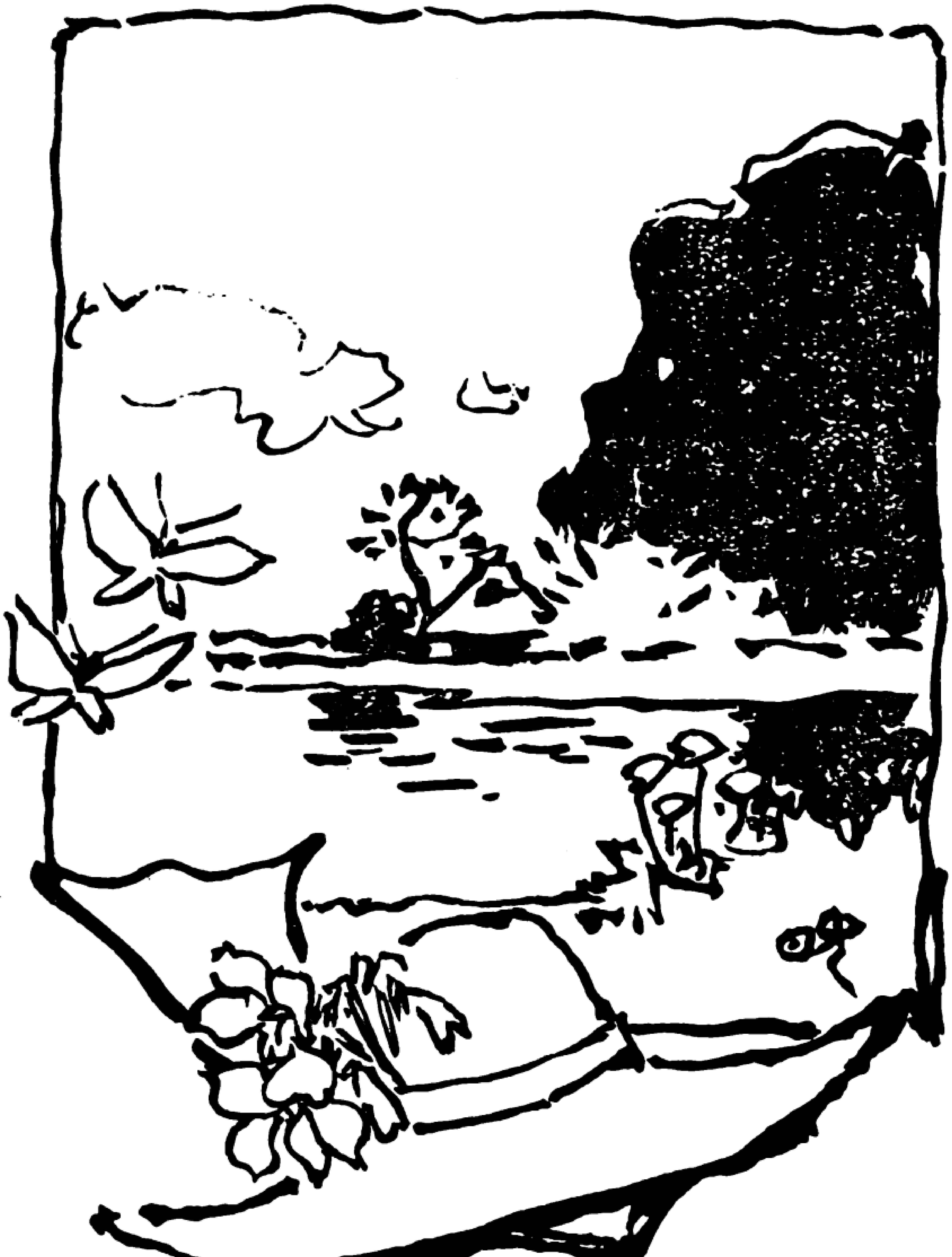
明治十七八年頃　私の處へ御嫁の周旋を頼みに來られるのに、少少馬鹿でも容貌の美し

いのを世話して呉れと言はれる方が可なり多う御坐いまして、そんな間違つた御考では御世話出來ぬと申した事がありましたが、追々婦人の地位も高まつた故か、近來は品性に着眼するやうになり、容貌が餘り美しいと自然浮華に流れる傾があるから、少し容貌は下つても貞淑で兩親に孝順で、善く一家を治める婦人を專ら望むと云ふ風で、大事な息子の嫁には、先生の御眼識で何卒温良な節操の堅い婦人を御世話願ふと御兩親から善く賴まれます。それで快活に社會を切り廻はす婦人が欲しいと望んで來られる方は一人も御坐いません。唯今は婚嫁先に兩親のないのをと望む婦人が多いやうですが、これは新舊思想の衝突のために家庭が圓滿にゆかぬと云ふ考からでせう。併し若い夫妻斗りではワイ〳〵と浮調子で一家の締りがつかぬ處もありませう。手を携へて公園に散歩する風で永遠に睦しく暮せるかと申すに左樣斗りは參らぬやうです。舅姑によく仕へられぬ婦人は、良人に對しても貞淑を守る事はむづかしい。孝順も忍耐もなく唯若き面白き樂みを以て暮すのは一時の夢の如くで、夫妻永久の親睦は決して得られないものです。特に經驗淺き新婦の間は、舅姑の注意に服從して家政を掌るのが間違ひなき方法と申す可きでせう。忍耐淑德は日本婦人特有の美質ですから、何處までも之を養成して堅固な家庭を作らせなければならぬと存じます。

▲師弟の情誼

東京へ修學に大事な娘を出さるゝ地方の親御達は、深く詮索もせずに唯何々學校がよい位の評判を聞た丈けで入學させ、寄宿舍の弊風に化せられたり、甚しきは下宿住ひをさせて怪しからぬ邪道に陷らせる等は實に歎はしい次第で、田舍に置いた方が遙かによい位であります。私方では兩親とか親戚とかゞ連れて參る女子でなければ入學を斷ります。獨身で入學を賴みに來る者や、下宿から通ふものは決して入學させません。私は大勢の生徒を收容して不完全な世話をするより、一人でも完全に敎育したい精神であります。一體學校でよい生徒

を作らうとするには決して澤山の人數を收容しては可けません。先づ多くとも二百人が限りでせう。是れより多くなれば師弟の情誼と云ふものが散漫になつて商買的に傾き學校屋となつて了ひます。學校教育の骨髓は師の感化にあるので、如何程學藝ばかり發達させたとて、師が目標となり母親となりて日夜生徒の心にのりうつる事がなければ、眞實の人間は作りますまい。師たる者が謹愼己れを持して生徒の模範となり、子の如く生徒を慈しんで互の情愛が深くなれば自然感化の力が強くなるのです。生徒が教師を唯學藝を教へる器械の如く心得、誰を目標にして己れを反省したらよいか一向夢中で居るやうでは可けません。私共の學校は別に優れた點はありませんが、師弟の情誼の深いと云ふ事丈は眞實で、卒業して遠方に嫁した生徒方が出京の際は必らず來られて、師の安否を尋ねら



れ、相遇ふて互に物語る嬉しさは親子にも優る位であり、中には不幸にして婚家を逃げ來り情實を訴へるもあると云ふ風です。先達も或る親御が某女學校を卒業した娘さんを連れて入學を乞ひに來られましたので、已に他の卒業生を教育する高等な學科もないからと斷りました處、再三再四依賴に參り、是までの學校には品性の手本として則るべき師が定まつて居らず、唯學藝を覺えたと云ふだけなので、肝腎の女の道が曖昧で困りますから、何卒先生の感化を受けさしたい、學ぶ事がなければ、書畫や裁縫だけを專門にさせても宜いから是非にと賴まれたのでした。斯樣に申すとゑらひ私が驕慢のやうに聞へますが、私は元來話しが極下手で、有の儘ばかり申す方ですから、新聞雜誌の記者方にも御目に懸らぬ事にしてあります位、何一つ優れた事もないのでありますが、唯生徒方を他人の子とは如何しても思はれぬのが私の性質なので御坐います。

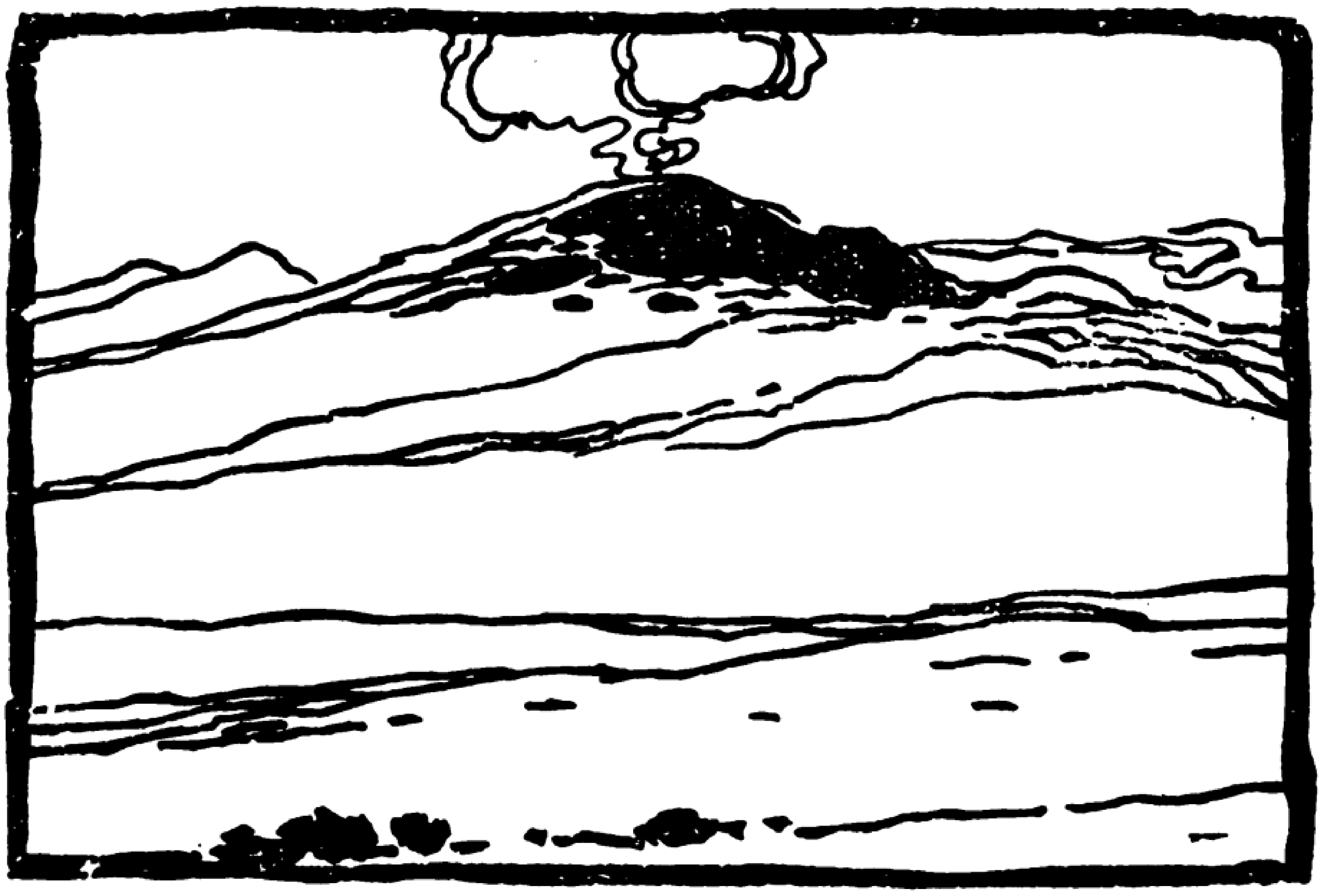
▲書畫の習練に就いて

書畫を學ぶ心得と申して、別に他の道と異つた事はありません。心で描くと云ふ事だけを承知して居れば宜いのです。心が淸く確乎して居なければ、本當の書畫の出來る次第も無く、此畫を作つたら金が幾何取れるなどと考へて筆を執つては、名畫の出來る例は無い。ですから昔から名家に富豪はありません、西洋でも名高い畫家は生活に豊かでないとの事で御坐いますネ。話は別でありますが、嫁入して子供さんでも出來ると、學校で習得した事を全然忘れたやうに打捨て了ふ方が隨分あるやうです。是も心掛次第で練習が出來るわけでせう。一寸無駄話しでもする時間を注意して、毎日一時間づつでも練習に用ゐる事に定めて置けば、長い月日を積む内に進歩の域に達するものです。一廉の腕前にさへ成つて居れば、若し不幸に遭遇した際の役にも立ち、不幸に遇はずば、己れを慰むる術ともなりませう。特に習字などは夜分でもどんな處でも簡便に出來るものです。此校の生徒は皆習字が熱心で卒業後も始終淸書を持つて參り、遠國の者は郵便で送附し直して呉れと申し

て參ります。

▲明治初年の女子教育

京大阪に居りました頃から、何もよう出來もせぬ私の處へ、姫君を預つて呉れと仰る公家方が御坐いまして、明治三年に出京致してからも東京まで御寄越しに成りましたので、不肖ながら御世話申して居りました。私は學校を興さうと云ふ考へは素より無つたのですが、唯依賴される令孃方が追々と殖えて四十八人程になつたので、勢ひ一の私塾を建てねばならぬやうに成り、明治七年に猿樂町へ跡見女學校を創立した次第であります。其頃東京一般の少女は皆眉毛を剃り、眞四角な額形に造り、質素な着物に細い黑い帶を腰の處で貝の口にチヨコンと結んで、男か女か分らない妙な姿でした。京阪で芝居へ參ると舞臺より見物の娘方の眩い斗り美しいのに目が移る位でありますのに、東京の芝居の內は何處も彼處も眞黑な女子ばかり、若い嫁さんの丸髷に赤い手柄を見る他に赤い色は絕えて無いのでした。是れは俳優の風俗にでも感染した結果でありませう。夫れから又學問に志す若い婦人の中に頭髮をざんぎりに致し、兵兒帶でぐる／＼卷き付け、耳に鉛筆を挾んで、洋書をむき出しに小脇に抱へ、正則何學校、變則何校とかへ通學するのを多く見受たので、隨分地位ある家の令孃でも斯樣な突



飛な眞似するのがありました。私は斯様な風俗ではならぬと存じ、塾の方をば務めて優美な風に粧はせました。髪は皆稚子髷に結ばせ、振袖に袴を穿せましたが、餘り殺伐な風で見よくないから、日本舊來の優美な緋の袴の風が宜しからうと、恐れ多くも　皇后陛下が御意遊ばしたと承りましたので、私方では緋の袴に代用する紫の袴を用ゐました。大抵華族の令孃達で御持ち合せの衣類で間に合せて居つたのですが、世間外づれた上品な作りを見て、跡見女學校は大層贅澤だと批評されました。併し實際金を掛けて華美な作りをするではなく、例へば浴衣なぞも紺絞りは一切禁じ、上品な模様の中形物ばかりを選用すると云ふ風に注意したので、費用の點は格別變つた事はないのでした。唯今では跡見女學校は因循だとの評も聞きますが、却つて率先したのであると思ひます。稚子髷、袴、立やの字などは確かに私方が率先であります。又學科に繪畫を置いたのも私方が初めで、明治七年に文部省へ屆を致した處、學校で繪畫を敎へるは不都合だと諭され、尙可笑しいのは裁縫も學科には不都合であると命せられた事でした。然るに其後外國博覧會から日本女子の製作品をと云ふ註文があつた處、何處の學校でも應ずることが出來ないで、私方の生徒ばかりが唐紙半截へ繪いて出品いたし、大層賞賛を得たので、夫れから俄かに必要を感じ、一般に繪畫を課目に置く事になつたのです。私方では其頃書は大文字を習せまして皆善く書きましたが、朝鮮の或る貴人か來朝せる際、席上揮毫を致させた事がありまして、九歳十歳位の令孃が振袖に片襷をかけ、唐紙全幅へ唯一つの大文字を書いた其筆力の雄健なのには、韓客も舌を卷いて驚歎した位でした。唯今は一般に細字ばかり練習させる様になりましたが、本當に書を學ぶには大文字が必要で、大文字さへ出來れば細字は自然に善く書けるものです。

▲體育の率先

學校創設の頃體育の必要を感じまして、運動踊りを致させました。夫は琴曲に合せて今様を大勢揃ふて舞ひますので、極優美な手振でありました。寒中なぞ臥せる前に此踊りをさせますと全身が温まつて汗が出る位になり、臥床に入つてもほと〳〵致すのです。其頃世間では學校で踊をさせるのは何の事だと嘲笑されましたが、追々舞踏も始まり唯今諸學校で體操遊戯を致さぬ處は無くなりました。今様踊は女子體育の率先と申しても可い次第であります。

棚橋絢子刀自經歷談

中村鈴子

我國女子教育界の泰斗、其人に乏しからずと雖も、空論に陥らず末藝に流れず、實踐躬行を以て後進を感化せらるゝ棚橋刀自の如きは稀なり、刀自の學歷談の最も價値ある所以。

▲刀自の系統

私の祖父は大阪の酒造家でしたが、文藝が嗜好で、漢學は越高州に學び、和歌は有賀長隣に學び、畫は森狙仙に學びました。それで祖父の書いた畫帖も唯今遺つて居ります。他に御茶や琴まで致しましたが、琴は雅樂に使ふやうな短いのを使ひ、月下に組なぞ彈じで樂んで居つたのを微かに記臆して居ります。私の父は父の叔父の許へ養子に參つたのですが、是れも祖父の性質を受け續いで矢張越先生の門に入り書生をして居つたので

ありました頃には、酒造を止めまして、灘や池田から鷹樽で取寄せ御賣又は小賣もして居りましたが、未だ相應な身代でありました。私の母は糠問屋の娘でしたが、却々締つた貞順な婦人で、多勢の子供を撫育し、長幼相敬愛する道を敎へ込んだもので、今以て母の敎訓を肝に銘じて居ります。

▲刀自の天才

私は幼い内から少し變り者でありまして、家へ來て居た從兄が私の書いた文字を見て、これは異風な人が書いた手風だと申して居りました。餘り讀み書きが好きなので、五歲から書を習はせて呉れられたのです。其頃私共の隣家に住んで居た高槻の浪人は獨身者で、讀書算術を人に敎へて居りましたが、父とは別懇の間柄で常に出入して居り、私に是非算盤を敎へて見たいと申し、未だ無理だと父が申すのを聞かずに、八算を敎へて呉れられました處、何樣やら斯樣やら八算だけは空に覺えて了ひました。唯今の子供には珍らしくもありませぬが、其頃は六歲の女兒が算盤を彈くと云ふのが珍らしいと云ふ評判で、彼方此方の家へ招かれては八算を彈き、其度に御菓子や玩弄品を貰つて參つたので、子供心に算盤を彈くと何か貰ふものだと思つて居たのです。所が其頃は女兒に學問をさせると生意氣になつて不可と云ふ風でありましたから、學問が好きでも公然通學させてもらふ譯に參りませんから、本當の盜み學問を致したのであります。それで私は每朝四時から六時まで寢床で讀書致し、六時には家內一統が起き出ますから、私は讀書を止めて家事の手傳にかゝりました。夜は十時まで家の用を致し、十時に奉公人が寢ますと、それから十二時まで寢床で勉强すると云ふことに致したのです。夫迄は別段師と賴む人はなし、經典餘師に賴り學びましたのでありましたが、漸く十七の時、弟が奥野小山先生へ通學するのに付いて行くことを許されました。これを考へると當今の女學生方は幸福過ぎると申して宜しいので、私は每度生徒方に向つて『貴女方は餘程大學者にならなければならぬ道理です』と申す位で……先

づ私の處女時代は斯樣な鹽梅で暮したのです。

▲刀自の配偶

前にチヨツト申し上げた從兄は、叔母の義子で、兩親が行く行く私の配偶と云ふ積りで置いた者でした。私は決して此人を嫌ふた次第ではありませんでしたが、唯だ商家に暮すのが厭で何卒學者の處へ



參りたいと云ふ希望でしたから、妹を相續人として從兄を見合せ、私は此棚橋家へ嫁したのであります。棚橋家は倉屋敷の御留守居役で、五百石取りに相當する格で、其頃は隨分幅の利けたものでした。私の良人は此家の長男で、經學に達し文筆の優れた方正の人でありました

が、二十五歳から眼を患つて私の嫁する頃は殆んど失明で在つたので、親達はチヨツト不承知でありましたが、奥野先生の媒妁にてとう／＼行く事になりました。私は假令不具でも敬慕する人を夫と頼み師と仰いで、及ばずながら君子を慰籍したいと云ふ決心で、十九歳の時、三十一歳の人に嫁しました。

▲窮窟なる芝居見物

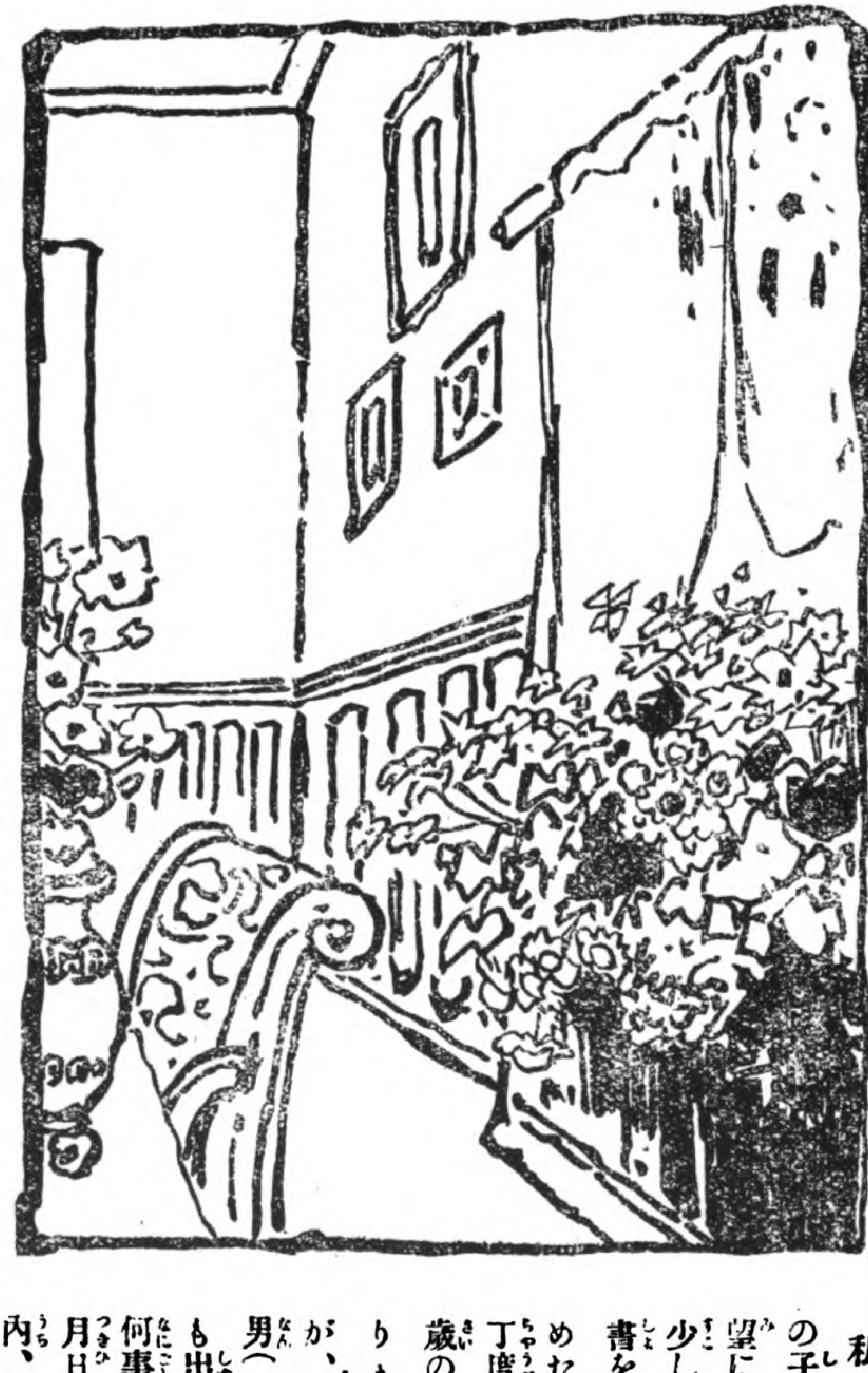
御承知の通り大阪は評判の芝居道樂の土地である上に、舅なぞ華美な勤務向でしたから、交際上始終參つたのですが、私は素より好みもしませず、良人も出すのは大嫌ひでしたけれども、舅が若い者に見せぬのは氣の毒だと申して一度連れて參つたとがあります。『朝は十時から出掛けて、四時までには必ず歸れ』との良人の申し付を守る決心で出掛けましたが、宅の表門を出て石段を下ると、直ぐ下が川で、船に乘れば道頓堀の芝居茶屋へ横附になると云ふ工合でした。昔の芝居は夜分十一時頃まで興行して幕合が大層長く、四時頃から段々面白くなる都合ですから、私が四時に歸るのを連れの婦人達が氣の毒がつて、『旦那様へは私共が申譯します、今暫く見物なさい』と勸めまして。舅が『言付通りの時間に歸へさぬと堅苦しい伜に濟まぬと申しました處、皆が可愛相に／＼と泣くやうに言ひましたので、自分も年のゆかぬ事とて、何となく悲しくなつた事なぞ善く記臆して居ります。

▲初て田舎の生活を味ふ

嫁してから三年目に藏屋敷は廢止となつたので、舅は京都へ殘り、私共夫婦は郷里美濃へ退隱するととなりました。都會で荒い風にも當らずに育つた年若の者を俄かに僻村へ連れ行くのは如何にも氣の毒だから、實家へ歸るが可いと良人も申しましたが、私は望んで緣付いた家でもあり、良人に侍して講義を聽き品性を養成して貰へば、何樣な山家に住ふても本望であると申して、二三の伴と郷里へ旅立ちました。これは霜月半ばでし

たが、近江路は一面の雪でありました。鄕里は伊自良谷と申す谷間の村落で、姑と良人の弟が住つて居り、或旗下の知行などを支配する役人で可なり饒かに暮して居りました。

私共が參つても何不足なく、却て都會の生活より氣樂で、清雅で、私には滿足であつたのでして、



私が近隣の子弟の希望に應じて少しづゝ讀書を敎へ初めたのは、丁度二十二歳の時でありましたが、其内長男(一郎氏)も出生致し何事もなく月日を過す內、維新の變動が起り、僻村で相談に好都合でしたから勤王の浪士が引きも切らず參つて宿泊致し、弟は金錢を惜氣もなく費つて浪士を優遇すると云ふ始末で、追々身代も傾いて參りました。而して其頃實家の方も父は既に沒し、

商法の手違ひなどで、私の所有と定めてあつた家屋敷なども遂に手離すと云ふ衰運に向つて居りました。

▲食客の苦を知る

其頃尾張の高田村に農と材木商とを兼ねた親類がありまして、子女の教師に私共夫婦を預からうと申しましたが、弟も『盲目の兄に家計の心配事を聞かせるのは心苦しいから丁度宜からう』と相談に乗りました。併しながら、良人所有の田地は賣却し食扶持として後から送らうと約束を定めて、住み馴れた故郷を離れ、尾張へ辿り着きましたのは、私が二十九歳の時で、六歳の長男と二歳の娘とを携へて居つたのです。兎角する内に郷里の方は、種々不幸な境遇が續いて田地も人手に渡り、約束の金も寄越すことが出來なくなりました。所で私共夫婦を預つて居る家の主人は極好人物でしたが、妻は全くの商人風で少々遣り過ぎる方でしたから、不具な者や幼い子供を連れて居ながら、何時までも送金のない私に對して、自然迷惑の目顔を見せ、何となく氣まづくなつて參つたのです。良人は勿論私もそれまで世帶の味知らずに生活して來たところ、此に始めて世帶の苦を知り、郷里より送金の道絶えた以上は、親子四人厄介物に相違なし、一日たりとも厄介となつて過すのは心苦しい限りである。切て此家の針仕事でも手傳ふて謝禮の幾分かにしたいと考へて、其主婦に話すと、召使から家族では二十人餘の仕立物もあり、嫁入仕度する娘もある處から、喜んで私に仕事をさせました。私は元來裁縫が大好きで速いから、澤山の仕立物をズン／＼片付けて遣りました。そこで待遇も大きに宜しくなりましたが、偖私の骨折は一通りでありませんので良人や子供二人の洗濯物もあり、乳呑兒を抱へての針仕事ですから、夜も一時頃まで縫ひました。併し不具の良人に心配を掛けるのは忍びませんし、又心配させたとて如何する術もないので、良人には此境遇を一言も話しませんでした。それで良人は何時も太平の心地で一室に靜坐し、詩文を考へては私に書けと命じたり、讀書して呉れと命じたり致しましたから、私も隨分弱りましたが、終日縫

聊に苦む良人の煩悶を思ひ遣れば、私の忙しい勞苦は何でも無い、良人が一日の中生命と賴むは、私の讀書を耳にするのでありますから、隨分無理な時でも命ずる儘に讀んで聽かせました。

▲獨立の決心

勞苦の激しいのは厭はぬが、如何に骨折つても厄介物の位置は免れない、同じエライ骨折をするなら、獨立して一戸を持ちたいと、日夜心



を碎くに就て、先立つものは金ですが、嫁入る時に母から貰つて身を離さなんだ二分金三拾兩は、食料として最早出して了ふたし、殘るは手道具と衣類だけでしたので、之を賣り拂はうと決心致し、丁度折よく來合せた懇意な古着屋に逐一事情を話し、私の衣類だけを賣り拂ひまして漸く百兩を得ましたが、其際殘した衣服は、上布が一枚、花色越後飛白の帷子

が一枚、玉織の袷が一枚、奉書紬小紋の小袖が一枚です。此内越後飛白の帷子は、唯今以て殘つて居りますので、毎年夏になると紀念の爲めに着用して居ります。それで資本も出來ましたところへ、偶檀那寺の和尚が參られ、私共の樣子を見て事情如何と尋ねられましたので、決心の次第を話しますと、世間なれぬ御夫婦を斯樣な苦境に沈ませて置くのは、實に氣の毒であると、涙を流して同情致し吳れられて歸國後直ぐ村の口きゝに話して吳れられましたので、其人が買先へ色々話して地所を六十兩買上げさせて其金を送つて吳れました。ソコデ愈々此家を立退く事になつた時、初めて良人に事情を打ち明け『是れから私の微力で四人の糊口を致す積りですが、幸ひにして此難關を越えられますか、或は健康を損じて倒れますか、二つに一つであります。併し私が倒るれば、良人と幼兒二人とは、親戚か知己が必ず助けて吳れませう』と申したところ、良人も深く私の志を嘉し、且つ氣の毒がりました。それから立退く際、永々親子の世話になつた謝禮として、私の轎輿、帶、鏡臺など、此家の娘の嫁入道具に必要な物品を遣りましたが、これは餘程金高な品ばかりでしたので、先方も氣の毒と思つたと見えて、前に出した三拾兩を返して吳れました。ソコで合計百九十兩ほどの資金で、一ノ宮に小さい家を借り諸雜費の殘金は知己の商人に預けて利分を貰ふ事に致し、前の古着屋の仕立物を致す傍ら、一二の子弟に讀書を敎へなど致して、辛くも親子四人の生活を立てたのです。

▲一ノ宮の生活

一家を攜へてより、力と賴むは自分ばかりですから、寸陰も仇には過しませず、夙夜他人の爲に嫁衣を縫ひながら、近所の子弟に讀書をも授け、子に乳を吞ませる時は、見臺に書物を置いて良人に讀み聽かせたのです。子が乳を吞み終れば、腰部を紐で結んで大小便の漏れぬやうに致し置き、或は洗濯針仕事を致すと云ふ風でした。近隣の人々は追々私に同情して吳れ、よく畑の物など持つて來て吳れました。良人は大層餅が好きでした

のでよく餅を贈つて與れる人もあつたのです

▲親族に輕蔑さる

此處に住まつて居る内、大阪の實母が病氣危篤との報を得ましたので、親子四人連れで參つて看護致し、養生叶はず死亡致しましたので、葬儀を濟ませて一ノ宮へ歸りました。實母死去の際、紀念に貰ひました衣類は、大切の品ながら、脊に腹とはいふ譯で、涙ながらに賣却し、尙ほ私所持の本なども賣り拂ひまして、チヨツト百兩ほど纏め、前々の所持金と合して、豪商の某親族に預つて貰はふと致した處、口實を以て斷りましたから、他の親族に預けて利分を貰ふ事に致しました。此際は何の氣も付かずに過しましたが、程經て聞けば、某豪商は私共の落目を卑しみ、なまじ少々の金を預つた爲めに、厄介の入り込で來ては迷惑だと云ふので斷つたのださうです。私は之を聞て實に殘念に存じ、富める人の厄介になる位なら、斯く辛苦は嘗めぬものを、偖々淺墓な人情であると激したのです。



其後私も御蔭で都合もなほり、先年愛知高等女學校長となつた際に、彼の豪商は私に頼む事があつて二三度來て頻りに私に是非御出なされと申しましたが、私は『御宅へ伺つて又厄介でもかけるやうな事が有ては御氣の毒ですからと……』断りました。

▲小學教員奉職中の生活

一ノ宮の詫住居も夢と過ぎて、刈安賀と申す處から子弟教授の爲め招聘され、此處で暫く生活して今度は名古屋幅下と申す處の小學教員に招かれましたが。其頃の事ですから、四書の素讀習字算盤裁縫ぐらゐを教へて濟んだのです。其うち教員養成所も出來たので、其處に入つて一通りの教授法を習ひ、尙ほ小學教師を勤續して居りましたが、悴も十三歳に成り、私が八歳の時より素讀を仕込み十一歳位より佐藤牧山先生の講義を聴て居りましたから校長より助教に頼まれました。固より薄給ですから、下女は迚も置けませんでして、毎日の出勤に不自由な良人を殘して出るのですが、却々心配でありました。若も留守中に近火でもあつたら、私の歸るまでに、何卒良人だけ連れ出して下さいと、近隣へ頼んで置いたので御坐います。毎朝御飯を炊いて二人の子供の辨當を拵へて出して遣り、良人の晝飯は、常食の二碗を盛り、蓋をして側に置き、不自由なきやう用意して出勤しましたので、末の乳呑子は學校へ連れて行き、私の側へ坐らせて置きましたが、よくしたもので至極大人しい子供ですから、乳さへ與へれば世話なしに教授が勤められたのです。左樣私は二十四歳で悴を擧け、二十八歳で長女を產み、三十二歳で二女を產みました。

▲東京師範學校に招聘さる

其頃師範學校長伊澤修二さんの夫人が、幅下へ折々來られたに付伊澤さんとも懇意になりました所から私に是非出京せよと勸められましたが、不肖淺學の身を以て、帝都の學校に教鞭を執るのは、僭越であると存じて

躊躇して居つたのですが、伊澤さんが歸京されて、吉川泰次郎さんが英語學校長になつて來られまして又々出京の事を進められまして、東京の女子師範學校長小杉恒太良さんは其友人でありましたから、之に紹介せられ遂に東京へ召される事になりました。是れより專ら教育事業に從事する事となつたやうな次第で、是れまでが先づ私の經歷の一段落であります。

▲刀自の潔癖

某新聞に私が借金の爲めに困難した事を書いてありましたが、私が借金する位なら、是れまで苦勞は致しません。一厘の借錢もせずに推し通して參る爲めに、人一倍の骨折も致したのです。某新聞は私の苦心を強く書く爲めに借金云々とされたのでせうが、これは贔負の引き倒しであります。私の潔癖は精神的ばかりでなく、身の周圍の掃除など宜い加減にして居いては氣が濟ます、唯今でも我部屋の掃除は自分で隅から隅まで整然と致し、カラ拭を掛け、夜具戸棚の中なぞも、毎朝埃を掃き出すと云ふのが私の癖であります。此潔癖も一つは良人の風が沁み込んだ加減もあるので、良人は晝間は一度も炬燵に足を出した事のない程、行儀が善く、隨つて非常な潔癖家で、子供が學校から歸つて參ると、上衣を着換へるか塵埃を拂ふか致さねば承知せず、幼兒が粗匆でも致すと、湯を沸して腰部を洗へと命じますのみか、子供の便器でも枕元へ置かせぬと云ふ風でして、學校の勤めはあり、手一つで面倒な命に從ふのは、隨分忙しいのですが、私は盲目の良人を欺き宜い加減な事で濟すとは如何しても忍びません、目の見えぬ人の命は尙更忠實に守りたい精神ですから、規帳面に一々遵守しました。漸く用事が片付いて先づ一ト休みと坐ると、終日待ち詫びて居る良人が讀書を請求しましたので、ヤレ辛い事と思ふ折もありましたが、良人に對する熱い同情を以て、每時この愚痴を打ち消し、快く慰籍致しました。

▲事務の工夫

手一つで内外の務を致すので、種々工夫して一時に三つ位づゝの事を執りました。先づ朝竈の下を焚き付けて置いて味噌も摺り、掃除もする、釜の湯は鐵瓶と桶に取り分けて、御飯のむれる間に、子供の顔を洗ひ、自分も朝水を遣ひ、チヨツト身仕舞もするので、私は何樣な境遇の際でも髪を亂したり、顔を洗はずに外出した事はありませんでした。それから御飯後は釜、飯櫃も整然と磨き、棚元を拭いて叮嚀に片付け、留守に人が來ても見苦しくはないやうに何時も致して置きました。斯樣な生活は隨分永い間續けましたので、伜が大學卒業までは、下女も雇ひませんで、繰り廻して來たのであります。

▲何時も同じ心持

私は困難の際にも、早く此境遇を脱したいと焦きませんでした。勿論甘んじて怠ると申すのではなく、働けるだけ働き、履むべき道を履んでさへ居れば、心は何時も平かで、煩悶は無いと信じたのです。今日少し樂になつたと申しても、心持は昔と少しも變りません。私は身邊の掃除などの如き細い事は、規帳面にしたい方ですが、大體の精神は綽々と餘裕を有つのが好きなのであります。

▲刀自學問の仕方

私の學問は前にも申した通り、單だ多くの書物を通覽致しただけで、分類的に研究したので無いから、即則乃便などを一々說明する力は無いのです。ですから、堂々と皆樣の前で議論することは出來ませんが、婦人の履むべき經道は、多年良人の側に侍した御蔭で、聊か悟る所があるのです。一體婦人の學問は、婦人に必要な點に當て嵌るやうに研究するのが一番宜しいと私は考へます。

三輪田刀自の修學時代

（令息元道氏の談）

婦人記者

母が幼年より今日に至るまで修學に關しての逸話は、隨分澤山ありますけれども、自から話すに自慢のやうに聞ゆる處から、母は非常に之れを嫌ふので、私から御話しするのも餘り喜ぶまいと思ひますが、大畧申し上げませう。

▲幼年に於ける學問の動機

母の學問好は天性で、五六歳の頃菅丞相の梅の詩を讀んで深く感じ、自分も九歳にならば菅丞相のやうに詩を作つて見たいと云ふ志を起したのです。又十二三歳の頃母親に連れられて石山寺に參詣した時、丁度月の良い夜で紫式部の古事を深く想ひ浮べ、自分も何卒紫式部の才學にあやかりたいと云ふ志を起した、此二つが主なる動機となつたのです。

▲百人一首の隱し讀み

母の生父は詩や經書に凝つた人で、國學は大嫌ひでしたから、母にも國文、和歌類の書は一切見てはならぬと命じてあつた相ですが、母は又此類の書物を見たくて堪らぬ處から、母親に乞ふて潜かに烈女百人一首を買つて貰ひ、父の目を忍んで寢床に入つてから讀み、頻りに歌意を喜び味ふて終に盡く暗記して了ひました。其内父に見つかつて大に叱られ、其本を取り上げられた處、已に暗記したから本も入らぬと云ふやうな次第で

父親も最早暗記したのなら仕方がないと我を折つた事が唯今以て一笑話となつて居ります。左様たしか十二三歳の頃でしたらう。

▲筆耕先生

母は梁川星巖の門人達が組織した詩作會へ始終出席しましたが、婦人は妙齢の母一人だけである上に、何時も秀逸の詩が出來るので皆に愛され、特に神山鳳陽氏(京都第一流の書家)なぞは感歎の餘り母の作詩を一々書て與れたので、皆が鳳陽氏を綽名して梅野女史(眞佐子刀自の號)の筆耕先生と呼んだ相です。星巖と母とは祖父と孫位の年ばへ、殆んど星巖に抱れる位であつたとか云ひます。其後漢學を松苗博士に、和歌を高橋武之に、書畫を岩倉公爵の祖母君知光院に學びました、母が學藝の進歩の著しいのは、天才の點もありませうが、熱心の度が非凡であつた事は確かなので、母より十歳も年上の男子が毎々母に教を乞ひに來られたのでした。

▲心機一轉

妙齢時代の母は專心一意學問に身を委ね、殆ど他を顧みぬと云ふ有樣で、若し其儘で推して往くと、男性的の變り者となつたかも知れなかつたのです。所が紅蘭女史に親炙して其薫陶を受け、爰に心機の一轉を來したのです。紅蘭女史は御承知の通り學問、書畫に秀でゝ居る上に、婦人の常道を正しく踏み行ふた人で、良人の留守に機を織りながら三體詩を悉く暗誦したと云ふ有名な事實があつた位です。夫れで婦人は書畫なぞに耽るべからず、唯家事、裁縫の餘暇に試むべしと云ふのを平常の精神として居つたので、女史が書畫の印には針線餘事の文字を刻してあつたのです。母は女史の感化を受けて大に悟る所を生じ、所謂婦人らしいと云ふ事を己れの立場として學問を練磨したので、書畫の印も矢張り針線餘事を用ゐ唯今以て之れを履行して居ります。

▲畢生の恨

母は江戸の塾堂に入つて學びたいと云ふのが熱望でしたが、勿論女子の入學は許される筈はないので、岡本黄石に連れて往つて貰ひ志を遂げやうと企て、已に行李まで整へて支度して居る時、丁度長州征伐の變亂が始まつて、黄石氏は其方へ出掛けて了ひ、折角の望を水泡に歸したのは畢生の恨みであつた相です。併し後に考へれば、假令黄石氏が同伴して志願したとて迚も許可される氣づかひは無い、誠に踏天の望であつたので、畢竟好學の極度、斯様な可笑な事もあつたのです。

▲机を持つた嫁は厭

岩倉公の媒酌で嫁いだ母の良人は、勤王家で且平田派の國學者であまりしたが、机を持つた嫁は厭だと云ふ風でしたから、婚嫁後の母は家政經理と良人奉仕とに意を專らにし、寸暇を得れば書見する位でありました。併し國學は自然良人の教化を受けて進歩したのでありませう。當時良人は外務省に奉職してありましたが—氣骨のある人だから同僚と意見が合はぬとかで辭職し、母を殘して地方を巡歷なぞして居る内、古い槍傷より脊髓を侵され、それが爲めに精神病の氣味で、明治十年から十一年にかけて長の病床に就きました。母は良人の看護の暇を竊んで日本外史、日本政記等の書を悉く讀み明らめた相ですが、是れが後日教鞭を取るに當つて大層利益したのです。

▲素手で學塾を開く

永の煩ひの後子供を殘して良人が沒した際は、良人の氣風のため家に借財も在つたのですが、母は一錢の借財も快しとせぬ性質ですから、公債證書を悉く賣却して返財して了ひました。母も未だ三十一二歳であつたので、親戚が再婚を勸めるのを斷然意を決して子供を引き連れ、金も書籍も何もなしの誠の素手で松山市へ出で、明倫學社と云ふ漢學の私塾を開いたのです。此頃は漢學隆盛の時代でしたから、他に助くる人もなく單身

教鞭を取る母の許へ入學するもの續々殖へ、忽ちにして入塾生ばかりでも二十人程もありました、素より倔強の男子ばかりでしたが、皆よく母の訓誡に服從して靜粛なものでした。中に分らぬ學生があると、夜通し坐らせて反省させたので、隨分閉口した者もあつたのです。母の實子は不幸にして成長の後死去致したので、私は養子であります。私は此明倫學社へ漢學を習ひに來た門下生の一人でしたから、師たる母の經歷を委しく知つて居るのであります。母は後來糊口のため立身のために學を修めたのではなく、唯嗜好上から修めたのでありますが、寡婦となつて獨立の道を立てる時、藝は身を助くると云ふ格言をしみ〴〵思ひ當つた相です。若し無學無藝であつたなら、洗濯か按摩でも爲ねばなるまじ、母の生家の身分としてまさか斯樣な事も出來ず、據ろなく心になき再婚をするやうになつたかも知れませんが、多年蓄積の學藝で一家を與した處から、彼の格言を深く感せらるゝのでせう。

▲書籍を飾物とせぬ

母は私の書物道樂を知つて居ますから、如何程高價の書籍でもドシ〳〵買つて與れ、又豫約もして與れます、未だ切らぬ洋書も澤山有つて居る位、外國雜誌も三種程取り寄せて居ります。人間何か一つ樂しみが無くてはならぬから、書物を幾らでも買ふが可いと母が言つて與れるのです。併し母自身は書物を蓄積したり、立派な本を座敷へ飾つて置くのは嫌ひであります。一書を手に取れば之れを熟讀解釋せぬ內は放しません。一度頭腦に入れた書物は再度見ずとも記臆して居るやうでなけりやならぬ、一寸見て、これは又後日に見やうと思へば、つひ失れなりになつて役に立つものでないと言ふのが母の持論ですから、此三輪田女學校へも古い雜誌は保存して置きません。一度生徒に熟讀させ頭腦に入つたら、新しいのと取替へて古いのは取除くと云ふ事に定めてあります。母は又何樣な破れた汚い書物でも、愛讀しかけたら机邊に置いて專心熟覽するので、一向

體裁に構はぬのです。

▲學に入るには深く強くあれ

漢文を學ぶなら、論語一册でも之れを會得するまで何遍でも讀み、國文なら徒然草でも、竹取物語でも、暗記するまで讀み、和歌なら古今集を暗誦するまで熟讀すべし、尤も目下は教育法が昔と違ふけれども、讀本でも國定修身書でも讀んだ丈けの書册の事はシッカリ頭腦に泌み込ませなければならぬ、目下の教科書類は讀むに容易だと言つて馬鹿にして粗雜に讀む



から得る所が少いのである。假令如何に低い程度の書でも再三熟讀すれば發明する所がある、雜誌中の一文章でも仇に看過してはならぬ、總て初學者は汎く淺いより狹くとて深いのが肝要であると母が常に生徒に訓誡して居ります。

▲技能を人に知らるゝを厭ふ

母は非常な好學で、どんな忙しい時でも一日に一ページなり二ページなり見なければ馬鹿げたやうな氣がすると云つて、寢床に入る前に必らず何

か讀んで寢ますし、書や畫も一寸でもかいて寢ます。私の妻なぞ『御母樣は今以て御習字を爲います』と不思議がる位、實際嗜好の度は深いのです。併し書いた物は人が望んでも決して與りません。夫れは書家だの畫家だのと人に許されるのは厭だからです、元來母の目的は教育事業であつて、及ばずながら後進の婦人を導き、聊か國家に盡したいのが主義で、末技を以て世に顯はれるは本意に背くからです。丁度星巖先生が古本屋を素見して居る時來合せた書生が、星巖の在るとも知らず本屋に向つて、詩人星巖の著書が在るかと尋ねたのを聞き、嗚呼余は經國濟民を以て任じて居るのに、世人は余を目して詩人となす乎と浩歎して、其後は餘り詩を公けにせなかつた話と同じ意味であります。併し和歌の友人なぞが參れば暇ある際は餘念なく之れと談ずるので是れは單に和歌だけの知友として交はるのだと云つて居ります。

▲英、數、理科の獨習

母の研究的性情は舊式の學問に許り甘んじて居りませんで、新式の學問も一通り學びましたが、皆獨習であります。最初は自分の子供に就いて學校の教科書を研究し、追々進歩を早めて子供より乘り越したので、英學でも、地理、歷史でも皆斯くして研究しました。數學も洋算は子供から學び初めたので、英學も最初は其通り唯今では會話こそむづかしいが、讀むだけは結構出來るやうになつたのです。總べて根氣強く深う研究するのが母の持前であります。

▲勤儉力行

母の勤儉力行は實に感ずべきもので、一文の借錢もせず、寄附も乞はず、全く母一人の勞力と勤儉貯蓄とに依つて公共のために此學校を建てたのでありまして、私は唯犬馬の力を盡して母を助けるに止まり、却々母の萬分の一をも、眞似る事は出來ません。母は實に間斷なく働く人であります、唯學藝に心を働かす許りでなく

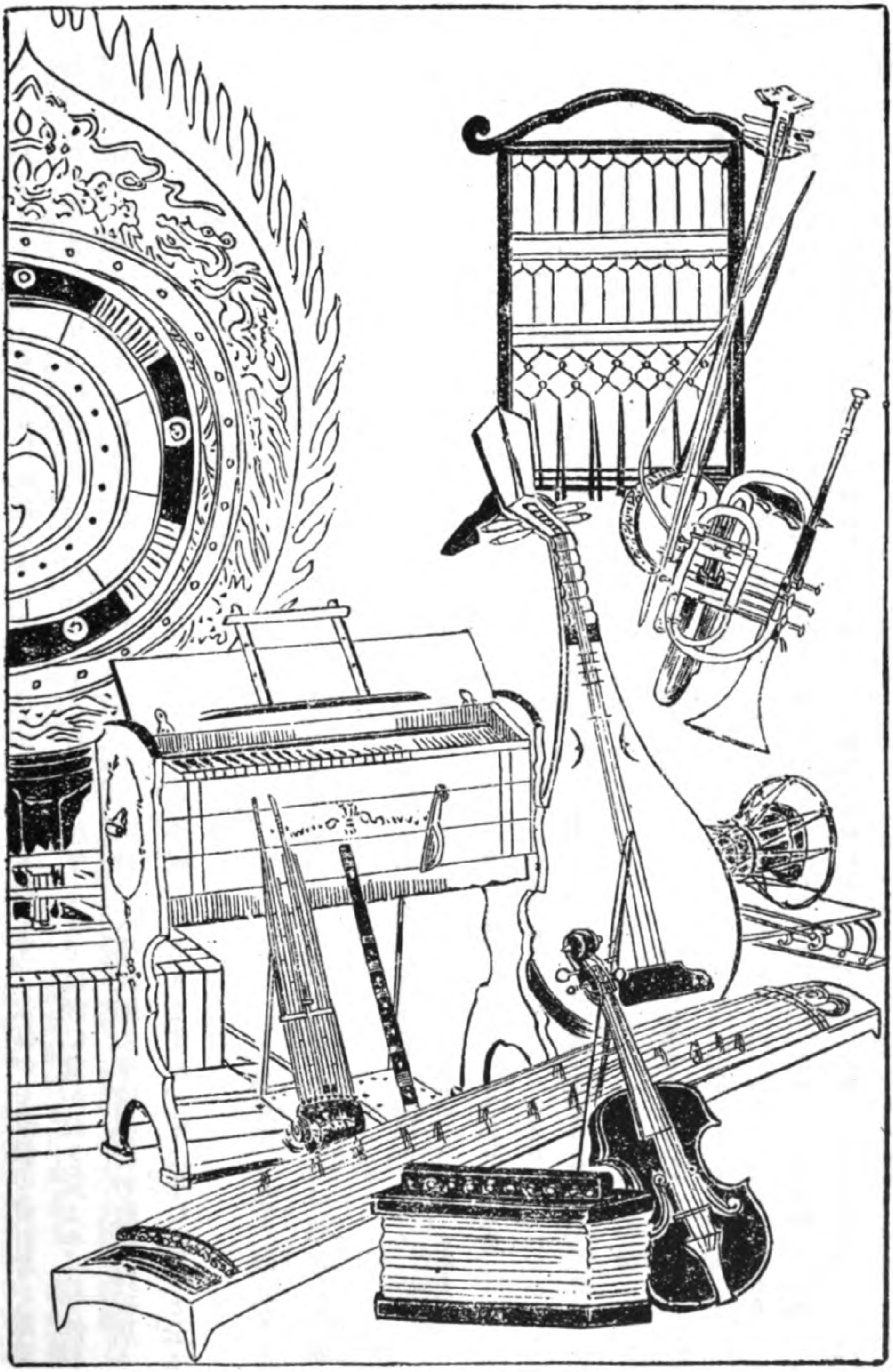
庭作りもする畑もすると云ふ風で現に此庭の木なぞ皆母の手植したものです。夫れから金錢の會計なぞ嚴重な人で、毎晩自から調査して出入に少しの違ひが在つてもそれの判然するまでは寢に就かぬと云ふやうな性質です。折角の御出でに纏つた御話しも出來ず、失禮でしたが、丁度明日の入學試驗の準備のため取込んで居ますので、かいつまんだ事だけ御話し致しました。畢竟母は非常な好學家ではありますが、單に學に耽ると云ふ側でなくつて、其頭腦は經世家、敎育家に出來て居ると私は思ふのです。

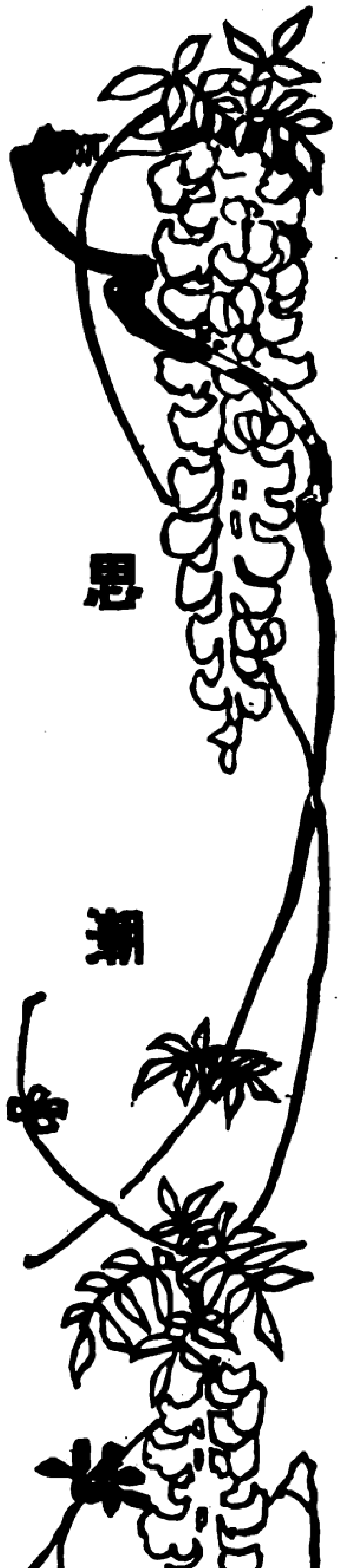
兩陛下の御膳部

兩陛下へ大膳職より毎日調進し來つる御料の御膳部の御模樣を漏れ承るに何れも同一の御膳部を進め參らせる事となし居れるが御常式と申す御獻立と御好みの御獻立との二樣あり御常式と申し來つるは朝が二汁三菜、御晩餐が二汁五菜何れも日本料理の御獻立なり　聖上は魚類にても鳥肉にても生物は少しも御用ひあらせ給はず御好みさせ給へるは鯛のソボロ、興津鯛の味噌漬、カヽ煮の蕪等にして御常式の朝の部は煎上げの魴鮄、卷燒玉子、おはらぎ湯波、一の汁が銀杏大根に白味噌、二の汁が鯛の清汁等にて卷燒玉子が朝の獻立にあれば土器燒玉子は御晝か御夕餐に必ず進め來つりこの外に御好みの御料理を一二種づゝ調進しまゐらすとの事なりと云ひ、

皇后陛下は御常式の外に御好みはおらせられず鯛の作身、蔬菜の御浸物等を召したまひ朝は御常式の御膳部にも御箸のつけさせ給へる事はなくて麵包と牛乳を召上れる由に承りぬ又西洋料理は御陪食などのある時の外には召されず西洋風に鯛、芝鰕を以て衣揚げと稱するフライの如きものを一種位加へ來つり鯛、興津鯛の如きは必ず獻立の内に加へざるはなく汁も朝白味噌を進めまゐらすれば次には三州味噌を用ひ毎日三回とも調理法を換へて進めまつるが例なり魚類は元より新鮮なるを選ぶは申迄もなく吟味の上にも吟味をなし時候に適する魚類または野菜を原料に用ひて最も鄭重に調理するなりと云ふ。

樂器





女一生の大問題

三輪田女學校長　三輪田元道

△女は如何にして學問すべきや
△女は如何にせば過ちなき生涯を送らるべきか

女子は如何にして學問すべきや、と云ふとは頗る考究に價する問題で、今後最も教育家の留意すべきとであると共に、各自それ〲苦心して居られるだらうとは思ふが、私は女子に餘り最高の學問をさせる必要はなからうと信ずる。何故ならばと云ふに、女子は男子と異つて先天的に、イヤ生理的に、體質の上から云つても、精神の上から云つても、到底男子と競爭してこれに打勝つて獨立的の生活をするとが出來ぬからである。男子ならば、專攻的に科學なら科學、文學ならば文學、美術ならば美術と云ふやうに、各自志すところのものを分業的にやり遂げるやうになつて居るが、女子は然うではない。女子が社會に立つて實際の力が男子に優らない限りは、女子は矢張り家庭を中心として夫を輔け、子を育て、所謂良妻賢母として一家を治めて行くものとならねばならぬ。其良妻賢母となるには敢て深高の學問は要せぬ、女子大學を卒業せぬからと

云つて決して一家の主婦たる資格に於て缺くところはない。寧ろあまり學問をしすぎては身を過つ基である。

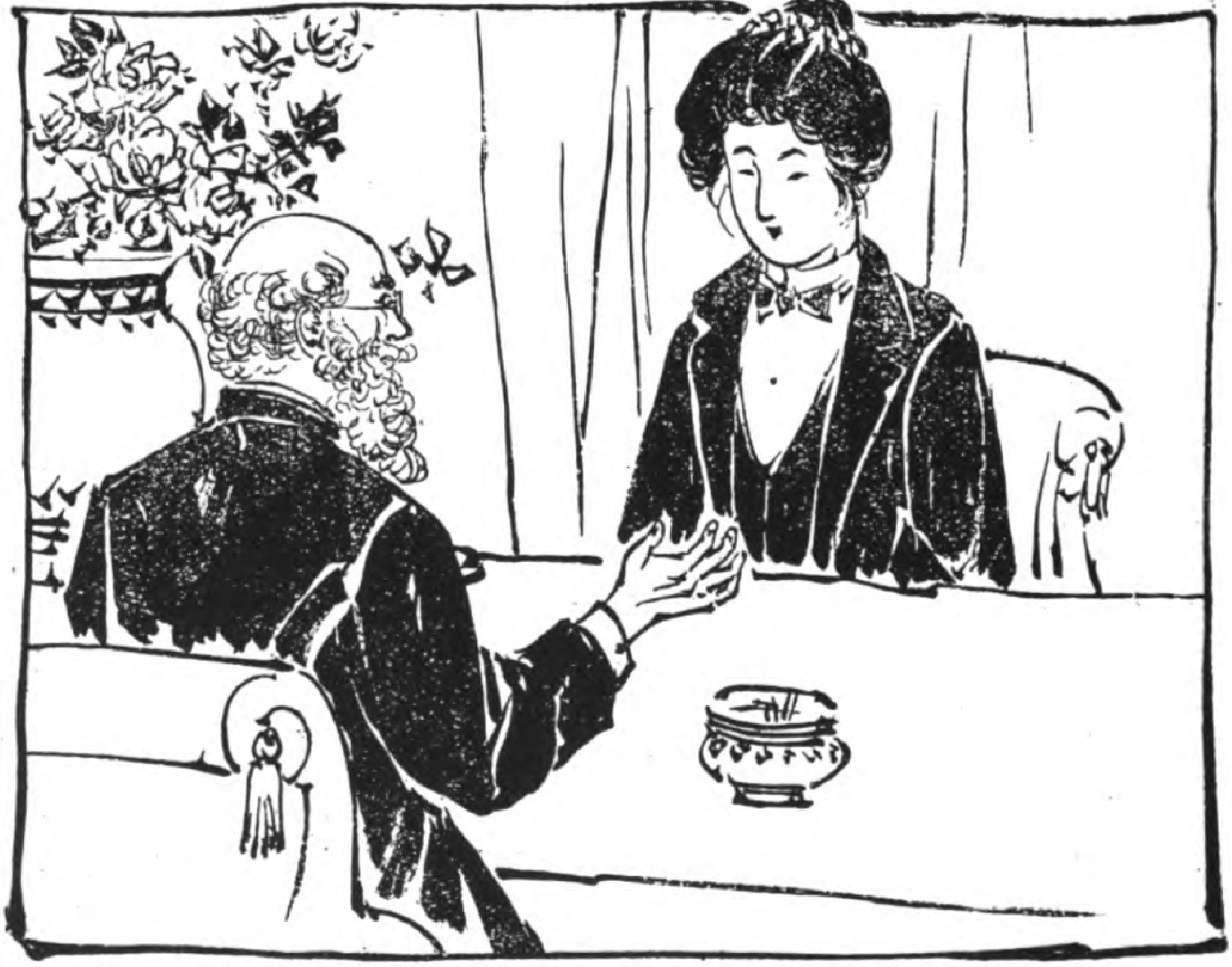
▲間口の廣き學問

其代り女子は淺くとも廣い學問を脩めておかねばならぬ必要がある。一家を組織する上に於て、家政學は勿論のこと、料理法も知らなければならず育兒法も知る必要あり、裁縫に、衞生に、生花に、音樂に、其他家庭の裝飾、來客に對する禮儀作法等、あらゆる方面にわたつて細かく廣い智識を要する。其點に至つては男子よりも餘程複雜な責任があるので、女子の學問が凡て雜駁に流れ、謂はゞ敷物のやうに薄く廣くなるのは、勢ひ止むを得ぬ次第である。それと今一つ女子が學問を深く修むる事の出來ぬ理由は、時間が許さぬからである。つまり年齡の問題である。從來婦人の嫁婚期は先づ十八九歲から二十一二歲位までとしてある。それが現今の學校制度でゆくと、十五六歲で高等小學校を卒業して、それから四年の高等女學校を了へると、モウ二十歲位になる、其上又女子大學までと云へば既う結婚期、――婦人の身に取つて尤も大切な結婚期を通り越してあたら良緣を取外し、生涯獨身で終ると云ふやうなことになる、爾うなると學問が却て其人を禍ひし、且つ一生の幸福を奪つて仕舞ふといふやうな事になるのである。然らば這の弊害を如何にして避く可きやと云ふに、まづ現今の社會の狀勢から推して第一の方法は高等小學二年まで修得したら、直ちに特定の高等女學校に入り、一般の普通學を脩めて卒業するのが、大抵十七歲位、それから二三年は家庭にあつて實地の練習をなし、而して良緣次第結婚するのが一番幸福に近いのである。然るに今日の風潮はやゝもすると多くの父兄達は高等小學の全科を卒業せしめた上でなければ高等女學校へは入れぬもの、高等女學校を卒業すれば、更に又本人の望むがまゝにそれ以上の學校に入れ、天晴れ女大學者を作らうとする傾きがあるが、これは大なる考へ違ひである。

▲オールドミス

女子も亦學問さへすれば豪いものになれる、ナニ男子などに負けるものか、と自己の體質や、又先天的の特性を忘れて、無暗に學問萬能でやり通さうとする、其中に二十歳が廿五となり廿五が三十歳となつて、最も大切な結婚期を通り越し所謂オールドミスとなつて止を得ず獨身論を唱出すやうな不具者になり了るのである。

▲女權の擴張に就て



元來女子の生産力の時期は男子に比して極めて短く普通二十歳から四十歳まで即ち女子の生命は僅にこの正味二十年である、其二十年しかない生産力を學問の爲に過半奪はれて、而も人間として滿足の義務を果すとが出來ないなどは誠に悲しむ可き現象である。近來婦人問題が大分矢釜しくなつたので、虚榮心の強い婦人の中には、例の女權擴張、獨身同盟會などゝ頻りに騒いで居る人もあるやうだが婦人は果して社會的に男子と拮抗なし得る資格があるだらうか、男子の選擧權を

有するが如く女子にも選擧權を與へよ、男子に判檢事受驗の資格あつて女子にこれなきは奈何。と云ふのが彼等の唱道し絶叫する所であるが、これは無理な注文である。若し女子の欲するがまゝに男子同様の權を悉く許すとすれば、女子は當然の義務として男子同様の兵役に服さねばならぬ、それからして既に女子は本然の資格を缺いてるではないか。女子が社會的に活動せず、又權力範圍を限られて居る其代りとして、男子は人類として最も苦痛なる兵役の義務に服して居る、女子はそれを思はず男尊女卑がドウのコウのと云ふけれど、日本の風習は決して左まで不公平ではない、寧ろ幸福は男子より女子に多いのである。

▲小不平の結晶

米國の婦人社會では盛に女尊男卑を唱へ、非結婚同盟會だとか、獨身倶樂部だとかいふものを組織して、專ら男子を壓迫しやうとして居るが、これは一種の反動に過ぎぬので、女子が社會的に迫害せられたといふ理由から發した公憤ではなく、實は自己を中心とした小不平の結晶である。サテ其小不平なるものは何から起つたかと云ふに、謂ふまでもなく、女子が學問の爲に結婚期を失して、極めて不自然なる生活をつゞけた結果、遂には精神上に病的作用を釀して即ち右の如き不具者が作られたのである。何も米國の婦人だからとて人間に變りのある筈はない。人類として相當の機能を有する以上は、矢張り時節が來れば結婚を要求し、兩性相俟つて美しい家庭を作りたいと云ふのが婦人一般の理想するところで、決して結婚其ものを眞から否認する者はないのであるが、それが爾うは行かぬのは、畢竟婦人自身が學問に誤られたからである。

▲生學問の害

然るに我邦現今の婦女子は恁の如き精神的不具者を一種の模型として、米國がコウだから我等も女權を擴張せねばならぬ、獨逸ではドウだから我等も其様にせねばならぬと、出來もせぬ相談に矢鱈と改革呼ばりを

して、婦人の思想を攪廻さうとして居るが、誠に淺間しい次第であると共にいよいよ過度の學問が婦人にとつて恐る可きものであると云ふことを示して居る、其證據には此等の事に運動をして居る婦人の十中八九までが、生學問の爲に好配偶を逸した末、止を得ず獨身論を唱へて居る負惜み者か、さなくば一種の失戀の反撥から起つた精神的の病者である。成程我邦の社會制度には多少の決陥もある、あるから之を徐々に改善して行く必要は認めるが、根本的に改革するなどの必要は



斷じてない。

▲學問と結婚の兩天秤

然し乍ら私は一般の婦人に全然最高の學問をするなと云ふのではない、普通學は無論修めねばならず、時間さへ許したなら、如何なる高等の學問でも奬勵したい方ではあるが、如何せん、婦人には年齡が許さない、婦人には最も重大なる結婚と云ふ責任がある。尤も多くの婦人中には、この重大なる結婚を抛つても、學問の爲に一生を了らねばならぬと云ふ特殊の人もある、

其特殊の人と云ふのは、何によらず一種の天才を有した人か、若くは境遇上、假令ば親一人子一人で、親を養はねばならぬところから、止むなく獨身で立つてゆくと云ふやうな人を指すので、此等は最も稀に見る事實である。私の母（眞佐子刀自）の如きも境遇上いろいろの變化もあつたが、要するに多少一種の天才を有してゐたから、今日に至つたのである。

▲天才の病人

此天才の二字が最も女子の虛榮心を挑發せしめ、且つ女子を毒するのである、近來になつて更に女學生の天才病者が殖えたやうに見受るが、彼等は普通の學術以外に、短歌の一つ、新體詩の一句も綴れるやうになれば、直ちに女流詩人氣取りで、我には慥に天才ありと己惚れ、天晴れ一廉の女文學者を以て獨立せん、などゝの野心から、結婚を蔑視して果は何方つかずの不具者となり終るのである、天才が然う世間に澤山あつて堪るものでない、又ある可き筈のものでない、天才は人の作るものでもなければ、學問によつて作られるものでもない、自然に產れるものである、セキスピヤが何程の學問をしたかと云ふに、僅に田舍の尋常小學校を卒業したばかりである、それが全世界を驚かすやうな大文豪になつたのは、寧ろ一種の奇蹟に類するので、決して所謂學問の力ではない、それを思はず現今の女學生が何でも學問をしさへすれば天才を獲られるかのやうに心得て居るのは實に滑稽の次第である。

▲晩婚は國の不爲

近來我邦の男女とも著しく晩婚者の數が殖えて來たやうであるが、これは一利一害で、早婚に弊のある如く晩婚にも亦弊を免れない、これは生存競爭がいよいよ劇しくなり、人と人との內的軋轢がます／＼複雜になるにつれて生活難から自然資力のないものは晩婚になるといふ當然の結果ではあるが、決して喜ぶべき現象ではない、結婚をしても一家を計營する上の資力に缺かぬ者は、學生時代に既に結婚を濟まして夫婦とも

袴を着けて通學して居る人も往々あるが、然もなくして學校卒業後、幾千の月給に有つかねば一家の經營が出來ぬ程の無資力者は勢ひ判事とか檢事とか或は學士と云ふやうな肩書のつくまで結婚を待たねばならぬ、爾した日には男子は既に三十歳に手が屆き女子も亦、妙齡の時代を經過して兩性とも變則な結婚をせねばならぬとになる、若い女學生の中には二年や三年婚姻が後れても、是非最高の學校を卒業せねばならぬと事もなげに云つて居る者もあるが、コノ二年三年が女子にとつて最も大切なる歳月であると共に、結婚を遲めると早めるとは一生に大なる影響を來すのだ、これは何とかして早に失せす晩に失せぬやうに結婚法を改めたいものである。爾するには矢張り、



▲修學の年限

を適度に縮めねばならぬ、元來各女學校とも多少教授法に遺憾があるから、修學年限が永くなるので、假令ば五年で卒業するところを三

年に切詰めて卒業させるやうな教授法をとつたならば適度の時期に結婚することが出來るだらうと思ふ。例せば裁縫、茶の湯、生花、琴曲といふやうな普通學術以外の手藝の如き、從來のやり方で見ると、裁縫でも茶の湯でも生花でも琴曲でも、各々其道によつて、奧義、若くは秘傳と云ふものがある、其奧義――秘傳を悉く得るには、少くも裁縫が五年、茶の湯が二年、生花が二年、琴曲が三年、少く見積つても前後十二年の歳月を費さねば所謂奧義、秘傳の免許を得られぬのである。此時間を短縮するには宜しく從來の、秘傳とか奧義とかを看板とする個人的の師匠をはなれて、少し團體的に公開的に學校で教授をすれば可いのである、そして生花ならば黒板に其方法を描き示し、この枝が天でこの葉が人になるといふやうに科學的に説明すれば多數の生徒が一度に修得することが出來る、時間の經濟上、何も特殊の師匠に就いて學ばねばならぬといふ必要はないのである。それに近來勃興した問題は、

▲女子と實業教育

を授けよと云ふことである、成程これは新らしい問題で、女子と職業といふ關係上、頗る留意すべき社會問題であるが、サテ實際にやつて見て、果して好成績を得るや否やといふ事が疑問である、三越呉服店、其他銀行會社などで女子の店員を遣つて居るところを見ると、強ち女子だから實業的事務に適さぬと云ふ理由もあるまいが、然らば男子と併立し、社會の矢面に立つて同じやうに活動が出來るかと云ふに決して爾ではない、根本的實力に於て違つて居る。若し女子に實業教育なるものを施し、男子と同樣な業務を執らしむると云ふ日になると、茲で男子と女子との職業爭ひが起つて來る、爾うなると自然弱肉強食の理法によつて、女子は毎に敗者の位置に立たねばならぬ、敗者となつても關はぬからやると云ふならば論外だが、何も好んで敗者となるべき職業を求むるにも及ぶまい。若し女子に、實業教育を授くる必要ありとせば、それはホン

の或一部、或範圍に限つてやつて見るも可い、其範圍と云ふは餘り太した腦髓を勞さない、例へば牧畜、養鷄、養蠶の様な事業、若くは手藝に屬する陶器、漆器、編物、織物のやうな種類である。これならば私共も進んで奬勵しやうと思つて居る。然るに現今の女學生に就て、



▲卒業後の目的

就業の方針等を見聞するに、多くは男子と同じやうな事を考へて居るらしい、一番多いのが獨立的方面では新聞雜誌記者志願者、次が學校教師、銀行會社等の事務員、又人の妻としては、外交家、實業家、辨護士醫師と云ふ順序で、虚榮心の强いとは事實男子よりも甚だしい。それに近來殊に憂ふべきは、かの星だとか菫だとかいふ和歌新體詩に憧がるゝ女詩人の多くなつた事である、これは勿論一時の流行でもあらうが、女學生の多くが紫式部、淸少納言等を理想とし、活字の厄介になるのを無上の名譽と心得て、卑猥なる文學熱に浮された末が、悲觀となり、厭世となつて自ら身を持崩し、若くは他日獨立して女文學者たらんといふ下心から文筆に親しむといふ、何れにしても喜ばしからぬ現象である。そこで或一二の學校では

此弊を矯めやうといふので、文學に關する新聞雜誌及び小說等を生徒全體に讀ませぬ規則を設けたと云ふが、これも隨分愚な話である、何程學校で嚴重に取締つても家庭で讀めば同じ事である、却て恐いもの見たさの好奇心から一種の反動を起さぬとも限らない。

▲學校は家庭の豫備門

之を要するに學問は主でない、手段である。學校は主でない、豫備門である。家庭を作るに就いての方法を養ふ講習所である。學問は其家庭の柱となるべき良妻賢母を作る爲の辭典である。然るに大方の女學生及び其父兄は、コノ目的と手段とを顚倒して、學校さへ卒業すれば即ち一人前の人間になつたかの如く心得て居るから、動もすれば、ノートブックと首ッ引をし乍ら、お料理をして醬油一升と水一合とを取違へる樣な滑稽を生ずるのである。女子が獨立して男子と併行する程の實力のない限りは、女子は飽までも家庭を中心としてこれに處する方法を怠らぬのが第一義である。隨つて、

▲學問は深さを要せぬ

淺くとも廣ければそれで家庭の用は足りてゆく、求めて學問に深入をする必要はない、唯だ『人類は如何にして幸福となる可きや』と云ふ事を主として考へたらば、自ら婦人問題の解決がつくのである。然るに現今の女流は餘りに希望が大きい、空想が大きすぎる、何でもかまはぬから豪いものになりたい、凡人では面白くないから、是非ヂャンダークとかクレオパトラの樣な非凡人にならねばならぬ、と云ふのが一般の女性が頭に描いて居る理想らしいが、社會は決して恁る英雄豪傑の出現を要求せぬのみならず、寧ろ平々凡々でも常識の發達した婦人の多からん事を希ふて居る。

▲英雄を產出す母

又婦人自身の爲にも自ら英雄たらんとする人よりも英雄を產出す母となる人が更に偉大のものである、蓋

臣秀吉、西鄕南州などは豪い人であつた、豪い人には相違ないが、其豪い人を產出した母は更に豪い人である、歷史上光輝ある名は殘らぬまでも、事實に於て本人よりも更に豪い者であつたらうと思ふ。人の母として我子の立身を祈るは凡ての人情、而も之を英雄たらしむるは人生の快事ではあるまいか、これを思はずして大方の婦人は、只管自己の虛榮心に驅られて出來もせぬ空想を描き、飽まで非凡人たらんとあせる如きは、實に本末を誤つた次第である、私の主張は全く賢母良妻主義で、本論の要領を摘めば左の數項である。

一女子は高等小學二學年修得後、直ちに高等女學校に入る可きこと。

一十七歲前後に高等女學校を卒業し二年若くは三年間父母の家庭に於て主婦たるべき用意を研究すること。

一獨身は婦人をして精神的不具者たらしむ。

一早婚に弊ある如く、晚婚にも弊あり。

一結婚期は二十一二歲を超ゆ可からず。

一學校を主とせず、家庭を主とすべし。

一學問は深きを要せざれど萬般にわたりたる智識を涵養すること。

一茶の湯、生花等の秘傳を知る爲に長日月を費すは愚なり。

一女子は平凡なるべし、常識に富むべし、自ら非凡人たらんと欲するよりも、母として非凡なる子を養成するは更に多大の名譽なり。

大略右の如き順序で行つてゆけば大した間違はなからうと信ずる、尙ほ女子自身も、前に述べた如く、「人間は如何にして幸福の生活を得べきや」と云ふ事を深く考へて、自ら發明するところがなければならぬ。

(右は三輪田先生の口話を記者の筆記したるものなり)

▲女の心

夫を亡くした女の悲みと云ふものは左程に長くはないと云ふ事だ、左樣だらう心配するのはセカンド(Second 一秒、次の夫の兩義)だから。

經濟を主眼とする家庭教育

左の一篇は曾て穂積法學博士が婦人教育會に於て演説されたるを記者の筆記したるものなれば文責は記者にあり

▲日米教育主義の差

この世の中に人を教育する場所は、三つある其一は家庭、其二は學校、其三は社會である。日本の兒童は家庭に於て如何なる教育を受けるか、慈母の懐にあッて假初の寢物語にも、桃太郎の鬼が島征伐、猿蟹合戰を始として、稍長ずるに及んでは義經、辨慶、清正、太閤、正成等の話を聞き、街頭で軍ゴッコをするにも又古英雄を自分に擬らへて遊戲をする位である。隨ッて家庭内に於て愛讀する書物は源平盛衰記、太平記、三國誌のやうなものである、次に第二の教場たる學校に於ても亦同様で教師の教ふる所、生徒の學ぶ所、教育勅語の旨に從ひ義勇奉公を主とすることを教へ、而して維新以來教育の進歩により古來の武士的精神を四民一般に普及せしめたのである、第三の教育場たる社會に於ても亦同じく忠義勇武を專らとして人々の口に稱讃され心に刻み傳へらるるのみならず各地方の神社にも古來の忠臣、義士、英雄、豪傑を神として祭られて居る、斯の如き家庭、斯の如き學校、斯の如き社會に教育された日本人民が戰に臨んで忠勇無雙なるは當然である故に私は滿洲の野にクロパトキンを擊退したものは大山、兒玉、黒木、野津、奥等を始め諸將卒のお母さんである、教師である。又旅順でステッセルを降服せしめたものは東鄉、乃木其他の將卒のお父さんやお母さんである、學校の教師である、社會が是等の忠勇の士を作り出して武名を世界に轟かしたのである、故に私は日本が何故に勝つたかとの問に對しては常に教育であると答へるのである。

扨て日本は教育で勝つたが米國は何故に米國が富むかと云ふ問に對しても、亦た教育であると答へる其の理由は、米國に於ては三大教育場たる家庭に於ても學校に於ても又社會に於ても致富を以て主旨とすることは恰も、日本に於て忠勇を主旨とすると同様であるか

らである。

▲米國の家庭教育

先づ米國に於ける家庭教育に付いて申せば私が漫遊中、他の同行者と共に「セントルイ」に於て「ハミルトンホテル」と云ふ旅館に泊つて居ました、其「ホテル」の食堂の入口に机を置て各種の新聞を賣つて居る小僧十一二歳の小供があります。旅客は毎朝毎夕其所で新聞を買ふ、然るに此小僧が客との應接、金錢の受拂等は中々



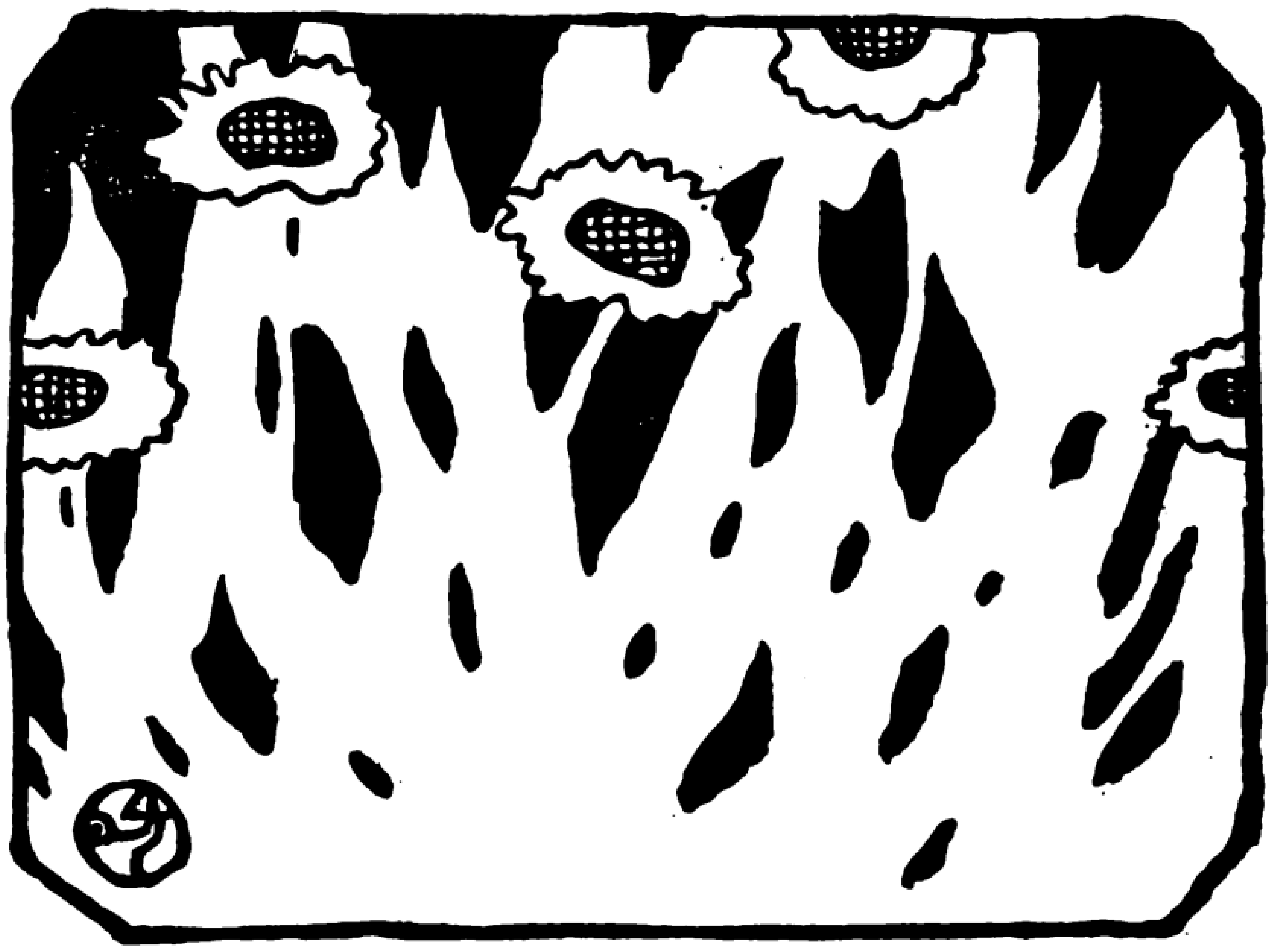
慣れたものである、或時此小僧が「ホテル」の持主(これはウキリアムソンと云ふ富豪)に向ッて「お父さん」といつて話して居るから、私は其ウキリアムソンに向ひ「これはあなたのお子ですか」と聞くと「私の子でございます」と答へた、「なぜあの樣に新聞賣などをさせるのですか」と尋ねると「これは學校に行く前と學校から歸つて來た後即ち朝飯と夕飯の時に二時間づゝ此處に坐らして賣らせます、それは實業の思想を養ふ爲

めです」と答へました、そこで私は大に感ずる處あつて是から米國の家庭教育の事を調べて見たいと云ふ念を生じたのであります。

▲米國兒童の身體を構成する要素

夫より私は機會があればつとめて子供のある家庭の實情を觀。其他宴會や汽車や、汽船等にて逢ふ人毎に子供を持つて居さうな人は勿論、其他の人にも談話の際家庭教育の實際に就き質問を心掛けました、勿論人により家庭により多少考の異る點はありますけれども概して云へば幼少の時より財産は勞働の結果であると云ふ考を起さする其習性を養ふのが家庭教育の重要なる一部と爲ッて居るのであります或は一日一時間だけは友人の持主で有る處ろの印刷工場に遣つて活字拾をさせて其賃錢は殘らず之を與へ、其帳面は自分に附けさせて父母が之を檢査すると云ふ樣な風にして居る人もある、又或は使ひ小僧「メスセンジーヤーボーイ」の代りに使用して小使として賃錢を與へると云ふ風にしてゐる人もある、又掃除をさせるとか、新聞を賣らせるとか其外種々小供に出來そうな用事をさせて之に賃錢を與へそして幼少の頃より子供に一切親の財産を當にせず、財産は自分の腕一本で働き出すものであると云ふことを身に浸み込ませることを心懸けて居る樣である、是は大に注意すべき點の一つである、勿論我國に於ては今日小中學校に行つて居る子供でも先生から富は自然、勞力、資本の三原素から生じるもの、財産と云ふものは勞力の結果であると云ふやうなことを聞き或は讀本で讀んで居るのであるが亞米利加の子供に至ッては之を知つて居る計りでなく之を心に感じて居るのである、身に刻みこんでゐるのである即ち家庭教育に依ッて習ひ性と爲り、此考が血と爲り、肉と爲り、神經と爲つて身體を構成して居るのである、日本の子供は單に知つて居る丈である、けれども米國の子供は感じて居るのである、單に知つて居ると云ふことゝ感ずると云ふことゝは全く別なことで、悪い事を

してはならぬと云ふことは知つて居つても、惡い事をすると心持が惡いと云ふ程にならねば善人にはならぬのである、亞米利加に於ては財産と勞力と云ふことの關係を能く性質の中に注入すると云ふことを、家庭教育の一つの重要なる事として居ると云ふことは明かであります、從つて勞力といふものは神聖であると云ふ考が起る、勞力の神聖と云ふことは希臘の哲人ソクラチースが唱へ始めたことであるが、ソクラチースが他の聖賢に異る所は勞力の貴いと云ふことを言ひ始めたのが一つの點である昔の人は遊惰は富貴の徴。勞働は貧賤の印であると考へた、それを破つたのがソクラチースの卓見の一であります。



▲勞働神聖の觀念

亞米利加人が勞力神聖の念の盛なる一例は聖路易の博覽會を御覽になつた方はよく分るであらう其の博覽會は二里四方もあつて巴里の博覽會の十一倍もある非常な廣い面積を有するのでありますが、場内に椅子車即ち椅子に車を附けた乘物を、後ろの方から押して歩く、足弱の御爺さん、御婆さんなどは皆それに乘て見物しますが、其車夫が一定の服を着て居ります是は悉く大學生である、大學生が車を押して車賃を取つて居る、博覽會事務局は大學生に限つて鑑札を與へると云ふことである、是は學資を作る爲であり

ませうが前へ挽くのと後から押すのとの別こそあれ、堂々たる大學生が數百萬人の集まる所で人力車夫の業を採つて而かも毫も愧ぢる色の見えませぬのは如何でせう、彼等は勞力の神聖と云ふ考を持つて居るから何とも思つて居らない、南部諸州の大學などでは、例へば春期の耕耘秋期の收穫等にて農家の忙しい時分には大學生が百姓に雇はれて働くと云ふことでります、それで被傭賃を取つて學資に充て、阿父さんの臑を噛ぢると云ふが如きことのないやうにするのであります、總てそう云ふ風で日本人でも中學生で皿洗に雇はれて居る人があります。

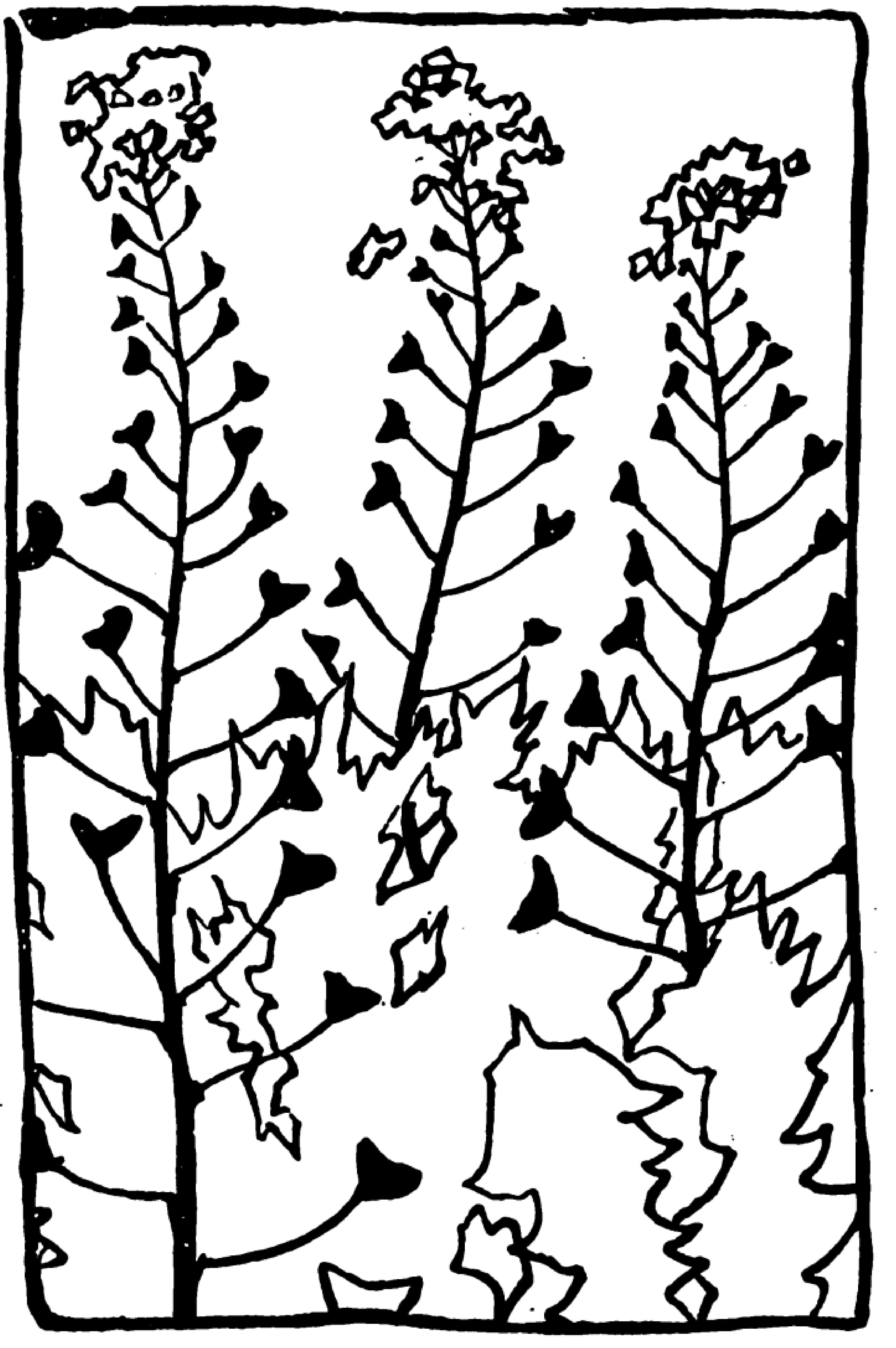
▲俄か富限の子弟

そこで一代分限、一代身上を得た人の子弟の教育と云ふものは一つの大問題です、俄分限、俄貴族、即ち國家に功勞ありて俄に貴い地位を得た人、或は商工業等に依つて急に巨萬の富を得た人の子弟の教育は一つの大問題で極めて六かしいもので十中の八九は失敗するものであります、亞米利加の富豪は殆ど皆俄分限であると言つて宜しいから此等の子弟と云ふものはどうなるかと云ふことは一つの問題であると豫て考へて居りましたが勞力を神聖視する觀念は其子弟を玉成する上に至大の益があらうと思ひます。

▲財產觀念の相違

且亞米利加人の財產と云ふ考は我々の財產と云ふ考とは縱と横の違があると思ひます日本人の財產と云ふ考は縱になつて居つて、丁度柱のやうなものでありますす我有する財產は家の財產である、又父兄より承嗣いだ財產でもある樣に考へ、我が作つた財產も又當然我が子孫が受繼ぐものゝ樣に考へて居るのである、然るに亞米利加人の財產と云ふ考へは横になつて居る即ち個人の財產と云ふ考へが强くて日本流の相續と云ふ念は極めて薄いのである。即ち財產は一代其作つた人にのみ限られて居るものと考へて居る、隨つて其の子孫も又父祖の財產を當にする念が薄い、故に自分の

死後には大學に寄するとか、慈善事業を起すとか、種々の公益事業に寄捐するなどの風があるのも必竟個人財産の念が強く、相續の念が薄いからであると思ひます。日本人の財産の觀念が柱なら、彼等の財產の觀念は鴨居か敷居の樣なものであります、私は彼の新聞を子供に賣らせる所を見て此問題と大關係がありはしまいかと考へ、成程是で亞米利加人の財產と云ふことの考は分るのである。



▲社會教育は經濟教育

學校教育の實際に就て見ても經濟思想の發達に注意して居ることは勿論の事ですから米國の社會が如何に經濟思想の勃興に勢力あるかは多言を要しません。米國の土地は北亞米利加の中部を占め曠野千里の大富源を有して居り、米國の人民は發見以來敢爲の氣象を帶び新世界に於て一仕事をせんと企て移住した人民の性質を遺傳した人民である。米國に此土地

あり、米國に此人民あり。米國の社會を支配する人は多くは一代身上の富豪で自己の勢力で財産を作つたのである、そこで此共和國は鐵道王と稱し、鑛山王と稱し、煙草王と稱する無冠の帝王が社會を支配して居るのである、此社會に成長する者も常に目に觸れ、耳に入り、新聞紙に讀む所のもの一として社會教育を受けぬ者はありません。故に私は米國の富める所以は教育にありと云ふのであります、家庭の教育、學校の教育、社會の教育、共に經濟教育を主眼として居ることであります、私は此經濟教育のことを御話致すと同時に又教育經濟のことを御話致して諸君の教を乞ひたいと思ひます。

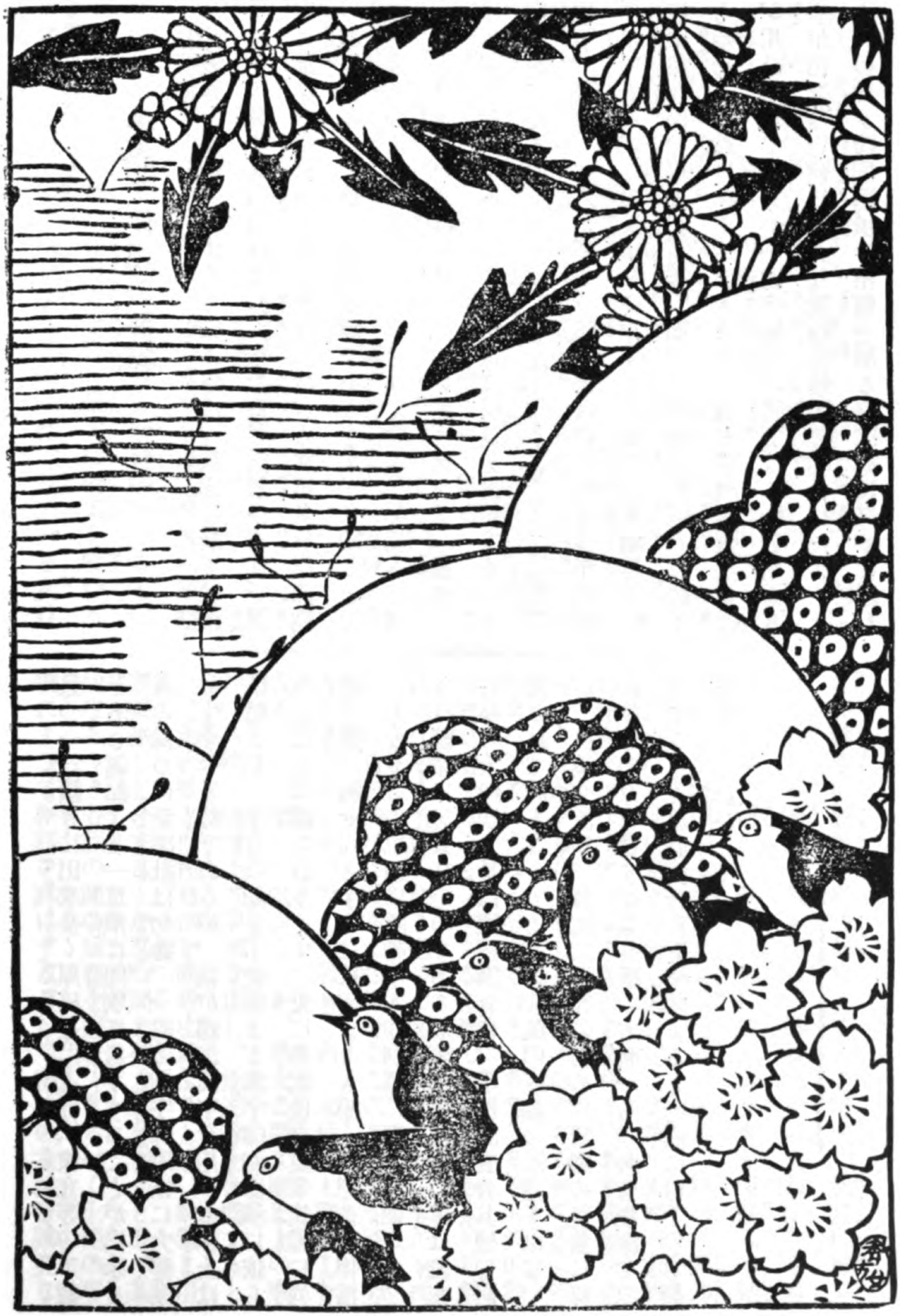
▲學校教育も又經濟教育

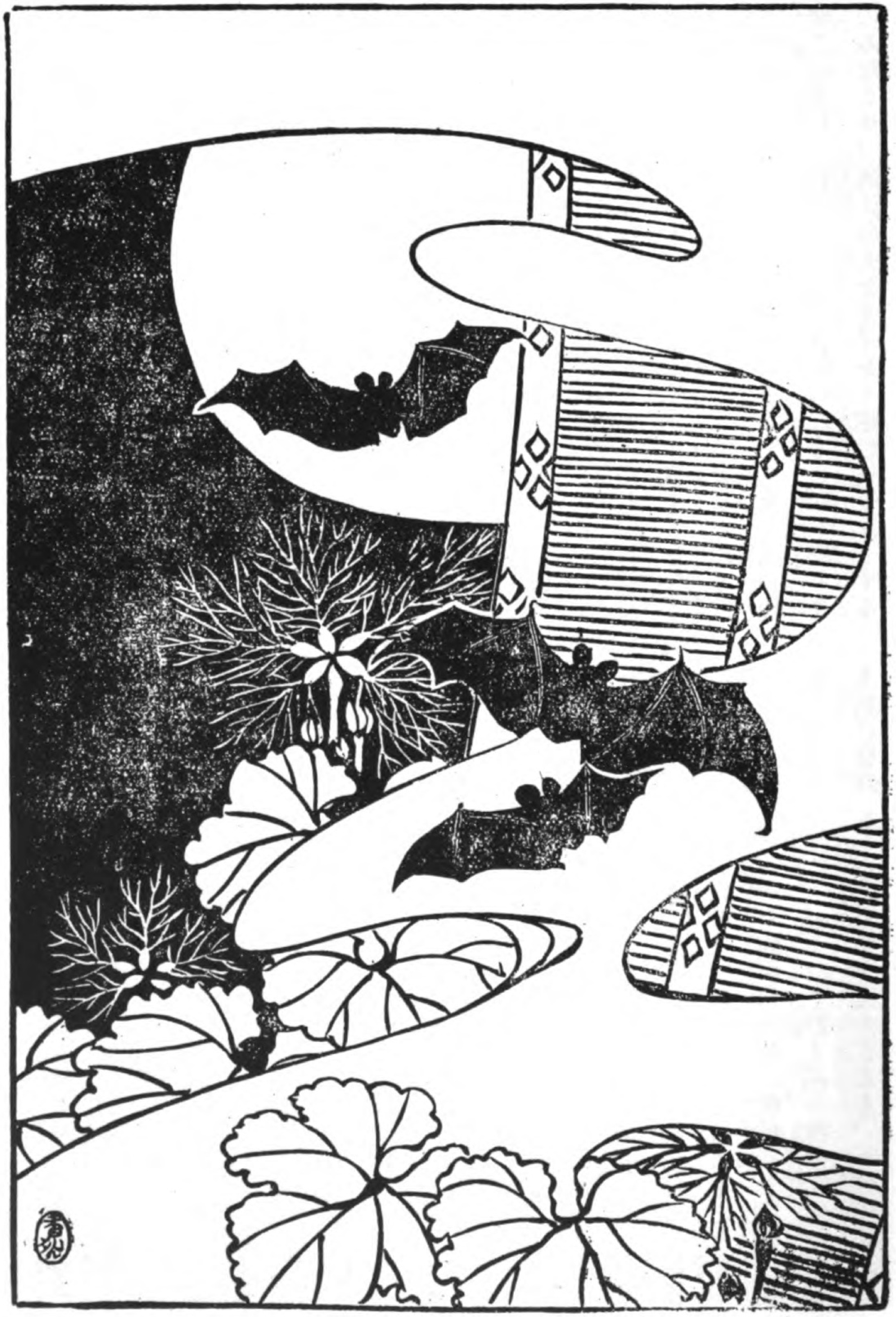
應用經濟の主旨は最小の勢力資本を以て最大の產物を得るにあるのです、私の謂はゆる教育經濟なるものも教育に關して最小の勢力を以て最大の効果を收むるを目的とするもので詞を替へて云へば、及ぶべき丈け生徒就學の勤勞を經濟的にすることです、我邦に於ては此教育經濟論は最も諸君の御攻究を望まねばならぬ所である、何となれば我邦に於ては支那文明輸入の結果漢字を使用するが爲め泰西諸國の兒童に比して我邦の兒童は非常に重き負擔を擔ひ、之が爲めに他の教科に影響を及ぼすは勿論、身體の發育等に迄影響を及ぼすことは尠からぬことである漢字使用の爲めに我國の教育は兒童に大なる勢力を課し、非常なる不經濟的教育法を用ゆるの止を得ざるに至てゐるのである、泰西諸國に於ては此の如き進步の障害物のないにもかゝはらず教育經濟には非常に注意をして成るべく生徒の勞力を省くことを研究して居る、例へば地理と歷史とを成るべく合同して教ふるとか、作文の題に歷史上の事件、人物、地理上の事項を出し、此三課を合同するとか、動物學と自在畫法を同時に教ふるとか、數學と用器畫法とを合するとか又時間と勢力とを省くとか、其他なるべく各課の間の重複を避け、なるべく土地の事情によつて學科を殊にするとか、種々の方法を講究し

て居るのである。

▲漢字使用の弊害

此教育を經濟的にすると云ふ事は、我國に於ては漢字使用の爲め此問題は殊に大切であると思ひます。漢字が進歩の障害物たるは輓近に於ける文房具及び印刷の進歩によつて倍々感ずる譯であります、米國などで中等以上の人はフアウンテンペン(萬年筆)を携へて居らぬ人は少ない之れが爲めにインキスタンド(墨壺)は不用となるのみならず、常に文房具を携帶するの不便を避け得るのである、漢字を使用する爲めには硯箱、硯石、墨筆、水入が要る。然し是は尙ほ兒童少年の間の事であるがこの漢字を使用するに就ては米國等では近頃諸官衙、學校、事務所、商店、學者其他個人に於ても殆んど一般にタイプライターの如き便利重寶なる器が用ひられて居るが、漢字使用の國ではこれを用ふる事が出來ない尙ほ重大な問題は最近發明されたリノタイプの如き印刷器械で指頭を觸るれば直に母字を出し且つ一行續きに出來全く原稿、活字拾ひ、組立等の手數を省き速記より一足飛に印刷に着手することが出來る其の爲めに新聞社は勿論、一般の活字印刷術に大變動を生ずべき勢であるが、我が國が漢字を用ゆる以上は依然として今日の如き不便極まる活字印刷器械に依らねばならぬ譯であります、兎に角此世界競爭場裡に列國と併び馳せんとするには何よりも第一に思想の傳播であるがこの思想に附帶する印刷器に斯る不便があつては競爭は思束ないのである勿論文字印刷の事は國家百年の大問題で是は國語調査會、學制調査會其他で研究されて居ることであるから此の議論の本旨ではないが、只漢文使用、言文二途等の爲めに我國の兒童に餘計なる勞力を費すから各種の方面から、教育經濟を攻究することは經濟教育を奬勵すると同樣に目下の急務であると思ひます。





現代 淑女の生活

吉川曾水

一、外見を飾る勿れ

天下の婦女子は、眞理と事實の範圍を超へてまでも外見を飾らんと欲するもの也。而して外見を飾る少女は異口同音に和して曰く、是れ修養なり文化なりと。然れども眞正の文化と修養とは、決して高價なるブローチ燦爛たる衣裳を生ずるものにあらず。質朴なる體裁をなすも、品格と智識とは消ゆるものにあらざるとを知らざるべからず。

世には儉約を恥辱なりと思惟する婦人多し。彼等は古き衣服を纏ふを恥とし、金の指輪を着けざるを恥とし、斯る贅澤品を有せざる故を以て、集會などにて自ら其位地を低くするは愚の極にあらずや。蓋し此の如き婦人は流行の奴隷にして、流行の二字に對し唯り吾身のみならず、最愛の夫をも子をも犠牲にせんとする狂者なり。而かも奢侈を尚びて外見を競ふ風は、益々横行するこそ悲しけれ。試に市街を觀察するも公園を散歩するも學校寺院を訪ふも、一般に此弊風の存在するに氣附くべし。衣服の華麗を競ふが如き、唯其一端に過ぎず。或は宏大なる邸宅に住まんと希ひ、或は交際社會の虚榮に耽らんと欲し、其收入財産以上の生活を營む結果、不義の金錢を求むる心となり、遂に種々の罪惡を犯すに到るは豈に嘆ずべき事にあらずや。

體面とは何の意ぞ。體面の重んずべき事は女子も男子も皆一樣なり。然れども近代の體面なる語は唯外見を保つの意に解釋せられぬ、即ち美服を纏ひ大なる家に住み瀟洒たる體裁を作るを以て、能く體面を保ち得たりと信じ、人格の高きか低きか、道德心の有るか無きかは少しも問はざるものゝ如し。されど現時の所謂體面なるものは、金錢さへあれば何時にても之を保つとを得ると共に、斯る體面に何等の價値なきは明白なりとす。ジヨエル、バーロー曰く「一塊の麪包を求むる爲に自殺したる人あるを聞かざるも、一輛の馬車を

得んと欲して自殺したる人多し』と。實に此言の如く世には必要品の缺乏の爲に苦む男女よりも、贅澤品の不足の爲に煩悶する男女は比較的に多し。殊に小說的戀愛の爲に支配せらるゝ青春の女子の渴望する所を觀るに、盡く奢侈品裝飾物にして、生活に必要なる日用品の一點すら認めざるは奇なる現象にあらずや。而して貴族富豪の外見を飾る風習の下等社會に傳播するは頗る速にして、書記店員の妻娘に到るまで流行の衣裳を着けんことを期し、遂に衣裳を誇る位には滿足せずして芝居に行き假裝會に列し、長裾を曳きて倶樂部に入らざれば文明國の婦人たる能はずと想像するものあるに到っては、流弊の赴く所も亦大なりと云ふべき也。



故に高慢なる女子は、須らく汝の誇張と虛榮を棄てゝ、眞理と事實とを奉せよ、言ひ換ふれば身分不想應の外見を作ることを廢止せよ。昔日四人の年少き貴女あり互に其手の美しきを爭ひつゝ議論果てしなく、遂に近傍の乞食婆を訪ひ其鑑定を求めたるに、老婆は先づ昨夜來一片のパンを得ざることを訴へぬ、此老婆の苦痛を聞くや鳶色にして皮膚の汚れし指を有する一女は直に財布の紐を解きたるに、他の美しき手を持つ三人の女子は少しも顧みざりしかば、老婆は徐ろに彼等の美醜を鑑定して曰く、『三人のお方の手は美しくあります、

剪絨の如く柔かく雪の如く白くあります、されど此乞食婆をお惠み下さる一人のお方の薄黑き御手は一層美しくあります」と。是れ西洋の寓話に過ぎざるも、深く味ふべき也。

金錢を以て望み得べき外見の華麗を、多數の女子が得んと望するは迂なり愚なり、寧ろ斷然斯る望を絕ちて己の本分を守るに若かず。淸楚たる風丰は固より社會の花として愛撫せらるべし、然れども高潔なる精神に比して何れを取るべきか。埃及のクレオパトラの妖艶、蘇格蘭の女王メーソーの雅美も、其慘憺たる運命を救ふ能はざりしに徵すれば、益々外見を飾るの必要なきを證するにあらずや。

二、他人を尊敬せよ

善良なる作法は淑女の儀表なり、鄭寧なる挨拶、優美なる擧動、趣味ある言語は修養ある婦人の當然有するものなるが、單に之等の資格を備へたるを以て、未だ眞正の淑女と稱すべからず。蓋し動作は往々僞善を伴ひ、鬼をも喰ふ恐ろしき女子が動ともすれば虫も殺さぬ令孃の風を裝ふことあるを以て、外觀のみに依りて淑女の品價を定むるは謬まれり。

優雅温和なる作法は、他人を尊敬する精神より生せざるべからず。之より生せざる作法は概して僞善の類のみ。米國の一紳士嘗てワシントンの街路を步して一黑奴に遇ふ、黑奴恭しく禮するやワシントン亦帽を脫ぎて答禮しぬ、其後紳士ワシントンに問ふて曰く、「閣下の尊榮を以て黑奴に答禮するは何故ぞ」、ワシントン應へて曰く、「黑奴にして既に禮す、白人たるもの何ぞ禮を缺くべけんや」と。是れ人類を尊敬する英雄の心事を示したるものにあらずや。

眞正に他人を尊敬するものは、他人を助け又樂しましめざるべからず。他人を樂しましむるは、己の樂しむ理なることを悟らざるべからず。而して他人を助けんと欲するに要する材能と、他人を樂しましむるに足る寬大なる精神とを貯へざるべからず。モンタグー夫人曰く、「禮儀は凡ての物を買ふことを得べし」と、實に禮儀

は上帝王の宮殿より下貧民の茅屋に到るまで存在し、如何なる暴漢と雖も禮儀を傷つくる能はざる也。されば天性優雅なる婦人は殊に禮儀を重んじ、縦令己より身分の卑しき人に處するも決して禮を失ふべからず、若し之を失へば他に百千の美德ありと雖も、其婦人は忽ち排斥せらるべし。

自己の利益を忘るゝは、他人に對して最も鄭重なる作法なり。己といふ觀念の消へ失せざる間は、如何に喃々として口頭の作法を述ぶるも些少の効果なしと考へよ。自己の虚榮を求むる婦人は賢母良妻となる能はざるべし。故に苟くも作法を謹み淑女の擧動に背かざらんと希ふものは、先づ自己の利益



を以て、他人の利益の犧牲となすの覺悟なかるべからず。佛國の有名なるレカミエー女史を觀よ、女史は世の所謂美人にあらず、而かも年老ひて尚幾多の男子を引き着けたりき。女史は又自ら書を著述し畫毫を揮ひ計畫を立てざりしも四方の文學者畫伯政治家は雲の如く女史を取り圍みて、或は其詩歌を示し、或は其繪畫を供し、或は其計策を談じたりき。是れ何故ぞ、他なし、女史は唯心より他人の成功幸福を歡迎したりしに依るのみ。更に他の言葉を以てすれば、一度女史の音容に觸るゝものは、實に溢るゝばかりの同情に浴するを得しに依るのみ。されば交際を好む少女は宜しくレカミエー女史を模範とすべ

し。別に學問を要せず材能を要せず。唯他人の幸福を喜べば可なり、是れ豈に如何なる人にも出來得る簡易の處世法にあらずや。

三、愉快に暮らせ

快樂は時間を空しく費消せずして、却つて壽命を長くする德を有す。人は快樂なくして働らく能はず、大なる事業を成さんと欲すれば大に樂まざるべからず、實に快樂は重要なる快樂なり。少女の戸外に嬉遊するを止むる勿れ、細君の街頭を散歩するを冷評する勿れ、彼等をして自由に遊ばしめよ、清く澄む銀月の夕、美しく咲く百花の朝、勉めて身體を運動せしめよ、運動する時間なしといふ學生は概して机の傍にありて無益の空想に耽るものなり、やがて心身の衰弱を招き、青春の花を散らすは明白なり。

快樂を與ふる事物は世界に滿つ。面白き書籍、流行の歌謠、美術館の見物、短艇を漕ぎ球戯を爲す事、兒童と遊ぶ事等は何れも健全なる快樂なり。然れども如何に健全なる快樂と雖も、過度に縱にすれば害あり。唯如何に多く用ひても些少の害なきはそれ家族團欒の快樂なるか。夫の晩景家に歸れば妻は之を迎へ、頑是なき小兒は母の膝下に戯れつゝ、晩餐の卓を共にする快樂の、清淨にして一點の汚氣なきは世人の熟知する所なり。而して此の如き家庭の快樂を增さしむる任務は、夫よりも多く妻が荷はざるべからず。苟も女子を以て家庭の王なりと呼ぶ限り、一家の妻たるものは、如何に疲れたる夫を慰さむるか、又生長の途にある子供を如何に樂ましむるか、同時に其家をして如何に春風の吹くが如くならしむるかを考へざるべからず。

音樂は人の性情を醇化する尤も力ある快樂なり。マチユーの英國に於て禁酒運動に奔走するや、先づ音樂隊を作りて到る處に吹奏せしめ、酒を廢して其代りに音樂を用ゆることを勸め、非常に成功したりき。尙音樂は一般に普及する性質を有す。老人も兒童も、富者も貧者も、男子も婦人も凡て樂しむことを得べし。或人が音樂を稱して天眞の快樂なりと言ひたるも亦無理なら

ぬ次第なり。シドニー、スミス曰く、『惡しき行を防ぐには善き樂を以てせざるからず』と。故に我等は修養の要素として快樂を主張す、世の婦人が絶へず清新なる快樂に滿たさるゝことを希望す。快樂なき家庭は恰かも光明なき地獄の如し、一刻と雖も生存すべからざるなり。

四、天才を誇る勿れ

天才を以て一代の淑女とならんと欲すべからず。天才なるものが果して存在するかすら疑問なるが、假に存在するとするも、之を賴みて勉强を忽かせに附するは大なる過なり。サンド、エリオット、ブロンテ、ビーチャーストウ、紫式部等女文豪の作は、其天才に依りて成りし如く想像せらるゝも實際に然らず。何れも皆深窓人の知れざる藻思を費やしたる結果なり。ノーチカ夫人は唱歌師として其名世界に高し、而して夫人は常に其門弟を戒めて曰く、『大なる音樂家とならんと欲すれば、大なる勉强家とならざるべからず、多くの少女は天才を有すれども、此天才は磨かざれば用なし、故に勉强せんと欲すれば、諸種の遊戯はいふ迄もなく、交際の如きも勉めて少數の人と交るべし』と。



天才は捷路にして勉强は順路也。天才に任すものは面白く感せらるゝも概ね失敗の結果を齎らすに反し、勉强によりて進むものは盡く其志す所を遂ぐべし、年少の婦人にして少しく文才あり或は詩歌の能に堪へ或は小說の一篇も綴りたらんには、忽ち社會より天才なり女

著作家なりと持て囃さるゝも、斯る虚榮に浮かされて研鑽の勞を積まざれば、折角芽を發きたる天才も直に凋むことを覺悟せざるべからず。又交際社會に於て、才氣ある婦人は兎角其才を振舞はさんと競ふ傾あるも、是れ大なる心得違なり。淑女の交際は他人を專ら樂しましむると同時に己の才能を少しも誇るべからず、己の才能を輝かさんとするは則ち己を樂しめんとするものにして、淑女の交際法にあらざる也。

婦人の感化力は絕大にして、男子を動かし一家を動かし一國を動かし、遂に世界を動かすものなるが、而かも其動かす力は、婦人の天才にあらずして、婦人の眞情なり。才識爛熳一座の男子を惱殺する佛國風の婦人にあらずして、勤勉力行家庭の爲に隣人の爲に身を獻ぐる誠實の婦人なり。リンコーンの母の如き固より學問もなければ、文明社會の交際術を解せざりしも、其天使の如き性情は能くリンコーンを感化し、米國の發展の爲に將た世界の人道の爲に、最も大なる働をなしたるにあらずや。

五、絕へず修養せよ

修養とは英語のカルチユアに相當す。而してカルチユアが農夫のカルチベート（耕作）より來りたるは明かにして、農夫が土地を耕やすが如く、人も亦其心の雜草を除き良き種子を蒔きて、之を培育するをカルチユア即ち修養といふなり。

社會より推重せらるゝ婦人の中にも、怜悧なる婦人と、修養ある婦人と、聰明なる婦人の三階級あり。怜悧と聰明とは相似たる上に、天性なれども、修養は天性よりも寧ろ敎育學問の結果なり。されば我等の心を耕作するには宜しく讀書せざるべからず、又實習せざるべからず。玆に一小話あり、英國の著作家ガスケルの友なる二十歲前後の少女、非常に學問を嗜み、普通學は云ふまでもなく、ヘブライ語、サンスクリツト語に到るまで通せしかば、ガスケル頗る尊敬の情を表し、一日某氏の許を訪ひ、「斯る修養ある少女は恐らくは英國になからむ」と語り出したるに、某氏は微笑して曰

く、『余は足下よりも能く彼女を知る、彼女は足下の語るが如く諸學に通ずるも未だ修養ある婦人といふべからず、自ら學び得たることを能く考へ、之を實行して初めて修養ある婦人といふべきなり』と。實に心に銘すべき訓言といふべし。

公私の學窓にある幾多の女子よ、右の小話によりて修養の意義を知る。若し卿等にして學びたる事を行ふ精神なければ、如何に高尚なる學科を修め、深幽なる學理を語り、テニソン、ウオウヅオースの詩句を探り、サカレー、ホーソルンの小說を味ふも、決して修養といふべからざることを看取せよ。ヘマンス夫人は生れながらの詩人として唱へられたるにも拘らず、夫人は其詩の爲に苦心すること大方ならず、一生を通じて研究を怠らざりき。修養は讀書にあらず、讀書は修養の階段に過ぎず、而かも階段を踏まんと欲するものは、讀書の門に入らざるべからず。

試に修養ある婦人の席に行けば、彼等の語る所行ふ所、自然に節制あり雅致あり、何となく奥ゆかしき心を生ぜしむべし、彼等は多く喋らず妙に首を振り手を動かさずと雖も、互に意思は疏通し、彼の喜ぶ所我之を悟り、我の悲しむ所彼之を察し、同情同感の交歡を完ふすることを得べし。

詩星グレーは、甞て貧しき人々の死して荒村の廢寺に葬らるゝ情趣に就て歌へり、若し此貧しき人々にして、知識あり修養ありしならば、必ず幸福なる生涯を送りしならんと追想したりき。嗚呼千載朽ちざる一篇の輓詩も、其要旨は修養の缺乏を悲しみたるに外ならず。婦人にして權勢を振ひたるもの、露國にカザリンあり、墺太利にマリヤテレサあり、支那に則天武后ありしも、眞正に修養ある女子は、此等の女皇よりも遙に貴し。埃及國民は婦人を以て知識の源泉なりと呼びたるが、此知識は宜しく研かざるべからず、農夫が四時を通じて耕作に從事するが如く、一日と雖も修養を廢すべからざる也。

時感三則

小波

一　所謂卒業の女子

學校の卒業式に臨むと、來賓の演説などには、よく卒業生に向つて、『皆さんはこれから社會に出るのだから……』と云ひ、又卒業生自身も其氣で、『私共がこれから世の中に出ますのは……』などゝ、答辭の中に聞くのであるが、其所が考物だテ。彼等學校の業を卒へた者が、それで直ちに世に立てやうか、所謂る社會に出られやうか。今この世智辛い世の中に於て、ますますその問題なるを感じる。殊に女學校の側に於ては更にその感が深いので……

かう申しては失敬かも知れないが、世の多くの女學校出身者が、學窓を出てから、新たに家庭を作るまでの時間は、彼の男學生の者が、學校を卒業して了つてから、何かに役付くまでの時間に比して、決して短くない樣だ、否、時としては、男子が就職の困難よりも女子が結婚の面倒の方が、更に其度が多いのである。蓋しそれも無理は無い。男子の就職は、ほんの一時の間に合はせと云ふ事もある。又厭なら中途で辭す事も出來る、が、女子の結婚に至ては、一時の腰掛は無論出來ず。また中途で飽きたからと云つて、容易に離婚の出來るものでは無いから。

これを思ふと、彼の男學生の多くが、已に學校にある頃から、八方運動して就職の道を求めると同じく、女學生も卒業以前に、それ〳〵緣付口を探しておく必要がある。

さるにても、世渡はます〳〵むづかしくなる斗り。迂ッかりしては居られませんぞ。

二　女同志の交際

世の所謂る黒人なるもの。即ち藝妓、及これに類似の身柄の者は、男に對しては、口も輕かれ、眞面目に女客に對しては、殆んど物の云ひ樣をさへ知らぬ。

これは多年の習慣の、勢ひ然らしむる所であるが、頃日女學生の多くを見るに、動もすると彼の黒人の如く、異性の男子には大分程が好いが、同性の女子に對しては、却つて無愛想極まる樣だ。

これと云ふのも、異性にはこれに親しんで、その愛を迎へる必要があるが、同性には之に反して、直ちに

その弱點を見出さうと云ふ、例の嫉妬心、猜忌心から斯る現象を呈するのではあるまいか。

男女交際の事、余は必しもこれを排しない。否、むしろ贊成する一人であるが、それが爲めに多くの女子が、只に男子との交際のみに長じて、女同士の交際に疎くなる樣では、頗る感心せぬ事と思ふ。

三　晩學女學校の必要

女子敎育の振興と共に、女學校の新設は、殆んど雨後の筍の如しだ。

が、まだ甚だ遺憾に思ふのは世の晩學の女子に對する、敎育機關の不足な事だ。

晩學とは、讀んで字の如く晩く學に就く事である、ある事情の爲めに、年頃の間を學校以外に送つて、普通をさへ十分受け得なかつた者の、偶々境遇の變遷し、事情の權務とで、新たに學に就き度いと思ふのに、生憎此種の人を收容すべき、適當な設備の無い爲めに、折角殊勝に思ひ立つた事をも、其儘立消にさせてしまふのは、人道の上から云つても、まことに不本意な次第では無いか。

尤も此種の人の中で、特に熱心な女子は、已に肩揚の取れた體で、下げ髮、稚子輪の群に交つて、學校通ひに浮身を窶す事もある樣だが、その多くは、何となく氣が怯れて、懷中には入學志願書を持ちながら、學校の門前から、スゴ〳〵又引返へしてしまふ。――勇氣が乏しいの、熱心が足りないのと、必ずしも罵る勿れ、此等は女子の弱點として、寧ろ大いに同情を寄すべき所だ。

是に於て、世の識者の間には、此種の女子に對する敎育機關として、講義錄樣の雜誌を出して居る。これも至極結構な事に相違無い。

然し通信敎授なるものは、到底羽織の上から灸を据く樣なものだ、雜誌學問の成績の、學校敎育の効果に比して、その三分一にも及ばぬ事は、誰も容易に認めて居る。

兎に角にも、世の女學校設立者の、徒らに課程を高尚にして、虛名をのみ賣る事を努め、却つて此種の晩學者の爲めに、新しい福音を傳へやうとせぬのは、甚だ意を得ぬ次第である。



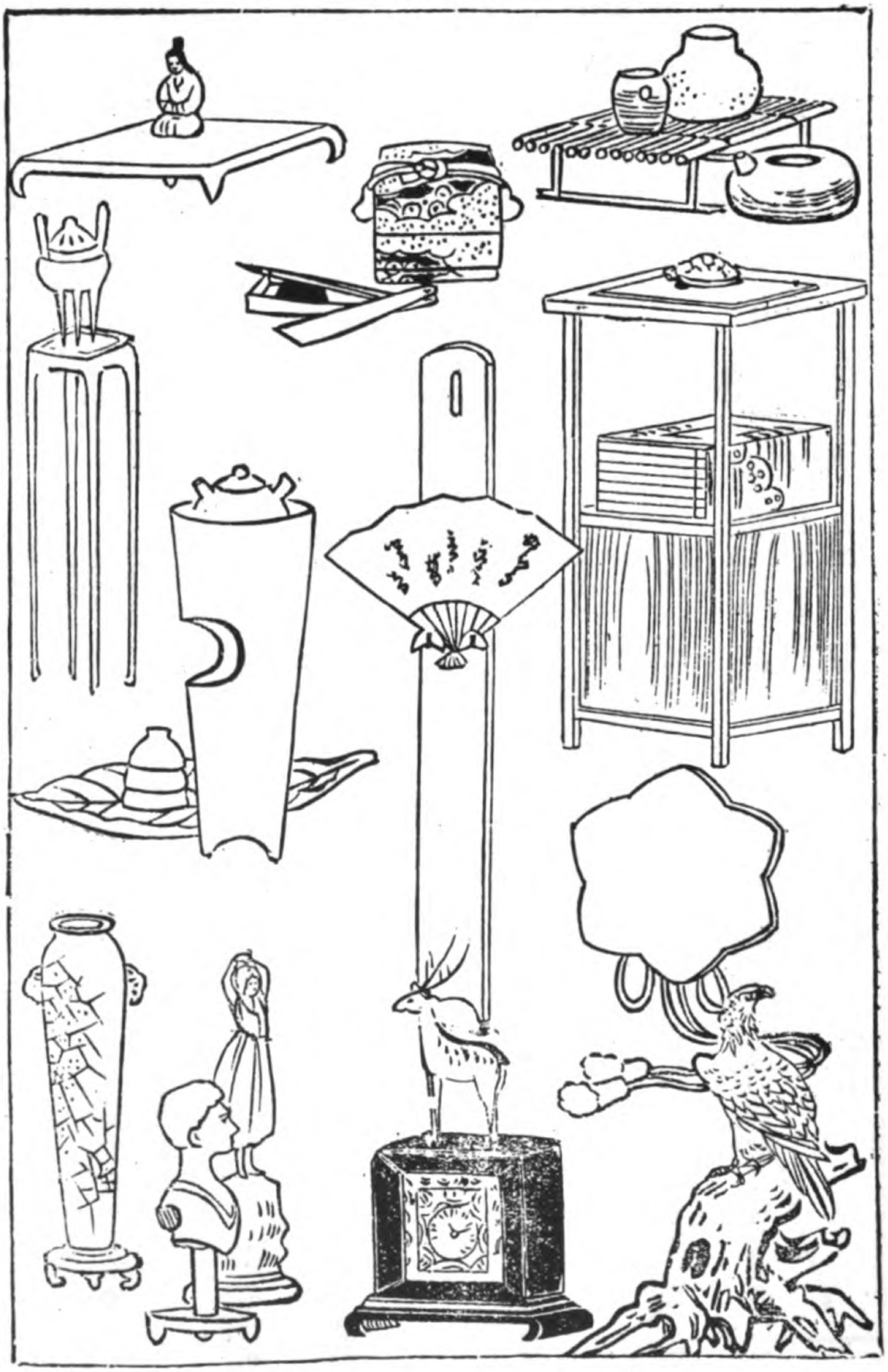


心の工風

△夜更てこゝとゝふとも、初ほとゝぎす雁かねは必らずうとくすべからず。
△枕に通ふとも咎なきものは、花の香、遠寺の鐘、霜夜の虫の音は殊にあはれむべし。
△にくゝとも許すべきは、花の風、月の雲。うちつけに爭ふものはゆるすのみかは。
△野分のあしたの庭の面ならでは、亂るゝをゆるすはあらざるべし。落花、落葉の狼藉もゆるすのみかは。酒のみだれは其類ならず。
△月はいつとても親しむべし、されど過ぎし夜をしたふも苦し、行末を思ふもうるさし、只むかひてこそ、腰のあたりにていかづち鳴立はべらずば共にぬともありなん、花の下臥もをなじ。
△あるもなきに劣るは賦なき人の才、女のさえ、いなづまの影、あふと見し夢、うたてきものはみな月の霞、落葉の風にさわぎたる。
△多きを忌むものは茶器、酒の肴、遅櫻、龍膽の花、ほとゝぎす、鈴むし。
△よきはよく、あしきはあしきは、諂ひもの、やめる女、風流もその内なるべし。我が程を知り、なすべき事を爲してこそいはめ、しゐて古をこのみ月花をめづるとて、いかでいなん、夜すがら月見むよりは日を惜むにしかじ。
△うづもれておかしき物はあらじ、子日の小松夏艸にかくれたるはおかし。
△思ふに違ふて嬉しきは八月十五夜の晴たる、五月雨の雲間の月、幼きと思ふが文つくり歌よみたる。
△うとむべきものは歎きいふもの、よそ見ぬ理屈、千祭の歎の昔、蜘蛛の巣、足駄のあと、すゝめ、猫、鼠は猶惡むべし、打も殺しつべく思ふは蠅、蚊、ひる、いつはる友にこそ。
△尊むべきは、人に異なるひと、たふとむまじきは、人に異なる様の人。
△きゆる時をゆるして雪を見、雫の月を思ひて夕立にあふべし。
△梅か香と櫻の花、柳の枝になどゝは思ふまじき事なり、花の紅、柳のみどり、心をわけて樂しむべし。
△足れりと思ふべきは我が身、たらずしてよきものはつとむべき道。
△樂しきと思ふが樂しきの本なり、いかで外に求むべき、たのしむ翁いふとぞ。

（松平樂翁著書室の銘）

心の工風



火の要鎭

△火を燃やしたる後は燃へさしの火の全く滅るやうに注意すること肝要なり。

△火を竈下に燃やすには可及的竈門の外に火の燃へ出でざるやうにすべし。

△消炭は急速の用に適ひ又火を燃やしたる後の危險を少くするの効あれば徒に灰と化らしむべからず。

△爆炭は餘程危險なるものなれば木灰を買ふにはなるべく注意して跳ねざる質の炭を擇むべし。

△煙草盆の火爐に埋藏べき火は櫟炭を最良とす。

△火鉢の火はこれを用ひたる後、丁寧に埋種べし。(火を裝放しにして茶の沸溢れるをも知らざるは不行届と知るべし。)

△夜中寢る時は火鉢の火を殘らず火消壺に移つして滅すべし。この時最も注意すべきは火炭壺の蓋を隙間なからしむる事なり。

△ランプは其の掃除に氣をつけ、常に汚れざるやうにし、又破さゝるやうにすべし。

△石油は所謂火止油を用ひて危險を豫防すべし。

△ランプの油を注ぐは必らず晝間に於てすべし。若し止むを得ず夜中に油を注ぐ時はまづ手燭にあかりを燈し、ランプの燈りを消したる上火の氣なき處にて靜かに注ぐべし。

△蠟燭は鼠にかじらるゝ恐れなき所、又火熱なき處ろに貯へ置くべし。

△提灯並に燭臺を用ひたる後、燭しかけの蠟燭を其儘に捨置くべからず、殊に提灯はこれが爲めに鼠に嚙ひ破らるゝ事あり。

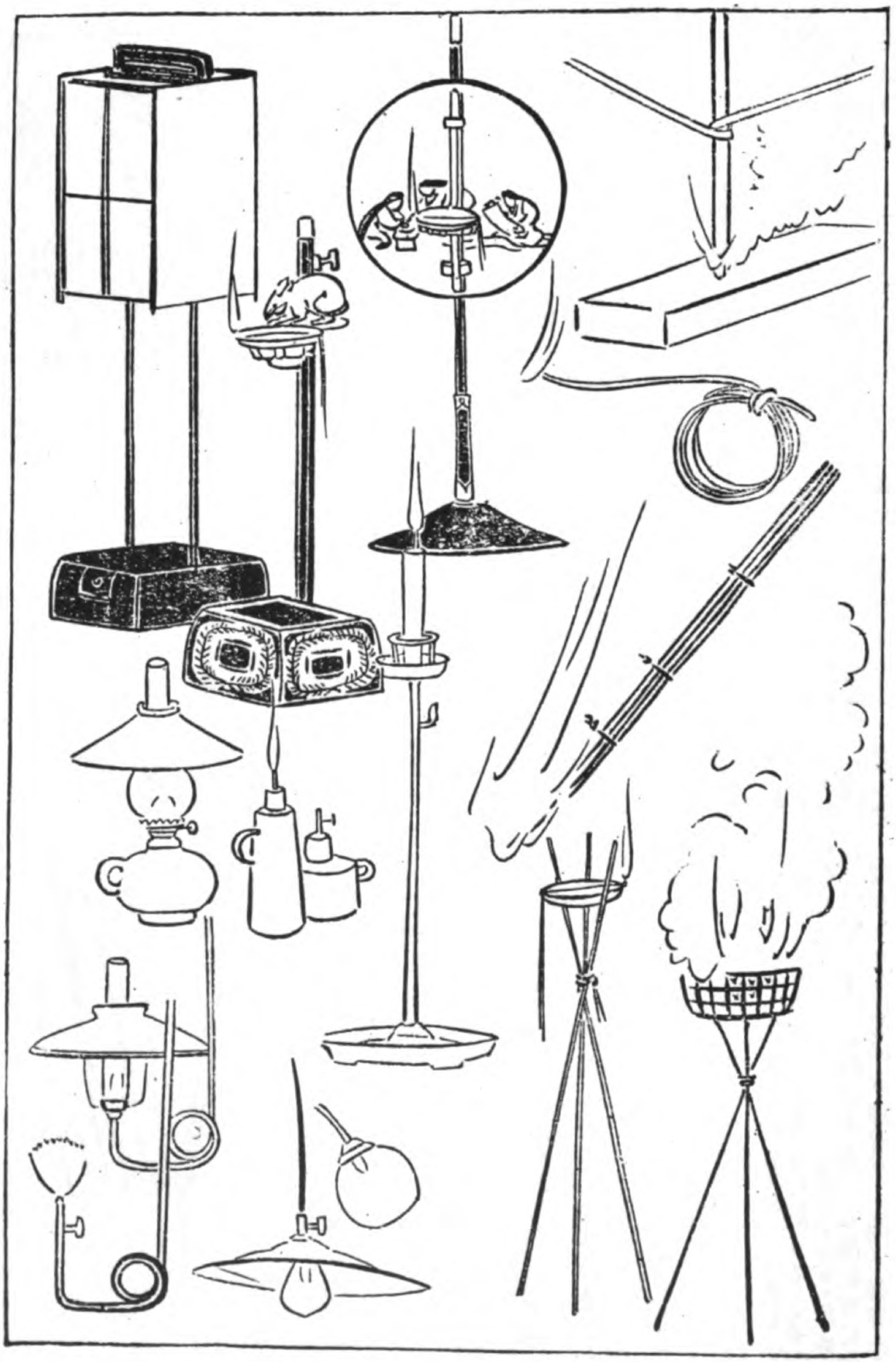
△手燭、提灯、燭臺などは時々其の蠟の堆りを掻き落してこれを紙燭(紙捻を蠟屑の溶解したるものにひたし、これを乾かして手燭などに用ゆるをいふ。)を製するに用ふ。

△ランプを拂拭したる反古と他の反古とは必らず別にし、火に近き所に置くべからず。

△夜中寢床に入りて後はあかりを消すべし。若し俄かの事變の爲めに供ふるにマッチを忘るべからず。

火の要鎮

（燈火の變遷）



現代女學生の半面



元祿女史

愈々縣立高等女學校を御卒業遊ばされた相ですが、何より御目出度う御座います、先達の新聞紙上では、卒業生二十餘の姓名をずらりと揭げ、殊に成績も優等で、級の首席を占められた等と承はり、此れは平素眞面目に御勉强遊ばした結果と、只管感嘆致しました、女子に對する普通敎育の一班は先づ是れで一段落を告げました樣ですが、

今後修學の方針

は如何遊ばす積りで御座いますか、定めて前途の希望は洋々たる者で御座いませう、誠に昨今に於ける女子敎育の進步は、夥しいもので、寧ろ男子の其れよりも、一層盛んな樣に思はれます。之れは妾等の女流社會に取つては最も喜ばしい事で、一に他日の良母賢妻を作りて、第二の國民を完全に敎育致したいと思ひます。妾共

が修學の時代には、女子教育抔と申す事は皆無と申ても差支へ無い位、曰はゞ寺小屋的の教育で、偶々高等小學校でも卒業すれば、上の上出來、夫れも一村に一人か二人しかなく、まあ無い方の年が多い程で、其の卒業した者と云つても餘程の財産家の娘でなければ、出して置く者はなかつた樣です、先づ大概の者は、尋常小學より高等一二年でも濟むで、自分の姓名でも分り、紺屋の札と染賃位が分れば夫れで充分のものだとして、退學し、あとは母の膝下で家庭の手傳、農家であれば、製茶、養蠶の事から、糸、機の始末を覺え、殊に養蠶中など、雨でも降らうとする前の桑摘と、上簇にでも近寄らんとする時の忙しさと云つたら、迚も當今の女子の想像し及ばない處です、之が丁度製茶の季節と衝突して、一方は茶摘みの世話、人夫や職人の賄に至るまで、下女と共に、眞つ黒くなつて、働く時分の事を考へて見ますと、實に此の世に女ばかりは、働くのみに生れて來たもので、牛や馬と少しも變つた事はない、只少し物の聽き分ある位のものだ、迚も〳〵英や米の婦人社會で唱道する樣な、女尊男卑とか、男女同權とか云ふ事は思ひも寄らん事で御座います。

此の季節が過ぎた處で、引き續いて田植やら夏の耕作、秋の收穫まで一々手傳はねばならず、少し農閑の閑だと思ふ冬枯三月は、少々樂も出來るかと思ふと、近處の裁縫の師匠の處へ參り、漸くの事で、單衣、袷の縫ひ方裁ち方を覺え、之れとても、今日の如く、一派の流儀を案出して、是れは何流、是れは何式、是れは誰れ樣の發明だとか申す事は、更に御座いません、況して、渡邊裁縫女學校は怎うする、小出先生は什麽する、誰れ某は如何だ抔と、云ふ事は、師匠迚も知つては居りませんでした、唯、羽織が羽織に出來、袷が袷に出來れば夫で上等、先づ嫁入の資格に於て充分なものと致して居りました。

町家の娘

にした處で、女學校へ出す抔と申す者は、華族樣の姫樣か御孃樣か、餘程の金滿家でなければありません、大抵は高等小學校位で退校つて矢張り家庭の手傳でもしたり、店のことでも手傳つたり、餘暇があれば茶の湯や生け花をする者もあつたでせうが、先づやらなかつた者が多いです、華族樣方にした處で、誰れも彼れも殘らず、女を高等女學校に入れたと云ふ事はないので、之れも眞の女子教育に熱心な御方が出す位の事、立派な華族女學校が出來ても、僅に平民の女子を以て其數を漸く充たしたと云ふ位でした。

然るに最近數年間に於ける、女子教育の進歩を申しますと、實に驚くべき速力を以て進んで參りまして、現今の所、私共の修學時代とは打つて變つた有樣、苟も女と生れて高等女學校の課程を踏まないと、一人前の女ではないと云ふ樣な時代となりました、世間の父兄自身も、娘を持つたら高等女學校へは出すべきもの、東京へ修業に出すべきものと思ふ樣になつたのは、國運の發達上至極喜ぶべき事では御座いますが、併し或る一面から見ましたら、娘さへ學校へ出せば、學資の工夫は足りても足りなんでも家政上の都合が怎うあらふが、其樣事には頓着なしに唯女學校の一點張り、女子は必ず海老茶の袴をはくもの、廂髮に結ふ可きもの、靴で步行く可きもの、之さへ出來れば、所謂紫式部、清少納言の理想は達せらるべきもの、下田先生にでも、奥村女史にでも、鳩山夫人の樣にでもなれべきものと極め込むで、婦德の養成は甚麼事であらふと、學校の內容は怎うであらふと、唯、無闇矢鱈にハイカラがれば、女子修養の理想は達せられたもの、當代の才媛と仰がるべきもの、必ず、良夫は得らる可きものと思ひなさる方も御座いませうが、之が果して賀すべき現象と申されませうか。

女子の修養と申しましても

强ち、左樣ばかりには參らず、假令小學校を卒業したのみでも、能く自分の理想を鍛錬して、婦たる身の德即ち將來に於て良母賢妻となる可き心掛さへあれば、是れが何よりの大切の事で、よしや、幾年の螢雪を積み、幾千册の書を讀んで今紫を氣取つても、此の德が缺けて居つては一時の間に合せ者で、漸次年立つに從つて、婦人の本性を失つて仕舞ふ之れが所謂、冠王の如しとでも云ふべき事で、今の社會でも古の時代でも一番人の忌み嫌ふ所であります、是れは獨り女ばかりでなく、男でも厭がる所でありますから、萬望人は斯くなりたくないと思ひます、御同樣此の心掛は肝要の事かと存じます。



此の德を能く心得て居つた人は、打ち見た處一寸變な樣に思はれましても、漸々年經つに從つて、天眞の美

質を發揮し、眞の良妻賢母と仰がるゝに相違ない、孟子の母だとか、山内一豐の妻だとか、松下禪尼等と云ふ人は、今日の女學生程の智識はありませんでしたでせうが、此の點に於ては慥しかに、一點の非難は無かつたもので御座いませう。

女學生々活、殊に高等女學校時代では、未だ前途の考へも確々定まりませんで、志は大にして高きを欲す抔と、多大の空想は惡うは御座いますまいが、一つ此の學校時代を經過して、所謂專門學の時代となりまして、女子大學なり、高等師範なり、其他英語なり技術なり特殊の勉强せんと思ふ時こそ、能く考へねばならぬと存じます、去りとて、私共は決して東京へ出て勉强遊ばすのを不贊成だと申すのではありません、出來る限り、勉强して戴きたいと御勸めする者で御座いますけれど、唯徒らに空想に憬れたり、ハイカラを氣取つたりなさる事を止めて、眞面目の女となり、眞面目の良妻賢母とおなりなさいと云ふ事です、此の眞面目の心掛けさへあれば、期せずして自ら幸福は得らるゝものと信じます。

近い例の御話

で申すと、能くは存じても居りませんが、當今の名士の中でも、板垣伯の夫人だとか、桂伯の夫人だとか、前の山本海相の夫人だとか、我國の文壇で第一流と仰がるゝ坪内博士の夫人だとか、横井博士の夫人だとか、申すは、今日の女學生程ハイカラで在つたか什麼だか知りませんが、兎も角少い時に能く見拔かれて、其選に當り、今日の樣な地位にあるのだと聞いて居ります。

今一つ之れと反對に今度は、女より見た男の例を御話し申さば、此れも人から又聞致したので、確とは記憶えて居りませんけれども、嘗て明治の十年頃の大隈伯に一人の愛孃があつて、是れに婿樣を撰ぶ事になつた相

です、處が當時切つての日本第一流の政治家で御座いましたから、可成秀才を貰ひたいと云ふので、當時秀才優待會なるものを作つて、當時の秀才を悉く自邸に招いて、山海の珍味を聯ねて御馳走をして、婿樣の選擇をした、其時集まつた面面は、今の末松男爵だとか、田尻とか、男爵だとか何とか云ふ連中で、末松は御覽の通りの男振り、田尻は一つ洋服を十三年も着ると云ふ性の人であるから當時の俤は想像せらるゝ。だから獨り其選に當つたのは南部秀麿さんだ相です、處が當時秀麿さんは洋航歸りのほや〳〵で、歐羅巴仕立の新智識、金縁の眼鏡にカスメチツク、(いや實際は金縁だつたか怎うだつたか、此れも能くは知りませんがね、呵……)と云ふ扮裝で、男振りから云つても、末松、田尻以上數等を超えて居る、而かも幾萬石の大名華族、時めく勢力には、惚れざらんとし



ても能はず、其處で、父伯爵は令孃を招いて、今日の集會の中で、誰れでも其許の氣に入つた人をとの粹な仰せ、選は遂に南部秀麿氏に落ちた、交情濃やかに時久しく過ぎましたが、一朝何かの事情で、父伯の怒りにふれ、破鏡の嘆を見るに至つた相ですが、若しも彼の當時、末松か田尻でも選んだならば、今は爵位と内閣の椅子の一脚位は得らるゝ事であらふと、當時の事を追想して、自身の眼識の淺薄なりしを恨むより詮方なし云々と話された等と云ふ事を聞きましたが、事實の如何は扨て措き、斯様な事はまゝある事で、誰れでも注意しなければなりません、

暫時話しは縱横道に這入りまして、濟みませんでしたが。

當今の女學生

此れは昨年の夏の事です、私の親戚に女子大學に參つて居るものが御座いまして、暑中休暇に歸省致し、私共へも訪ねられたので、種々と學校の近況、學校の有様、寮舍の生活等も承り、却々校長、講師の熱心なる敎授やら、訓練やら、限なく行き屆き、遉に日本一流の女子敎育所と感心致し、私共も、ならば一度若返りて、海老茶袴の女學生となりて、女子大學へでも通ひ度くなりました、卒業後はと聞きましたら、少くも外交官か高等官でなくては、嫁には一切行き申さゞる由にて、素晴らしい勢力だ相です、之が目今の女學生を代表したりとも申すべき風潮で、角帽何のその、女子大學生にあらざれば、日本の天下は夜も日も明けん抔と力んで入らつしやる相です。

由來東京の學生間には、一種の暗流があつて、男學生でも女學生でも斯う云ふ事を申してるさうです、即ち帝國大學と日本女學校、早稻田大學と女子大學、學習院と華族女學校、高等師範と女子高等師範抔と申して居る

さうですが、此の事は何の事だか、私共の様な野暮の者には了りませんが、何れかの事情があるので御座いませうよ』。

兎も角、夫婦は一世の苦樂を偕にすべき者でありますから、選りに選つて最も氣に入つた者と連れ添ふこそ肝要の事で、殊に婚禮は萬世の初めだ抔と申す事もありますから、實に必要の一條件なれども、餘りハイカラや、空想に耽つて取り返しの附かざる失敗を遺さざる様に願ひたいもので御座います、殊に世の中の事は、理想通りに行かない者で、萬事齟齬し易いものです、夫れ故に、



三度喰ふ飯さへこはしやはらかし
想ふ儘にはならぬ世の中。

と申した人も御座います相ですから、愼重に考へて感想を誤らない樣にするこそ、女子修養の必要が起つて來るではありませんか、硬派の人から申しますと、思ふ人を得ざれば一生獨身で居ても敢て恐るゝ處でない、婦人の天職は那邊にある抔と、一生獨立の臍を堅く締めて態々地方から遣つて來ても、段々東京の感化を受、年々歲々御飾りの下をくゞり、門松立てゝ恭賀新禧の端書かく每に、此の堅固なりし思想も何處かへ飛んで、却て堅固なりし人程、深い堀へ嵌まる者で。

夫よりか、寧ろ高等女學校でも終つたら、中學生でもお百姓でも商人でも、其人の心掛と天才の恃むべき處とがあつたら、御嫁入りすることそ肝要の事で、女の修學するは學に依りて飯を喰はうと云ふのではなく、人の妻となつて夫を助け子を育てゝ、良母となり賢妻となりて所謂婦人の天職を完うするにあるので、此れに反する者は婦人の天職に違うて居ると云うてよいと思ひます。

其處で、天に從ふ者は榮え、天に逆ふ者は亡ぶで、つまり婦人の獨立は六ケ敷いと云ふ道理に宛て嵌まるのであります、能く記憶えては居りませんが、詩經の何やらの篇には。

摽梅の期

と云ふ事があります、「摽つる梅あり、其實三つ我を求むる庶士其今に迨ばんか」と、即ち梅と云ふ物は實が熟すると、必ず黃いろくなつて落つるもの、決して木にいつまでも附着いては居らぬ物で、落ちて仕舞へば、何の用もなさない、其落つるや必ず時期があると云ふ事を例として、女も同じ樣に、一生一人でも居れぬもの、必ず一度は人の妻となるべきもので、其の妻となるべき時期がある、其時期を過ぐるのと、梅の實の落ちたのとは、何の用もなさない樣に、女も時期を過ぎては嫁入りは出來ぬものと諭して、即ち女の嫁入り時を指して、

標梅の期と申したのだとやら申す事を聞きました、男は格別、娘の年過ぎたのは、餘り善いものとは申されません、漸次話は結婚の事迄も及びましたが、之れから方針を轉じて。

女子高等師範

の事に移りませう、彼の學校は餘所の學校とは餘程體裁が違つて居ります、女子に關する高等女學校以上で、政府の管理に屬してるものは、音樂學校と之れのみだ相です、從つて之に入學する生徒も選擇して年々定員を定めて、各府縣下より平等に取る樣になつて、入學試驗も可なり六ケ敷、大概、一縣下で毎年一名か二名で其れも秀才の方が大低登第して入學すると云ふ具合だ、卒業後に就いても方針が敎員と定まつて居るから矢張り、敎員同士が好んで入學すると見えて、高等女學校の出身者よりも女子師範出の者が多い、其の敎育の方法に就いても、女子大學等に比べて見ると、大に異なつた處がある、一方は官立、一方は私立と云ふ工合で、一方は敎員となる人物に限られ、一方は奥さんでも敎員でも、何んでもと云ふ風であるから、女子大學には師範出の女學生よりも、高等女學校出身の者が多い、從て高等女學校出の人には地方の財產家より來て居る者も多いと見えて、女子大學の方には贅澤の學生が多く、從つてハイカラ風に傾く者がある、高等師範は、之に比して更にローカラ否十九世紀式だ、何でも箱詰主義だ、鑄形に詰めた樣な人さへ造ればよしとしてある、所謂干涉敎育より成立つて居る女學校だ、稍もすれば、萎靡して振はずと云ふ風に傾きはすまいかと思はるゝ、心ある人は行つて御覽なさい、却々六ケ敷です、一寸の面會でも容易の事ではありません、先づ保證人の捺印してちやんと紹介してある願書を門番に取次いで貰うて、舍監へ出す、漸く許可となつて應接間に行つて面會をする、其一通り話しの時間も何十分とやらに制限されてあるさうだ、其の位であるから、外出なども却々面倒で、

出先の範圍もキチンと定められてあつて、門限五時に一分後れても、大騒ぎださうだ、曰はゞ、體のよい監獄同樣、女子大學の夫れと比べて見ると、實に彼等の境遇は慘憺たるものと云ひたい。

全體女學生の墮落とか不品行とか云ふ可き者は、馬鹿に校規を取締つたからとて夫れで決して矯正る可きでない、其麼に八ケ間敷しても、墮落する者は矢張り墮落する、學校に居る内は規則と云ふ綱の爲に、縛られて居るから善い樣なものゝ、もう學校を出ると其綱の弛むに從つて世話の燒き人もなくなる、從てそろ〳〵墮落する事になるのであります。

今日教育の方針

と云ふものは、斯かる薄志弱行の人を作るを以て主眼として居らぬ、人が居ても居なくても、規則があつてもなくつても、人の人たる所謂人倫の大道は、必ず踐むで行かねばならぬ、是れは女でも男でも通じて、必要なる事で、無言無形の間に天下百萬の人に行はれつゝある道德と云ふ一條の大綱は、百錬の鐵鎖より堅く、之れが敎育の淵源となりてこそ今日の社會は立つて行くので、若し人が規則とか何とか、八ケ間敷事を擔ぎ出す樣になつては、到底今日の複雜の社會に處して行き立つものではありません、成る可く大方針が定まつて居ればよいと思ひます、秦の世でさへ法三章を約すと云つて、至極簡短明瞭であつた。

斯くの如く人の師となり、社會の指導者となる者をこそ規則がなくとも、束縛せずとも、必ず人倫の大道は誤らない、墮落はせない者として、法三章で敎育せねばならぬ、然るに管々しく八ケ間敷言つたり定めたりするのは、必竟女子の弱點を恐れてゞあらふか、乃至は社會の人に嘲られはせんかと心配してゞあらふか、之れは却て内冑を見透される樣に思はれる、此れと反對に女子大學は、高等師範に比して總てが寛大だ、惡く云へ

ば放任主義だ、寄宿舍でも面會でも總てが簡略だ、私共の見地より考へて見ると、兩者に反對の規律があつて欲しいと思ひます、尚ほ又、

地方の高等女學校



にした處で、女子師範の教育とは、大變違つて居る、素より女子高等師範や地方女子師範は教員を作る處であるから別問題としても、其卒業生が餘り箱庭的方法で教育して行くと、自然と其教育者に依て養成せられた兒童、即ち第二の國民は、皆高砂島の人となる次第だ、然し今日文運の盛なる時代、苟も東洋の覇權を一手に收めつゝある、日本帝國の主義としては、餘り取る可きでないと思ふ、今日は少なくも鎖國主義の學校の夢を破るべき時代と思ひます、今後修學せんとする御方等も此の目的に向つて、進んで戴きたいと思ひます、此の心を辨へて、婦人の德さへ缺けて居ませんでしたら、假令高等師範や女子大

學にまで這入らんでも、確かに大學校を修めた價値は充分あるです、別に東京へ出でゝハイカラがらなければならないと云ふ必要はありませぬ。

斯樣の事は獨り高等女學校を卒へて、他の上級の學校へ上らうとする者のみでない、小學校から高等女學校へ上らうとするものでも、在學中の者でも、其の他の人でも萬人に通じて、必要の事と思ひます。

誤れる見解を御持ちなさる方は、東京へ出しさへすれば、立派な人になれる何も缺點のない人になる事が出來ると御考へなさる方もありませうが、之れが抑もの間違ひなので、東京と申しても決して善い事ばかりは御座いません、試みに東京に於ける

女學生の一班

を話して見やうなら、夫れは〳〵田舍の女學生と大變な違ひで御座います、田舍では多數と申た處で、女學校の所在地は知れたものだ、處が東京には、多數の女學校があつて、府立もあり市立もあり、特殊の女學校や私立の學校が、澤山ある、此の中でも、府立官立を除いては、實踐女學校、跡見女學校、東京女學館、女子美術學校、女子大學校等は隨分名の聞こえたもので、此の外にも私立の女學校は澤山御座いまして、隨つて此等の學校に出入する女學生は決して少々では御座いません。

殊に田舍の女學校と違ひまして、二三の學校を除くの外は大抵寄宿舍の設備が齊つて居ませんで、通學の方が多いのです、甚しきは男も寄宿すなる下宿屋から通學なさる女も多いのです、此の多數の通學生の間には、國と國とで知り合つたり、又は學校のお友達と知り合つたりして、此れが漸々と男學生と交際する樣になり、終には之が大なる間違の原因となる事は屢々あるので御座います。

然して、東京に男學生の多い事は、女子に幾倍する程で、昨今は十萬を以て數へる相ですから、此れ等の中には、隨分郷里で心安くなつて居た者もありませう、之れが段々と交際を結ぶの端緒となり、又男の性と女の性と云ふ者は、例へば電氣の十と一と云ふ工合で、何時か陰電氣と陽電氣とが引き付けらるゝ性質を持つて居る樣に、何か男と女とは一處に寄りたがるものです、殊に夕暮等、美い奥樣と旦那樣とが手を引き張つて、散歩する手本等を見せるものですから、若氣の至り前後の考へもなく、此の手本を學ぶと云ふのも無理はない筈です、斯かる事が根元となつて、終には一生を誤ると云ふ大失體を演ずるのであります、田舍の女子では這樣事は滅多にない、して見ると却て田舍の方が女子の修學には善いかとも思はれます。



能くしたもので、蛇の道は蛇が知るの譬へ、殊に東京は大都會で隣りから隣り、知らぬ人ばかりであるから、門を出ると直ぐ手を連れて遊んで居つても、人は見咎めない況して、女學生等の爲に、立派な遊歩場が出來て居る、日比谷公園、上野、淺草、等は最も好適地でもつと、進んだら芝居も可からふ、寄席もよからふ、或は待合まで行くかも知れない、して見れば、却々妙齡の女子を手離して東京へ勉强に出すのは、危險千萬と云ふ事になつて來る。

果して然うで御座いますとしたら、態々金を使つて東京へ勉學に出る必要はなくなつて來る、東京には女學生が一人もなくなる筈で御座いますが、扨て此處が肝要の所だ、今日の狀況で見ますと、益々增加するとも減ずる等と申す事は御座いません、之れは比較的女子の思想の堅固の者が多くなつて、矢鱈に迷はされると云ふ、前に申た薄志弱行の女學生が甚だ少ない結果で御座います、其れを斯樣の事が一つもあると新聞紙等では、珍らしげに書き立てますから、隨分大袈裟の樣に見えますが、之を多數の學生間に統計して見ましたら、九牛の一毛位だかも知れません。

是れ迄、種々と女學界の事を述べて參りましたが、尙は進んで。

女子に專門學

は必要であるか無きかと云ふ事に就いて、世間では話して居る者もある樣で御座いますが、女學生の立場より申しますれば、決して學問をして惡いと云ふ樣な事は御座いません、出來る限り勉强もし、智識も磨き度は山山で御座いますが、多少は經濟上の事も考へて見なければなりません、高等師範は官費の學校だから之は別問題として、女子は衣服や化粧料が入るので男子よりも學資が餘計に入る樣に見える、少なく見積つても一ヶ年二三百圓の金が入ると云ふ事になつて居る、此の金を使つて、三年四年の歲月を費して勉强して、田舍の奥樣となつて、夫れ丈の効果がありや無しや甚だ疑問です、女子大學の家政科等は隨分學科も高尙で、將來日本一流の婦人を作る樣に出來てるが、其處を卒業致しまして、實際其の學んだ學科を應用する事の出來る家庭を造り得る事が出來るや否や、末は兎も角今日の處では、卒業早々、迚も此の學科の十分の一も應用する事は出來ますまいと思ひます、西洋料理の仕方を覺えて居つても、竈の改良法を覺えて居つても、豪商か華族さんならばいざ知らず、少しばかりの田舍の素封家等では、琴や生花位が漸くの事だ、して見ると專門學等は敢て入

用もない樣だが、又一方から女子自らが獨立でもして行かうと云ふ時には、是非必要の事で、何はなくとも、專門的の智識を覺えて居つて、之によつて世に立つと云ふ考へを出さなくてはなりません、ですから、高等師範等を卒業した者はあまり地方の財産家等へ嫁入るものは少なくて、大抵は共稼ぎで金を貯へると云つた樣な者が多いです、

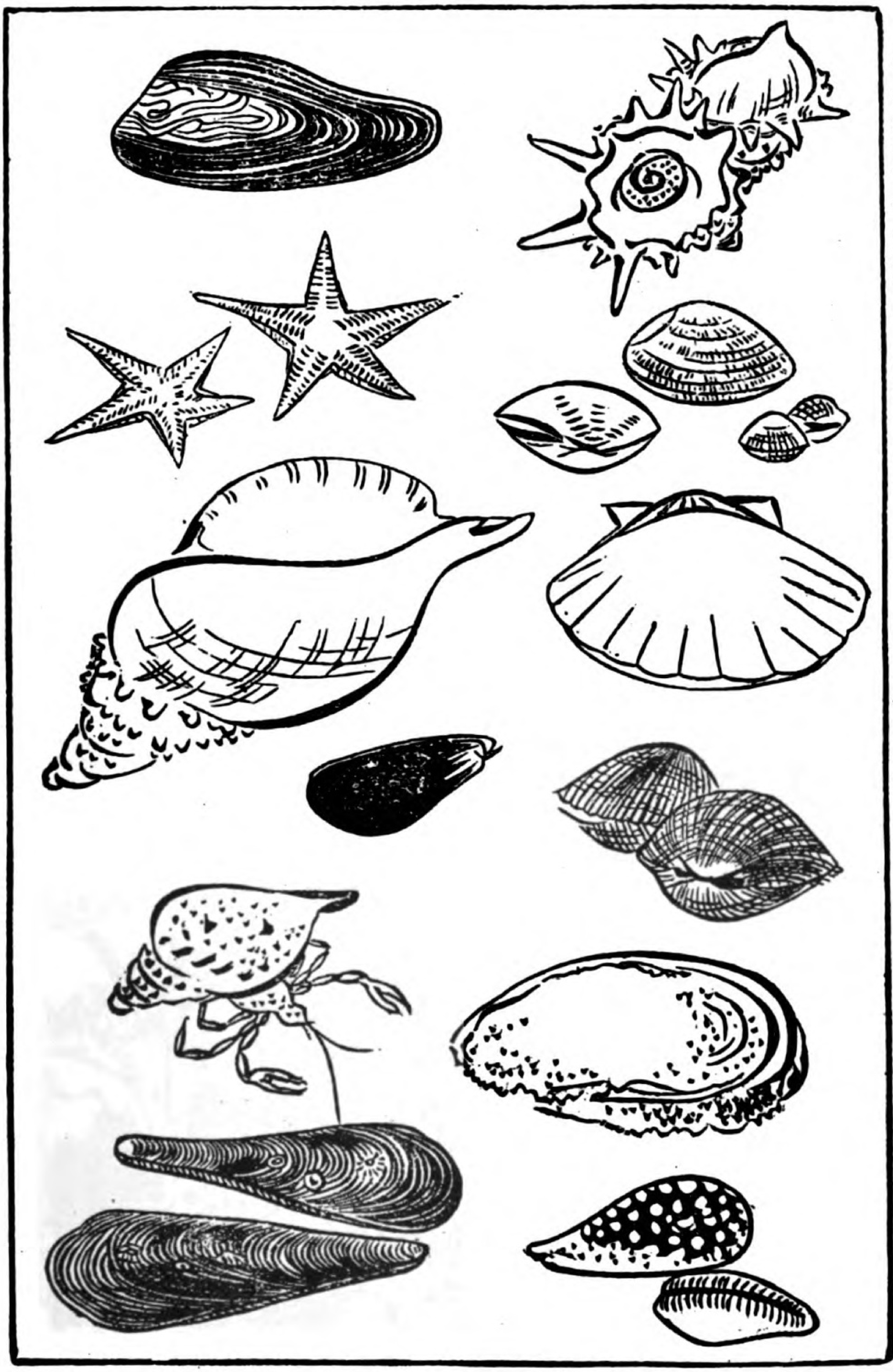
で、御座いますから、多少別嬪などゝもて囃さるゝ者は、高等女學校時代に片付く者が多くて、何かの事情か、又は餘程の篤學の人でなければ、專門學迄修めると云ふ人は少ない、年齡から申しても、五年の高等女學校を終つて、三四年勉强すると、先づ二十歳の坂を越すので、前申した標梅の期を失ふと云ふ點から强て嫁入る者が多い。

東京での勉學は、何かに於て耳新らしい事を見たり聞いたりする便利はあるが、今云つた樣な危險がある、田舍に居つて勉强して居る者は、此の點に於て後れて居るが、女の一生を誤る如き深い淵に嵌まる樣の事はない、概して田舍に生息して居る者は正直だ、人の云ふ事も能く信じて實行する、都會の者は上べのみ眞面目に見せても腹の中を割つて見たら、隨分不潔極まるものが澤山ある、女學生も男學生も皆斯う云ふ風に傾いて、東京等の大都會に居るものは殊に甚だしいから、修學中は、成る可く斯かる不良の感化を受けない樣にするのが肝要で、此の實を擧ぐるには、東京邊りの私立の學校へ上げて御轉婆にして仕舞ふよりは、田舍の學校がよいと思ひます、東京の女學校は私立が多いから錢さへ取れば善いと云ふので、學問の切り賣りが多い、だから教へた事を覺えて居やうが居まいが、其麽事には少しも構はないで、只教師は講義をして行けばよいと云ふ鹽梅だ、田舍の學校へ行つて見ると、教師も多少責任を重んじて、東京の如く切賣的の學校は少ない、教授でも訓導でも、皆教育的教授に傾いて居つて、萬事生徒の一身上に迄世話を燒いて呉れる、此れは迚も東京邊の私立學校では見る事の出來ない事だ、夫れであるから、學科も眞面目に調べて居るので、眞の學力を比較して見たら、田舍で勉强して居つた者の方が多いか知れない、何れにしても、一利一害は免れないが、多少は其人の種々の事情からも割り出して、學修の道を考へねばなりません。（完）





貝づくし



家の寶

家庭の養鷄

養鷄を始むるには二月上旬から萬事の仕度にかゝるが、卵を孵すには二月中旬から四月下旬までが丁度時節である、此時節に孵した雛子は六月前後入梅の頃にはすでに百日程の成長をしてゐるから、梅雨といふものは雛子に取ッて恐るべきもので、色々の病を起すのであるが最早此の位になれば其心配はない、依ッてこの時節を逃さず始めるのがよい。

雛をとるには二樣ありて一は種卵を巣鷄に抱かせて孵すか、又は孵化して百日程を經た雛を買求めて

修學の栞

女學生と倫理

東洋女學校長　村上專精

女學校に於ける多くの學科の内、習ひし其日より家庭に於て直ちに應用し得るものと然らざるものと有り、倫理學の如きは前者の内の一つなり。凡そ學問は學びたるが故に其人貴きに非ず、學びたる學問を應用し得て始めて其人は貴きなり。學校にて學びし英語を用ふる事無くして數年の後には殆んど全く忘却し了るが如きは、屢々耳にする處なるが是れ最も馬鹿氣たる話なり、故に敎へられたる其日より直ちに實地に利用し應用し得るは學問其者の本旨にも叶ひ、且つは學問の貴さをも發輝し得たるものとす

蓋し物理學の如き算數學の如きは、一定不變の原則有りて永く變化するものに非ざれども、倫理學は時代と共に多少變遷せざるを得ず、社會の進歩發達と共に倫理も亦改良せられざる可からず、即ち倫理は社會と共に常に變遷し推移し活動するものなり。

見よ一日の内、乃至一時間の内、算數學の應用されぬ日は有りとも倫理

始めるかである、今一ッは一番即ち一雌一雄の親鷄を購求めてこれより卵を採ッて追々雛を仕立つるのである、前の方は資本が少くて至極着實であるけれども繁殖の割合が遅い、後の方は親鷄を買入るために、種卵或は雛を購入るゝよりは少しく餘計の資本が掛るけれども繁殖が速いのである。

扨卵を孵し、雛を仕立つるには如何なる種類の鷄を撰んでよいかそれは第一人々の好みがあるから一概には言はれないが其中卵を多く產むのを撰ぶと肉の多く取れるのを撰ぶのと、又奇麗で愛翫を專らとするのがある、併し家庭の養鷄は專ら產卵の多き種類を撰ぶのが通例であるが、その實用鷄の中

學の應用されざる日は一時一刻たりとも無く、單に家族と云ふ事のみより見ても、父母に對する義務有り、兄弟姉妹に對する義務有り、僕婢に對する義務有り、夫婦間の關係有り、是等の人々は皆終日起居を共にせるが故に必ず何等かの倫理的關係を生ずべし、又、國家に對する義務、國君に對する敬意、他人の生命、財產、自由、名譽等に對する道義、及び慈惠や、獻身や、自己の身體に關する智力、意志、職業等に關する義務をも數ふれば、人は一刻一時間と雖も倫理より離るゝ能はざるのみならず、更に人は此倫理觀念に依りて、善人と成り惡人と成り、怠惰と勤勉とに別れ、意志の決定、行爲の活動をもなすなり、極端にいへば人は無人島に唯一人生息せざる以上は倫理と一刻も離るゝ能はざるほど、夫れほど貴重なるものなり。

然るに世の倫理を敎ゆるもの〻多くは、單に君に忠ならざる可からず、父母に孝ならざる可からずと敎へて、如何にして忠を勵むべきか、孝を盡すべきかを敎へず、又決して其實行を迫らざるが如し、何ぞそれ不親切なるや、斯くの如くにして忠臣孝子を望まば、木に依りて魚を求むる類なるのみ、故に敎ゆる者に充分の親切無かる可からざるのみならず、敎師が少くとも生徒の模範となり得る敎師ならざる可からず、敎師が屢々遲刻し缺席し乍ら、生徒に無遲刻無缺席を奬勵するが如きは、其効無きのみならず

にもいろ〳〵種類があるが中に就て性質順良にしてあまり食物を貪らない種類を擧ぐると。

△レグホン――此種は今より凡そ卅五年前伊太利から出たもので其後米國及び濠洲に移したところよく其の殊なる國の風土に適し今や産卵鷄としては世界に珍重せられてをる、これに五種ありて、白、褐黑、油羽、漣 などゝ申し其中白、褐が最もよろしく體の目方は六百目から九百目まで一ケ年間の産卵は平均二百個より下らず、其卵は十四五匁もある。

△アンダルシヤン――これはスパニシ種より出でた一種で元西班牙國アンダルシヤン洲にて改良され一の良種となりたるもの、故にス

大なる矛盾なりとす。されば習ふ生徒等も亦、其敎師を眼前の鑑として、誠意を以て其講義を聞き、善事は直ちに實行し惡事缺點は直ちに改めざるべからず若し然らずして其儘に打棄て置かば遂には恐るべき結果を來すものなり、倫理は實行せんが爲めに敎へらるゝものなれば、着々之を實行して、貴重の金錢を拂ひて師に就かしめらるゝ父兄の厚意に報ひざる可からす。

元來今日の青年男女は父母の高恩を思ふ事頗る薄くなりたるやの感あり是れ大なる心得違といふべし、少しく西洋の書籍を見たる女などは、やゝもすれば、父母は我を生めり、故に我を養育すべき義務ありなどゝいふ思想を抱くものもなしとせず、これ甚だしき不了簡なり抑も父母を敬愛すべき事は『子婦孝なるものは父母舅姑の命に逆ふこと無く怠る事無し』と禮記其他の支那倫理書に記されたるのみならず、獨逸の哲學者フキフテも亦曰く『父母に對しては一に服從を旨とせざる可からず、服從は諸德の基にして又其最大最重なるものなれば、諸德の發達するに先立ちて豫め之を發達せしめざる可からず』と希臘のプラトーン亦曰く『兩親を最も尊敬して之が恩に報ひざる可からず、抑も吾人は兩親に對して最も大に最も古き債を負へるものなれば先づ之を償はざる可からず、兩親は吾人を生み、吾人を養育す、其厚恩や例へんに物無し』と更に又大賢ソクラテスの言を聞け

パニシと同じく大きな卵を產みます、目方はスパニシに等しく羽毛は光澤ありて淡色、黑紫、柿色の三種あり、共にいづれも美麗である、卵は十四匁より二十匁までゝ一ケ年に二百個以上を產みます。

△スパニシ——前記の通り西班牙產で、羽毛黑く、光澤あり、目方は雄七百目雌六百五十目に至るものあり、卵は十四匁から十七匁まで、一年の間に百四十個から二百個まで產みます。

△ミノルカ——これはもと地中海のミノルカ島に產したもので十八世紀の末スペイン國の愛禽家の手で改良され今日の如く優等のものとなつた、スパニシに似て色黑く體の目方、卵の目方、產卵の數共

ば、婦人は妊娠といへる重任を負擔し、身體を苦め、生命を危ふし、且つ營養の一部を割き、又其分娩するに當りては苦痛言語に絕し、產後數十百日の間亦晝夜の別無く哺乳養育の煩累に身を處して而かも其報ひを求めず殊に赤子の爲めに一言の謝辭をだに受くる事無し、加之ならず父母は其子の養育を以て足れりとせず、漸く成長して事物に認識の力を生ずるに至るや、よく後年世に立つの事柄を敎へて漏さず、師傅の爲には費用を吝まず百方手を盡して其子の薰陶を謀る。あゝ我子よ、父母の恩を感せずんば汝の親友と成る者は無かるべし』云々とありて、佛說父母恩重經の文字と甚だ相似たるものあり。取り分け日本は個人を以て國の單位とせる西洋流に反し一家族を以て一國の單位とせるが故に、家、即ち家庭が甚だ重要なるものとなり、祖先崇拜の美風と共に又飽くまでも其の父母を敬愛せざる可からざる也。

要するに倫理を學ぶ者は直ちに學びし事を實行するを第一とし、それには限り無く父母を敬愛するの心懸け無かる可からざるものとす。

に略スパニシに似て居る。

以上の四種はすべて西班牙種で飼ひ易くて食物を貪らず、且つ寒暑にもよく耐へて、一名產卵の器械とまで稱せられてゐる程、最優等の種類であるから、斯る鷄を撰んで飼養されゝば間違はない。

△ウーダン——是は今より五十二年前佛蘭西にて改良されたと申します、羽毛は黑色、白色其他いろいろあッて目方はほゞ七八百匁ほどにもなり、卵は十六匁位にて一年間百六十個ほど生みます。

△ラフレーシユ——これも又佛國の產ラフレーシユ村から出たもので、此の肉冠は奇妙で鼻の穴の上部に固まつた肉のやうな肉冠がある、これより上部には更に二つの

習字の修業

東宮御用掛　小野鵞堂

第一、手本

小學校を卒業した位な所では習字の目的はまづ手紙の文に限る。此手紙の文には同じ草書でも一字一字堅く書くのと幾字も續けて書くのと有るが其れにも亦師匠に就いて習ふ者と獨習する者との二た通りある、前者は其師たる人が斟酌して敎へるから善いけれども後者には手本を一通り示さればならぬ、之等の手本としては今日の人では多田親愛、岡田起作（高等師範學校敎師）坂正臣、大口鯛二、小杉榲邨等の諸氏の物が社會から歡迎されて居る（記者曰く小野鵞堂氏のものは以上の諸先生のものよりも尙ほ多く歡迎されつゝあり）之等の内何れにても各自の嗜好に依りて撰擇するが善い。

第二、姿勢

次には姿勢である、之には種々の流儀もあるけれども、先づ正しく坐して机に向ひ、下腹に力を入れて首を曲げぬ樣に注意せねばならぬ、手本の位置、硯其他の位置も正しく定めねばならぬ、それから筆の持方は指を一本懸けるものと二本懸ける物と二た通り有ッて何れでも善いが、唯だ指を使

角のやうな肉冠がある、肉髯は長く耳朶は丸く、いづれも大きく、羽毛の色は眞黒にて且つ緑紫色を帶びて日光の照る時はキラ／＼として恰も黒色の金剛石が燈下に輝やく如く餘程奇麗である目方は一貫目以上にて卵は中形、一年間に凡百四十五個を生む。

△ポーランド——此の鶏の毛冠は前後左右に垂れて優美で奇麗な故愛翫され卵も餘計生む方である。

以上の三種は愛翫と實用を兼ねて使用するによろしいこれを庭に放たば一種の光彩を添へるでありませう。

猶此他に産卵鶏は多くあるがまづ右の七种に優るものはないから是を省き、これからは肉用鶏に就

はぬ樣にせねばならぬ、即ち臂で書く樣に爲るので。斯くて筆が右の眼の丁度上にある位に保つて體を歪めぬ樣に氣を付けて一點一畫にも深く注意しながら、書くのである、成功しての後は姿勢は左程嚴格で無くとも善いが初學の内は必ず此姿勢を一つの作法と心得て嚴守せねばならぬ、それで無くてさへ人の體は崩れ勝ちなもので有るから、體を曲げて書くと曲つた字が出來て仕舞ふ、それでも字が曲つたと心付けば未だしもだが、自分の體の曲つてる時書いた字の曲つてるのは筆者に氣が付かないもので有るから甚だ惡い。

第三、習字の分量

次には習字の分量である一日何時間程稽古したら善からうかとは初學者から時々質される問だが、一時間でも三十分でも度々に分けて爲るが善い即ち毎日つとめて少しづゝ習字をした方が一番善い、結局昨日と一昨日は爲なかつた上倘ほ明日も休みたいから今日は都合四日分四時間の習字をやるなどは甚だ惡いのみか、それでは中途で根氣が盡きて一點一畫も苟もせぬと云ふ事がうるさく成り、ツイ早書きをする樣になる、早書きをすれば字の形が崩れて仕舞ふから幾枚書いたからとて、害こそあれ何の益にもならない、それで毎日何枚位の紙數を稽古したら善いかと云へば、十枚位が丁度善からうと思ふ、餘り多くては飽きたり根が盡きたりするし、餘り尠

て其最なる種類を擧げませう。

△プラマー――これは印度の大河なるプラマープートラーの原産で、四十年前米國へ移され今は肉用鷄として歐洲各國幷に濠洲にて盛に使用されてゐる、此鷄は元熱帶の産故北海道の如き寒地には適せぬ四國九州などにては殊に成績よろしく卵も多く産みます、プラマーは暗色、淡色の二種あれども、容姿はいづれも直立して威嚴あり肉冠は小く、胡桃の形をなし肉髯は大くて下に垂れ、胸は廣く突出、脚には羽毛がありて、容子振り如何にも溫雅である、目方は鷄の中第一で海外の博覽會共進會などに出づるものは、雄一羽で三貫目位なものが往々ある、又卵の量は

くても功が見えない。

早書きをすると文字に勢が出來るから、誰しも早書きを仕たがる、けれど手本を離れるなら兎も角、習ふ間は最も叮嚀に書いて、字の形を第一と爲し、勢を第二にせねばならぬ、それでも一方では習字は直ちに實用に供せられて居るから、どうしても早書に陷り易い。

第四、筆蹟の一人前

一通り習字に就いて方角が分るまでは必ず一つの手本を稽古せねばならぬ中途で變へるなどは以ての外である、しかし一通り分つた後は何でも自己の氣に向いた物を稽古して差支は無い、之を小供に例令て見れば一通歩きが出來る樣に成つた程度で、つまり一寸短冊や色紙を見ても善いか惡いか位は分つて來るから、自分で手本を撰むだけの力が出來たので、此所までは大抵の人は行かれる。三年位かゝる人もあるが、之迄家庭に於ても稽古をし、平常も少し注意してゐる人は一年位で達し得られるものもある。

第五、細字と大字

元來習字の目的は短冊其他寫本などの細字にあるのだが、習ふ時には大字を習ふのは、古來一點一畫をも嚴格に覺えるには、大字で無くては稽古に手答へが無いからで、初めから細字は敎へるにも敎へ難く、習ふにも習ひ難いのである。

十八匁より、二十四五匁まであり

△コーチン――これは元安南の產にて支那交趾にて改良せられたもので今より六十一年英國女皇陛下の希望によりて支那より英國に輸入せられ當時甚だ評判の高かつた鷄である、これもブラマー種の如く、體大きくして容姿は威嚴あり但少しくブラマーと違ふは肉冠が鋸の風をしてゐる事である、交趾に淡黃、眞黑、純白、赤油の四種あり、目方はいづれも大差なく十分に成長した雄鷄は八百目位になる、卵は十六匁より二十匁迄。

△ラングシャン――此鷄の原產地は未詳なれど、交趾種の變成ならんとの事であるブラマー交趾抔なの如く、寒氣を恐れずしてよく卵

斯くて習字は數を澤山に書けば其內には自然と上手に成るので、古人の善い手本を寫して見るなども善い事である。

由來古人は細字が甚だ旨かつた、その譯は昔は今日の樣な活版が無く、上古になると版木に彫刻する術さへなかつたらうから、自然と寫本が世の中に流布した、有益で多趣味なものを見た時には之を寫して置くといふ事で、甚だしいのは長篇の小說本などを面白いとて家內中の者が協力して數ケ月で寫したものもある、それらが知らず識らずの間に細字を上手にさせたものでせう。

近來では手紙の文などを書いた習字手本があるから、それを片端しから叮嚀に寫したら、文章の力と習字の方と一擧兩得になつて善からうと思ふ。

第六、書は無限の佳景

式紙や短册の書式は色々有るから、これは上手な人や先輩の書いた物を見たら、一々寫し貯めて置くが善い、そして自分が書く時に、その內から好都合のものを撰出して參考にするが善い、これに就いては尙ほ云ふべき所有れど書式で示さねば分り惡いから略して置く。

蓋し習字は恰も無限の山水域を旅行する樣なもので、行けば行く程佳境へ這入る、平常心懸けてさへ居れば進步する譯である、其所には又一里行つて止める人と二里行つて飽きる人と三里四里進んで行く人と樣々である

を産み、目方は前の二種より下るも肉の味は誠に美である、又此鷄は羽の毛が深い故雛を孵へすには甚だ調寶である。

右の三種は肉用鷄の最良の物で外にこれに及ぶものはない、又卵肉兼用の鷄にはブーリモースローク、ワイアンドット、ドーキングレッド、カップ、などの如きものである。

朝顔の栽培法

△たねまき――普通八十八夜を以て適當とし、丸咲(一重)は何れも此の時を外さゞれど、牡丹咲（變り咲）は丸咲に比べて、性質柔弱なるものなれば、是より十日間も後れて蒔くを常とす。これは若し

が、兎に角中止しては、跡戻りはせぬがそれより先の美景は見られない、然し心懸けてさへ居れば段々と面白く成つて其先、其亦先と、美景に對する慾が出て止め惡くなる、早く次の絶景を見たいと心に焦るから、熱心に勉强する、こうなれば人に依りて多少の遲速は有れど必ず上手に成るから

私は手筋が惡いから駄目だらうなど〻中途で止めるのはよろしく無い、そんな風では習字に限らず何事も成功するもので無い。

初めの間は、手本や時間さへ一定の量に限つて置くけれども、進んで行けば筆持つばかりが手習ひで無く成る、筆持つ以外に大なる眼識を養ひ、一寸一枚の額を見ても何所が善いとか惡いとか直ぐ分るから、他人の筆蹟を見るのが又一つの手習ひと成る、机にのみ就いて居らずとも其人の書は進歩する事に成るで一旦習はふと思ひ付いたら、何所までもやる氣で生涯の仕事とせねばならぬ、弘法や東坡は百里行つたか二百里行つたか知らぬが書は無限の山水で有るから勿論完全の城、充分の境に達して居らぬ。

第七、古の能筆

中世には加藤千蔭、近衞家凞など筆蹟は極めてすなほで最も婦人の學ぶに適して居る。上世の筆意は貫之朝臣、行成卿、佐野卿、小野道風などを探ぐれば略ぼ遺憾無く窺ひ知る事が出來る。

假名文字の手習ひは此所等で最早極度とする。

丸咲と同様に蒔き、不幸にして氣候不順勝なる時は、發芽に至らずして早くも種子の腐敗する恐あるを以て也、總じて丸咲牡丹咲の別なく、種子の選定は云ふまでもなく、殊に牡丹咲に限り蒔く時には種子に小刀もて少しく傷を付置き發育を早からしむる事、種蒔の秘訣なりと知るべく、商賣人は皆此方法を取れり。

△土ごしらへ――東京入谷邊にては土地の土と、山の手邊のボカ土といふを混交して花壇を造るを例とす、此のボカ土といふは土質至つて柔かにして、種子の發育をいたく助くるものなれば、必らず此土を混用するものなり。但し之は牡丹咲のみの場合にて、丸咲は最

第八、經驗

私は假名の頽れた頃稽古し始めたので、初めは唐様の柔な字を習ひ、與樂院家煕の御家流に飛び越して上世の諸名家を學びました、御家流は元來行成卿から出て居て實に善いので有るけれども、中世に至つては段々に崩れた氣味がある。

第九、草書と假名の調和

漢字の方には我國にも道風の如き名筆があるけれど、本家だけに唐の物を見なければならぬ、又見なければならぬ物が澤山にある。それで假名は我國特有の物であるから、漢字の草書と、假名とを旨く渾化し調和させねばならぬ。

唐様の草書の力が如何程立派であつても、其人の假名は又別物で必ずしも、善く無い。又どれほど假名が上手な人でも草書は自ら別の物で、中々書けない。唐様の字を書く人の書いた假名は畢竟草書の假名で甚だ見惡い假名を書く人の書いた漢字は草書で有つても精神が亡けて居て甚だ見惡いものである。

第十、かな書の注意

初めは一字一字の正しい假名を習ひ、次に續けて書く事を習ひ、次に續けて書き行く内に文字の大小を造りて、面白く調和したところの綿連たる

初より土器に蒔付け、決して花壇には植付ず。さて花壇の造り方は日當り好き場所を選ぶはいふまでも無く、風通しと水捌け好き處を專一とし、一二寸土を盛上げその上にボカ土を置くがよろし。

△植かへ——斯て約一週間にして貝割葉は生ずるものゆゑ、其上ば晴天を見定めて鉢に移植するを宜しとすれど、さのみ急ぐ事なく暫時其儘花壇に置きても大なる害はなし、さて漸く成長して蔓が出初むれば、生育至つて速かなるものなれば、其の時は直樣莚の手を造りやるべく、蕾の出初むるは大抵七月初旬にて、開花は同月二十日頃よりなるが、牡丹咲の中細物に至りては、常に開花期の遲るゝも

ところを見せねばならぬ、次には又細い、太いとの配合も入用で有る。又一くだりの文にの〇の字の如き同一文字が幾個も有る時は、それにそれ〴〵の變化を與へなければならぬ、例へば第一のの〇の字は上の文字に續けて書けば、第二のの〇の字は下へ續け、次は平たく、其次は長目に書くなど、其場合に適宜の手段を取らねばならぬ。而して手本を見て習字して居る時でも、此邊まで注意して其手本を見て居らねばならぬ。

此配合は吐嗟の間に考へ出すので有るから其人の伎倆が其所へ能く現はれる。で同じのの〇字でも變體が五通りも六通りも有るから、込み入つた字の次へは簡單な字を續け、大字の次には小字を篏込んだり、隣の字が太ければ此方は細く書くなど、こんな文字以外の文章も見て面白しと思はせねばならぬ、古人は皆そんな所へ細かく行渡つて注意して居た。

元來此假名字は柔かに書くのが第一であるが、でも骨無しに成つては困る。之を例令ば才藝の世に秀れた上に思想の堅固な淑女の御口、しとやかに優美に暖く親しみ易い間に、何所と無く凛として犯す可からざる威嚴が無けねばならぬ、而し文字の太い細いは人々の好不好も有れど、人に依りて肥大な人と瘦た人と有る樣に、何れが美人とは定められないが、其所には自然美の標準が有つて佳人の物は誰が見ても佳いのである。

第十一、筆と墨と紙

のにて、約八月廿日頃より咲出るが例なり。惣じて變り物は手を少なく造り、蕾も二三輪に止め、其位置を能く造るが肝要にて、尙貝割葉は開花の期に至りても、附着せるを以て手際とし、細葉物には之もさして至難の業と謂ふべからざれど獅子咲等には花期まで附着せるは稀なり。

△肥料のやり方――前段略述せるが如く、種子の蒔方土ごしらへ植替へ等は、さして至難の業ならねど、好き花咲かすも咲かせぬも、多くは其後の手當一つにあり。肥料のやり方やがて是にて、多年斯道に入立たる黒人の苦心も常にここにありとす。さて其方法中最も宜しと覺ゆるは、鉢に植替へして

筆は柳葉形と雀頭形の二た通りあるが、雀頭の短い方よりも柳葉の穗尖の長い方が、假名の如きものには使ひ易い、其長い穗を半分まで下ろすが宜しい、筆其物に大小は有れど總じて腰に力が有つて毛先の柔かな物を撰ぶが宜い。例令ば筆の大きなる割合に小字の書けるものは、毛尖が纏まつて居る證據なので、其筆は必ず惡く無いのである。尙ほ一言添えて置きたいのは、小さい筆で大字を書くのは無理が出來て非常に惡い、之に反して書の割合に少し大きい筆で書いた字は勢が有つて宜しい。

次は墨で有るが、大字には唐墨も惡くないが、極小さい字は和墨の良品で書けば大層善い、唐墨では不可、之は和墨には膠が少いからで有る。

それでも現時の用紙は大方墨汁がにじむ樣に出來てるから唐墨が適當で有るが、丹冊だとか、きら引の扇子の如き墨汁のにじぬま物には和墨の良品が最も宜いので有る。

書道に就てはまだいろ〳〵言ふべき事があるが大體まづ右樣の事柄を心得てよろしい。

より、先づ一ヶ年程經たる下肥を少し宛與ふるか、若しくは油粕を與ふるを宜とす。斯て其後は一週間に一回位、其下肥に水を加へ薄くして與ふことにて、流儀によりては二回位施すもあり。要は凡べて變り物は肥ゆるを嫌ふものとて、肥料の利過ぬを專一とし、其手加減なか〳〵六箇敷く、尙ほ雨天の時には決して肥料を施さず、又木に手指を觸る事も嚴禁なり。

△水のやり方——丸咲の分は乾きを見計ひ、日に二回位開花せば水は三回位施すをよしとし、變り物は花期にても二回位を適度とす但し山の手と下町とは乾き方に相違あり、山の手は槪して乾き方遲く、下町は至つて早きもの故、其

女子と家政學

成女學校學監　嘉悦女史

何事でも只習ふといふ事は易いものですがそれを實地に行つて見ると思ふやうには行かないものです、家政とても其の通り、學校で敎はる處ろは只大體だけです、けれど、實際に當つて見るとそれ以上遙かに複雜して居るもので、中々困難なものです、故に家政學を習ふに就ては、自分が實際主婦の地位に居るものと思ひて、其の心持ちで講義を聞かねばなりませぬ、

婦人の學問の全部は即ちこの家政を完全に爲了せるだけで澤山、この外に婦人の仕事はまづないと言つてもよいのです。

大凡世の中の事は理屈通りに行くものは少いが、家政などは其中でも尤も著るしいものです、殊に日本の風俗は約束通りや、時間通りに事の運ばぬ風習ですから事に臨んで理屈以外、豫定以外の事件が起る事が多い、そこで家政を執るものは常に臨機應變の心得がなくてはならぬ。

家政學の材料は必らずしも敎室のみに在るといふ譯はありません、一と足戸外へ踏み出して見ると家政の好材料は山のやうにあります、就中他家を訪問して御覽になれば種々な研究材料は澤山にあつて自分を敎へて居るではありませんか、すべて學問は不斷の注意力で以て身外の萬象を材料に

場所によつて相應の手心あるは謂ふまでもなし。

△鉢の選び方——惣じて朝顔には本燒を嫌ひ土器鉢を好めど、これは庭上にて栽培する塲合にして、大阪もしくは下町等の物干或は屋根上にて培養するには土器鉢は用ふべからず、云ふまでもなく是は水の乾き方速かなれば、木を弱らする憂あれば也。尙鉢の土も河砂小砂利等を混じて造れるもの、此花物には最もよろし。

△咲かせ方——丸咲は大輪なる花を珍重するが例なれば、發芽の頃よりその用意に取懸らざるべからず。其の方法は三葉位芽出したる時心芽を摘取れば、更に葉の間より芽を出す、若し三本出たりとせ

して研究するに若くものはありません。

又私は密かに思つて居ります、今日高等女學校や、女子大學位で教はつた家政學で到底完全な事は出來やう譯はない、つまり實地に就て練習するより外はありません、そこで私は名實共に模範的の家庭に女學校の卒業生が住み込んで十分の經驗を得るに限ります。これは丁度むかしの行儀見習といつたやうなもので、今日とても猶大商店の息子が然るべき嚴格な老舖に小僧奉公するやうなものです。

近來家庭間にやゝもすると嫁姑の意見の衝突といふやうな事があつて、其れが爲めに遂に離縁沙汰を聞くやうな次第ですが、これ等は必竟嫁の方に家政學の未熟といふ弱點があるからの事です、行儀見習といふ修學旅行を十分にしたならば滅多に斯樣な事はありません。

又どんな事でも爲て出來ぬといふ事はありません、爲ればそれが直ぐに自分の幸福の基となるものであるてふ事を自覺するのが一番必要な事です學校でこの氣象を養成しなければ根本の定まらぬ學問となります。

一體家事はどんな者にでも採られて居るから、誰れでも出來るものと思つて居る人もあるやうですが中々そうではありません、まづ一口にいへば世間一般皆曲りなりにやつて居るので完全無缺といふのは一つもありません、ですからこれは新教育を受けた婦人が大に工風して完全にしなければ

ば其の二本を除きて一本とす、さて葭の手に一廻り半も巻付きたる頃、又々先を摘取りて延さゝれば自然蕾に勢を増し大輪の花を開くものなり。尚極の大輪に咲かせんとせば、尺位の鉢に蕾の五つ位を止め、木を成長せしめずして肥料を強くせば事足れど、性質の善惡により斯くしても思ひの儘にならざることあり。丸咲とは反對に變り物は大輪を珍重せず、自然の咲き方を好むものにて、中には葭の手なども設けず培養するものさへあり、之を如意式といふ。斯て咲方には一重八重牡丹咲亂菊咲大輪中輪小輪咲等ありて、葉の形狀にも種々の區別あれど、是等は黒人の上ならでは趣味なき事ゆゑ爰になりませぬ。

學校は單に家政の智識のみを敎へる處ろではなく、如何にして家政を完全に爲し得べきか、如何にして社會に立つべきかといふ其の氣象を養成する處ろであらねばなりません。

學校の家政と實地家政

女子高等實修學校長　山脇夫人

學校にて敎ゆるものは獨り家政の學に限らず理論的に流れ易きが常なり然るに家庭の實際は如何までも情實的なるが故に、其間に少からざる差違ある可し、此差を少からしめたる者、即ち學校にて習ひしものを最も巧妙に家庭に利用應用し得る者程、其人の働きなりと云はざる可からず例令ば男子に有りても大學を卒業したるものは一人も殘らず學士なれど一旦社會に出ては其地位皆悉く同じからず、是れ各自が其修め得たる學問を應用する働振りの巧拙に依るものとす。

元來學問は爲さぬ人よりも爲したる人が勝れて居らざる可からざるが當然なり。然るに是迄の敎育は多くは、本を讀む時のみはその氣で居るけれ

は記さず、猶貝割葉の中に葉形により丸咲と牡丹咲とは容易に見分られ、又普通の花は蕾とならざれば、其色は判明せぬものながら、白堊の分は絞りと限れば素人は俗に之を採牡丹と呼ぶ。

金魚の飼ひ方

池の汀にあやめ、燕子花のふぢ紫、それは田舍の庭の眺め、漆喰塗の泉水、又は箱舟を縁端にしつらへて浮藻をくゞる紅の尾の潑剌を見るは都人士の賞翫、玻璃の器に養金、流銀を放ちて鳳眼の眼をたのしましむるは、盆栽、盆景の奇功あるにもまして風情のあるものなり。殊に紅塵萬丈の都門にありて身邊三尺の小天地浮世の塵を忘れしむるものはこの美術的鱗鱗の眺めにぞあるべし。これより厭暑の睡氣をさましと

ど、一度之を閉づれば、二度之を應用せんとの心掛なきを以て幾程本を讀むとても幾程新智識を得とも之を巧に活用するにあらざれば何の益かあらむ。凡そ如何なる學者も如何なる物知りも、其學問智識を社會百般の實地に活用するに非ざれば何の利益かあらむ、唯だ勉學に費したる多量の時間と金錢とを無駄に成し了らしむるのみ。況んや家庭の事たるや、あらゆる世事の内最も理屈通りに行き難きをや、特に日本の家庭は秩序無きが故に家政學を修めんものは、此所に深き注意を爲さゞる可からず。

又一方に於ては今日の各女學校家政科の敎師を見るに、男子若しくは獨身の若き婦人にして、家政に就いては餘り實地經驗を有せざるもの少からず、されば立派なる女學校の家政科卒業生にして、裁縫の出來ざる上、毎日三度宛食すべき飯の炊き樣をも辨へぬがあり一家の主婦たる資格を造る家政科を卒業し乍ら、さりとは餘りに實地に疎き事ならずや。こは其學生の罪に非ずして、責任は敎育當局者にあらざる可からず。

現時の女學校の家政科には、心理學は有れど裁縫割烹は敎へざるがあり家事敎科書中に、人體一日に要する滋養分として脂肪質幾グラム蛋白質幾グラムなど詳細に敎ふれども、一升の米に何合の水を加へて飯は煮らるゝか、何本の大根に何程の鹽と糠を與へて香の物は漬けらるゝかを敎へざるがあり。

して茲に金魚の飼養法なるものしぬ銷夏の一端ともならば幸甚

△錦魚の季節——春の小鳥飼、夏の錦魚、彼れは煩はしけれど、これは慎やかなり。もとより錦魚は水物ゆゑ暑き時分に愛翫せらるゝはその筈なるが、季節をいへば初夏の候より秋までなり、されど走りを尊ぶ人情よりして毎年四五月頃ともなれば、いづれも此魚の出始めにて氷水屋の店頭と其の軌を一にするの例なり。

まづ大要なる飼養法の一斑をいへば春の土用前より雌雄を分けて餌を十分に與へ日中には差し水、夕方は二割方の減水をなし八十八夜まで雨障子を覆ひ十分に精分を強くして將に子を産まんとする際に他の泉水に移し、松藻を小石に結びつけて容れ、雌雄兩方を一所に入るなり、扨て子を産み終れば親は他の器にうつし泉水には雨覆をなし、夜は暖め、日中は之を除きて日光を導き入るやうにするなり、扨て一週間も經ば卵は孵化して少さき刷毛のやうなる子を

歐米の家政學教科書には常食たるパンの製造法を記載したれど、我國にては文部省檢定濟の教科書にも飯や香の物の製造法を記しあらざるなり。斯く學理的にのみ走りて實地に疎きは、明治今日の如き過度の時代には免れ難き情弊にして、萬事實直なる風習を有する英國の如きも、一度は斯る時期を經過したりと聞けば、穴勝ち嚴重に責むべきにもあらねど、斯る折りに女學生たり花嫁たらんものは、其間に專心注意して怠ること無からんを要す。

日本婦人と音樂

東京音樂學校教官　天谷秀

家庭を樂しき團欒の場所とするには是非共音樂の趣味が必要です。良人は外に出て働き、妻は内に居て臺所や裁縫に急はしく子供等も亦各々學校へ行きて、其日の務めを盡し了ッた後の晩餐の席には活氣の有る談話と共に、愉快な音樂が有つたら、如何に嬉しい事でせう。

歐米諸國では音樂が非常に流行して居る、流行といふよりも寧ろ普及、否普及と云ふよりも敬愛されて居て、如何なる家にも風琴の無い家は無く

發生するなり、次で四五日も經過せば鷄卵の黄味の煮たるを水に溶かして泉水中に打込みその翌日水換をなして又他の泉水を洗ひ雛子を松藻と共に移し斯くして又餌を與ふるなり。この如くすること前後及び五回にして稍々魚の形を具ふるに至る、尤もこれは雛子仕立の本式にていづれも專門飼育者の取る手數なりと知るべし、かくて雛子の善惡を撰み拔き、良子は凡そ一疊數ほどの泉水に三四十匹の割合にて水の深さ二三寸とし、日中に差水し、夕方には二割の減水をなすなり。又雛子の良否を撰拔くには嗽水茶碗に雛子を水共にすくひあげて小さき貝杓子にて一づゝすくひ出すなり。

△金魚の容器――金魚の置場所は四方に障害なく、特に日當りと風透しの好き東南に面したる場所を選ぶべし人家稠密にして庭園の狹き場所にては物干の上など最も適當ならん、但し屋根又は塀などありて風透しと日當り共に惡しき場所にても一日五六時間づゝ日の當る處ろにあらばまづよし、但

凡そ中等以上の家庭には皆ピヤノが備へ付けて有る。それに洋弓や横笛の様な各種の樂器も備はつてゐて、晩餐後には内君が唄へば主人は伴奏する子供等は踊るといふ様なわけで、そうして樂しく其日の勞れを慰めるのである。其和氣靄々たる有様は、遠い國から來て滯在してる者などには、とんと此の世の天國を見るやうで、皆羨ましく思ふて居る、取分け音樂の盛んなのは獨逸ですが、英國でも米國でも皆その通りです。

露西亞は歐洲文明國中に於ての有名な蠻風蠻野の國ですけれど、音樂の發達して居る事は又非常なもので、世界第一の洋琴家と呼ばれたパテレ、スキー氏は即ち露國人です。旅順で開城された時、我が軍は澤山のピヤノを占領したといふ事です、それは龍城中將軍の士官等がつれ〴〵に彈奏して居たもので、ピヤノと一緒に在つたモツアルト其他諸大家の作曲の譜本の中には澤山のむづかしい譜日本で然るべき音樂家でも彈けない位むづかしい物が澤山有つたといふ事です。士官と言へば音樂には勿論素人ですが彼等は、素人でさへそれを彈くだけの伎倆を持つて居るのです。又伊豫の松山に捕虜が澤山收容された時、彼等はいつも夕食後に唱歌をやらぬ事は無かつた、然るに此捕虜の世話係りで有つた大島(義修)と云ふ文學士の少尉が、音樂に多少の趣味を持つて居た處ろから、誰でも捕虜收容所へ樂器を寄贈してやれば善いと絶えず言つて居ましたが、其内に何處からかオル

し水の下又は雨露のかゝる處は堅く忌むべし、特に注意すべきは日光の反射を避くることなり、反射は魚に害あるものなれば是れ最も注意すべし。

扨又その容器は漆喰塗の泉水、又は箱舟をよしとす、但し瀬戸物は禁物たるべしその大小は一定せずと雖も深さは通例三尺四方の器にて四五寸とし底を平坦にするを好しとす又これに放つべき魚の數は三四尺四方のものならば當歳子にて十尾以下、二歳子ならば六尾、三歳子にて四尾位、容器の大小により大概二の割合と知るべし。容器はなるべく靑苔のつきたるを好しとすれば、新らしきものならば十日以上水を容れ置き後ちその水を取りかへて魚を入るべし、容器を掃除する時苔を落さゞるやうざつと洗ふ位にすべし。

△錦魚の種類――は蘭鑄、獅子頭、和金の三種を主なるものとしてその他出目錦、琉錦等の種あれども、要するに右の三種の變化したるものに外ならず、去乍ら各種とも體



に現はれたる斑、即ち模樣に至つては種々樣々と變化ありて、高尙なるもあり、又下品なるもあるが、蘭鑄は背鰭を有せず、全身黄金色を帶び、姿頗る愛らしきものなり、獅子頭と稱するは頭部に透明なる瘤を冠り其樣恰も獅子頭を冠りたるが如し、其の體は大きく尾は房のやうに垂れて、如何にも華麗なり、亦和金と稱するは普通の魚にて本邦固有の產なるが金魚として美術的の價値なく、隨つて其品位も下等なれど、その販路は極めて廣し、さて如何なる種類にても金魚は總じて上方の斑白となりて背より下方に模樣のあるを貴ぶの例なるが、今尤も高尙なりといふ模樣の一例を擧げて見れば口と目が紅にて鼻髭と兩の頰が髭のやうに赤くなり、尾と六枚の鰭と皆赤く其他の所が金色（尤もこれは蘭鑄についていふ若し和金ならば、白色なり）ならば金魚の模樣として本式のものなり、勿論此の如き注文通りの斑のいづるといふはまづ稀有なれどもまづ以上の模樣を標準としていろ〳〵と

ガンを寄贈したものがあるから、捕虜は大喜びて、各自の聲の高低に從つて二部若しくは三部に分かれて、オルガンの伴奏で合唱し、毎晩こんな事を仕て、故鄕の妻子の戀しさや、天涯の異域に虜の身となつてゐる徒然などを慰めて居たのです。

翻つて日本の家庭の有樣を見ると、音樂といふ程の物は、殆んど無いと云つて善い位、食後に家内中で管絃の合奏を爲る事などは滅多に聞かれないのみか、夏は夕まぐれの涼風に、秋は更け行く月光のうるはしさに小琴取出して一曲を彈ずるなどは僅かに上流社會の奧樣姫樣に限られて居てそれ以外にはトントない圖であるそれで日本の樂器を西洋の物に比べて見ると、甚だしく劣つてるのが多いからいさゝか恥しい樣な譯です。家庭に音樂があれば充分歡樂の資と成るばかりか、其他にも數へ切れぬ利益が澤山有る、且つは今後外國人が益々這入つて來て、親しく交際する樣になれば、一層洋樂を盛んにする必要があります。近年著しく音樂が流行して來たのもまづそんな關係からでせう。

日本固有の音樂に就ては暫らく言はず、東京に音樂學校が出來て以來、洋弓の幸田姉妹を初め洋琴、風琴の誰彼を數へたら隨分名手もある又それに就て器樂も相當の發育を遂げてゐる樣ですが、聲樂の方は未だ發達はしません、藤井女史、吉川女史、杉浦女史など聲樂の名手は有るけれども聲

美しき斑のいづるに從がひ等級を定むる故、千差萬別、同一の模様の出づるは稀有なりと知るべし、之に反して頭部が赤く其他の部分が白斑ならば下品として鑑賞家の撰には入らずといふ、又全身に模様なく總體白色なる魚は俗に之を白子と稱して鑑賞されざるなり。

△水替法――錦魚を養ふには水替の手數と面倒を見ざるべからず、水はすべて井水よりも川水をよしとす、若し井水ならば半日以上汲み置きのものに限る、又容器の水替は晴天の日朝八時迄に終るべく、雨天若しくは曇天の日は行ふべからず、又水替は四期によりてその度數に繁閑ある事大凡左の如し。

四月	十日間一回
五六月	一週一回
七八月	一週二回
九、十、十一月	十日間一回

十二月より翌年三月までは水替の必要なし但し冬季の候若し容器に水減じたる時は晴天の日に注水すべく三月に至れば下旬より冬圍ひを取除けたる時に一回行ふべし。

樂の方に比べると甚だ見劣りがする、一體聲樂はまづ樂者其人の身體の發育上に大關係があつてそれには飲食物の關係も有らう、併し、一體に日本人の身體は發育が惡いから、歐米人のそれと比較したならば聲帶からが劣つて居るものらしい、殊に日本の婦人は小柄で纎弱で、力の籠つてる聲などは容易に出そうにも無いので、音樂として一番に人の感情を引付ける物即ちインスピレーションを起させるに善い所の獨唱は甚だ希望し難いやうである。

歐米諸國では七八歲の頃からしてはや獨唱を稽古させる、初めの内は多く家庭内で母から敎へられるのであるからちやんと子供の中から出來るやうになつてゐる然るに日本では中年から習ふので、器樂の方では指が固まつてしまつて、敏捷に思ふやうに、働かない。それでも稽古するに隨つて熟練すれど、聲樂の方になると年を取つて聲帶が固まる、一度固まつた物は、容易には直らないこれが第一の缺點である。故に眞の音樂者を作らうとするには三つ子の時から敎へ込まねばなりませぬ、一寸した例令が彼の箸などである元來日本人は子供の時から箸を持ち、筆を持ち、針を持つ習慣に致れてゐるから指先の事は自然と器用に出來てゐるので、器樂の方は多少埋合はせつく勘定である故に聲樂は倘更幼時から仕込まねばならぬ。歐米では十歲位の少年の作曲した物も有りますこれは全く家庭から敎はつ

但し飼養家によりては六月梅雨中は換水せざる向もありそれ錦魚は雨露を忌ふものなればなりされど夏日は水の腐敗を來し易き時なれば以上の例によりて行ふ〻よしとす。

△餌物——錦魚の餌物は年中毎日休みなく與ふるものなるが、四月より十一月までは成べく早朝より午前十一時頃までに食ひ盡すやうにし、若し殘りたる時は取捨つるなり又十二月より春の彼岸までは正午十二時頃の温暖なる時を見計らひて餌を與ふ。扨て其の餌物は「みじんこ」、孑孑、糸みゝずを普通とす、最も是等のものを與ふるは中々手數を要するのみならず、寒中にて容易に得難き時は、粉碎せる魚肉、削りたる鰹節、索麵、麩粉の湯出たるを與ふるもよし、但し此の場合には三四日間に水を代ふべし。餌の分量は當歳なれば其頭の大さ程、二歳以上は其頭の中分位を一日の量とすべし。

△産卵——錦魚の産卵期は前にもいへる如

て行く故です、今日の壯士俳優に自然俳優的天性の乏しいのも矢張り中年仕込であるからです。

或獨逸人の言に、日本人の聲樂は到底見込の無い物で有ると云つた、併し私は決して左様とは思ひません、成程歐米人は最高音ニオクタープ以上のC音まで出し得るのに、日本人ではZ音(高音の)位しか出せないのですから、其距離の大なるを想へば實に情無くも成りますが、勉強の仕様に依つては、必ずしも失望すべき事で無い、のみならず。仕込様によつては歐米人を驚かす様に成るかも知れません、

這回の日露戰爭には音樂が大分効用をして居ます(獨り旅順の籠城者を慰藉したのに止まらず、或は滯陣無聊の時、或は奪進突擊の時、或は酒宴歡樂の時、愉快なる舞踏曲や進行曲などを演奏して、軍隊を慰藉し勇氣を起こさせた事は澤山にあります。其軍人等が連戰連勝で目出度凱旋して來たから、國民は之を歡迎する爲め、亦盛んに音樂を用ゐました。由來室外で多勢に聞かせる程の樂器は日本に無いのです、室內でも千人以上の集會には充分聞かれないので有るから、西洋音樂の發育は國家の膨脹發展に伴ふは當然の事ではあるが、其進步の迅速は驚く可きものです。尙ほ此上とも夫婦間に起つた朝の感情の小衝突も、晩餐後の音樂に依つて、融和すると云ふ様に、早く一般に音樂趣味を普及させたいものです。

く通例四月下旬より五月までの間なるが、產卵の二三日前より魚は容器の緣を追懸け廻るの常なれば此の時松藻を入れて追ろべし、產卵の時間は朝日の昇る頃より午後二時頃の間なればその後は親魚を他の容器に移し、二三日間餌を與ふべからず、扨又その卵は晴天ならば一週間位にして孵化すべく、更らに五六を過ぎて後藻を取り除け湯出たる卵の黃身を水にて解かし、三四日間毎に毎日之を與ふべし、その後は「みじんこ」を與へ、發生後四十日間を過れば孑孑「いとみゝづ」を與へてよし。

△錦魚の直段――その模樣と發育の程度によりて直段に高下の定まるものなるが、まづ蘭鑄にて彩色模樣とも申分なきもの二歳子一尾三十五錢、三歳子にて五十錢位なり、獅子頭は少し下りて十尾三圓より三圓五六十錢の相場なり、されど緣日夜見世にて小兒の翫具として賣るものはいづれも屑物にて百尾二三十錢より四五十錢內外のものなればその中に逸品はあるべき筈なし、和金又は

序に音樂界否音樂學校の近況を一寸述べませう日本に西洋音樂を敎へ始めたのは明治十二年の秋文部省に音樂取調所と云ふものを置き、當時米國人メーソン氏を招いて、今日の小學唱歌の「春の彌生」を飜譯させた時です、今日音樂界名家島居、上、奧、伊澤の諸氏は其時敎へられた人々です、次いで小學唱歌集が此人々の手に依つて、大層な苦心を以て編纂されました。これが明治二十年十月に東京音樂學校と改稱せられたので、幸田延子や故人遠山きれ子などは十八年即ち未だ取調係時代の第一回の卒業生です。第二回には小山作之進、納所辨次郎の諸氏が出で、第三回には鈴木、第四回には山田源一郎、第六回には橘糸重、第七回には島崎藤村、頼母木の諸氏が出た。私の卒業に丁度十年前でしたが、當時でさへ學生の數は本科撰科共で約七十名、それも賣口が甚だ惡かつたが、今日では驚くばかりの進歩で生徒數が四百四五十名に成り、本年四月の甲種師範科約三十名の募集に對して貳百四十六名の募應者が有ると云ふ勢です又私のやつて居る東京音樂院でも昨年十月始めたばかりですが既に生徒が九十名近く居て、而も益々增加するから目下新校舍の築造中です。又器樂の賣行も中々活潑で、名古屋の鈴木では注文が多過ぎるから洋弓などは製造るのが間に合はぬ位だ相です。之に依つて見ても、如何に快速なる勢力を以つて、戰捷後の我が國民が、西洋音樂の趣味を解して來たか、要求して居るかゞ略想像されます。其他全國各縣下の町、村で軍人の凱旋以來、音樂隊を新設したものが數へ切れぬ程澤山あります。

巳渡澤山

▲運命

國木田獨歩氏の詩的趣味は曩に「武藏野」に於て其の淸新脫俗の筆致を見たり今回又この「運命」を見る、吾人は氏が詩想のいよ〳〵出でゝいよ〳〵新たなるを喜ぶ。定價三十五錢　近時畫報社出版

現金と稱するもの、中には三歳子百尾にて四圓より十圓、四歳子ならば二十圓より三十圓位に及ぶものあれど是等はいづれも胴の瘠せたるものにて觀賞の價なし、されば美術として賞翫せんとならば矢張り蘭鑄、獅子頭の中なるべし。

廢物利用法

廢物利用は家政學の一にして天地間の妙用、造物者の意に適ふが故に、巧に是を利用する人は必富を致す、主婦たる人心がけずんばあるべからず、人數なる家はおのずから廢物も尠けれど、大勢ぐらしの大家には隨て夥しく有物也、先づ廣き庭園を有する屋敷にては樹木を疎にする勿れ、松葉は悉く拾集めて俵詰としおけば敷

女子と美術

女子高等師範教授　下田次郎

女子は美術（繪畫、彫刻、建築、音樂、文學等）に對して、何程の力量を有するかと云ふ事に就いて、説明して見ようと思ふ。先づ

▲繪畫

に於ては、一體に男子の方が勝れて居る、女の畫家も少くないが、女で大成功をしたものは古今ともに少い、女子は境遇と教育の關係から材料が乏しく、想像も寧ろ再生的であるから、その製作に於ても見るべきものが少い、繪は無論想像を要するものであるから、巧妙偉大なる繪は大想像が無くては畫けぬ、神、天使、惡魔、地獄、極樂等の宗教畫、その他比喩畫即ち宏大なる思想を、人體を假りて現はした大意匠、大配合の繪は、何時でも男の手から出る、人事の大なる發展錯綜を現はす所の歷史畫に於ても、女子には見るべきものがない、マドンナ（基督の母）が基督を抱いて居る所は、女子の心情に嵌つて、女子の畫題としては適當のものであるが、之とても女子には大作がない、女子の好んで描くは、花鳥山水等の靜止せるもの、進んでは動物畫、肖像畫位のものである、人物を描くのでも肖像畫

松葉とて茶人の庭に有用物なり茶室あらば即用に立べく、主人茶を爲す不用ならば其向へ賣り相當の價を得べし空しく芥溜へ捨べき物に非ず。

△竹籔は不動産の一なる事勿論也籔ならずとも庭中に少しのむら竹あれば年毎に繁殖する物なれば、無用の處へ出たる、又は延過て明りの障となる等は裁採て垣の破損を繕ふべく、手拭竿小道具の柄、栞箸其他竹の日用品に使用せらるゝ事枚擧に遑あらざる也、眞に竹は重寶なる物なり、其葉又生魚の敷物に鮨又刺身の皆に菓子にも用ひらるゝ事あり。

△梅は花を賞するのみならず、實の有効なるは誰も知れど、葉の有

即ち實物を寫す方が得意で、想像から一種の人間を作り出して、之を描くが如きは不得手である、佛蘭西のルブランは女子の畫家としては有名なもので、その肖像畫は如何にも愛らしい、やさしい、女らしいものであるが、其の思想結構に於て雄大を認めるとが出來ぬ、同じく佛の女流畫家ロザ、ボヌールは動物畫で有名で、其の作は如何にも天然に迫つて居て、動物畫家としては傑出して居るけれども、要するに動物を寫した丈で、最も高尚なる畫題に向つて、伎倆を振ふたものではない、其他伊太利にも多くの女流畫家は出でたが、要するに第二流以下である、日本でも女の畫家はあるが、矢張第二流以下で、多くは花鳥山水を模すに止り、それも自分の想像といふよりは、一定の型を結合して機械的に描くに過ぎぬ、女子の性質は獨創的でなくて模倣的であるが、此の特質は繪畫の上にも著しく現はれて居る、其の證據には女生徒は一線一點も間違へぬ樣に御手本通りを描くことは旨い、併し自分の想像から新しい物を描出すことは拙である、ソレニ日本では繪を學ぶ標本に乏しく、名畫を見る機會がない、西洋では大きな都會には大概美術館があつて、繪畫、彫刻の傑作が陳列してあるから、知らず識らずの間に思想も高くなり眼も肥えて來るが、日本は美術國と稱しながら、之れを奬勵する所以を知らぬ、元來日本の家屋は小さいから大きな物を畫いても、掛ける所がない、隨つて小さい物ばかり出來る、故に繪

益なるを知れる人尠し、數樹あるならば俵詰として紅屋へ賣べし、紅染には梅葉必要なるが故に梅に有名なる大和國なる月ヶ瀬村は、京都の紅屋を以花主とし、年々梅葉を積荷として送る也、二三樹にて賣る程もなきも米唐戸へ交へおけば虫を防ぐべし。

△椿は花の跡になる實より油を採て金物を琢磨に妙也。

△山茶花も椿に同じく油に能あり此油にてテンフラを製すれば味ひかろくして頗る上品となり常の物と同日の論に非ず好事家を驚かすに足る。

△柿は實の甘き物は只美味なるのみ、何の用も爲さゞれども、澁柿は多くあれば呉服物の糊に有用の

を進歩せしめやうとならば、此等の點も亦た改良せねばならない、但し繪畫の中で、陶器畫は女子に最も適當なものであらう、女子は綿密で、細かい事が出來、手本に依つて描く分なら、別に筆法意匠も要るのではなく、器械的に描きさへすれば、宜いのであるから、女子の職業としては最も適當なものであらう。

▲彫　刻

彫刻界に於ける女史は、繪畫に於ける女史よりも尚ほ微々たるもので、昔から殆ど女子で彫刻に名を爲した者はない、古來名ある大作は悉く男子の手に成つたものである、彫刻に於ても女子の意匠は男子の如く複雜偉大なること能はざるのみか、槌と鑿で大理石等を扱ふことは女子の腕力には寧ろ不適當である、女子にはミケランゼロの「モセス」又は「ダビッド」の如き雄大な像は出來ぬ、ドルワルドセンの愛に關する優婉な作の如き物が寧ろ適する、女子は愛情、柔和、女らしきを具體的に表はすには適當の樣である、併しカノバの「愛と心の神」の如き作は出來ぬ、況んや多くの人間を結合した大作は殆ど女子の夢想する所ではない、併し粘土や臘の細工、陶器を担ることは、女子も能くするし、細かい事は得意である。

▲建　築

建築は材木、石、鐵等を取扱ふ大掛りの仕事であるから、勿論女子の纎

品なれば其筋に賣れば、價を得る事紅染の梅葉におけるが如し、又其外にも功能あり、凡百枚に水一合の割合にて煮かへして罎詰とし蓄へ置、沓又は下駄の白掛鼻緒其他何にても革製の物に塗附おけば水に濡ても硬强らぬ事妙也、又鹽のからき干魚の鹽出しに柿の葉を多く採て水に浸し、其水に漬おけばよく鹽を去る。

△鴨脚木の實は銀杏なれば蓄て料理物に爲べく、實の外皮は洗濯用として紅紫等の色物を洗ふによし又小兒ある家ならばシャボン玉として弄ぶべし皮を捨て水に浸也其葉は拾集めて陰干とし克枯たるを書籍に挾めば蠹魚を防ぐ。

△櫻は花の散ざる先に少し許とり

手には不適當である、隨つて女子で建築家と成つたものは殆どない、尤もレブリング夫人は其の良人の病氣の爲にニューヨルクのブルークリン橋の架工に從事した、併し其は唯だ工事を監督した丈で、其の設計は良人がしたのである、建築はまた數學及び重學の正確なる智識を要するもので、女子の思想には寧ろ適せぬものである。

▲音樂

先づ作曲者としての女子を見るに、昔から女子には大作がない、小い歌曲や短い曲には好いものがある、弦樂に於ては獨のマイエルの如き、又たピアノの曲に於ては獨のペンゼルの如き、シューマンの如き近くは佛のビアルドの如きがある、併し女子の想像は大規模に於て、音材を料理するに不適當である、要するに女子は作曲に於ても矢張模倣的で、獨創的のものは極めて少い。

奏樂は曲譜を音に現すものであるから、或る度までは女にも上手がある、併し其の上手は手の指が間違なく達者に動くといふ、寧ろ器械的の上達である、器械的の上手には、曲の意味が分らぬでもなれる、曲の意味を眞に了解して、その感情を音に寫し出すことは矢張男子が旨い、女子には達者となるものは多いが、上手の者は少い、音樂の眞の發達は男子が出ねば出來ぬ、日本に於ける西洋音樂は、まだ夫人が重要なる位置を占めてゐる、

て鹽漬とし置、湯に浮て客に出す櫻湯とす、賣店に曲物に入たるを買に及ばず、實の克熟したるは甘き物也、菓子器に盛べし、葉は櫻餅に用ふれば菓子屋へ賣べし、此外柏椿の葉も菓子屋に用る物なれば無益に捨べからず、但し是等は皆毛虫の發生し易き物なれば初發未だ巣の中に在て外へ這出ざる中に注意して速に殲除くべき也、何にても虫喰葉と成ては用に立ざる也。

△ばらは花を賞翫したる後其花瓣を採て香水を製すべし（香水の製法は別に記すべし）

△牽牛花の葉は虫に螫れたるに採て捺付れば功あり。

△秋海棠は洋墨の付たるに其莖を採挫て捺れば落る。

尚音樂の幼稚なる證據である。エリス曰く、音樂は美術中の最も感情的のものであると同時に、又最も嚴格に抽象的のものである、音樂ほど婦人の好む美術はないが、又音樂ほど女子の能く物にせぬ美術はないと、扨て又た唱歌は何うかといふに、唱歌に於ては女子も男子に讓らぬ上手がある、ギリシヤの神話にはシレンの如き唱歌の巧い海女が居る、スペインのパッチ、濠洲のメルバの如きは、今日唱歌界に名高き女子である、女の聲は男よりも高い、女に男の聲が出ぬように、男に女の聲は出ぬから、各々唱歌に特色がある譯である、併し節廻しは男の方が上手ではあるまいか、尤も唱歌に於ては、女子は男子よりも早く上達する、ルグーベ曰く、經驗に依るに唱歌は女子では大概二十歲以前に其の能の絕頂に達する、即ち四年も習へば上手になれるが、男子では八年を要すると、

▲文學

文學は他の美術と同じ様に想像と材料を要する故に、模倣的の女子には、歷史的、宗敎的、哲學的の材料を使ふて、之を大きく消化する大文字は、女子には不向である、戯曲に於ては、英のシエクスピーア、伊のダンテ、獨のゲーテ、シルレル、墺のグリドルチエル、又た近松の如きは女子にはない、又其を舞臺に上すやうに段落を作つて、形成することも男子の方が旨い、詩は文字の制限や、押韻の面倒があつて、作曲の如く或る方則に束

△菊は花を賞するのみならず、其葉は天プラ揚として酒の下物とすべし、又黄菊の花小なる物は刺身のタンに用るのみならず、搯て蕋の青みある處を去り、瓣ばかりを沸湯を沃て水に浸し捩て三倍酢などにて浸物とす、柚酢に砂糖を加へてかけたるは尤美味也、又花を多く搯て瓶中に鹽を振て押入竹皮を蓋として、上より少しく重押を掛て蓄へ置ば、翌年に至るも入用の時ザッと煮て鹽を出し去れば香氣失ずして時ならぬ珍物となる。

△桐は成長の速なる物なるが故に近江國あたりの不動産持は桐畑を作りて多く培養す、女兒を生ずれば其女兒の爲に幾本の桐を植て十

縛さるゝものであるから、作詩は女子の好まぬ所である、その形式も散漫で寧ろ散文になるの傾がある、女子は感情的であるから、その作る所は主に抒情詩である、古くはギリシヤのサッフオーの如き、近くは英のブラウニングの如き女詩人もあるが、要するにミルトンと比肩することは出來ぬ、事實を有の儘に書く叙事詩又は沒我の劇は男子の領分である、女子は餘り主觀的であるから、自分を離れて色々の心中を作り出すには不適當である、併し小說に於ては割合に多く女子が成功してゐる、英のジオルジ、エリオット佛のジョルジ、サンの如きは小說家としては上乘で、男子におさ／＼劣らぬ、女子は大局を達觀することは拙であるが、細かい觀察は巧みで、人の身振り、言葉遣ひ、笑ひ方、擧動等は日常その注意を劣らぬ所であるから、其を殆ど有の儘に書いても出來る。小說に於ては男子は女子に及ばぬ所がある、手紙も女子の方が達意で、報告も詳しい、又た女子は天然の會話家で、敎育のない者でも世の出來事を述べる事は男子よりも旨い、女子の會話を直して少しく著色すれば、自ら是れ一の小說である、紫式部の如き樋口一葉の如き皆當時の會話の有樣を巧妙なる文字を以て殆ど直寫したものである、是は女子特有の觀察に待つもので、男子には到底同じものは書けぬ、又た演劇に於ては女子は男子と同等の伎倆を有するのみならず、寧ろ男子以上とも云はれる、ルーセルは佛國の演劇を見て、上手な役者は

六七歳に及び嫁入期に其簞笥長持等を作る用材と爲に足ると云、僅に一二本にても軒に植て夏は西日を除け其葉大なれば雪隱に入て反汚を防ぎかつ防臭藥ともなるものなり。

△此他猶多しと雖枚擧に遑あらねば止、總て庭園には樹木草花も唯見て目を樂しましむるのみならず有益の物を狠りに捨るは可惜實を土に埋むが如し何にもならざる雜木とても栽すかしたる枝及自然に枯たるも共に焚付に用ふれば薪の幾分を補ふべく枯葉も釜居風呂を焚べし。

△又廣濶なる園土土堤などには種々の草生る中には有益の藥草あり恐べき毒草なしと爲べからず常

女優に多いと言ふた、今日佛國では女優サラ、ベルナールに匹敵する男優はない、英國に於ても此の二百年間には女にすぐれた俳優が多い、女子は心の活動が早くて、一層感情的であるから、己の扮する人物に早く適應し、容易に其者と成て了ふ、その扮したる人物の感情が、直ちに自分の感情と成つて、之を言語擧動に表はすには、女子の方が一層都合が好い、それから演劇と關係のある舞蹈に於ても、女子は優れてゐる、又男子よりも好きである、西洋でも舞臺の踊りは殆ど女子に限られてゐる。

要するに一般より云へば、美術的技倆は女子よりも男子の方が優れてゐるが、併し女子だからとて、其の得意の方面に練習を積めば、必ず成功するに相違ない、殊に近頃は追々と女子の美術を學ぶ者が多くなり、又音樂會にはいつも女子の來會者が溢るゝばかりある樣に成つたのは、誠に喜ぶべき現象であるから、此の機運をして益々增進さして行きたいと思ふ。

婦人と體操の活用

女子高等師範學校教授　井口あぐり

婦人に體操の必要なることは、今更申までもないことです、私は此爲めに種

に注意して植物博士に質問して心得おくべき也無邪氣の小兒樒の葉を舐て毒に中られ一命をおとせる事有り。

△酸模と云草あり形小松菜に似て莖赤く葉柔なり土堤などに多く生ず俗にスカンポと云、尾濃邊にてはスイハと云北海道にてはダイスと云いづれ酢味を帶る故なるべし市ケ谷見附内の土堤にて摘取たる事あり煠て浸物とするによし餘り人の知らぬ事也。

△扨此廢物たる木の葉等より得たる金錢は積で貯る事なく雇人出入の者等に惠み與ふるをよしとす、如何となれば廣大なる庭園ある程の大家にて木の葉迄も金と爲といへば、やゝもすればケチと譏るべ

種奬勵も致しましたが、學校にある中は出來ますし、また進んで致しますが、學校を出でゝ後は殆ど皆無と申てよい程に實行されません、それで近來は一切御話をしませぬのみならず、寧ろ「お止めなさい」と云ふて居る位です。斯樣な次第ですから、御話をする氣にもなりません。

一體人間の運動といふとは、三度の食事と同樣にせねばならぬもので、更に男女の區別はありません、殊に女子は兎角屋内のみ居り勝ですから一層必要でありますのに、殆ど閑却されて居ります。日々の立働きなどを以て充分として居る人もありますが、これは不規則であるし、また順序がありませんから、左程の結果はありません、是非毎日一回は必ず、規律あり順序ある體操をしなければならんと思ひます、折角のお需めですから、其方法等を少しく申ませう。

扨其體操は最初どの位の處から爲さばよいかと云ふに、大要左の如くです。

頸、胸、手、腹、脊、腰、足の各部を順次に規則正しく運動することです――足から始めるのは一番生理的ですが――さて其時間は最初廿分或は三十分間で、漸次多くすべく、時は早朝最もよく、或は夜間就寢前など空氣が比較的清淨な時です。まあ寢室の中で寢衣の儘でするのが一番爲し易いと思ひます。併し日本家屋の構成が此種の運動に適して居ませんから、

ければ也、唯かく木葉迄も苟も疎にせず廢物利用の天理に適へるを家人に悟らしめ、是等より生ずる金を分與へて不時の役得あれば雇人も心悅て自然と物を粗末にせざる樣になれば暗々裡に經濟の足りとなる事多きもの也。

△世間廣く交際多き家には鰹魚節玉子の箱砂糖菓子の折等多く溜ると屑屋に賣とも、所謂二足三文なれば大なるは蓋と底のみを除置てぐるりは皆打割て薪の補ひと爲方得策也、蓋底の板は折ふし物の蓋又は臺其他机普請に克用に立事多ければ也。

△紙製の箱は焚付に代用すべし、ハガキの反古も焚付に都合よき物也、總て洋紙は質よわく破易けれ

誠に困ります。日本婦人の之を爲し能はざる原因は忍耐心がないのにもありますが、一は家屋の構造がよくないからであらうと思ひます。それで若し此運動が出來ないならば深呼吸丈でもよいから是非するがよいと思ふのです。前に申た數種の運動は別に器械を要するでなし、さまで多くの時間をとりません夫れに場處も疊一枚あれば充分のですから、よし家屋の構造が不完全でも、心掛さへあれば實行し得るでせう、私の外國に居つた時分止宿して居る家の主婦は兎角運動が足りないで困ると云ふので、體操の教師の處へ尋ねました、すると其體操家は、詳細に取調べ、一のカードを作りて送つて來ましたが、主婦は此カードに依て、日々怠らず勉强したのです、すると其結果として健康上に大なる益を得たのを見ました。思ふに我國の婦人にして若し之を勉めるならば、健康の度を增すは無論のこと、精神も快活になりませう、その結果として一家の整理平和等の問題の上にも多大の幸福を來すであらうと思はれます。

今や學年の終に際し、多くの卒業生が出ますが、どうか學校に居つて爲て居つた體操のことを忘れず、家にあるも主婦となるも、之を實行せんことを切にお勸め申す次第であります……、參考書も種々ありますが、既刊の書籍ではまあ「三島博士の室內體操法」がよからうと思ひます。

ば日本紙の如く用に立たねども燃料にはよきものなり。

養生の秘訣

米國の偉人リンコーンが或時其舊友の健康宜しからざるものに與へた勸言に「心を惱ます勿れ、胃の消化を良くせよ、而して爲事に沈着きて氣を安らかにせよ」と云ふのである、この勸言、リンコーンの處方とて常に米人の間に語り傳へらるゝものである、蓋し長命の秘訣を最も簡短に且つ適切に述べたものであらう。

身體の弱き人を鑑み見よ、大抵の場合に其の人は必らず苦勞性の人で、且つ胃病に罹つてゐる。胃の消化力が弱くなるのは種々の原因もあるであらうが、何よりも心の惱みが一番主なる原因で、そして又不消化が原因となつて此の惱みが益す加はり、兩方相待つて、愈よ健康を損するのである。種々

裁縫と女德

若溪女史

裁縫は技術にあらず婦人の道德なりと、この言甚だ奇なるが如しと雖も深く味へば大に理あり。何ぞや、女子が裁縫を學ぶに就てはあらゆる諸德を此所に注がざれば以て上達し能はざるが故なり、抑も裁縫の業たる啻に反物を裁ち縫ふだけの藝にはあらず、婦人がその濃やかなる情愛をこめ、親切なる心掛を寄せて良人の身態、裝飾等に思ひを注がんとき、自分にその心得なき時は如何ともなしがたく、譬へ家にお針を雇ひ、又は仕立屋に吩咐けてさする程の身分となりても、若し自分にその心得なければ見積も出來ねば註文も出來ざるべし、去ば總ての女は必ず裁縫を修業すべし。

裁縫は變化なき同一の業を緻密に且つ辛棒つよくなしつゞくる手藝なれば、之によつて鍛錬されたる婦人はすべての事に忍耐強くなるものなれば、單に藝と思ふべからず。

元來婦人は一生目立たぬ器械的の仕事を綿密に遂行すべき役目を帶ぶるものなれば妙齡に達するの前には這般の修業鍛錬を經るを要す、裁縫は實に女德の一つなり、これを藝として輕んずる大なる誤解なり、藝なくば一つ位學ばずとてもよけれど、女德に缺けては女の道に背くものなり、裁縫

のことを氣にかけて絶え間なくあたふたと焦り急ぐことは最も健康に害あるもので、我々は食事の時にまでも火事場にでも居るやうに急いで居る人を往々見受けるが、これ等の人は己れの身を大切に思はぬ人といつても宜しい。俗に早飯と何とやらは藝のうちといつて食事を早く濟ますことはよい事のやうに思はれて居るが、飛んでもない間違で、食事は成るべく悠然として、他の事は一切忘れて樂しくするに限るのである。

これもピーチャーといふ米國の偉人の言つたことに、人の性質の善惡は多くの場合に健康の如何によるもので、一般に胃の消化のよき人は善き性質を有し、其の惡き人は意地惡きものであるといふのがあるが、いかにも道理なる言葉である。朝日のやうに快活な氣輕で心の善い人は必ず胃の丈夫な人で、陰氣で意地の惡い、そして絶えず小言を言つて居る人は大抵胃病に罹つてゐる人であることは何人も經驗して知つてゐるであらう。



を學ばざる女は女の道に背くものといふべし。

且又裁縫を投げ遣りにする位の女は、必らず、家事を取らせても亂雜なり、事に當ツて不綿密なり。身の持ち樣も自然不しだらなるを常とす。彼の明治二十年以前の女學生、その性質甚だ亂暴にして變生男子の如くなりしは其の教育の方針、讀書に重きを置きて裁縫をゆるがせにしたるが故なり。女をして女らしくならしむるは全く裁縫

人生の幸福、成功又は働きは大に人の健康に因るもので、其健康は又主として其人の食ふ所の物、食ひ方又は食ふ分量に因るものであるが、然し如何なる食物を如何程食ふべきやといふ點については、個人毎に相違があつて、一定の規則を以て束縛することが出來ぬ。西洋の古い諺に「一人の人にとりてよき食物も他の人にとりては毒となる」といふのがあるが、全く其通りで各個人それ〴〵自ら定むるところがあらねばならぬ即ち年齡、職業、體質、氣候等を考へ、自分に最もよく適する食物の何であるかを講究し、然る後食事を定めねばならぬ。他の人がいかによいといふ食物も或は自分には適さないかも知れぬ。近頃は種々の滋養食品が發明されて盛に新聞紙等で推薦されるが、うかと其誇大なる功能書を信じて自分の大切な身體を試驗用に供するやうな愚な事をせぬやうに注意せねばならぬ。それから食事の際には充分に嚙み碎くことが必要で、食過ぎたり又は間食

てふ女德の力なり。されば世の母親たらんもの我が子女をして耐忍の德を養ひ、溫柔の德を養はんと欲せば必ずその子女をして裁縫を學ばしむるにありと知るべし。この如く裁縫は女德の一要素なるがこゝに又この德が家政上に及ぼす影響の大なる事、即ち裁縫術の精神の家政上に及ぼす利益の大なる事に就て一言せん。抑も婦人が一家の主婦として家政の衝に當り萬事を處理する上に於て必要なる精神上の要素は一に忍耐なり、綿密なり、節約なり、淸潔なり、而して是等諸德の修養は專ら修身學上の問題なれどもこれ等の諸德を涵養するには裁縫術に依るを最も捷徑となす、何となれば裁縫の術には、忍耐、綿密、節約、淸潔の諸德を要するものにして、若しもこの一だも缺く時は到底完全なる衣服の調製は出來ざるなり。

裁縫の手ほどき

女子職業學校教師　藤村はる子

深い所までは兎も角一通りは女として知らねばならぬのは裁縫の業です。先づ立板とか剪とか平とか指輪とか一尺二尺の物指など道具一通りの使ひ方を知らねばなりませんが、先づ手解きとしては、運針といつて三尺

たしたりすることのよくない事はいふ迄もない。

或醫師は言つた「人間の病氣の多數は直接に胃から來るもので、又間接に胃から來る病氣は一層多い。卒中、心臟破裂其他の急なる死亡は多くの場合に於て直接に胃に原因するもので、これ等は胃が餘りに多く仕事を命ぜられ、其の結果働きが弱くなつて居るにも拘はらず、相變らず強て過度の勤めを課せられた結果である。胃病患者は絶えず藥を用ひたり。又は消化し易い食物を求めて居る者であるが、如何に消化し易い食物でも仕事の過ぎて居る胃に適合ふことはない。されば此等の人に取りて一番大切なるは胃に休息を與へることで、余は多くの胃病患者に暫くの間の斷食を勸め、それから其食事を程よく整へて治療した。これに加ふるに新鮮なる空氣と、適宜の運動と、深呼吸と（深呼吸は殊に胃病に効あり）素湯の飲用と、沐浴と、按腹とを以てすれば慢性の胃病患者は大抵全治つ

計の白布に一度定めし位置の動かぬ爲め適宜に待針を打つて置いて、それに向つて他の一方から縫ふて行くのです。又雜巾に簡單な模樣を差すのも善い。是等は單に針の動かし方指先の練習の爲めです。之が濟まば襦袢又は單衣物を縫ひ習ふが、順序です。襦袢は特に拙い出來でも人目に觸れぬものですから、稽古の爲に、之を縫ふのです。

單衣が濟んだらば袷物を習ふのです、次は綿入物、次は袷羽織、綿入羽織、次は女帶、袴、次は男帶といふ順で總て女物より男物はむつかしいものとしてあります、何となれば女の衣服は、少し位は長くとも短くとも、腰の邊に大方たくり上げて置く事が出來ますから、着る時の手加減で程善くも見せられます、けれども男物はそれが出來ぬ故寸分違はぬ樣にせねばなりません。故に男物は多くは自宅で仕立ないで職人に賴むのです。

男帶まで出來たらば次は本比翼とて胴も裏も同一の地で縫ふもの、次は付比翼とて、一枚の物を二枚に見せる物で、即ち襟、袖口、裾廻し等ばかりを二枚に仕立てるです。前記の男帶位までは獨習でも出來ますが比翼からは不可能です。故に實物即ち手本を解いて見なければなりません。次は袷袴です、此れは中々むつかしい實物を見ねば口頭で敎へたばかりで出來ません。偖此邊で裁縫も大方行止まりとなります、然し尚ほ此上に習はんとならば茶幅紗です、されば昔は傳授物として容易に敎へませんでした。

たのである。

災難除心得草

△暴風除の工風——樹木板塀を吹倒し、戸障子外るゝに至らば、一間に立籠るべき處を定め、其他は幾間あるとも、何一つなく取片付て、建具を取除け、疊をも上て、表と表、裏と裏に合せて積重ね、雨戸をも明放て殆空屋の如くし、風の吹拔に任せて、逆らはねば、家屋の損じ尠し、扨立籠る處は、風吹方の雨戸を〆て、其の合せめに、他の上なる疊を立かけて、木箱櫃の類、何にても、貫目あるものにて押へ置くべし、ガラス入の戸障子は、早く取除ざれば、破損

一寸見たところは簡單なものですけれど、裏より三方を縫ひ行きて他の一方を針目の間から返す時がむづかしいものです。

裁縫には文字の通り裁方と縫方とが有ります。如何に縫方が巧妙でも裁方は別で必ずしも上手とは言はれません、仕立屋では裁方は大方男子が受持つて居ます、仕上げの火熨斗も亦然です、女子でも出來ぬ事は無いですが、立流な品や美事な物は必ず男子の手をかけねばなりません。

刺繍の手ほどき

女子職業學校教師　木村なか子

先づ一通り針持つ事を覺えざる可からず、同じく針を持つとは云へど普通裁縫の時の持方とは違ひあり、偖て手本を前に置きて、それを見つゝ教ゆる人の言葉に從ひて縫ひ出すべし、口頭の説明を聞くばかりにては到底分り難きものとす。最初の內は絹糸は細くて滑かなるが故に使ひ悪ければ木綿糸にて稽古をすべし。

第一着手に試むべきは梅か櫻の二三輪なりとす。梅と櫻は相似たる花故若し梅ならば櫻に、櫻ならば梅に、直ちに應用することを得べし。梅や櫻

する事有、或大邸にて、裏通の板塀を、態と控へ柱もなく建おきたれば、人怪みて其故を問ふ、主人笑つて曰、いか程念を入て建るも例年暴風には、必破損を免れず、故に態と、かく控柱を止めて、麁末に倒れ易くなしおくなり、少しの風にても、強く吹けば、忽倒るれ共、倒れ易きが爲に板の損なし風止めば、書生下男一兩人に命じて、おこさしめ、元の如く爲す、敢て職人を雇ふに及ばず、無造作にて、天然と板の腐敗する時に、改造するのみと、是又一理也。

△雷除けの妙法――雷除柱の設けある家ならば、至極安心なれど、普通の家にては、只廣き間に、其中に居るを宜とす、家内の人々一

が出來たらば次は桔梗、次は菊などにして、其次は水仙、椿の類なるべし。總て花瓣の細きもの、葉の平たきものはむづかしきものなり。

斯る物の繡方十通り位も知りたらば、一寸出來る人といはるべし。さは云へ凡そ二三十通りの繡方はある可く、一つの牡丹にても、さしぬひと肉入りのさしぬひと、糸を其儘使ふものと、糸を縒りて使ふものと　四種の仕方有り。

此絓糸には縒りを揃へるが大切にて、始めの内は中々旨く行き難きもの故、其手加減を呑み込むが第一なれど、其手加減は熟練に依るの外に途なし。

刺繡は總て、右手を上に置き、左手を刺繡臺の下へ入れて繡ふなり、初めての人は誰も右手を下へ遣りたがれど、之が一つの法則の如く成り居りて、事實に於ても右手を下に置かずば、針を下より突き出す時の見當が分り惡くして甚だ不便なり。

斯れば手本を見て一人にて習ひ學ばんとするは甚だ困難なる事とす。

刺繡には繪畫と圖案の力を養ふを最も利益なりとす、全く繪畫を知らざる人は善き刺繡を造る能はざる可し、故に各學校にても、一週二三時間を刺繡の爲めの繪畫に費し居れば、師の許を離るゝとも、決して繪畫の稽古を怠る可からず。

處へ寄集らずして、各々別れて居るべし、一塊となり居る處へ、不幸、にも落雷せば何とせん、別れてさへ居れば、萬一撃るゝとも、其中の一人にて、事濟べき也、然るに、とかく恐がりて、一塊にしがみ付などする、愚の至り也、東京の女子は、殊に雷を恐るゝ甚敷が多くて、雷は神也、故に呼捨にすれば、怒て落るとか云て、らい様お降りなど云、抱腹の至なり恐るゝは、神經のみ、又其人の性質にも、依と云へど、多くは幼少よりの習慣なるべし、幼兒は何が怖しき物なるか知る物ならねば、母乳人等が恐れざれば、兒は決して恐れぬを、物の理を辨へざる乳人傳婢などが、兒を懐〆て、ムヤ

尤も畫きし繪が其儘刺繍に利用さるゝにはあらず、其間に多少の斟酌すべきもの有りて、これらは熟練すると共に自ら悟る所有るを得べし。
此刺繍に應用する繪畫には圓山派の物を最も適當なりとす。

造花の手ほどき

東京女子職業學校教師　金子しゑ子

初めには葉や花瓣の色染め方を稽古すべし、材料としては絹地其他種々あれど、普通稽古用として多く使はるゝは寒冷紗にて、之を葉の綠色又は花の薄紅に染め。次に葉の形又は花瓣の形に切り出す事を習ふべし、之には打拔きとて、器械が有りて菊の葉薔薇の葉、梅や櫻の花瓣など、一定の形狀を容易に拔取り得るものあれど、此器械を所有せざるものは、是非とも西洋剪の使ひ方を心得ざるべからず。
先づ菊ならば新聞紙の上に實物の菊の葉を帖り付け、乾きし時に其形の通りに切り拔き、更に染め上げられたる寒冷紗の上にあてがひて切り取るなり。
初めの內は簡易花より順次見本を見つゝ習ひ始むべし、大抵の人に造り

ミに怖恐れ、聲を立て叫びなどするが、故に、兒も供に驚き脅えて、度重れば、習慣となる、少しくゴロ〳〵と鳴出せば、恐るゝ第二の天性を作るゝなり、又雷は恐るゝに足らずとて、態と椽の端に出て、空を白眼などするも、いらざる痩我慢なれど、蚊帳の中に、夜着引被て、汗もしてゝに佛名を唱ふる如きは、笑止の至りなり、雷は眞に恐るべきものにて相違なけれど、恐るゝにも程あるべし、只注意すべきは、雷光の方を視るべからず、もし眼に直射するときは眼を損する事有とぞ。

△野外の雷雨――野道街道等にて迅雷に遇はゞ、雨に濡るとも、大樹の下に立寄るべからず、大樹は

易きは庚申花か梅花なれば、それらの二三輪を手始めとして試むべし。同じ梅を滿開三十輪、半開三十輪も造りたらば、其花はそれで充分覺えたるものとして次の花に移るべし。

梅や庚申花の次には牡丹、薔薇、木蓮等の順序にて習ひ行くべく、松や南天の如きは最もむづかしきものとす。

松、南天までが充分に出來れば、他の諸花は實物を見て遺憾無く造り得るに至るべし、習ひ初めてより此域に達するまでには、大方の人は約二ヶ年を要し、特に器用にして熱心なる人も一ヶ年以上を費さゞるべからず。

初め葉や花瓣を染むる時、後に日光に會ふて色の醒むるが如き事無からしめん爲め、必ず明礬を液中に混入すべし、斯くて後簾子に懸けて乾かすなり。

稽古は多く寒冷紗を用ふれど、進歩するに從つて天鵞絨、羽二重、縮緬等、必要に從つて各種の物を葉、花其他の色合ひに染て使ふに至るべし。

編物の手ほどき

東京女子職業學校教師　豐原繁尾子

編物は優美に造るを第一の目的とすべし、それは實用向として丈夫に造る

やゝもすれば、雷獸の掻のぼることあり、逃込べき家もなき處ならば、爲方なしと觀念して、其儘歩行の外あるべからず。

△先年或家の裏町へ落雷して、仕立物屋の店に居並で、仕事爲つゝ在し職工四五名、驚死せしことありき、其中仰に反倒したる一人は全く死して、俯し倒たるは、皆蘇生したり、是其仰たるは、震動の爲に、腹中の筋の損するが故也と醫の話なりし、俗に雷の臍を採ると云は、全く是を云ふならんか、迅雷の時は、俯めになり居べき事にこそ。

△附て云――四季いつにても、大雨の際、庭上へ大盥、米とぎ桶、何にても出して、雨水を受滿たら

可き必要も有れど、靴下とシャツを除くの外は、身體の内最も目立つ所に着けらるゝもの多ければなり、其の靴下も日本にては靴を脱ぎ置く事少からざるが故に不格好なるは惡し。

偖最初は涎懸、帽子、肩懸等の容易なるものを習ふべし。手ほどきには涎懸、肩懸の如きものよりも、靴下、手袋の如きが價も安ければ反つて容易なるかの樣に思はるれど大違ひにて、前者は太き糸を使へど、後者は細き糸に限られたれば手が細かくなる故に、初めての者にはむづかしきなり。然し手袋の如きは學校にて敎ゆる時は、順序で行けばズッと後廻しになる譯なれば、日常の必要品なれば繰り上げて、何所にても肩懸などの次に敎へ居れり、是等が一通り出來たらば、後は流行品などの内、蟇口の如き其人の希望に從ひて習ふべし。總て上手に造りたる物は、光澤が添はる故に、稍光澤の出づるに及んで始めて一人前となりしと知るべし。

編物に用ふる針は獨逸のヘーゲル製が使ひ善し、太物、細物、中細物、極細物の四種各々十番より二十番までの長短あり、鍵には角製と金製とありて、之も亦一番形より十二番形までの大小あり。

糸も又細、中細、太の三種に多く使はれねど極太も有り。十二三年前までは日本製は粗惡にして到底役に立たざりし故、舶來品のみを使用したれど、近年和製の良品澤山に出來て舶來品減少したり。そは糸の製造元へ、

ば、他にあけて、又受成べく多量に溜おくべし、雨水は物を洗ふに功能あるものなり、大雨の翌日は必らず快晴になるなれば、其水にて洗濯すれば、勞少くして功多し

但雨垂落の水は、屋上の塵交れば不淨なり天より直下するに限る。

雨垂落へは、雪院のきん隱、樋等を脱して、出しおけば、骨折らずして掃除出來るべし。

△洪水除けの工風――海河近き處は、平日は景色佳なれども、出水の難は免れがたし、洪水床上を侵すに及べば、井も厠も一になりて水中に在ながら飲用缺乏を告るなれば、成べく早く、桶類、瓶類にても、有限りの器物へ、井水を汲蓄へ置べき也、故に他所より出水

上線を今少し堅くとか、下線を緩くとか編物の製造者より注文したるの結果にて、品質はスコッチ又は綿スコッチ、強ければ專ら使用して德用なりとす。

針の持方、糸の懸方も大切なれど、一寸むづかしきは糸の卷様なり、西服には糸卷と云ふ物無きが故に、單に卷かれたる束と成し置くなり、又糸卷を用ゐても同じく堅く卷けば糸が延びて長く成るべし、殊に毛糸は甚だしく、一度延びたるものは元の形には成り難し、故に其手加減に注意すべし。

總て編物は人々に依りて種々の癖が現はるゝものなり、故に時々先輩に作品を見て貰ひて惡き癖を直さゞる可からず。

針は東京にて出來たる物を使ふも惡からねど實は獨逸物が使ひ善し。

婦人と數學

點　[illegible]　子

數學科は普通教育の學科目の中で、生徒の常に六ケ敷いとする處であるが、之れ一つは數學其物の性質に因ることではあらうけれども、亦た之

の見舞を贈るにも、清水を多量船にて、積み送るを、心利たる計らひ也と、水場の人の話なり。

洪水にて家に住がたく、逃出る場合には、各自其家の名處を記したる風呂敷を、身體へ確と結び付おくべし。運拙く溺死するも、何處の誰なることを知らるゝが爲也と云、此事水難に限らず、總て立退く場合には、よき事なるべし。

△地震除け――家屋倒崩する程の大地震に至ては、又爲方なし。只身を全ふして、迯るゝ工夫の外あらず、然雖 左程の大地震は、毎度あるものにあらず、變事を詠める古歌に

地震はじめ風は中程水終り
雷 こそは計り知られぬ

を教師が教授するに當つて、其方法宜しきを得ないで、生徒をして倦み厭かさしむるもの、其原因の幾分たるに違ひない。

と、曩の文部大臣男爵理學博士菊池大麓氏が曾て云はれたことがあつたが、誠に至言と謂つべしで、實際其通りである。

一體數學の問題を解くには、考へやう一つで六ケ敷くもなり、また易しくもなるものであるから、常平生心掛けて工夫を凝して置くのが肝要である。工夫を凝すと云つても、白痴が智慧の環を考へるやうに、たゞ無暗に試つて見たつて駄目である、出來るものではない、假令偶然に答の數に合ふことがあつても、それは眞箇に出來たのではない、下手な弓術家が尺二の大的を覘つて、傍にある金的に射當てたと同じことで、それでは何の役にも立たない。

加へるにしても、引くにしても、それ〳〵其理由が無ければならない、譯も分らず掛けたり割つたりして、それで答に合はせて喜ぶやうな心掛けでは、到底上達する見込みは無いのである。

一度遭つた題は忘れてはならない。よく其運算を會得し、如何いふ譯で斯く運算するのであるかと云ふ、題の眞意を了解して、十分頭腦に染み込まして、今後、何時、如何なる場合に、此種の題に出合ふとも、決して間誤つかないやうに心掛けて欲しいのである。

地震は初發が一番強く、續發しても、後程かるくなり行、暴風は吹出してより、次第に烈しく、中頃尤強勢と成、少し和らぎかゝれば、漸々とかるく成、水は終が尤も夥し、雷は變化極りなければ、測量がたしと也、此事俗説なれども、代々の歷史、古老の話などに參照して、多く違はざるが如し。

△强震――始に下よりドンと、突上る如くに來るもの也、如斯き時は、早く廣き庭か、明地へ馳出べし、始よりゆさ〳〵と横にゆるならば、少々强くとも、家の崩るゝ程の事はなければ、逃出すに及ばず、只棚などの下に居たらば、早く中央へ出でざれば、棚の上の物落て損たるゝ事あり。

とは云へ問題は何時も同じ姿ではやつて來ない、種々に衣服を着換へて來るので、生中な會得ではそれを見破ぶることは出來まい、見破ぶることが出來なければ、其問題は又た新らしい難題となつて、更に頭腦を惱ませなければならない。

馬子にも衣裝髮容、人は衣服の善惡で見違えることがあるものであるが數學の問題も衣服でもつて全く見違えることが往々ある、二八あまりの稚子姿、好いたらしい鬼若丸が、辨慶とまで變らないまでか、牛若丸が、源義經位までには變つて出て來る、それを直に見破る底の眼力をもつて、出會つた問題の眞意を見抜くのが肝要なので。

試に一つ問題を出して見やうか。

一本の價金二錢の鉛筆と、一本の價金四錢の鉛筆と、合せて百本を金二圓五十八錢にて買ひ取りたりと云ふ、各幾本づゝ買ひ取りしなるか、また、其價は各幾何づゝなりしか？

答｛二錢の鉛筆七十一本、此價一圓四十二錢
　｛四錢の鉛筆二十九本、此價一圓十六錢

此問題を解くには如何すれば可いかと云ふに、其考へ方は、買ひ取つたと云ふ百本の鉛筆は、二錢のが幾本か、四錢のが幾本か分らないのであるから、先づ若し之が二錢の鉛筆ばかりであつたら如何だらうかと考へる、

△地震と釣洋燈――つりランプは餘程搖れても別條なきものなり、置らんぷは、倒易ければ、必手に持べし、壁際へよる事勿れ、上に物を積上てなき簞笥又は高足テイブル等の傍に居るよろし、萬一鴨居、天井等の崩れ落るも、此物に障支られて、身の撲るゝを免るゝが故也、餘り周章て、外へ飛出し軒近き所にて、屋上の瓦飛散するに偶會て、怪我する事有。

△强盜に對する心得――强盜の外は多く戸締りの不注意、塀墻の破損を繕はざる怠り等より來る物也無人の家は、殊に〆りを嚴に爲べし、犬の出入する處は、必偸人の覘ふ處となるなれば、速に繕はざるべからず。凡盜は其家の人

すると其價は 100×2=200 で、二圓で拂ひが濟むのであるが、實際は二圓五十八錢拂つたので、爰に五十八錢の差 258−200=58 がある、此差は全く百本の中に四錢の鉛筆があるのに、それを皆な二錢のと見たから起つたのであるから、其中幾本かを四錢のに換へれば其差は無くなる譯、從つて

野邊　みな人の春の心のかよひきてなれぬ野邊の花のかげ哉　定家



其幾本かゞ知れゝば、それで答が出るのであるから、之を見付け出さなければならない。

それには如何すれば可いか、先づ一本だけ四錢のに換えやうとする、すると二錢だけ足さなければなるまい、つまり二錢の差が出來る、從つて二

よりも、盜賊の方が十分の恐怖を心に懷つゝあれば、賊入たる上は爲方無と度胸を据て、敢て恐れず大膽に搆ゆれば、大體は物も得とらで逃去べし、驚恐れて、夜着引かふりなどすれば、賊の心強く成て、主客の勢、忽地を換る也、然れども持凶器强盜には、猥りに抗すべからず、一命を失はぬ迄も、怪我しては損の上塗と成べし、いかにもして早く、交番へ訴へ、近邊より騷ぎ立て退去せしむるの外有べからず。

△狼藉者――に偶會して、手をつかまれたる時、振放さんとしても中々放さず、然る時には、其つかみたる敵の手を、成べく延ばさせる樣にして、其腋下を觀定て、不

本換えれば四錢の差が出來る、五十八錢の差があるのは、58÷2=29 だけ換えたからではあるまいか、否！ 百本の中二十九本だけ四錢のがある爲に、此差が起つたことは確かで、此上諄く説明するまでもあるまい。

因つて此問題は次の如く運算すれば可いのである。

100×2=200　258−200=58

58÷(4−2)=29……四錢の蠟燭の數

100−29=71……二錢の蠟燭の數

29×4=116……四錢の蠟燭の價

71×2=142……二錢の蠟燭の價

問題の解法は、分つて了へば誠に易しく、何で今まで苦心したかと、實に馬鹿々々しくなることもあるが、其また苦心の結果解し得たかと思ふと、愉快此上も無い。

此問題は十分に解し得た、さて暫らくして次のやうな問題が顯れ出たとする、其時諸孃は如何なる態度をもつて之に對するであらうか！ 實際に其樣子が見たいものである。

一

鶴龜合せて百頭あり、其足數合せて二百五十八本なりと云ふ、其鶴龜の頭數各 幾何なるか、また、其足數は各 幾本なるか？

意に我頭にて、敵の腋腹を突と同時に、ツト背後へくゞり拔れば、思の外容易く逃らるゝものなり、敵肋を突かれて、眩暈することあるも、正當防衛なれば、咎とならずとぞ、さる柔術先生の敎られき、されど生兵法は、大疵の基の諺あり、萬々止を得ざる急厄の場合の心得のみ、猥に爲べき事に非ず。

△怪我――誰にても大怪我を爲たる時、周章して介抱、其宜を得ざる事あれば、大に事を誤つ物なれば、是亦平日心懸ざるべからず、怪我にもいろ〳〵あれど、とにかく出血を早く止るを以、肝要とす、刃物にて手足と指を、切斷したる如きは、即刻ゆがまざる樣に、接合せて、有合の木綿切にて卷て、

二

一錢に付二個の果物と、一錢に付四個の果物と、合せて二百五十八個を金壹圓にて買ひ取りたりと云ふ、各幾個づゝ買ひ取りしなるか、また、其價は各幾何づゝなりしか？

此二題、諸嬢は何と之を見らるゝか知らないが、之は全く同じ問題なのである。たゞ一番の方には、鶴の足は二本で、龜の足は四本のものであると云ふ、至つて程度の低い、三尺の童子と雖も猶ほ且つ之を知る底の智慧がホンの爪の垢ほど要るばかりで、少しも異つた處は無いのである。

さて、此問題を解くには如何すれば可いか、考えるまでもない、此二題は、曩に詳しく說明した彼の鉛筆の問題と、また少しも異なる處は無いのである！

オヤ、左樣か知ら？　など〻前を見返へすやうなお方は、まだ十分に鉛筆の問題の解法をおのみこみにならなかつたに違ひない。急所を指されたからとて止すには當らない、分つて居ないのなら、何遍も見返えすがよろしい、寧ろ其方が望ましいのである。

斯樣いふやうに問題が衣服を着換えて來るので、ともするとお馴染みの問題が、他の難題のやうに見えるものであるから、能く氣をつけて、衣服なんぞに迷はされず、赤裸にして了つて、其實質に就いて考へれば、譯無

しかと括止べし、先敏捷に出血を防止て、扨速に醫に托し、決して素人療治爲べからず、病にて眩暈、癲癇、卒倒の類、皆俄然に起るなれば、主婦となつては、常に心掛て、さる筋の取扱法を、それぞれの書に依、研究し、又博識の醫に質問して、心得おくべし、されども治療の事は、醫に非ざれば猥に爲勿れ、只醫を呼迎る迄の間の看護法のみ。

装飾の秘訣

室内の装飾は四季の移り變りに由つて様々に變化しなくてはならぬ春夏秋冬いつも〳〵同じ様な装飾では決して神心慰樂の目的を達せらるゝものではない。春は春らし

く解き得らるゝであらう。

此頃博文館から出版された竹貫直人君の著「少年算術遊戯」と云ふ本の中に面白いことが書いてあつた。

▲無算者の失敗談　某貴顯の家に、馬十八頭を飼ひ給へりしが、殿の仰せに、予は斯様に多くの馬は要らぬ、乗料は一頭あらば可い、餘は殘らず汝等に遣さん程に、太郎其方は二分の一を取れ、次郎は三分の一を取れ、三郎は九分の一を取れとのお言葉なり、されど殘りの馬は十七頭にて二分もならず三分もならず、況して九分もなり難きに、如何せば可からんと三人の公達、思ひ煩ひ給ふ折柄、家令三太夫參殿いたし、某分配し參らせんとて、軈て何れよりか一頭の馬を牽き來り、そを加へて十八頭と成し、而して先づ其二分の一なる九頭を太郎公に參らせ、三分の一なる六頭を次郎公に參らせ、九分の一なる二頭を三郎公に參らせ、さて餘りたる一頭は三太夫これを牽き歸りたりとなん。此談を或る無算者聞きとりて、這は面白き扱ひかな、己れも斯る扱ひことあらんにはと、手薬煉引きて待ちける處に、只ある者の家にて、三人の娘に十一反の反物を、二分の一と三分の一と六分の一とに分ち與へんとて、其分ち方に困じ居る由を聞きければ、それよと云ひて、早速に一反の反物を携へて走せ往き、十一反に加へて十二反とし、さて其二分の一なる六反は姉娘取

く秋は秋らしくするのが肝要である。然しそれは夏は暑そうな飾を爲よ冬は寒そうな飾りを爲よと申すのでは無い、外國の狀況に應じて心の趣く所を趁ふのであつて夏は涼しそうに冬は暖かそうにするのである、一寸見ると天地間のもの冬寒そうに夏暑そうに成る樣に思はるゝが、決して左樣ではない、冬枯れ果てた野邊の草原には假でも薄でも何れもその根本はまづ靑に芽ぐんで居る、又夏に成ればどんな木草でも葉末まで一盃に水氣を含むで涼しそうな水分は天地の間に充ち〳〵て居る、それで天地間の森羅萬象何れも時候とは反對の狀勢を以て活動して居る、人間の心が夏に爲つて涼しいこと

るべし、三分の一なる四反は中の娘取るべし、六分の一なる二反は末の娘取るべしと、それ〳〵分ち與へたりければ、終に一反も殘らず、携へ往きし反物をむざ〳〵失ひけるとかや。

何と趣味ある物語ではないか、之を分り易いやうに算式に書いて見ると、

（三太夫の扱ひ）

$17+1=18$

$18\div2=9$

$18\div3=6$

$18\div9=2$

$9+6+2=17$

$18-17=1$

〜〜〜〜〜

（無算者の扱ひ）

$11+1=12$

$12\div2=6$

$12\div6=4$

$12\div6=2$

$6+4+2=12$

$12-12=0$

斯樣なる、成程至極面白い、面白いが併し之は異箇の數學の問題にはならない、噓の算術である、遊戲算術としては差支へないが、敎科書の問題にはならない、第一三太夫が扱つた方の塲合の如き、扱ひ方は成功したかは知らないが、てんで問題と成つて居ない、それから見ると、無算者が扱つた塲合の方は、扱ひ方こそ不成功に終つたが、此方は何程か問題らしくなつて居る、乞ふ少しく其理由を說明して見やうか。

一體斯樣いふ分配の問題は、之が答を求むるには按分比例の法で解するのであるが、其要素として缺くべからざる條件は、問題の中にある何分の一、何分の一、何分の一と云ふ、此幾箇かの分數が、之を合せれば何時でも必らず一と云ふ完全數にならなければならない、然るに三太夫の扱つた

を好み、冬に爲つて暖かいのを好むのも、皆この天則に漏れぬのである、その心に適ふ樣に爲るのが室內裝飾の上では最も大切な注意で屋外では光線の直射で眼の眩みそうな土用の日盛りでも、床の間に水鳥か何かの淡然とした懸物でも掛けて銀製の水盤に河骨に唐葦でも挿み坐敷の境には簾位を垂れて籐椅子の一二脚も併べて居て御覧なさい、その涼しそうな樣子は夏なんぞ無い世界へでも參つた樣である、又北風のヒユー〱と吹き荒んで耳や頰の打切れる樣な寒中でも床の間に書でも畫でも敦厚りとした表裝の幅を掛けて寒牡丹の一輪か二輪を黑下んだ銅瓶に挿むで坐敷中一ぱいに花絨氈を敷き

場合は斯樣なつて居ない、$\frac{1}{2}$と$\frac{1}{3}$と$\frac{1}{9}$と加へたつて1にはなるまい、之が即ち問題に成つて居ない證據である、殿樣の仰せが間違つて居るので、如何しても左樣は分けられないのである。

曲水宴　家房

ゆく水にうつらふ花のさかづきやながれての世の例なるらん



眞面目に數學を勉強しやうとするものは、一見直に之は噓の問題であることを觀破する位の眼力を備へて貰ひたいものである、そして斯樣な問題には初めから手を付けない位の見識を持つて貰ひたいものである。それに

詰め金屏風でも立て麗はしく裝飾をすれば、それは又寒さも何も忘れて仕舞て少しく睡く爲る位である。それは皆裝飾の器物調度の色や形や時候に應じて濃淡を斟酌するからの事である、寒い時に白い色や、暑い時に黑い色のものを配合してはどうしても人の心に叶ふものではない。

それで形なり色なりの配合が時候と大なる關係を持つて居ることは只今申す通りであるが、それ計りで無く、風土とも關係を持ち、場合とも關係を持つ、器物と器物との關係の大切なる事は勿論である、即ち九州の端や琉球邊では器物に就て云へば團扇も裝飾の一つであれば籐椅子も裝飾上の立物とな

は問題を常に能く吟味しなければならない、つまり問題の要素は何々である、之より多くつても少なくつても、問題は成立しないものであると云ふことを知ることが肝要なので、知つて其與へられた要素を、それ〲適當に加減乘除すれば、如何な問題でも立に解き得られると斷言するに憚らない。

殿樣は畢竟餘計なことを仰せられたのである、三人の兄弟に分けてやるには、二人にだけ其方法を命令したなら、最早それで十分なので、殘る一人は、云はなくつても其餘りを貰ふのに定りきつて居る。それだのに殿樣は三人に分つに、三つの方法を與へ、それを一人々々に命じたから惡い、それも、整然と殘りなく當て箝まるやうになるのなら、まだ幾分か恕する處もあるのに、殿樣に數學の智識が無かつた爲に、三人の兄弟は餘計な心配をし、三太夫は思はない手柄をした。勿論三太夫の扱ひは眞箇の解法で無いことは分つて居る、試に之を眞箇の解法で運算したら如何なるであらうか、隨分と面白い結果になるであらうから、一つ興味を添える爲にやつて見やう。

$17 \div 2 = 8\frac{1}{2}$　即ち太郎は八頭と半分

$17 \div 3 = 5\frac{2}{3}$　即ち次郎は五頭と三分二

$17 \div 9 = 1\frac{8}{9}$　即ち三郎は一頭と九つに切つて其八つだけを貰ふと云ふこ

る、盆栽の如きも、蘭科植物の花や棕梠竹のつめた物なども大切である、芭蕉も椰子樹も土地相應のものを要する又青森や北海道あたりでは同じ敷物でも窓掛でも色合の濃ひ地の厚い織物も好く熊の皮の椅子掛も、飾暖爐も装飾の一つとして用ひねばならぬ場合に依ては婚禮には婚禮らしき調度を要する可成色も形も麗はしひ芽出度きものが好い、餞別や離別の席上には織物を掛くるにも花を一瓶挿むにも似合はしひものを撰ばねばならぬと云ふ樣なものである。日本では時々座敷の掛物も屛風も取り代ふれば棚や飾机の類まで取代ふるがこれは氣候の變化の多い國であるから自然にその感化が人心に

となる、お可笑いではないか、殿樣の御息子樣が馬肉屋を開業するのならそれも良からうが、活きて居る馬を貰ふのに、二分の一とか、三分の二とか左樣なことは實際出來る話で無い。それも先づ勘辨するとして、さて兄弟が、それ〴〵命令通り分配すれば、足りなくもなく、殘りもしないかと云ふと、各の所得は $8\frac{1}{2}$ と $5\frac{2}{3}$ と $1\frac{8}{9}$ とであるから、之を加へると $17\frac{1}{18}$ となる、即ち十八分の一頭だけ足りない、十八分の一頭と云へば、恰度馬の首だけ位のもの、足りない處で文句は無ささうなものではあるが其處は命令で左樣は行かない三太夫は流石に年の功、一頭連れて來て十八頭とし、之を二分三分九分したれば時に取つての扱ひ方、出來した〳〵とでも云つて置かう。

それから無算者の扱つた方の場合は、之は兎に角問題らしくなつて居る三人の娘に、一人々々其分配の方法を命令したのは、殿樣の仰せと同じく少しく餘計なお世話であつたが、それでも其命令した方法通りにやれば、跡に少しも殘らず、また足りなくもならないのであるから、此娘の親たる人は、幾分か數學の素養があつたと見える。

即ち問題に示された分配の方法は、$\frac{1}{2}$と$\frac{1}{3}$と$\frac{1}{6}$とであから、之を三つ加へれば1になつて、完全に按分比例の式が立つ、斯樣いふことを前に確めて置くのは、頗る肝要なことである、

影響して變化の必要を見るのである、それは我國計りでは無い伊太利でも何所でも島國では時候の變化が多いからどうしてもそうなるのである又變化せねばならぬのであろふ。概して申さば歐洲風の裝飾は濃厚的で日本風の裝飾は淸素で淡然として居る、それは隨分眞の書院飾などは中々艷麗で西洋風の濃厚的にも負はぬ位である、が先づ日本風の裝飾の特長は淸素淡雅なる方に優れて居、歐風のは濃妖艷美なるが長所である、これは必竟前章に述べたる樣な風土氣候の關係もその原因の一であろふか。又其外にも當時の文物や宗敎なども原因となるので日本でも王朝時代の裝飾は優美で艷麗で、そ

此場合、問題は先づ完全であつたが、之を扱ふ人は確に無算者であつた何も十一と云ふ數が、二分もならず、三分もならず、六分もならないと云つて、一反を持つて行つて十二反にする必要は無い、成程十二と云ふ數にすれば、二でも割れ、三でも割れ六でも割れるには違ひないが、命令は十二反を二分せよとも、三分せよとも、また六分せよとも云つたのではない十一反をせよ云つたのではないか、それだのに一反を持つて行つて割れるやうにして分配したのは、怜悧のやうで馬鹿である。持つて行つた一反を取られて了つたのも、實を云へば自業自得ではあるまいか、三太夫の扱ひの方が餘程巧みであつた。

前の場合には、問題は不完全であつたが扱ひ方が良かつた、今度は問題は完全であつたが扱ひ方が惡かつたと云ふことになる。

そんなら如何すれば良いかと云ふに、矢張り眞箇の解法でもつてするより外は無い。

$11 \div 2 = 5\frac{1}{2}$　即ち姉娘は五反と半分

$11 \div 3 = 3\frac{2}{3}$　即ち仲の娘は三反と三分二

$11 \div 6 = 1\frac{5}{6}$　即ち末の娘は一反と六つに切つた其五つだけを貰ふと云ふことになる、さて左樣分配したなら、恰度うまく分け切れるかと調べて見れば、其處へ行つては問題が完全であるだけに、餘つたり足りなかつたり

して氣品も非常に高ひ、鎌倉時代はどうかと申せば簡古で清趣で一寸申すならば澁ひ方である、それは全くその時代の文物宗教政治などの關係の爲めに一種の變化の來たのであるが鎌倉時代の如きは尤も宗教上の感化を受けた事が多ひので所謂禪林の清規なるものが居室裝飾の上にまで侵入して來たのである。

そこで裝飾は淡雅な方が面白が濃厚なのが好ひかと申すに濃厚なものは濃厚なる處に風情があり淡雅なるものは淡雅なる所に趣味があつて、それ〳〵に面白味を具へて居る、譬て云ふなれば牡丹や海棠は花の形も色も奇麗で派手やかであるが、その派手で奇麗な所が彼

する心配はあるまい。即ち

$$5\frac{1}{2}+3\frac{2}{3}+1\frac{5}{6}=5+3+1+\frac{1}{2}+\frac{2}{3}+\frac{5}{6}=9+\frac{3+4+5}{6}=9+\frac{12}{6}=11$$

すつかり十一反となるではないか！

云ふを止めよ、分配の數に端數が付くではないかと、假令此場合端數が付いたにしても、根が反物である、一頭の馬は最早分けることは出來ないが、一反は之を切つて分けることが出來るではないか。明治十八九年頃の數學の敎科書には、隨分一頭の馬の何分の幾つと云ふやうな答を、平氣で書いて置いたものもあつたが、二十世紀の今日の日本には、流石に斯樣な問題は無いやうである。

餘計な文句はさて措いて、女學世界を讀まれるお方は、一反の反物は、其長さ二丈八尺を常とす位のことは知つて居らるゝに違ひないから、姉娘の所得は五反と二分の一と云つても途方に呉れるやうなことはあるまい、二分の一と云へば、一反即ち二丈八尺の二分の一と云ふことであるから、$28\div2=14$ 即ち五反と一丈四尺だけ貰へば、それで姉娘は云ひ分は無い筈である。

仲の娘の所得は三反と三分の二であると云ふから、之は $28\times\frac{2}{3}=18.66$ 即ち三反と一丈八尺六寸六分五厘程貰へば、それで、之も文句は無い筈で

れの見所で又寒菊や梅の様なものなどは淡然りとして清らかなる所に云ふにも云へぬ氣品の高ひ所がある、それでその妙趣はそのものに就て味はねばならぬ、御厨子棚や黒棚を置いて文庫や手箱や、香道具の様な麗はしひ調度を飾つて狩野家か土佐の畫幅を掛けて、琵琶など迄飾つた御殿風も面白ひ丁度朝日に匂ふ山櫻かなとでも申したい様な風情、それから消息か短冊を更紗表装に竹軸と云ふ遊び仕立にして楪竹の手籠に寒牡丹一輪傍への春日卓の上には一二巻の經巻でも載せてあると云ふ極々侘びしひ隠士山を出るとでも申しそうな装飾も又中々面白い、して見れば何れが好ひの何れが悪ひのと申

ある、さて、末の娘の所得は一反と六分の五であると云ふから、之も同じ仕方で、一反と二丈三尺三寸三分五厘秤貫へば可いことが分る。
斯様分けさせさへすれば、十一反の反物は親の吩咐通り奇麗齒張りと分けられる、諄いやうだが、もう一遍其證據を立てゝ見やう。

姉娘の所得　五反と　一丈四尺
仲娘の所得　三反と　一丈八尺六六五
末娘の所得　一反と　二丈三尺三三五
合計九反　合計五丈六尺即二反

總合計十一反 $9+2=11$ となるから、此解法の正しいことが分る。
以上長々と説明した問題と及び其解法、之れ必らずしも解法の秘傳否な奥義と云ふことは出來まいが、此位まで問題の眞意に立ち入つて、諄く〳〵考へて解式の立てやうを案ずるのが肝要であると思ふ。
それから、よく出て來る問題に斯様いふのがある。
甲乙共に働けば三十日間に仕上がる一事業あり、之を若し乙一人にて爲すときは七十日を要すと云ふ、然らば若し之を甲一人にて爲すときは幾日にて完成すべきや。　答五十二日半
此問題を解くのに、斯様云つて教へる先生がある、即ち一事業を1とする。左様すると、甲乙では三十日に之を仕上げると云ふから、一日には

すことは出來ないが、日本風の特長は何れかと云へば淸素淡雅な方に優つて居る樣は思はるゝ。

話上手

學問を勉强する人は澤山にあり、身體健康の發達に心がくる人は澤山にあり、遊藝を修業する人は又澤山にあれども、會話の上手にならん事を心掛くる人は眞に稀れなり。

されども會話の上手なる人は、その人の一生を社會に愛せられ、社會に善を盡すを得るの一の道具なり、人の智識の中の十中八九は會話によりて得し所なりと、古賢の云ひけるは如何に會話の大切なるかを示せる名言なるぞ、我等が知

$\frac{1}{30}$

出來るであらうなどゝ、此云ひ方は甚だ其意を得ない、いくら一事業だからと云つて、それを1とする理由が何處にあらう、成程、解くには左樣しなければ出來ないのであるが、此塲合1とすると云つては惡い、斯樣な譯の分らない數へ方であるから、生徒が倦きるのである、之は普通の1ではない完全數と云ふ意味での1である、即ち仕事の全業である、斯樣云つても猶ほ惡い、てんで1となぞは定めないで、全業は何處までも全業にして置いて、甲乙ではそれを三十日で仕上げると云ふのであるから、一日には三十で割つた一つ、即ち三十分の一だけ出來ると云へば、如何な分らず屋にも分るであらう、斯樣いふやうに、數學の問題を解くには

水上落花
ちる花の水にし消ゆるものならば春の雪とや思ひはてまし　成範



らざる人に始めて對面せんに、未だその人の性質も知らず、人物も知らずと雖も何とも云へざる一種の引力を以て人を引着くるが如き感じありて其人の傍らを去るに忍びざるが如き感を起さしむるは會話の力なり、人を敎育し、若くは人より敎育を受くる唯一の手段は會話なり、實に會話の巧拙によりては益すべき問題を以て人を害し又己れをも害することあるに至るべし。

如何にせば會話に巧なるべきやといふに譬へば友人に對して忠告せんと欲する場合あらば、先づ先方の地位と其の希望と、性質と、及び先方より言ひ返すべき口實とを考へ次に此方より言ふべき順序を

筋道を立てゝ、誰にも分るやうに說明するのが第一である。

序であるから、此問題の解法を次に示さう。

甲乙共働ぎなれば三十日に仕上げられると云ふから、一日には全業の三十分の一出來る筈、また乙ばかりなれば七十日で仕上かるとあるから一日には全業の七十分の一出來る譯となる、左樣すれば爰に甲乙二人で働いた一日の力と、乙ばかり働いた一日の力とが分つたのであるから、共働ぎの力から、乙の働き高を引いたなら、跡には甲の働き高が殘る道理ではないか。處で、

$$\frac{1}{30}-\frac{1}{70}=\frac{4}{210}=\frac{2}{105}$$

とする、之が甲が一日も働く處の力である、此處まで分れば最早譯は無い、此甲一日の力 $\frac{2}{105}$ で、全業を割つて見れば、それが答は得られやう。

$$1\div\frac{2}{105}=\frac{105}{2}=52.5$$

答は即ち五十二日半と出た。斯樣したら讀者或は揚足を取つて、矢張り全業を1と定めたではないかと云ふかも知れない、が、併し、此處を能く考へなければならない、運算して得た甲の一日の働き高の $\frac{2}{105}$ と云ふ數は、もと〳〵全業に對しての比であるから、如何しても此處では全業を1

引きくらべて後友人の許に行き、柔しき言葉を以て己がこゝろを打明かし、親切を以て靜かに忠言を始むべし、人の心を動かし得べき談話はかくして出來得べきなり、其他はすべて之れに準するものと知るべし。元來談話は唯樂しみとのみおもふべからず、之れは人に取りては一の稽古にして又品格を作る一の器具なれば注意して功者になる事を心掛ざる可らず。

談話は實に有益なり、されど會話を重ずる人の爲めに一つの危き事あり、第一は心にもなき親切、心にもなき世辭をのべて、人を瞞着せんとおもふ人あり、かゝる人は人を瞞着せんとして反て己れを瞞着するなり、己れを瞞着するとは

と見なければならなくなつて來たのである。前に日數のみ分つて居た場合には、其數は比ではないから、如何理屈をつけても全乘を1と定めることは出來ない、此處を混同されては困る。

比の場合でもないのに、突然と全乘を1と定めるのは、一體から云へば之は算術の考へでは無く、代數の領分に喰ひ入つて居るので、代數の考へに魅られて居るのである、代數なれば左樣しても可いであらう。併し算術では斯樣說明するのは穩當でない。

さて、之は濟んだとして、世人は代數と云ふと算術よりは餘程六ケ敷いやうに考へて居るものが多い、理論上の代數はイザ知らず、實用上の代數は算術よりは遙かに易しい。假令ば斯樣いふ問題があつたとして、

某數に其三分の二を乘ずれば三百六十四となると云ふ、某數如何。

之を解くに算術では多少の考慮を費さなければならないが、代數であると直に出來る、何も代數だからと云つて、必らず x y や a b を使はなければならないといふ理屈はない、甲乙でも、イロハでも何でも差支へない、某數と云ふ其儘の二字を用ひても、決して出來ないと云ふことはないので、要するに題の意味の通りに式を立てれば可いのである、次のやうに、

$$(\text{某數})\times(\text{某數}\times\tfrac{2}{3})=364$$

之を解いて運算すれば、

己れより出でし僞善が己れが天性を作るに至ると云ふ。

第二は會話により間違ひたる智識を得ることあり。書物にさえ時に想像の記事ありて信ずべからざる事あるを、まして會話によりてのみ智識を得んとする人には、間違ひたる事實を誠しやかに覺込むことは珍らしきことにあらず、かゝる人と雖も勿論多くの談話の材料を有し、面白く語るの能力を有し、何時にても語り得るの用意はあれども、時々間違ひたる事を話すが故に、之を聞くもの信ずる能はざるに至るべし。

多くの人と相集りたる處にては、自分獨り呑込みたるつまらぬ事を話して、心を倦かしめざるは勿論

$$某數\times某數\times\frac{2}{3}=(某數)^2\times\frac{2}{3}=364$$

$$(某數)^2\times\frac{2}{3}\div\frac{2}{3}=364\div\frac{2}{3}$$

$$(某數)^2=364\times\frac{3}{2}=546$$

つまり某數の自乘は五百四十六と云ふことが分つたから、五百四十六を平方に開いて、二十四と答を出せば、それが取りも直さず某數と云ふことになるではないか。

此運算の中で、初心の者には、或は一寸合點が行くまいか知らぬと思はれるのは、式の兩方を三分の二で割つたことであるが、併し之は譯く説明しなくつても、もと〳〵等號の兩方にある數は等しいのであるから、片方を割れば、片方もそれと同じ數で割つたなら、少しも異らない道理ではないか。

斯樣いふ譯で、代數を知つて居ると、算術を解くのに非常に樂である。」容易く考へられるやうになる。

イヤ、くだらない理屈ばかりを並べて、大ひに濟みませんでした。

▲乙女の操　プラタニンアの時に顯はれたる少女の潔操を高須梅溪氏の飜譯したるものなり、文章は玲瓏として玉の如く、原詩幽婉にして花のごとし定價三十錢。

他人がつまらぬ事を話すにより、面白くなくして、一座のしらけたる時は氣を利かして集會中にて談話に巧みなる人の前に行きて其の人の口を開かしむる爲め、種々の問題を提出すべし、つまらぬ人が話の專賣をなして一座を亂すは然るべき人が話さゞるが故に、上手なる人の話す時は下手なる人は止むべし、恰も太陽の光線の出でざる前に、月や星が威張るがごときものなればなり、特に集會の中にて話す時は人々が大切なる時間を拂ひて聞く丈の價値ある談をなすべし。又た所謂陰口とて、その人の居らざる所にて、その人の事を話す事を忌むべし。

隣家へ一尾の魚を贈りて、隣家よ

作文の手ほどき

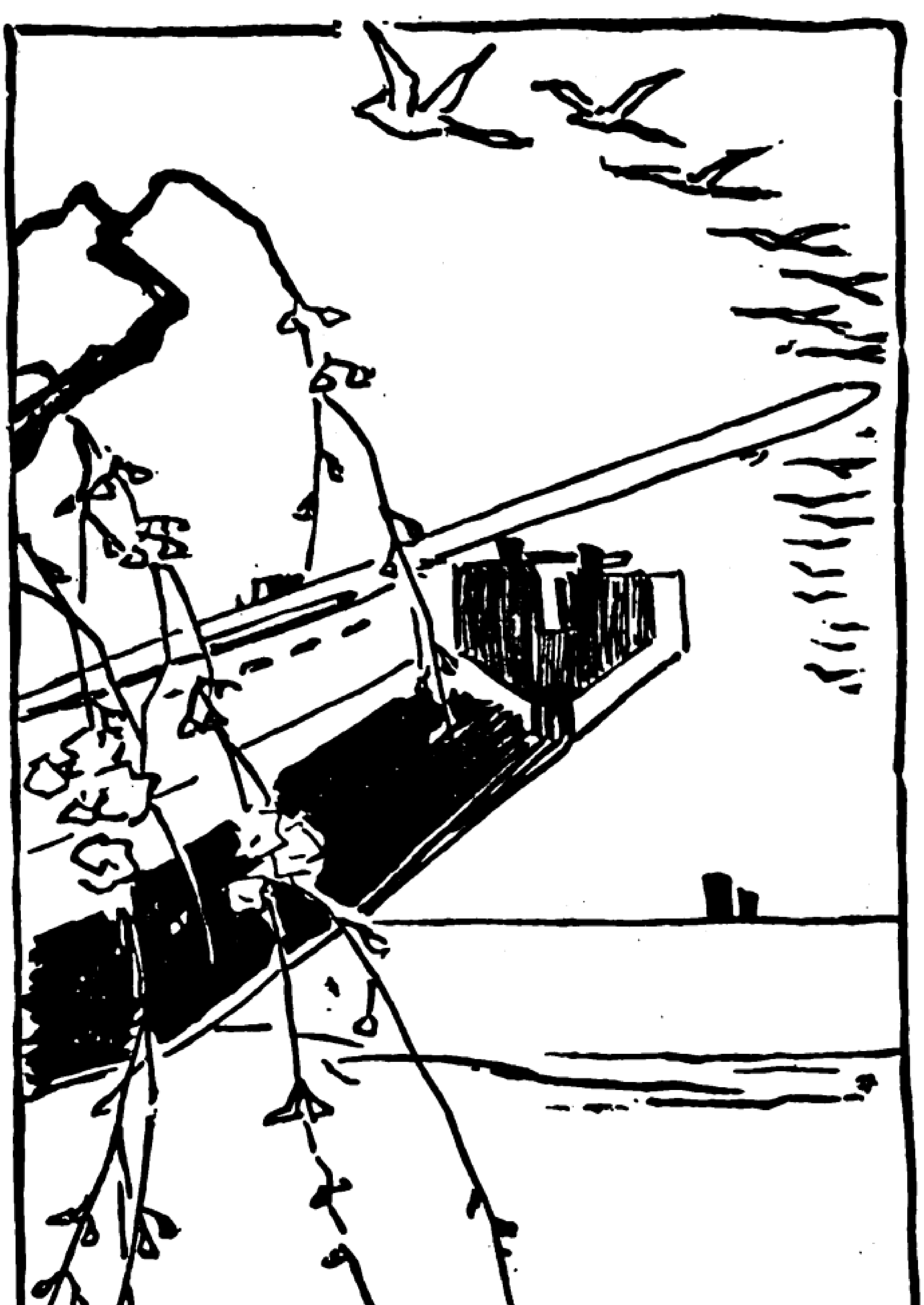
文學士　T　M

◎言語と文章

己れの思想を他に傳へる方法は二つあつて、一つは言語、一つは文章ですが、扨て此の二つを取つて比較べて見ますと、言語の方は口から發して相手の耳に訴へ、毎時でも話相手は目前に居りますから、時に語調を高くしたり、低くしたり、相手が眠むさうな顔をしたならば、隨分大きな聲で以つて怒鳴つて遣る事も出來ますけれど、文章に於ては決して左樣いふ譯には行きませぬ。讀者は何んな貌をして讀んで居るのか、それは些少も分りませんけれど、其代り又、自分の文章を他に發表する前に、幾度も〳〵繰りに繰つて、二三頁も平凡な事つゞきで、此邊でそろ〳〵讀者が欠伸をしたり眠むさうになる時分だと見計らつたら、思ひもよらぬ奇警な文句を挿入んだり、或は快哉を叫ぶやうな比喩を引いたりなどする事は、到底言語では及ばぬところです。爰に作文の手ほどきを申上げる前に是非云つて置かねばならぬ事は、「自分の著作を讀んで呉れやうと、呉れまいと、其れは其人の御勝手、自分の書いた事柄は、自然の眞理を記載したのである。

りその返禮をなさゞりしとて、その隣人を惡むが如き人あらば、衆之を卑しむべき人と謂はん。諂諛を他に呈する人は魚の返禮を望む人に異ならず、諂諛する者は、其の諂諛がその本人に達せざる處にては之を曰はず、多くは公會の席か、若しくは其友人が、本人に傳信の傳はる處にて之を語る、意はその送りたる言に對して報酬を得んとするにあり、望む處の報酬に別こそあれ、或者は高地位を得んと欲し、或者は金錢の惠を得んと欲し、或者は一杯の酒、一塊の寶を得んと欲し、若しくは己れの評判を好くせんと欲し、各々報酬を望まざるはなし、かりに其の卑劣にして人を害する事は問はずとす

それを讀まぬ者は不幸な者である」と反身になつて力味である鼻高先生が往々世の中にあるのでムいます。元來文章と云ふものは、自分の覺えか何



歸雁別花

折しもあれいかにちぎりてかりかれの花の盛に歸りそめけん　辨乳母

かに書きつけて置く者は別として、一般に世の人々に示すのが目的故、成るべく他にも分るやうに、成るべく愉快に讀ませるのが文章の上乘と云

るも、己れの品格をとし、己れの性質を下げて、おのれの不利益となる事尠からず、人に媚ぶると云ふことは、恰も人より媚を求むる看板を出すと同じく醜事にして一方よりいへば一種の賄賂なり、その醜しき賄賂は覺へず知らざる間におのれの言語に出す習慣となりて世人の笑となるは厭ふべきことなり、さりながら失望したる友人を慰め勵ましむるために必要なる讃辭は聊か諛ゐに似たれども是は一種の方便にして普通の諂諛と同じからざるなり。

世には一種の人あり、人は笑はざるに自らは面白さうに長談を爲す人若しくは人のうるさがりて困るにも拘はらず、いつも〳〵同じ樣

はねばなりませぬ。言葉を換へて云つて見れば、一行二行と讀んで行く中に、思はず釣り込まれて、謂はゆる卷を措くを忘れしむるのが、文章を作る上の極意と云はねばなりませぬ。

◎先づ一般の智識及び感情を養成すべき事

是れは頗る平凡な言のやうですが、何をすればと云つて一般の智識及び感情を磨かねば殆んど役に立たぬのでムいます。先日拙者が或る女學校で生徒に文章を作らせた時に、級中で第一の文才のある女生徒が「月」と云ふ課題の下に、月は東から出で星は西から昇つて出るから、夜半には月と星とが中天で遭遇ふだらうなど〻、間違つた事を極めて艶麗な筆で書いてあつた時には、嗚呼是れほどの才筆を持ちながら、一般の天文學の智識すら無い爲めに、星は西から出るものと心得て居るのか知らむ、と思はず長歎息をした事がムいました。又或る女學生などは議論文は却々達者に遣つて退けるが、肝腎の女性美なる感情が秀れて居らぬ故か、情を寫す場合になるとからきし筆が働いて居ないのがムいます。是れは當今女學生の一般の短所かも知れませぬけれど、「一抱へあれど柳は柳かな」「胡蝶にもならで秋經る菜蟲かな」といふやうな、自分の身の上、他の身の上に、極めて機微の間に愕くべき鋭い同情が入つてゐる文章は、當節柄の女學生方々の文の中には、一向に見出す事が出來ぬのでムいます。彼の星や菫を哀れと詠ふ

なる談話を得意になりて語る者あり、其の人は談話を好み、談話をなさずしては居られざれども其人に忌まるゝの原因は識見の狹くしておのれの知りたる事、面白しとおもふ事が、人の知りたる丈け高尚ならず、發達せざるによるなり、如何にせば人に好かれ、己も望みを滿足せしむるを得べきやといふに實に讀書にあるなり、マダムドスタール女史が讀書は全き人を作り、談話は用意ある人を作るといひしは味ひ深き言葉なり、多く讀みて先づおのれの腦を滿たしおき、さて談話する時は、人の輕しむるが如き談話は出ずで、又古るくさき話しは自分より耻ぢて語らざるものなり。

方々に於ても、實際に哀れと感じて詠ふのか否か、若しや、高襟主義の高潮の餘り、星や菫を高襟敎の偶像のやうに思つて、心の中には別段哀れとも何とも思はぬのであるが、其れを詠はねば、何となく異敎徒のやうに思はれはせぬかとの憂慮のあまり無意義に詠つて居るのではないかとも思はれます。何卒充分心底から感情を練上げて、加ふるに一般の智識を養成して、其上に優麗なる文章を築き上げる事を切望致すのでムいます。扨て其の一般の智識方面を研鑽するのには、動物學にもあれ植物學にもあれ、數學でも地理でも、將た星學でも地文學でも、所謂る科學と名の附く學科は成るたけ、汎く目を通して置くのでムいます、其れから感情を鋭敏にするには、一方に於て成るべく實際の社會に近づいて、結局實感の塲合を多く經驗すると同時に、他の一方に於ては敍情的の作物、即ち詩歌、小說、戯曲のやうなものを成るべく多く讀むのでムいます。扨て斯うして漸つと文章を動かすだけの下地が出來たとした所で、其で即時に好い文章が出來るでせうかと、云ふに、否々、到底其れだけでは未だ足りませぬ。右申したゞけでは、單に文章を作る上の資格の第一步を濟ませたと云ふのみで、其れからが始めて筆を執つて、而うして練習に練習を積まなければならないのでムいます。

◎所謂る文章なる者

次に謹むべきは、己れの事を話しの問題とし、若しくは話しの中に挾まざるを可とす、世の中の人は凡そおのれを信ずると分に過ぐるものにして謙遜せりといふ人にても、その謙遜を一種の誇りとして鼻を高くするものなれば、己が事を得意になりて語る時は聞く人は猶其よりも上手の人なるが故に心の中に不愉快を抱くべし、幸に其人謙遜にして、心中に不愉快を感せずとするも、己れの事を語るは失禮の事なり、己れの事は通常の事を語るさへも失禮なるにさして己れをえらきものゝ如く談ずべからず、己れの賢を言ふ人はそのいふ處の賢き分子を除けば後は愚なりと廣告するが如し、　ワシント

如何して好い文章を作り得可き歟、と云ふ問題に對して完全なる解答を爲す前に、文章とは抑も如何なる者であるかと云ふ事を究めねばなりませぬ。何處の學校でも一言に國語作文と云つて同じ種類のやうにしてありますが、其の實似てゐるやうなものゝ大いなる區別のあるのを發見致します。即ち國語とは我が日本の言語の一個々々を解釋して、是れは何といふ意味、彼れは斯う云ふ意味であるから、全體に引纏めて斯う云ふ意味になると說くので、其の性質は專ら科學的ですが、作文の方は或る題を設けて、其れに就いて幾度も〳〵作つたり、改したり、斯くの如き事を繰返し〳〵て上手になるのであるから、云はゞ習字や圖畫などの種類に屬し、藝術の一部分で厶います、して見れば理論も素より疎かには出來ませぬけれど、更に其れ以上に練習に練習を積む事が大に必要です。爰に序でながら古人が云つた三多の事を述べて置きませうが、是れは即ち、多く讀み、多く考へ、多く作るの三者を指して云ふので、多く讀まなければ、自己好りの偏狹となり易く、多く考へなければ多く讀んだ効も、多く作つた効も全然消えて了ふ譯になるし、多く作らなければ、文章なる者が元來藝術である以上、到底好い作を得られぬのは明らかな理であります。然し現今の青年文士などゝ云ふ者は、早く天才の名を擅にし度いとの野心にでも驅られてか、一向多くの書籍を讀まぬやうですから、年少い時は鳥渡短文なぞを小器用

ン」大統領を止めて家に歸るや、多くの人は群がり集ひて、種々の事を問ひ掛けしが彼は己れの爲せし事に就ては一言もせざりしと云ふ。

國文の栞

國文學は修めがたきやう思ふ人もあるべきなれど、そは大なる誤りにて、其の學びやうの順序次第さへ宜しきを得れば、容易く會得すべきものなり、今左に斯の道の栞を示して、研究者のたよりとなす可し、さて國文を修むるに、文學を旨として學ぶと、語學を旨として學ぶとの二た樣あり、何れを主として學ぶも其の人の心に任せつべきものなれば、自ら宜しと思

に書いたり、若しくは何々雜誌の懸賞小說に當選したりして、大分將來を囑目されてゐた人々が、何時しか左までの發達も無く、雅號さへ世から忘れられ、若しや天才夭折ではあるまいかと聞いて見ると、哀れや大枚十二圓取の郵便局の書記となつて、文士不遇の歎聲を洩してゐる向も隨分多いのでムいます。是等は多く讀書せずして、素養が少なかつた故でもありませうが、其れと反對に唯だ讀書さへすれば自ら名文が作れるやうになると思つてゐる方も、却々世間に多いやうです。先日『作文秘訣』と云ふ雜誌樣の書籍を繙いて見たら、中に某博士の說として、唯だ無暗に書籍を頭に入れろと書いてありましたが、其れは甚だ合點の行かぬ理で、如何に多くの書籍を讀んだからとて、其れだけでは決して文章は上手にはなりませぬ。勿論斯んな事を被仰る博士達は、多くは國學者先生で、人の多く知らない故事や故實を並べたてゝ、博識を衒ふのを豪いと思召してゐる方々であるから、斯う云ふ議論の出るのは強ち不思議ではムいませぬ。爰に『作文秘訣』を引出しましたから、其中にある諸大家(と云はれてゐる)の作文に就いての議論を見るに、中には、愕き入つて了ふ事を眞面目にお吹き立てなさる方々が隨分多いのには啻だ恐入るの外はムいませぬ。曰く文法などは如何でも構はぬ。曰く唯だ無暗に書籍を澤山讀め、曰く一旦作つた文章は決して添削してはならぬ。嗚呼果して是れが名文を作るの道でムいませう

ふ方をむねと學び修むるをよろしとす、まづ文學の部より列記せん。

○神皇正統記　准后北畠親房卿が軍務の間に書きしものにて、我國神代より後村上天皇御即位までの事蹟を國文にて記したる歷史なれば、正しき史書として見るべく、文章また國文の軌範とするに足る。

○太平記　此書は花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平十二年までの間の戰亂の顚末を記したる歷史なり文辭絢爛、筆力雄健にして足利時代の文學を代表するのみならず又た當時の精神を知り時勢の有樣を觀るには最よき讀みものなり。

○徒然草　兼好法師の隨筆にして、巧に思ふことを記したるもの、國文學上の珍品とす、北村季吟の文段抄を用ゐ、淺香山井の諸抄大成または隱者閑書の集説を併せて見る時は容易に解釋し得らるゝ便利あり。

▲先づ右の三書を讀みて、その間に左の歌書を見るべし。

○新千載和歌集　後光嚴天皇延文二年勅を奉じて藤原爲定の撰びしもの

か、以下に述べるところを御覧なすつて、適當に御判斷なすつて下さい。

◎文章の組立

文章を組立てゝ居る者は何であるか、其れは一個々々の言語であります。此の言語と云ふ者を譬へて見れば、恰度大きな河の流のやうな者で、極の最初は極めて僅少の言語しか無かつたのが、野蠻時代から次第に文明に推移るに從つて、凡ての事物が複雜になるにつれ、言語も其れに應じて數を增して行くのは當然の事で、恰も物體に影の添うてゐる如く、事物には必ず言語が添うてをるのでムいます。ですから朝鮮の事物が輸入つて來れば、從つて朝鮮の言語も輸入つて來るし、支那の事物が輸入つて來れば、支那の言語が輸入つて來る。歐米の事物が輸入つて來れば、歐米の言語が輸入つて來る。宛ら一つの谷川が大きな河になるまでには、樣々な水の流れを容れて行くのと一般で、而して其の本流に合する支流が、何時か本流と同じやうな水に化する鹽梅は、言語に於て殊に明かに伺ひ知り得るのでムいます。一二の例を引いて申しますれば、「鵲の渡せる橋」など云ふ鵲と言語は元來朝鮮語のカッチ、チヤックから來たのだと云ふし、又刈萱といふ言語も朝鮮語のカルキタから轉訛したのだと云はれて居ります。其他支那印度歐羅巴から舶來した言語が何の位あるか分りませぬが、面白い事には此等の言語が日本に輸入つて來ると同時に、其の言語の音調が日本化せられる

○新拾遺和歌集　同天皇貞治二年勅を奉じて藤原爲明僧頓阿と共に撰びしもの

○新後拾遺和歌集　後圓融天皇の永和元年勅を奉じて藤原爲遠の撰びしもの

○新續古今和歌集　後花園天皇の永享年中勅を奉じて飛鳥井雅世の撰びしもの

○續後拾遺和歌集　後醍醐天皇の元亨三年勅を奉じて民部卿爲藤の撰びたるもの

○新葉和歌集　宗良親王の撰ばせ給ひしもの

▲右の歌集を見るついでを以て左の歌集共も交へ見るべし。

草庵和歌集（頓阿法師）　李花和歌集（宗良親王）　草根集（徹書記）　常縁集　宗祇集　慕白集　兼好家集

▲此等の集を見て當時の風體を知るの便とすべし

○菟玖波問答　さゝめこと

▲此等の書に依りて連歌の趣を味ふべし



尋深山花　花にあかぬ心に身をしまかせれはよしのゝ山の奥を見ましや　重保

事で厶います。例へば鵲、刈萱が朝鮮の言語から轉訛した以上の例を初めとして、漢語の芭蕉をばせをとし、紅梅をこをばいとし、葡萄牙語の天鵞絨をびろうどとしたのを御覽になれば如何に外國語が我が國に輸入るや直ちに日本化せられるのがお分りになるでせう。最近の例を引けば更に能く分りますが、彼のハイカラーと云ふ英語がはいからとなり、はいかるとなり、はいかつてゐるとなり、到頭日本語の四段活用となつて了ひました。接吻と云ふ言語も其の通り、キッスでは、餘り日本語は遠いと云ふので、新派の

○謠曲拾葉集抄　謠曲通解（大和田建樹）
▲此の二書は當時の謠曲を研究するによきたよりなり
○藩翰譜　新井白石の著全部三十巻慶長五年より延寶八年まで凡八十餘年間三百三十七家の傳を評述したるものなり
○折焚柴の記（同上著）大和俗訓（貝原益軒）
○讀史餘論（著者同上）玉匣
○駿臺雜話（室鳩巣著）武德大成記
○古事記　元明天皇の和銅年中に太安麻呂の勅を奉じて撰集したるものにして、我國開闢より推古天皇の朝までの事を記したる史書なり、古文學を研究する者の熟讀すべき書なり。
○日本書記　舎人親王の撰び給ふ正史なり
○古事記傳　本居宣長の著にして全部四十四巻あり　同事傳を見るもよろし、神代よりの事跡をわきまへ知るに最便りよき書なれば古事記と共に併せ讀むべし。
○風土記　栗田寛標注本、同古風土記逸文を併せ見るべし。

歌人はツを除けて、きすと致して、「白き薔薇にきすすれば」など〻詠つて居ります。先づ斯う云ふ風に致して外國語が日本に輸入つて日本語化するのでございます。鳥渡此處に日本語が西洋に輸出して西洋語化せられた例を御覽に入れて見ませう。日本語の坊主が西班牙に輸入つてボンズとなり、襦袢がジバンとなるの類は、如何に日本語が西洋的に化せられたところの情態が顯然と表れて居るではありませぬか。抑も斯くの如く種々の言語が相集まつて一國の言語を爲して居るのでありますから、一通りは其の言語の性質を研究した上で無ければ、うつかりと文章を作る譯には行きませぬ。玆に於て言語學の必要が起るのでムいます。斯くして日本の言語の性質も大概は分かるやうになつて、斯う云ふ場合には斯う云ふ言語を用ひるものである。彼あ云ふ折には彼あ云ふ言語を用ひるものであると云ふ事が、場合々々に應じて使用することが出來るやうになつたら、次には其の言語を以て、自分の思想を表はすには、如何なる順序に並べたら可からう乎、此に於てか始めて文法の必要が起るのでムいます。假令自分の思想を發表すべき如何に多くの言語を知つてゐても、其の言語を組立つる方法を知らなければ、材木が澤山あつても家屋を建てる法を知らないのと同じです。ですから文法を知らない者の文章の中には、思はず冷乎とするやうな事がムいます。「汽車に乗り遲ればやと急ぎに急ぎぬ」など云ふのは最も

○萬葉集　此書は歌集の最古きものにて孝謙天皇の朝に橘諸兄の撰輯し、更に大伴家持に依りて成りたるものなり、加藤千蔭の萬葉集畧解を初めとし、契沖阿闍梨の代匠記、賀茂眞淵の萬葉集考、鹿持雅澄の萬葉集古義等によつて此等を解すべし、又た田中道麿の撰集萬葉徵は歌學者及び語學を修むる者の見て益あるものなり、長瀬眞幸の萬葉集佳調、最も見て益あり。

○竹取物語　我國の物語の書の最古きものにて、作者は源順なりと云ふもあれど疑はし、文字古雅にして愛すべし。

○伊勢物語　作者伊勢なりと云ふもあれと是れ又うべなひがたし、契沖の伊勢物語臆斷、賀茂眞淵の伊勢物語古意等を併せ見、なほ北村季吟の拾穗抄、藤井高尙の新釋などいろ〳〵あれば併せ見るもよろし。

○宇津保物語　作者は紫式部の父、藤原爲時ともいふ

○源氏物語　此書は紫式部の健筆になり國文の模範とすべき大部の書なり、此物語を解くには北村季吟の湖月抄を本とし、本居宣長の玉の小櫛、萱井義知の男女鈔東抄を添へて讀み、又熊澤蕃山の源氏外傳、安藤

著しい例でありますが、當今の女學生の書いた者の中には、「……な爲たまひぞ」とか「……申せしに」とかは勿論の事、其他假字遣の誤謬、てにをはの誤謬は凡そ半紙一枚位の文章の中に文法上の誤謬だけでも二三十は必ずあると云つても宜しい位です。何卒、眞面目に文章を稽古しやうと思ふ方々は、文法をも充分研究して戴き度いと存じます。能く、所謂る文士たる方々の中には、文法に拘泥しては可かぬ、文法などは如何でも好いと被仰つて居ますが、成程、拘泥しては可かぬ、其れは云はずと知れた事であるが、奈何でも宜いとは決して申されませぬ、左様云ふ方々のお書きになつた物に限つて、「人はいざ心も知らぬ……」と濁つて見たり、「汽車に乘り遅れようと思つて急いだり」などなさるのでムいます。

◎文章の美化法

先づ言語の性質を知り、次に言語の排列の法を知つて、是れで漸つと、自分の思想を誤りなく正確に發表する事が出來るのでムいますが、是れだけでは單に自分の思想を誤らずに傳ると云ふのみで、讀んで見ても別段面白いとは思はれ無いのでムいます。扨て、其れでは讀んで讀者をして思はず快哉を叫ばしむるには如何にしたら可からう乎。是れに就いて何の位古人が苦心して居りますかを鳥渡申上げて見ますれば、成るたけ言語に句調を好くして、「耳に快感を覺えしむるやうにと努めた者の中には、「坂は照る

紫草の紫家七論等をも讀むべし

○狹衣　紫式部の娘大貳三位の作なり。

○堤中納言物語　藤原兼輔の作なりと云ふ。

○濱松中納言物語　作者は詳かならず。

○とりかへばや　住吉物語　共に作者詳かならず。

○今昔物語　一名宇治大納言物語ともいふ、源隆國の見聞せしことを集めたるものなり。

○宇治拾遺物語　作者は上に同じ。

○土佐日記　紀貫之承平五年土佐守の任果て、都へ歸る時の記にして、文章古雅、我邦紀行文の嚆矢と云ふべし、季吟の抄、岸本由豆流の考證、橘守部の舩之直路、富士谷成章の燈等を讀みて解すべし。

○紫式部日記　作者が上東門院に仕へし頃のことを記せるものなり、壺井義知の傍注あり。

○蜻蛉日記　藤原道綱母の筆にて、日記の權輿ともいふべき書なり。

○和泉式部日記　又和泉式部物語とも云ふ、作者が冷泉院の皇子敦道親王の寵遇

照る鈴鹿は曇る、あひの土山雨が降る」などゝるの脚韻を押したのもあるし、「おろせがくせは駕で振り、ほたるは光る淺瀬川、またげしや、まつかせ乘物の乘手は知れた提灯に」などゝ頭韻又は間韻を用ひたのもムいますし、其他七々調、七五調などを文章の中に疊み込んで音調を麗はしくしやうと努めた事は、古來澤山あるのでムいます。奈行の音を澤山用ひれば文章が優美になるとか、Pの音を澤山用ひれば調子が柔かくなるとかは常に人の云ふ所でムいまして、彼の獨逸の文豪シルレルなどは、Sの音を多く用ひる事を好んだといふさうです。斯くの如く一方には音調の力を以て耳から美感を起さしめやうとすると同時に、他の一方に於ては、樣々の比喩や、云廻し方を以て、目前に種々の幻影を現はさうと努めるのもムいます。例へば、「環の鏇もげたる羽織の紐は、手長猿の月を捉へんとする狀して搖曳と垂れり」「秋風紅葉ばに別れを惜しむ」などとムいます。斯くの如く一方に於ては隙間も無く聯想を以て樣々な幻影を目前に彷徨かせると同時に、他の一方に於ては音調の美を借りて、耳障りを好くする事は、宛然耳に音樂を聞き目に演劇を見ると、一般なのでムいます。此等の法になりますと最早言語學や文法の範圍を脫して了つて、即ち修辭學、美辭學の領分に入るのでありますが、普通の修辭學や美辭學を御研究なさる前に、先づ五十嵐力氏の著「文章講話」を一通りお讀みになる事をお勸め申すのでムい

を巡りたる國のことを記せるものなり。

○讃岐典侍日記　作者が堀河天皇に任へ奉りし時の日記なり。

○十六夜日記　阿佛尼が關東下りの道の記なり。

○更科日記　菅原孝標の女の作なり。

○枕草紙　此書は紫式部と並び稱せられたる清少納言の文章を集めたるものなり、此書の解釋は、季吟の春曙抄最よし。

○方丈記　鴨長明の隨筆なり、槇島昭武の流水抄を見るべし。

○古今集　醍醐天皇の紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人に勅して撰ばしめ給ふ、これを勅撰の始めとす。和歌を學ぶものは暗誦するを要す。

○後撰和歌集　村上天皇の天暦五年大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等に勅して撰びしものなり。

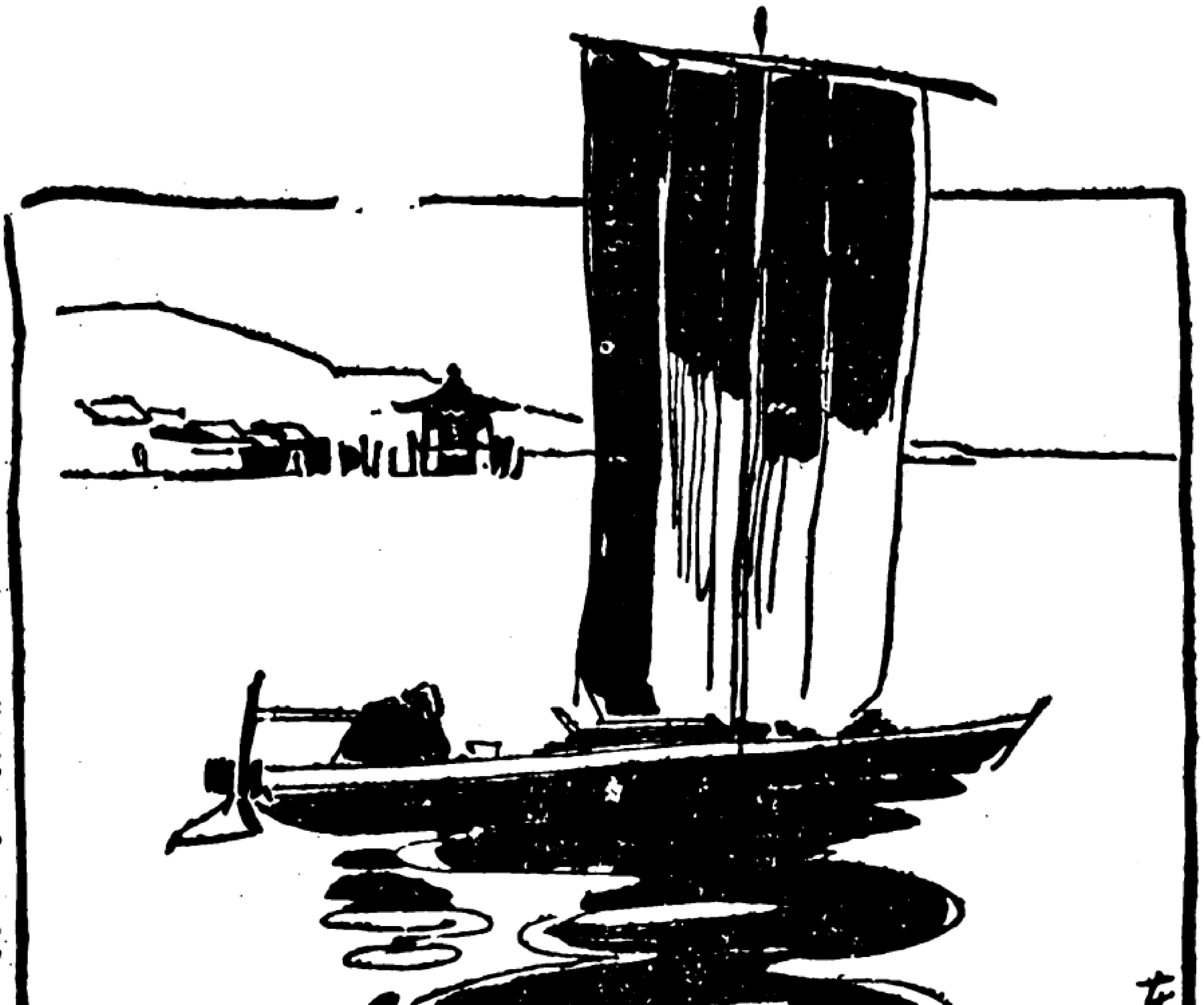
○拾遺和歌集　花山天皇の御撰とも云ひ藤原公任の撰びしものとも云ふ。

○後拾遺和歌集　白河天皇の朝藤原通俊に勅して撰びしものなり。

○金葉和歌集　崇德天皇の大治二年源俊

題、上春望

湖の海やかすみのなかにこぐ船の
まほりし春の景色なるかな
武子



ます。實に此の書は多くの材料に依て、分り容易く順序好く述ておりますから、文章を作らうと思ふ方は、是非とも一度はお讀みなさる事を、切にお勸め致すのでムいます。

◎如何にして傑作を作るべき乎

以上お話した所は、孰れも美しい文章を作る道を順序立てゝ述べたので

後に勅して撰びしものなり。

○千載和歌集　鳥羽天皇の文治三年藤原俊成勅して撰びしものなり。

○新古今和歌集　土御門天皇の元久二年後鳥羽天皇の院宣を奉じて藤原定家藤原家隆等と共に撰びしものなり、本居宣長の美濃の家つと、同折添へ等を見て歌の心を解すべし

▲右に擧げたる勅撰の和歌集を八代集と云ふ、其の他の勅撰私撰家集は悉くは記さず

○榮花物語　赤染衛門の作ともいふ、全部四十卷宇多天皇の寛平年中より堀河天皇の寛治年中まで凡二百年間の事を記したるものにて關白道長の榮華の有樣を寫したるものなり。

○大鏡　爲業の作にして藤原氏の榮花をうつしたるものなり。

○增鏡　○水鏡

○保元物語　作者は葉室時長なりとも云ひ、中原師梁とも云ひ、保元の亂の始末を記せるものなり。

○平治物語　此れも作者時長と云ふ説もあり、平治の亂の一班を記せるものなり。

あるが、一般の美しき文章と稱する物の以上、更に百尺竿頭一歩を進めて、雄篇とか傑作とか稱せらるべき文章を作るには、單に外形の美を裝ふのみならず、却つて寧ろ内容の優れた物を作らねばなりませぬ。さア斯うなつて見ると却々難しい、筆端の器用と云ふやうな、皮相の淺い所を辿つて居らずに、倚と々々深い所、叩けば骨からして動き出すやうな、人間の根本を知らなければなりませぬ。扨て此の研究には如何なる方法を以て着手したら可からうかと云ふに、先づ宗教の側から這入るのが一番宜しいだらうと考へられるのであります。即ち聖書とか法華經とかを充分深く研究して、何が故に基督教なり佛教なりが何千年と云ふ間、人類の思想界を支配したらと云ふ理由を研究したならば、蓋し自から悟る所が多いだらうと存じます。是れに次いでは論語なども宗教の經典とは云へませぬが、支那三千年の思想界に大なる感化を及ぼしたのでムいますから猶且研究なさるのが宜しい。斯くの如く人間研究の根本的解釋を試みやうと思ふのには、到底一朝一夕の事業では無く、畢生の事業として、猶ほ且つ及ばぬのでありますから、最少し手取早に傑作に近づかうと思ふには、何れの國のでも宜しいから、所謂る傑作と稱せられてゐるものを熟讀するのが最も捷徑だらうと思ひます。例へば我が國の文學ならば、源氏物語とか、近松の淨瑠璃とか、乃至は西鶴物とか、馬琴物とかを精しく研究するのが最も適當だらう

○源平盛衰記　作者は前の二書と同じ時代といへど詳かならず、源氏二氏の戰爭を細しく記せるものなり。

○平家物語　此は前書に似て更に深刻の趣きあり、作者につきては異說まち／＼ありて一定せず。

▲以上の外種々の書共あれども、大方は右に載せたる書だけにて足る。

地理の手ほどき

歴史が時間的の研究であるとすれば、地理はまさに空間的の研究です。彼れに太古、中古、近世の區別ありとすれば、これには、太洋、陸地、山嶽、河川の區別がある、彼れに盛衰興亡の事蹟があれば、これには、文明、野蠻の區別がある、彼れに戰亂革命の事蹟があ

と考へます。扨て其の研究の仕方に就いては如何したら宜からう乎。漫然と讀んで行くばかりでは、却つて書籍から讀まれて了つて、一向効果が些少い。其れに就いて拙者が思ふのに、その研究の方法に就いては、彼の日露戰役で討死せられた坪內鋭雄氏の『文學研究法』と云ふのを一通り目を通す事が宜しからうと存じます。鳥渡此處で申して置きますが、彼の夭くして亡くなられた一葉女史は非常の天才であつて、或る人は紫式部にも比肩すべきだとなし、故思軒居士などは、明治に於ける第一流の小說家は、尾崎紅葉、幸田露伴、樋口一葉の三人であると云つたさうで厶います。又、彼の『不如婦』の作者德富蘆花氏は、一葉全集を以て、我が國有史以來絶無の傑作であると、或る教會の壇上で叫んださうであります。何しろ斯かる傑作が少額の金錢に購ふ事が出來るのでありますから、皆樣、殊に文學に篤實な諸姉は、一本を求めて日夕お讀みになる事が、傑作を作ることの捷徑中の捷徑だらうと存じます。何卒、希望くは！彼の一枝の筆を以て、終始大奈翁に抗敵したステエル夫人のやうな、若しくは奴隷賣買の人道に外れたるを見て、萬斛の同情を以てアンクル、トムス、キャビンを作つたスタウ夫人のやうな方が、諸姉の中から一人でもお出下すつたら、幸ひに此誌に筆を取つた拙者は、如何に嬉しく思ふで御座いませうか。

れば、これには、風俗人情の相違がある。歴史に英雄豪傑、美人、烈士が顯はるれば地理には、都邑、村落、名勝、佳景が記載される。斯く歴史に分類のあるが如く、地理にも又種々なる分類があツて、これを學ぶに就ては極めて興味を齎らすものであります。

故に地理は學習する者の興味を利用して智識を開發するには尤もよい學問です、尤も地理はその學びの個條が極めて錯雜して居て、一寸の聞き嚙りでは容易に初學者の腹に入り兼ぬる點があります。譬へば人類の區分から、國々の位置、氣候の相違から風土の差違、山河の形勢から、生物の分布、猶細別すれば宗敎、政治の別ちから

記臆力の養成

下田文學士

記臆の仕方には種々ある、通例之を機械的、理論的及び工夫的の三つに分けることが出來る、一體小さい時は、譯も分らずに唯だ覺える、即ち機械的の記臆が主である、女子には殊に其の傾向があつて、學校でも女子の試驗は唯だ記臆の試驗となり易い、故によく覺えてゐるから、分つて居るかと思ふと、大間違の事がある、併し敎育のある者は、理屈で記臆する、或は工夫を凝して色々な仕掛をして記臆する、試驗に効を經たものは、此の工風的記臆が上手である、總じて記臆には此の工風的記臆が最も必要である。

女子は小學校でも左うであるが、高等女學校時代には殊に機械的の記臆が多い、分からぬけれど試驗に出るので無理に記臆する、其が爲めに身體を弱める樣な事があるから、試驗等は常に加減をせねばならぬ、記臆をば成べく理屈的にするが宜い、之には呑み込むやうに能く敎へることが肝腎である、記臆力は練習によつて、發達するや否やは疑問であるけれど、記臆の仕方は確かに發達するものである、即ち記臆上手になる、試驗上手になる、永く覺えぬまでも當分保つやうな一時的の記臆が上手になる、併し

人口の粗密、物産の種類、面積の大小、廣狹、其の他種々樣々の分類があッて、これ等の別ちをすべて自分の腦髓に記臆して、世界中の事柄を一目瞭然ならしむるといふ事は、專門家の仕事としても容易ではありません、況してや種々の事柄を學ばねばならぬ初學の方々に於て是れを悉く記憶に入れよといふのは非常の重荷で強いて記憶に入れやうとすれば却て腦髓が錯雜して、他の學問の妨げとなるやうな惡結果を來しませう、ですから、これを學ぶには極めて單簡な方法に依ッてその大意を明かにし、大體の區別を十分に腦中に疊み込んで置くのが、學問の速成法です、既に大體の區別が腦中に入

斯る覺え方は役に立ちませぬ、永く覺えるやうにするには、機械的でなくて、理屈が分つて呑み込むやうにせねばならぬ。

又た記臆は年齡によつて強弱がある、即ち子供の時は記臆力が強いけれ

藤

春きては心のまつにかゝりつる藤のはつはなさきそめにけり　俊頼



ど、年をとるに隨つて段々劣へて來る、自分の經驗では十三四頃が一番良く覺えたやうである、何でも機械的に暗誦して、一字一句間違へぬやうに試驗に書かうとした、一體若い時は神經が銳敏で、印象が強いから覺え易

ッて仕舞へば、その他の事は自然と我が腦髓に解釋が出來て來るやうになるものです。これが學問成就の良方便で、何の學問でも始めは皆その方法を取ッて行かねばならぬ。

そこで地理を大別して天然地理人事地理の二ッに區別します、天然地理といふのは、地球の運動、四季の差別、地球の形狀、寒帶、熱帶の區別から、大陸の區別、海山、川、湖水、或は生物の分布、氣候の相違など、すべて天然自然の有樣に就て知る處の天然的の智識であります、又人事地理といふのは、地球上に分布された處の人類の區分、文明とか、野蠻とかの人類開化の程度、或は宗教、政治

く、又た忘れもせぬ故、若い時に敎育することは大に効がある、若い時に一年で覺えたものも、年が寄つては三年掛つても覺えられぬことがある、語學の學習の如きも成年以後は進みが鈍いのである、年寄になると兎角昔の事ばかり云ひたがるのは、若い時覺えた事が最も强く腦裏に浸み込んで居るからである、女の方は年を取つても割合に良く覺えて居る、理解力は減じても、其の旺盛なる記臆力で、老耄を誤魔化そうとするまでメーピウスは言つて居ります。

前にも云ふ通り、女子は機械的に物事を覺えて居るが、是は言語を習ふ上に於て大に利がある、何となれば言語の記臆は大部分は機械的である、殊に女子は具體的の言葉を多く覺える、之を歐米の實驗に徵するに、女子は英佛獨等の近世語のみならず、ギリシヤ、ラテン語なども容易に覺える、だから女子で二三ヶ國の語が出來るものは、決して珍らしくない、會話でも左うで、女子は記憶の良い上に早口であるから、外國に行ても早く話せるやうになるし、旅行にも女子の方が早く出られるやうになります。

女子は概して抽象的の深いことは不得手であるから、言語でも根本的に研究する段になると、男に及ばぬけれど、實際の役に立つまでになるには、女の方が易いと考へる、女子に外國語を敎へることは決して失望すべきではない、唯だ今日は敎師と其方法が十分でないから、其効が擧がらぬので

貿易、物產、交通、乃至は國體の區別、人口の多少、都邑、村落の發達、人情、風俗、並に生活上の有樣に就て知る處ろの人爲上の智識であります。

さてこの天然地理と人事地理との二種に就て、どちらの方が興味が多くて、又どちらの方が、婦人の腦髓に早く入り易いかと申すとどちらも興味のあるものには相違ないが、天然の方は人事に比べて餘程科學的でもあり、且つ事柄が漠として居りますから、餘程腦髓が緻密でなければ、一寸解釋に困りますけれども、人事の方は例を取るにも手近く、隨ッて婦人の頭腦に入り易いのである、例令は亞細亞洲全體の地勢は如何なる有樣ある、女學校に男子の學校だけの英語の先生が居つたならば、男子だけの英語になれることは受合ひである、殊に會話は確かに女の方が旨くなる、女は生れながらの會話家である、併し其の會話は些細な事、個々の事、現在の物、感情的の物に付いてすることを好むものである。

感情的といへば快感が記憶を助ける場合がある、女子には殊に之が多い、一體快感といふものは、興味から起るものであるが、此の興味は偏局的の記憶を生ぜしむるものである、ソレで多くの人は實際皆な片寄つた記憶を持てゐる、ソレに女子は感情に抵抗が少い、話でも面白く感情的に遣れば、女子は別して良く覺える、女子は身體的の事、即ち顔、身振り、身の廻りの飾り等に注意して利害を感ずることが切實であるから、此方の事は良く覺える、其の證據には女同志出遇ふと、肝腎の用事よりは、先方が何んな着物を着、どんな釵をさし、どんな帶をしてゐるかなど、細かい所まで目を着けて覺えて居る、一般に愉快なことは不愉快なことよりも強く永く記憶するものであるが、女子に於ては殊に此の快感が記憶を助ける、即ち物の色、音、香、味等の感覺的のものに注意を拂ふ傾がある、故に芝居や踊り等の娯樂の事は良く覺えてゐる、併し女子は結婚すると、夫が家事向の興味が出來、是迄とは記憶の方面が變つて來る、進んで母となるとこんどは又た子供の事、世帶の事、敎育の事などの新しき興味が加はつて來るか

で何處に如何なる山があッて、何川は如何なる方向に流れて居るかと問ふても一寸分り難いかも知れぬが、歐羅巴の人種は如何なる種類で、その文明の度は低いか高いた、又その生活は如何なる有様かと聞かるれば直ちに大體の答は出來ませう。ですから人事地理の方は天然地理の方よりも自然と智識に入り易いものであります、そこでこの入り易い智識を利用して、なるべくそれに興味をつけて學んで行くのが地理學習の近道です、そうして段々進んで行けば行く程學問の興味が益々加はッて來て、後には無趣味であッた事柄も非常に面白いものになッて、知らず識らずの間に多くの地理學の智識を

ら、更らに記憶の方面が變つて來る、一般に云へば、女子の記憶の庫には、具體的のものが多い、女子は具體的のものに興味を感ずることが大であつて、又た早く且つ多く領得する、其代り忘れて了ふのも早い。

又た記憶は身體の健康及び頭腦の新鮮と關係がある、不健康のものや、疲勞したものは、覺えが惡いが、良き榮養を受けてゐる身體强壯の者は隨つて覺えも良い婦人は兎角貧血を起し易いが、是は記憶の爲には不利益である、月經と記憶の關係を調べたものは未だ見當らぬが、恐らく月經の間は記憶力は劣りはしまいか、と思はれるのである、これは大に硏究すべき問題である。

歷史の手ほどき

U・M生

歷史は進化の法則によッて動くところの人類發達の跡を示す一ッの學問であるから、吾人が常識を養成する上から是非共學ばねばならぬ一の科學である殊に婦人は家を修め、子を育つるの責任を持つものであるから、人間の進歩、社會の變遷、國家の興亡盛衰をなした事柄をくわしく承知して居らなければならぬ。

擴ろめて行やうになります。然らば如何にして人事地理を學ぶべきかといふのにまづ左記の數個條の區別をよく消化させるのが肝腎である

第一人類の區分、第二開化の程度、第三宗教の區別、第四政治の種類、第五人口の多少、第六都府村落の發達、第七生活、物產、貿易、風俗。

▲第一　世界上の人種はまづ大體白人種、黃人種、黑色人種、銅色人種、鳶色人種とその皮膚の色に依て區別されてである。更らに此區別を實地に當はめて說明すると、歐羅巴人種、亞細亞人種、亞弗利加人種、亞米利加印度種、馬來種となる、扨この人種を數に依ッて

抑も歷史は、幾千年といふ長い間の事柄を記した學問であるから、歷代の興亡、革命やら戰爭やら、人物の出現した跡などが、雜然として、宛から大海に波濤の起伏してゐるやうに見えて、初學のものは動もすれば中途で迷ふ事が多い、故にそれを學ぶには、始めからの關係を正して、大體の要領を得て置く事が肝腎である。それには一定の教科書といふものがあッて、長い年代の間にそれ〳〵時世の別區を立てゝ誰れにもよく腹に入るやうに說いてあるが、あまり書物をたよりにする處ろからして讀む時だけは僅かに覺へて居るけれども、一朝書物に離れると、遂に又茫然となッて仕舞ふのが多い、それ故是を學んで要領を得るには、どうしても自分から一ツの法則を作り出して、歷史全體をその法則にあてはめて覺へて行くのが一番の近道である尤も自分でこの法則を立つるは多少の弊害もあらうけれども、初めて物を學ぶには是非ともこの法則に依らなければ、手早く物を合點することが出來ない、そこで大體の事柄だけを自分の記憶に留めて仕舞へば、後にどんな、錯雜した事柄に出逢ッても、それから先は皆その記憶の範圍に這入ッて仕舞ふから、決して途中で踏み迷ふて難儀をするやうな事はない。即ち歷史の大體を自分の腦髓の帳面にチャンと記して置くのであるから、後日に及んで譬へ何程、こみ入ッた事柄に出會しても、その帳面の中へ秩序正しく這入ッて仕舞ふのである。尤もこの法則を立てる

區別すると亞細亞の黄色人種が五億人、歐羅巴の白色人種が三億人、次は亞弗利加の黒人種二億人、馬來種と銅色人種が一番尠く六千萬人に上らないのである。何故に黄色人種がその様に多數であるかといふと、それは支那といふ大國をなしてゐる蒙古人種が皆黄色人種であるからで、黄色人種の中五億以上は支那人に依て占められてゐるのである、大略世界の人口を十五億人と假定してその中の三分の一は支那人である、支那は單に國土が世界の大國たるのみならず人口の上でも又世界に比類のない多人數を占てゐるといふ事が分る。

▲第二　世界の開化には三等の區

のは單に歷史を學ぶ上ばかりでなく、地理を學ぶにも又必要であるが、歷史は活きた人物の活動するもの地理は死物であるから比較して歷史の方は興味の多いだけに又錯雜した關係が多いから、是非とも法則を立てねばならぬ、さて其の法則は歷史家の考へで様々あるけれどもこれを實地に應用するのは人々の勝手で銘々の御工夫の上にあらうと思ひます。

歷史の分類

歷史には日本歷史を始めとして西洋歷史、東洋歷史があるが、いづれの歷史に於ても第一にまづ年代の區別を立てなければならぬ。即ち、太古、上古、中古、近古、近世といふやうな別ちである、これは歷史を學ぶの第一歩で、たとへば家を建つるに地ならし、畑をつくるに畔ごしらへ、繪をかくに布置を取り、輪廓を描くのと同じ事で、大體の法則である。假りに之を日本の歷史に應用して見ると、神代の世が太古で、天之御中主神から天照太神の世を經て、神武天皇以前まで俗に神代の時代といふのがそれである、邈焉たる大古である。

次は上古ともいふので、神武天皇即位から天智天皇以前まで、凡そ千三百年間古代の世の中を一とまとめに見做しての時代である。

その次は中古、天智天皇以後奈良朝、平安朝の時代を經て源平盛衰の時代までを凡そ五六百年間を一まとめに見做してこれを中古の時代と定めた

別がある(一)文明、(二)未開又は半開、(三)野蠻、とこの三種である、さて野蠻の人民といふものは社會を形造らねば國に政治、法律といふやうな、制裁的なものが無い。人民は個々に分列して、日夕野山に獵し、湖海に漁し、或は野生の植物を採集して衣食し、闘爭を好んで掠奪を事とし、人倫もなければ又文字も無いのである。亞弗利加の土蠻、南洋諸島の蠻民は大抵この類に屬する、それより一等上ッて未開又は半開といふのは社會だけは形造ッてゐるけれども人間の理想が甚だ幼稚であッて、文藝も進まねば、工業も起らない僅かに農業耕作によッて衣食してゐる處ろの人民である。未開の例

らばよからう。

その次は近古これは頼朝の覇業に始まッて戰國の終りに至るまで、鎌倉の北條執權より南北朝の合戰、室町十三代の世を經て織田、豐臣の世に至る凡そ三百年間の一時代である。

牡丹

咲しより散はつるまで見しほどに花の下にてはつか經にけり　忠通公



その次は即ち近世で、徳川幕府創業に始まッて明治維新までとするのである。

こういふ按排に一とつゞきの歴史の上に分界區別を立てゝ考へると錯雜した事柄もハッキリとして學ぶのに大變都合がよく、まづ年代の前後が判然として早わかりがするのである。今これを人物の上に就て見るに藤原の鎌足は中古の始めに出た人物である、楠正

は亞米利加の土人西比利亞の土人近くは臺灣の生蕃並に北海道の舊土人アイヌ人などがその類で、馬來半島、布哇などはやゝ半開に進んだ人民であり又朝鮮の如きは更に一層進んだ人民である。次に文明の人民といふのは、日本は勿論歐羅巴各國、北米合衆國等で人智進み、理想高く、藝術の極めて發達した所ろをいふのである。

▲第三　地球上各人種の中に行はれてゐる宗教の種類を擧ぐれば甚だ夥しいものであるけれども。主要なるものは四ツに區別されてある。第一佛教、第二基督教、第三回々教、第四婆羅門教、其の外野火教、凡神教など稱へてすべてこれを偶像教の内に入れてありま

威は近古の時代の中ほどに出た人物で鎌足よりは凡そ六百年の後の人であるといふ事がわかる、又事蹟に就て見るも、元寇の役は鎌倉の中世の出來事で、阿部の仲麿の遣唐使の時代より後ること凡そ三四百年であるといふことがわかる。こうして年代の前後を判然と、わが腦髓のノートブックに記載して置く時は、歷史上の出來事、歷史上の人物が、其の時勢を脊負ッて來て趣味深く自分の思考力に解釋されて來るのである、それは丁度曇つた鏡を磨きたてゝ自分の顏を映したやうで目鼻があざやかに見へて來るのである、これは歷史を學ぶに尤も簡便な方則、又尤も捷徑な覺え方であると信ずる。

勿論この區別は自然と時世の段落によッて別れたもので、殊更人爲で以て別けたものではないから、この段落をよく腹の中に呑み込んで置けば、自然と社會の變遷、發達の跡までも合點されて來るのである。

尤も太古、中古といふやうな區別ではあまり漠然として、記憶上不利益とおもへば、更に別な方法によるのも妨げない、即ち二千五百年の歷史に第一期、第二期、第三期といふやうな小別をして時世の變遷に判別を立てるのである。

歷史の潮流

歷史は恰も一脈の川のやうなものである。その始は山から落つる一と筋

す。中に就て尤も盛んなのが、佛教と基督教の二種で、婆羅門、回々教が之に次ぎ、偶像教が、尤も少數であります。何故に佛教、基督教の二教が最も勢力あるかといふに、佛教は亞細亞教で、亞細亞大陸全部の宗教となッてゐるからその信者の數は五億人以上に登ッてゐるのである、基督教は歐羅巴全體、並に新開の亞米利加を加へて皆その信徒であるから總數四億に上り、印度と中央亞細亞の一部には婆羅門が行はれてゐるので三萬餘の數に上り又東部亞細亞から亞弗利加の一部には回々教が行はれてゐて二萬餘の信徒を有してゐるのである。

◆第四　國の政治には君主政治、

の溪川であるが、流るゝに從つて幾所の水を集めて次第に川幅を廣め、末は幾十間の大河となつて海に入る、その間淀んでは淵となり、旋つては瀨となり、岩を嚙み、岸を穿ち、溪に隘つては急湍激流となり、野に出でゝは緩流となるやうなもので、時世にも亦急流あれば緩流あり、急湍變じて靜波となり。山と山と重り合ふた隘い間を流るゝ時代もあれば又、廣々とした野原を流るゝ時代もあり。森の中を潜ることもあれば、又人家に沿ふて流るゝこともある。卽ち歷史に時代のうつり變りを見るのは河流に淵や瀨のあるのと同じ事である。この歷史上の淵と瀨を一目瞭然に合點して置くのが又習學上の必要な件で、上古には上古を通じた時世の特色があり、近世には近世を通じた時世の特色がある。更に詳しくいへば奈良朝には奈良朝、平安朝には平安朝、鎌倉時代、室町時代、戰國時代いづれも其時代に通じた歷史上の特色がある。大體に於てこの區別をたゝて、よくその時世の色彩を自分の腦髓に判然しておかねばならぬ。それから此の時世の特色を區別しておくのみならず、同時に又時世と時世の移り變りの境目をも合せて心づけなければならぬ。卽ち封建と郡縣政治との移り變りの境目に當つた大化の革命、王朝と武權との移り變りの境目に當つた革新、幕府倒れて王政維新となつた明治の革新、是れは歷史上の大きな結び目であるから、この結び目の處ろを十分に注意して明瞭に心に了解しておかなければ

立憲政治、共和政治の三種に區別されてあるが、君主政治の中にも又專制君主制と、立憲君主制の區別があり、露西亞、土耳古、支那などが、專制君主の政治で、日本英國、獨逸などは立憲君主の政治である、次に共和政治は人民の中から大統領を選擧して政治上の責任を預らせるので、北米合衆國瑞西、並に佛蘭西などがその例である。

如何にして天然の地理を研究すべきか

以上の如く人事に區別を立てゝ置いて、それから段々と進んで研究をするのでありますが、まづ第一に人類は如何なる處ろに尤も多く繁殖して、如何なる方法に依つ

ならぬ。歷史を學んでも唯のべたらに史上の出來事を記憶してゐるといふ丈けでは極めて無趣味な事で、それでは唯活きた讀本といふに過ぎない、そうでなくて、時世の變遷とか、時代の特色とか、革命とか、變化とかいふ事柄に深く注意をして自分の心に一角の見識を立て置くといふ事は、歷史を讀むに尤も必要な事である、そうでなくては百萬冊の書物を讀んでも死學問否活字引で一向に價値はない。よしや歷代にあらはれた細かい事柄は知らずとも、この歷史上の大眼目さえ腦髓に取り込んで置けば。他の詳しい事柄は後日の見聞によつて自然と補ふて行けるから、格別要るには足らないが、この肝腎の歷史上の區別がまだ判然としない內に、いろ〳〵な細かい事柄をつめこむと、終にはいろ〳〵と迷ふて仕舞つて何が何やら薩張り譯が分らなくなつて仕舞ふ、たとへば今こゝに王昭君の傳を讀んで更に又楊貴妃の傳を讀む、いづれも多情多恨で事柄はおもしろいがこの二婦人が出た年代幷に時勢といふ事が腦髓に判然して居ないと想像の餘地が狹くて興味を助くる分量が極めて淺いのであるのみならず、時としては前後の區別さい取ちがへる事がある。そこで今假りに此區別を立てゝ日本歷史を讀む方の參考にしよう。

△大化の革新　これは上古から中古にうつるの際で、孝德天皇の御代に出來た事今日より殆んと千三百年前、この時の改革は支那唐朝の文明を輸入

て生活をしてゐるかといふ點に注意せねばならぬ。いふまでもなく人間の最も多く住んでゐる處ろは水のある處ろです。水は文明の母と稱する言葉もあッて海邊並に河流の邊には人口が多い。何故に水のある所ろに人口が多いかといふに、海邊でも、川流でも、水のある處ろは概して平原である。この平原は天富の所在地で、植物も繁茂すれば、動物も生存する、又水を利用して交通も利くから人類が住むのに、甚だ都合がよい、むかし亞細亞の文明が黃河、楊子江の河岸から起ッたといふのも、水邊が人類の生活を資くるに都合よいからである、むかし歐羅巴の文明が、地中海の附近から起ッたとい

して從來の政治上の慣習や制度を改めたのである。この時までの日本の國民は所在豪族や、權家の奴隸であつたのを中央政府に統一されたのである中央政府には八省百官が置かれ、租税の分限も定まり、天下の統治權が甚



蛙

あさりせし水のみさびにとぢられて菱のうき葉に蛙なくなり　俊頼

だ廣くなつてゐつた。而してこの制度、この改革は專ら唐朝を模したものであつた。

ふのも水邊が人類の生活を資けたのである。その外、印度の文明がガンヂス河の畔から興り。バビロン、アッシリヤの文明がチグリスユーフラテースの河岸から興り埃及の文明がナイル河の畔から興ッたといふのも又同じ理由で、即ち水は文明の母といふ事を證明して居ります、又現在世界中で人口の尤も繁殖してゐる所ろはすべて大河の流域か。又は海邊である今この著るしい例を擧げて見ればまづ河畔では、支那の揚子江流域で中央支那の富源が開け歐羅巴ではライン河ダニューブ河ローン河の流域で、澳、獨、佛の沃野が開け。亞米利加ではミシシッピー河の水脈で合衆國の富饒が拓け。亞弗利加

扨てその次の變革は、賴朝の覇業であるが兎に角、時世の變遷、國家制度の改革といふ處ろには歷史を學ぶものゝ眼目として注意をしておかねばならぬ。

史上の大事件

以上世紀の區分と時代の變遷が十分に判別されたならば、今度は歷史上の重大なる事件を順序正しく年代に隨つて紀念する事が肝要である、是又歷史を學ぶの最大捷徑である、例令は

東夷征伐(日本武尊)
三韓征伐(神功皇后)
佛法傳來(聖德太子)
大化の改新(藤原鎌足天智天皇)
壬申の亂
奈良の盛世(法隆寺)
天慶の亂(將門、純友)
藤氏の盛世(閨秀文人の輩出)
保元平治の亂
源平合戰
承久の役

ではナイル河流域で埃及の大富源が開かれてあるその他すべて河流のあるところにはむかしから人類が繁殖して村落をなし、都邑を造ッて居るのである。我が日本でも關東に利根川、畿內に淀川、北陸に北上川、九州に筑後川、尾濃に木曾川其の他すべて人口の繁殖してゐる處ろは、必らずそこに大きな河の流域がなくてはならぬ。

要するに水域はすべて平原である、平原は土地が自然に肥沃であつて森林が多い、森林でなければ拓いて耕地にすることが出來ぬ、又河や、湖水や、海のほとりに住へば漁が出來る。嶮岨な山や、高原は地が瘠せてゐて耕作が出來ないばかりでなく、交通も利かない

鎌倉繁昌
元寇
元弘の亂(建武中興)
南北朝の戰(足利氏覇業)
室町盛世(東山義政)
應仁の亂
戰國
朝鮮征伐
關ヶ原合戰
大阪陣

此外歷史上にあらはれた事柄はいろ〳〵あるが、國家の大局に關係した事柄はまづこんなもので、是等の大事變を年代に依つて順序を正しく紀念しておけば、國運の盛衰時勢の變遷を鑑みるの一材料となるのである、是等大事件を記憶の外に置く時は歷史は無味乾燥なものとなつて仕舞ふのである。

興亡盛衰を知る事

以上歷史上の大事件を記したらば更に時代の盛衰、覇業の興亡に注意して見ねばならぬ、さすれば人心の向背も分り命運の消長する處も自ら明ら

から人類が生活するのに甚だ困難である。そこで人類はすべて平原の地、水域の地、肥沃の地に繁殖して、村落都邑をなし、樣々の產業を營むで生活をする。此の如く人事地理上の原則大意を十分心に會得して置けば、その他の事柄は此の原則によッて自然とおのれの腦中に了解されて苦もなく地理學上の智識が修められて行くのである。

まづざつと斯ういふ樣な按排に區別を立てゝ學習したらば自然に地理上の智識を得るの徑捷ともなりませう。

●富翁格言

▲世には懸河の辯を持ながら、一

かになつて、歷史が我々に與ふる處の訓誡の意味も自然に悟る事が出來るのである、一體歷史を學ぶのは何の爲である、唯昔しの事柄を知るのみでない、古人の爲て來た事柄を知つて話の種にするばかりではいけない。これを知つた上に、更にこれを今日の世の中の實際に當てはめて考へ、さうして自分の一身上に應用して世間に立つ工夫を考へる材料にする了簡でなければならぬ、我々の祖先がして來た歷史上の事柄は如何であつた。藤原氏は何故に榮へ、平氏は何故に衰へ、賴朝の覇業は如何して起り、北條氏、足利氏は如何にして天下を取り、如何なる政治を施して末はどうして亡びたか、豊臣氏は如何な時勢に起りどうして天下の主となつたか、德川氏の亡びた原因は何であるか、一口にいへば驕る平家は久しからず、源氏は武力を以て起り、北條氏は仁政を以て九代つゞき、足利氏は武將の人望を以て天下の主となり、その亡びたのは奢侈贅澤の致す處であつた、大凡これら歷史上の盛衰興亡の大體を心に會得して仔細に吟味するのは非常に興味のある事で、後世人々のよき訓戒となり、人の常識を養ふ處ろのよい食物である。歷史を學んで唯漫然と事柄を知るばかりでは何の益にもたゝぬ、兎角盛衰興亡の跡を吟味して篤と心に悟る處ろがありてこそ、始めて學問した甲斐もあるのである。

人物と事蹟を見る事

濟の道理を有せざる論士尠からず
▲富は之れを所持する者に屬せず寧ろ之れを樂む者に歸着す
▲己れが慾望に向て自ら拒絶せよ
▲鋤を執る者野人にあらず萬事を野卑ならしむる者野人なり
▲金錢の効用は之れによりて生ずる有らゆる利益之れなり
▲懶惰なる者は緩漫に歩行し遂に貧乏神に追ひつかる
▲今日の中に勤勞せよ蓋し汝は明日如何なる障害に接するや計り難し
▲今日の一日は明日の二日に價す
▲汝若し自己の欲する忠僕を得んと欲せば先づ汝自ら忠實ならざる可からず

家を起すものも人物なれば、國を亡ぼすものも又人物である、國家に大事蹟を遺し、大功業を立つるものも人物なれば、大戰爭をなし、大反亂を企つるものも又人物である、されば人物は歷史といふ舞臺に跳る處ろの役者であれば、此人物を除いて歷史といふものは無いのであるから、歷史を學ぶには必ず人物の出現に就て十二分の注意を置かねばならぬ。上は神武天皇より下は今上天皇に至るまで歷代百二十六世、二千五百年の間に日本の歷史上に顯はれて出た人物は幾千萬人と數は限りないが、その中に就て歷史上に大關係のある人物、即ち國家に、大功業を立てた人物、大野心を起して大反亂を企てた人物、大戰爭に與つた人物、國家の盛衰興亡に關係のある人物は、それ〴〵その時代に依て區別し、その時代を見る眼を以て又十分にその時代に出て來た人物を看定めて置ねばならぬ。

以上は歷史を學ぶ上に就て大體の手びきであるが初學の人以上の方法によつて學べば大なる誤りはなからうと思ふ。

●兒童が目に依つて感化を得る事は耳に依つて得るより大なり恰も蟲が其食する色に似るにひとし
●父母の爲せる擧動は其子はこれを再三再四行ひ試むる者なれば極めて些些たる行も輕ず可からず

道歌世渡の綱

○あらそはぬ風に柳の糸にこそ、堪忍袋縫ふべかりけれ……（忍耐立德）

○心根の形にみゆるものならばさて恥かしき事にあるらん

○足る事を知る心こそ寶舟もの〻數々積みおかずとも……（知足即富）

○世の中は眼に見ることを本とせよ、聞かぬ事はかわるものなり

○餘念なく遊ぶ子供の姿こそ、神代の人の心なるらん……（天眞爛熳）

○僞りのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

○やはらかに言ひても事は聞こゆるをなど高聲にひがむ世の人……（温言和意）

○世の中は木の葉この葉のうら表、時代ときよの風にまかせよ

○高慢のあかりぶらつく鼻の先もとが心のくらき故なり……（倨慢晦心）

○世の中は只何ごとも人並にありぬべきこそ見てもよからん

○世の中は德して人にほめられて損して人に笑はる〻なり

○世の中は何もいはずに伊豫すだれ其のよしあしは人に見へすく……（心眼明鏡）

○年を經て浮世の橋を見かへればさても危ふく渡りぬるかな

○倩々とおもへばかなしいつまでか身につかわる〻心なるらん……（身世煩累）

○好き中も近頃うとくなりにけり隣家に土藏を建てしより後

○こ〻ろから恥かしきかないたづらにくらして年を惜しむ習ひに……（光陰如箭）

○尋世留さいこ〻ろの脂を掃除せず雁首ばかり磨く世の中

○片乳房にぎるも慾のはじめなり

○あなどりて後にあやまる見苦しさ三つ見も智慧は育つものなり……（勿侮勿慢）

人心の異なる其面のごとし



をしへぐさ　立志の礎

△大業を成し、成功を爲すは決して安逸にて得べからず、必らず刻苦の裡より來るなり。

△一身は一家の基なり、一身すら保つ事能はざれば如何ぞ一家を保ち得べき。

△暇のあるを待ちて書を讀んとすれば讀書の時なし、すべて物事は油斷して待つべからず。

△未だ成らざるの功を圖らんよりも既に成りたる業を保つに若かじ。

△既往の過失を悔ゆるは將來の過失を防ぐに若かじ。

△身を立つるには將さに一歩高かるべく、人を扱ふには將さに一歩下るべし。

△百事を成すに中途にて止むる時は成就の期なし。

△人の耳目を集めて己れの聰明となす事勿れ。

△才氣極めて拙きも勤めて拙きを補へば將來必ず人となるべし。

△健康の時常に疾病を思へば、身を保つべく、裕かなる時常に貧を思へば家を守るべく、若き時常に老を思へば學を務むべく、生ける時常に死を思へば道を勵むべし、故に人遠き慮なければ必らず近き憂ありとは金言なり。

△家に千日の好事あるも一時の難に遭へば忽ちに外へ出づべし。

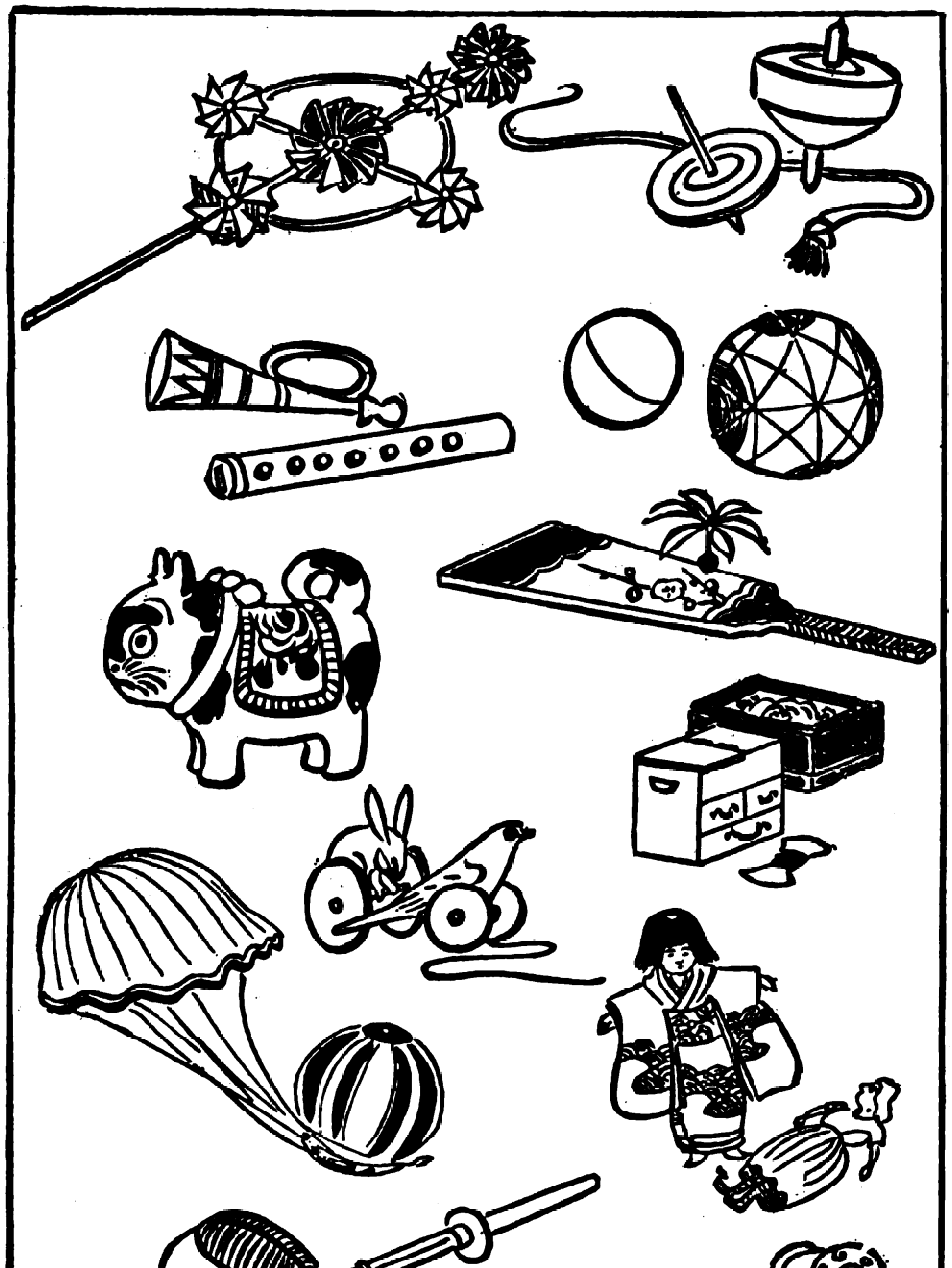
△天下の仕事計算に依らずして得る事なし故に計算をよくせざれば後日必らず困苦を受くべし。

△老て病を來すは若き時に之を招けばなり。

△時機を見ざれば必らず破を取るに至る、故に事を行ふには必らず時勢を察るを要とすべし。

△物を現金にて賣るものよりも掛賣を爲すものに心は赦し難きものなり。

三つ兒の魂（玩具のいろいろ）



くりやの掟

△すべて拭き掃除をなすに第一注意すべきは隅々にほこりを遺さゞる事是なり、

△戸障子の骨は塵埃の存らざるやうにすべし。

△蠅厨、鼠厨、其他帳簞笥、膳棚、押入などは時々内部の物を出して親切に掃除すべし。

△あげ板の下に不潔物を投入べからず。

△火鉢は毎朝灰篩を以て灰の塊りなどを去り又周圍を拭くべし。火鉢の抽斗には膏薬、或は蠟燭、髪油の類を入置く事なかれ。

△竈は時々外部を拭又灰を掃き取るべし。鍋釜の炭を掻き落したるまゝにて散くし置くべからず。

△埃拂などの底は折々これを取かへ毛ば立ちたる紙の散らざるやうにすべし。

△踏臺を紙屑籠の代りとなすべからず。

△紙屑籠は人の眼にかゝらざる場所にかけ置き、紙切を溢れざるやうにすべし。

△洗浄架は勿論板の間に、飯粒菜蔬の切屑を散亂するは實に見苦しきものなり。又洗しは屢々洗浄して粘り氣を去るべし。

△皿鉢茶碗の類は其内外部共に親切に洗ひ其糸底を清潔に洗ふべし。

△陶器類は時々鹽みがきにせざれば汚れ目を洗ひ落す事能はず。

△漆器は洗ひたる後其濕氣の全く無くなるまで拭き去るべし、汚れざる布巾の中乾きたるを用ふべし又重箱の如き方形なる器を洗ひ又は拭くには其の四隅に最も注意すべし。

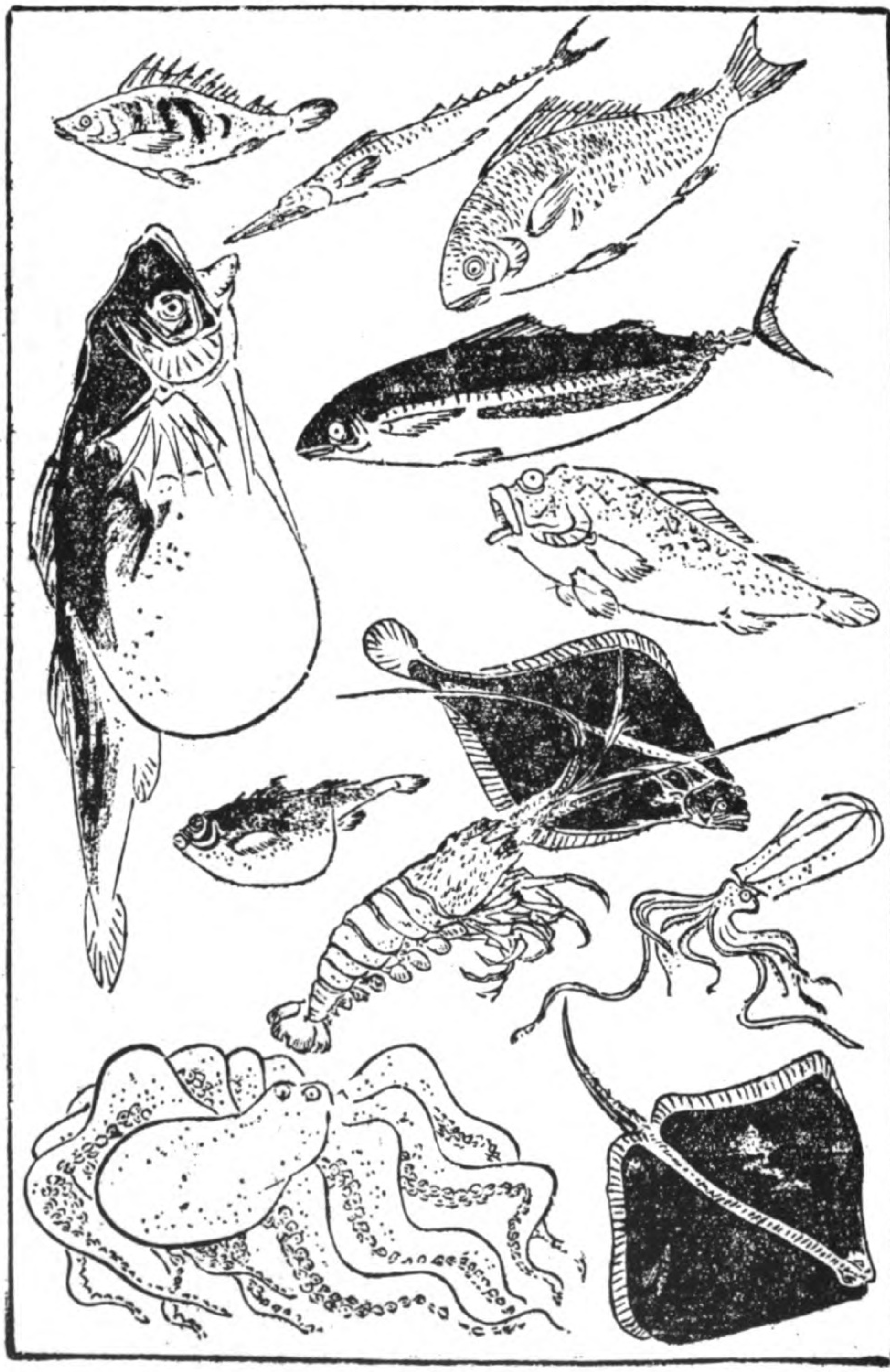
△煙艸盆の唾壺は毎朝清潔に其の内外部を洗ひ二三滴の水を其底に入れ置くべし。

△板の間を拭く時は雑巾をなま絞りにし其水氣を足の底につけて其儘席上に入るべからず。

△ガラス、陶器の破片をあげ板の下に捨置くべからず。

△若し夜中、指環簪などをあげ板の下に落したる時は必ず翌日を待ちてこれを捜索すべし、決してこれを捜さん爲めに燭光をあげ板の下に照す事なかれ。

魚のいろいろ



(1)かわはぎ　(2)かます　(3)たひ　(4)あんかう　(5)かつほ　(6)おこぜ　(7)かれい　(8)ふぐ　(9)えび

(10)いか　(11)たこ　(12)あかえい

× × ×

歐羅巴の女子大學生

歐羅巴の女子大學では女子も男子も一所になつて講義を聽ます、之れは男女同權だと云ふ點から來たものでしやうか、乃至は經濟の點から女子と男子と學校を別々にするは、澤山金が掛ると云ふ事から來たものでしやうか、又は其他の關係から起つたものでしやうか、兎も角男女混合して講義を聽くなどゝ云ふ事は、日本にはまだ珍らしい事です、先年早稲田の大學では、公開講義をして、男女學生の隨意聽講を許した、所が當時の先生は、坪内博士などで、日本一流の文學論者であつたから、隨分女學生も聽きに來たそうだ、之れ等は定めて、早稲田が率先して歐羅巴の例に倣つたものでしやう、今少し進んだら女學生も一所に講堂に立つ様になるかも知れない、其の時は目白の女子大學は、なくなりはせんかと心配する者もあつたが、いやなか〳〵左様の譯には參りません。

英國の女子大學生は、なか〳〵開けたものです、彼の牛津大學では、僅かに一學科を除くの外は、どの學科でも、出席聽講する事が出來て、どん〳〵女學生がやつて來て、平氣で講義をきいて居ります、日本の女學生の様に、いやに恥かしさうな風をして居るものは少い様に見えます、學校の方でも二百名近い講師が、だいぶ婦人を優待して居りますから、益々盛んになる計りです、但し女學生はビー、エーの學位試驗を受くる事は出來ても、夫れ以上の學位試驗を請求する權は持つて居りません、其他ケンブリッチ大學でも、ヴイクトリヤ大學でも、ウエールス大學でも大概同じ様です、流石に英國は女權の擴張し居る國だけあつて、女子の學識も進んで居る様に見える、之れに倣つて高等女學校でも、其他の女塾でも一般に發達して居りますが、日本も今少し女子教育を進めて、此の數年間に英米を凌ぐ様にしたいではありませんか。

獨逸でもやはり同様に男女混合です、日本から行つた留學生なども、彼地の女學生と交際を結んで、男女混合で東京會などゝ云ふ會を起して、隨分持てたとか云ふ事です、中には餘程懇意になつて、結婚の約束をする様になり、遂には日本に連れて歸た人もあつたとか云ふ事ですが、まさかにそんな人は澤山はないでしやう。

獨逸の大學は、英米の大學などに比べて見ると、餘程六ケ敷くなつて居つて、大學に入る前に必ずギムナジウム即ち大學豫備門の課程を履

まなければなりません、其の修業年限は九ヶ年の長期で、米國のエール大學やハーバード大學の卒業前課程と高等學校の課程を合せた樣なものですが、此の獨逸大學の豫備校は頗るパタスする事が六ヶ敷いです、でありますから中〳〵勉强しませんと大學に入る事が出來ません、それで少し大きい都會には、私立の大學豫備校があつて、其處の教授を受けて居ります、これは毎冬期のみ女子の爲めに特に講義を開くこととなつて居るので、勉强の女生は、之れで大學入學の準備をして、初めて大學教育を受くる事になつて居ります。

女學生で尤も重んずるのは體育です、殊に英國の如きは力を用ゐて居つて、體操科の成績が惡いものは、徳育の缺點と同じ樣に見られる、當時行はるゝ體操を區別して見ますと、大槪三つに分たれます、一は男子の兵式體操に似た樣なもので、二は舞蹈に少し外の事を交へた樣のもの、三は遊戯的のもので筋肉の發達と、四肢の働きを適度ならしむるものです。

蘇國の女學校では第一に揭げた樣なもので、其の體操科に着る女子の服裝なども、一見男子と違つた事はない、而して其の技術の兵式體操に類似せる所だの、其動作の活潑なる所だのと云ふものは、なか〳〵歐洲中に少ない、夫れであるから蘇人の體格は男女共に實に立派なものです、之れは即ち體育奬勵の結果と云つて差支ありません。

次ぎに寄宿舍の有樣を申すと、素より其學校の組織目的によりて多少の相異は御座いますが、槪して云へば皆な能く整頓して居つて外見如何にも立派の樣に見えますが、其の寄宿生の風が何となく男子の樣で、女子らしき所に乏しい所がありまして、日本の女學生とは、餘程違つて居るのです、若し是れ等の女學生が教師だとか技術家だとかになつて、一生獨立の生活を爲す者としたならば宜しふ御座いませふが、若しも尋常普通人の妻なり、人の母たる者としたならば、大いに鑑る所なくてはなりません、家庭に傭れる女學生などは、大槪中等の階級のものが多い樣ですが、稀れには富貴の家の女子も、其の母の考案により、幾分か世の辛酸をも嘗めさしたしなどゝの希望で這入つて居るものもあります、ケンブリヂ、オツクスホールドなどの寄宿舍には、隨分身分のある者だの、或は諸外國の貴族方などが來て居るものもあるです。

塾の女學生が尤も樂しんで待つて居るものは春、夏、冬の休業なのです、之れは年少の生徒等が、いつくるか等どゝ待ちわぶるのみでない、半白の年長教師なども、待ちに待つて、殊に休業日數の長き夏期休業などを、こよなき樂しみと致す樣です、尤も長い夏期休業も大抵滿二ヶ月少しくは其の餘位の事で、高等女學校は四十日より五十日位、春期は二週間、冬期は十日間內外であります。

夏期休業中は塾によつて悉く生徒を歸省せしむるのもあり、又其の望に任せて滯留せしめて置くのもあつて、格別遠くから來て勉

蟄して居るもの丶外は、歸つてしまふ者が多いです、時としては塾生だとか教師だとかと共に、旅行すると云ふ活潑の女學生もある、全體歐羅巴人と旅行は付き者の樣で男も女も老人も小供もみな大同小異で、轉地して新鮮な空氣を呼吸し、精神上、身體上の營養をなすものが多い、近來は東京邊の紳士などが大磯に行つたり、逗子に行つたり、輕井澤に行つたりするのは、此の風を學んだものではあらふが、英人のそれに比べて見ると、日本のやり方などは實に幼稚な樣に思はれる、學生の修學旅行と云つた所で、やつと歸國の途上の廻り道だ、富士山に登る女學生など丶來ては、まだ今日の所實に僅かの者と云つて宜しい。

米國の大學でもやはり男女は同じ講堂に立つて講義をきくです、カリフオルニヤ大學とスタンフオールド大學では、女子の數も男子の學生の數の約三分の一は居る、其の中には隨分オールドミスも多いが、大抵は二十歳より二十四五歳位の人が多い、オールドミスの内には、地方の高等女學校の先生等が、其の筋の許を得て一年間位勉強にやつて來るものが多い、之れ等の女學生が研究する所を見て居ると、大抵人文科の方で、各國の國語などを修め、たまには教育、心理、歴史等に出席するものもある。彼れ等の服裝は、日本の女學生などよりも、一層立派です、要するに富の程度の高いからでもあらふが、裝つて美しき風をすると云ふ傾きもあるのです、英國なども格別ですが、米國の女學生もあまり行儀がよいとは申されません、此の點から云つたら日本の女學生等の方が餘程行儀が宜しいと云ふべきである、例へば教師の講義をきくのに、頰づえを突いたり、教臺の上に腰をかけたり、教場や圖書館でむしや〳〵物を喰つたりする樣な不作法な事は、日本の女學生のとても想像の及はぬ所であります。

日本でそんな事をしたら、隨分人が眼を付けるでしやうが、男女學生の同行も普通の事として、決して怪しみません、通學の途中で男女の學生が話しをしたり、放課後に男女が一對になるなどの事は、到底日本の學校に求め得られぬ事で、畢竟眞正なる戀愛とでも云ふべきものは、米人によりて初めて解釋されると云つて宜しい、其の位だから戀を語るなど丶云ふ事は平氣の平の字で、公園であらふが、教會であらふが、學校であらふが少しも頓着して居らない、一體人と云ふものは變なもので、ほかに物事をかくすと見たがつたり、聞きたがつたりすると同樣に、戀もかくすから聞きたがるもの丶、米人等の戀は少しもかくして居らぬから、人も別段見とがめないと云ふ事になつて居る、之れ等は日本の女學生等とまるで反對だ、然し此等の風習が果して文明的であるかないかと云ふ事は、問題であつて、取つて以て直ちに日本に移す事は六ケ敷のです。

尚ほ之れ等の女學生が、いかなる生活をして居るかを云つて見ますと、朝飯は紅茶或は珈琲に牛乳、麵包と牛酪、及魚、鷄卵、冷

肉、鹽肉、等の如き物の一種で、獨佛等の諸國では、朝肉類を食せぬ代りに、チヨコレート等の飲み物がある、晝は肉と野菜と二皿位で、晩餐は尚此上に肉汁を加ふる事もある、總て調理法は手輕で且つ質素だけれども、衛生の點に付ては充分に注意してある樣に見える、此等の食物の外に午後四時より五時の間に茶を飲んで、點心にはバタを塗つた麵包の薄片だとかビスケツト類です。

之等女學生の學費なども國により所によつて、一樣では御座いませんが、倫敦では一ケ月十磅内外、巴里では二百二三十フラン内外を普通として居ります、獨逸では之れより少し安く上るかも知れません、衣服なども大抵其の膚に觸るゝ所の者は、少くも二日目か三日目位で取り換えて、其の汚れたものは一つの大きな袋の中に入れ、口を〆めて自分の名札を着けて、戸棚の内に入れて置いて、若し洗濯にやらふと思つた時は、其衣服の數と、月日と姓名とを一々紙片に書き付けて、小使の女に渡し、若し洗濯屋が洗つて來た時には、始めの書附を添えて返すのだから、小使は叮嚀に改めて、更に持主の所へ行つて檢べてもらふと云ふ譯だから少して間違などゝ云ふ事はない。素より日本の學校とても、是れ位の事に間違ふ樣の事はないが、其の順序だの方法だのと云ふものが、どこやら整頓して居る樣に見える。と云ふ事た新歸朝の人に承はつたので、こゝに書きつけました。

女子教育學費の統計

文明の進歩と共に、女子教育愈々發達し、社會は中等教育以上の學力を女子に要求しつゝあり。されば今後の父兄たるものはよく此處に留意し、以て其女子を教育せざるべからず、女子夫れ自身も亦た心して勉學し一人前の婦人となるを期せざるべからず。

今左に女子教育系統及び修業に要する費目概覽を列し、一は以て父兄の參考に供し、また女子修業の枝折となさんとす。

▲●●●●●●女子教育系統概覽を示せば左の如し

期限	年齢 自―至
一	3―4
二	4―5
三	5―6
四	6―7
五	7―8
六	8―9
七	9―10
八	10―11
九	11―12
十	12―13
十一	13―14
十二	14―15
十三	15―16
十四	16―17
十五	17―18
十六	18―19
十七	19―20
十八	20―21
十九	21―22
二十	22―23

幼稚園
尋常小學校
高等小學校（第二學年／第四學年）
高等女學校（及同程度の學校）
女子大學（及同程度の學校）（本科／研究科）
（女子師範學校及び職業學校）
（女子高等師範學校）
（同研究科）

（備考）（一）黒線を以てせるは普通多數の修學順序を示したるものにして、横の點線は其連續を表す。（二）双線は特種なる學校にして比較的一般的なる學校を表はせり。（三）學術の點に於ては入學の資格あるも年齢の制限あるものは、年齢によりて劃せり、女子高等師範の如きもの即ちそれ。（四）私立學校をも記すべからんも、各相異れるが故に須く除けり表中「同程度の學校」とあるにより參照せられよ。

▲修業年限及年齢●●●●●以上の概覧により各教育の期限及び年齢を再記すれば左の如し、但し便宜上「幼稚園」と大學の「研究科」を除く。

義務教育（尋常小學校卒業迄）　期限四ヶ年　年齢十歳
初等教育（小學校高等科第二年迄）　同　六ヶ年　同　十二歳

中等教育（高等女學校卒業迄）　期限十一ヶ年　年齡十七歲
高等教育（女子大學校卒業迄）　同　廿四ヶ年　同　二十歲

更に特種教育に就て記すれば

華族女學校（小學科より卒業迄）　同　十二ヶ年　同　十八歲
女子師範學校（小學校より卒業迄）　同　十二ヶ年　同　十八歲
高等女子師範學校（同上）　同　十五ヶ年　同　廿一歲

但女子師範は小學卒業後（にて十四歲）一ヶ年、女子高等師範學校は四ヶ年年限の高等女學校及同程度の學校卒業後（にて十六歲）一ヶ年の間を置く。

●●●●

▲學資概算　此調査を基礎として、學術上必須の費目を概算すれば左の如し（但東京に於て）

	一ヶ年間平均	卒業迄
幼稚園	約二十圓	約六十圓
尋常小學校	約二十五圓	約百圓
高等小學校（二年迄）	約三十五圓	約七十圓
高等小學校（全科）	約三十七圓	約百四十五圓
高等女學校	約五十圓	約二百五十圓
女子大學校	約八十五圓	約二百五十五圓
同　研究科	約七十五圓	約二百二十五圓

（備考）幼稚園は高等師範學校附屬幼稚園に於て調査し、其他は夫れ〴〵二三乃至四五の學校に就て、女子

大學校は五人の卒業生に就て調査せるものゝ平均額なり。
若し必須費目の外に要する費用即ち袴、草履、靴、辨當、手拭等の如きものを始め雑費等を計算すれば倍額以上に上るもあらん、而して寄宿或は下宿をなすが如きならば、卒業迄

		寄宿料及舎費	下宿料
高等女學校	最多豫算	三百八十五圓	五百五十圓
	最少豫算	三百圓	三百三十圓
女子大學校	最多豫算	三百三十圓	二百三十圓
	最少豫算	百八十圓	二百圓

▲各教育期の必須費目（寄宿、下宿料をも除ける）を概算すれば左の如し、但し「幼稚園」及「研究科」を除くこと前項の如し。

義務教育（説明は前々項に同じ）	約百圓	初等教育（同上）まで	約百七十圓
中等教育（同上）まで	約四百二十圓	高等教育（同上）まで	約六百七十五圓
合計	約九百二十圓		

右の如くにして、若し、幼稚園、女子大學研究科を加へば、前後二十年間の必須學費の合計は、

約一千百十五圓

を要す。尤もこは、再三云へる如く、必須の費用のみなれば、辨當、風呂敷、往復費、學校臨時費の如き種目を算せば前記の額以上に上るは勿論のことゝす一女子をして、相當の人物たらしむる豈に容易ならずとせんや。
若し地方より出でゝ、寄宿下宿をなして修業などせば其學費は左の如き多額に上らん（高等女學校以上）

		寄宿	下宿
高等女學校	最多額	六百三十五圓	八百圓
	最少額	五百五十圓	五百八十圓
女子大學本科	最多額	四百八十五圓	五百八十五圓
	最少額	四百三十五圓	四百二十五圓
合計	最多額	千百二十圓	千二百八十五圓
	最少額	九百八十五圓	千五圓

但學校用具費をも加算す

▲特殊學校　此外裁縫、刺繡、割烹の如き實科に志すもの、或は音樂、繪畫、彫刻其他を修めんとするものの等もあるべし。今一々之を記するは極めて煩なれば、唯だ其中の重なるもの二三を左に記載すべし。

音樂（東京音樂學校）　年齡十四年以上、學科は豫科一年、本科三年、研究科二年とす、費用中等教育に準じ、外に多少の增加あるべし。

美術（女子美術學校）　本科、普通科各三年、高等科一年乃至二年、費用は高等女學校と大學の中間なるべし。

語學（女子英語塾）　年齡十五年以上中等教育の卒業生は入學し得べし、修業年限は三ヶ年

而してまた小學時代より特殊教育を施すは華族女學校にして、大要左の如し。

初等小學三年、高等小學三年、初等中學三年、高等中學三年、各學科通じて十二年にして、十八九歳を以て卒業し得べし。

東京女學校一覽

女子敎育が近年非常なる長足の進步をなし、之が機關たる公私の女學校にして大は彪然たる女子大學より小は編物、裁縫の傳習所に至るまで數へ來らばその幾十百なるを知らず、此等多數の學校の中にはまゝ良好ならざるものも尠きに非ざれば、漫然就學して他日の不利益を釀すとなしと云ふべからず、昔時は師を擇びて學に就きたりと云へば、今日は學校を撰擇するとの術且ならざるを知るべし、さて概して言はゞ官公立に係るものはその設備比較的完全なれども兎角形式に流れて眞摯ならざるの缺點あり、之に反して私立は比較的設備は不完全を免れ難しと雖も校主敎師の誠實熱心なる所あり內容に於てその不足を償ふ傾きあるは喜ぶべし。

偖て私立にても文部省制定の設備準則に適へば高等女學校と稱し得るは勿論にして、三輪田高等女學校、跡見女學校、東京高等女學校、女子大學附屬高等女學校の如き是れなり、三輪田高等女學校は眞佐子刀自の設立に係り、東京高等女學校は棚橋絢子刀自の監理に屬すれば、共に官立私立の長所を幷せ得たる趣きありて先づ完全なる女學校と謂ふも溢美にあらず、女子大學附屬高等女學校は時世の風潮に乘じて生れたるものなれば、前二校が國粹なるに反してその歐風的なるは疑ひなけれん、又三輪田、棚橋兩女史と相並で巾幗敎育家の老成は跡見花蹊女史なるが、その經營になれる跡見女學校は最も古く、彼の女學生の袴を附けたるは實に此校を以て嚆矢なりとす、從來跡見學校と共に當代多くの名流夫人を出したるは私立にて東京女學館、明治女學校、英和女學校等なるが、官公立にては先づ華族女學校及女子高等師範學校なりとす、下田歌子女史の實踐女學校の如きは日尙ほ淺きに拘はらず成績は良好なるよし、津田梅子女史の手に成れる女子英學塾の卒業生が無試驗にて敎員となる特典を享有せるは同塾の特色と稱すべし、畢竟同塾にては英學を組織的に敎ゆるとの事社會の認識する處なればなり。

偖又技藝の方面にては裁縫、編物、造化、刺繡に關しては共立女子職業學校に及ぶものなく、繪畫、彫刻は女子美術學校（弓町）尤も評判よく、東京裁縫女學校通稱渡邊學校は創立以來幾千の小學裁縫敎師を出し殊に和服裁縫を以て優り、和洋裁縫女學校（堀越）は日尙ほ淺きも洋服裁縫を以て推さる、其他それ〳〵特色あるべきも一々詳言するの暇なければ、左に重なる女學校を一括して比較に便せり、父兄幷に生徒はよろしく然るべき學校を尋ねて就學せらるべし。

高等普通女學校の部

◎女子高等師範學校附屬高等女學校　（官立）

▲所在地及校長　本鄕區湯島三丁目、主事篠田利英

▲目的　女子高等普通教育の方法を研究し女子高等師範學校の希望者をして女子教育の方法を練習せしむるに在り

▲學科　本科、專攻科は第一部（數學理科を主とするもの）第二部（國語英語を主とするもの）に分つ

▲修學年限及學年　本科五ヶ年、專攻科三ヶ年

▲入學資格　本科に入るものは尋常小學卒業以上の學力を要し專攻科に入るものは本科卒業者或は之と同等の學力を要す

▲學費　授業料本科二圓、專攻科二圓半

▲摘要　定員は本科三百名、專攻科百名なり

◎東京府第一高等女學校　（官立）

▲所在地及校長　淺草七軒町二、渥美銳太郎氏

▲目的　女子に必須なる高等普通教育を施すに在り

▲修業年限及學年　五ヶ年、四月一日に始り翌年三月卅一日に終る

▲入學資格　高等小學第二學年を卒りたるもの若くは之と同等以上の學力を有せる年齡滿十三年以上のもの、但し二年級以上は年齡學力當該學年に相當のもの

▲學費　授業料一ヶ月一圓八十錢

◎東京府第二高等女學校　（官立）

▲所在地及校長　小石川竹早町、林吾一氏

▲摘要　凡て第一高女學校に同じ

◎東京府第三高等女學校　（官立）

▲所在地及校長　麻布北日ヶ窪町、小林盈氏

▲摘要　凡て第一高等女學校に同じ

◎學習院女子部　（官立）

▲所在地及校長　麹町永田町、部長下田歌子女史

▲目的　皇后陛下の令旨を奉じ彝倫を本として智識を發達せしめ高尙の性情を養ひ身體を强壯ならしめ上流社會の賢母良妻たるべきものを陶冶するにあり

▲學科　小學科（初等、高等）中學科（初等、高等）別科（年齡長じて普通の學科を修むる暇なきもの丶爲に二三の通科を授く）專修科（高等中學科卒業生にして尙ほ高等の學科を修めんとする者に授く）

▲修業年限及學年　小中學科共に初等三年高等三年通じて十二年、專修科二ヶ年、四月一日に始り翌年十二月卅一日に終る

▲入學資格　年齡滿六年以上滿十八年以下の華族の女子にして體質修學に堪へ得べきもの

▲學費　月謝中學科金二圓乃至三圓、高等小學科金一圓五十錢乃至三圓、初等小學科金一圓乃至三圓

▲摘要　士族平民の女子と雖も身分ある者は入學するの優

宜あり

◎三輪田高等女學校

▲所在地及校長　麹町四番町、三輪田眞佐子女史

▲目的　女子に必須なる高等普通教育を施し、最も力を眞妻賢母たるべき實力の修養に盡くすに在り

▲修業年限及學年　五ヶ年、四月一日に始り翌年三月卅一日に終る

▲入學資格　年齡滿十二年以上にして高等小學第二年級の課程を修めたるもの

▲學費　入學試驗料五十錢、入學金二圓、月謝二圓

▲摘要　校主眞佐子女史が多年家塾を開きて女子を教育し經驗上より、眞に完全なる女子を作らんには必ず身を以て感化の任に當り一種の學風を起すに若かざるを悟り在來の家塾を擴張したるものなれば官立の長所と私立の優所を合せ得たるは唯一本校あるのみ

◎東京高等女學校

▲所在地及校長　芝三田四國町、棚橋絢子女史

▲目的　女子に須要なる高等普通教育を施すに在り

▲修業年限及學年　本科四ヶ年、補習科一ヶ年、技藝專修科二ヶ年

▲入學資格　高等小學二學年の課程を卒へたる年齡十二歲以上のもの、補習科は本科卒業生若しくは之と同等以上にして年齡十六歲以上のもの、技藝專修科は高等小學二學年修業以上のもの

▲學費　束修一圓、月謝本科及技藝專修科二圓、補習科二圓五十錢

◎女子大學附屬高等女學校

▲所在地及校長　小石川高田豐川町、成瀨仁藏氏

▲目的　高等女學校規則に準據して生徒を養成するに在り

▲修業年限及學年　五ヶ年

▲入學資格　年齡十二歲以上にして高等小學二學年の課程を卒へ在學校長の證明書を入學願書に添へて出す者は無試驗にて一學年級に入學を許し、又二學年以上に入學せんとするものは同程度の高等女學校より轉學する者の外凡て入學試驗を要す、轉學の場合には前在學校長の證明書を要す

▲學費　定期受驗料一圓、臨時受驗料一圓五十錢、入學料二圓・一ヶ年授業料二十二圓

◎跡見女學校

▲所在地及校長　小石川柳町、跡見花蹊女史

▲目的　本邦固有の女德を養成し且つ日常必要なる學藝技術を教授し、生徒をして精堅質實を旨とし奢侈華美に流れざらしむるに在り

▲學科　本科の外に別科(寄宿生をして適宜に學習せしむ)補習科(卒業生をして必須なる學術を補習せしむ)選科(補習の中に設く)あり

▲修業年限及學年　本科五ヶ年、補修科一ヶ年、四月六日に始り翌年三月廿一日に終る

▲入學資格　高等小學年を卒へたる者は本科一學年へ、又高等小學卒業生は本科第三學年へ無試驗入學を許す

▲學費　月謝本科三年以上三圓、二年以下一圓半、補習全

科三圓中、別科選科とも種類に依て多少の相違あり、又寄宿舍に入るものは一ヶ月舍費一圓、食費六圓中

▲摘　要　舍則は嚴正にして寄宿舍制度の模範とするに足る寄宿生の爲めに厚誼會と云へる普恐會あり、又校内に慈善箱を備へ生徒の不用品を集め育兒院或は養育院へ寄送す

◎東京女學館

▲所在地及校長　麴町虎の門内、土方久元伯

▲目　的　女子敎育奬勵會の主旨に基き歐米貴婦人に同等なる佳良の敎育及家事の訓練を敎授するに在り

▲學　科　普通科（高等女學校に準す）高等科（普通科卒業後進で高等の學科を修むる者の爲に設く）

▲修業年限及學年　普通科五ヶ年、高等科二ヶ年、四月一日に始り翌年三月卅一日に終る

▲入學資格　年齡十二歲以上にして高等小學二學年の修業あるものは普通科へ入學を許す

▲學　費　束修三圓、月謝高等科三圓中、普通科三圓、

▲摘　要　寄宿舍の設備あり

◎實踐女學校

▲所在地及校長　豐多摩郡澁谷村常盤松御料地、下田歌子女史

▲目　的　本邦固有の女德を啓發し日進の學理を應用し勉めて現今の社會に適應すべき實學を敎授し賢母良妻を養成するに在り

▲學　科　本科、補習科（本科卒業後會は諸學科を專修するものゝ爲に設く）特別科（高等の數授を受くるものゝ爲に設く）あり

▲修業年限及學年　本科五ヶ年、補習科二ヶ年、四月一日より翌年三月卅一日迄

▲入學資格　高等小學二學年を修業せしもの若しくは之と同等以上の學力あるもの

▲學　費　月謝二圓、入學料一圓、寄宿生は食費五圓中、舍費一圓中、諸備費十錢合計一ヶ月七圓十錢

▲摘　要　寄宿舍は家族的にして能く整頓し又赤貧困なる女子の爲に貸費の制あり、本校は帝國婦人協會の所轄なり

◎日本女學校

▲所在地及校長　本郷龍岡町、西澤之助氏

▲目　的　我邦固有の婦德を發揮し併せて須要なる高等普通の智識を養成するにあり

▲學　科　豫科、本科、補習科、家政科、專修科、專攻科あり

▲修業年限及學年　豫科二ヶ年、本科五ヶ年、補習科一ヶ年、家政三ヶ年、專修科二ヶ年、專攻科三ヶ年、四月一日に始り翌年三月卅一日に終る

▲入學資格　豫科一年級は尋常小學卒業者、本科は高等小學二學年修業者、補習科は本科卒業生に限る、家政科は高等小學卒業者、專修科は高等小學二學年修業者、專攻科は本科卒業生、師範學校卒業生、修業年限五ヶ年の官私立高等女學校卒業生若くは入學試驗に合格者

▲學　費　月謝豫科八十錢、本科家政科補修科二圓、專修科一圓中、專攻科二圓中、束修豫科五十錢、其他一圓

▲摘要　時々名士の科外講演を聞く

◎成女學校

▲所在地及校長　麹町下二番町、嘉悦孝子女史

▲目的　女子に高等普通教育を授け進歩的賢母良妻を養成するにあり

▲學科　本科（甲種英語を課するもの、乙種英語の課せざるもの）高等科、補習科、專修科とす

▲修業年限及學年　本科五ヶ年、高等科三ヶ年、補習科二ヶ年、專修科二ヶ年

▲入學資格　他の高等女學校に準ず

▲學費　一學年本科及補習科二十二圓、高等科二十七圓半、技藝專修科十六圓半、家事專修科二十二圓

◎青山女學院

▲所在地及校長　豐多摩郡澁谷村、本多庸一

▲目的　女子に須要なる教育を授け基督教に基き人格の養成を計り家庭及社會に有用なる淑女を養成するにあり

▲學科　豫備科、高等女學科、高等英文科、高等歷史科とす、又隨意科あり

▲修業年限及學年　豫備科三ヶ年、高等女學科五ヶ年、高等英文科及高等歷史科各三ヶ年、四月一日に始り翌年三月卅一日に終る

▲入學資格　豫備科は尋常小學卒業生、高等女學科は高等小學二年を修了せしもの、高等英文科及高等歷史科は高等女學校を卒業し且つ英語の力あるもの

▲學費　束修一圓、月謝豫備科七十錢、高等女學科一圓二十錢、高等英文科及高等歷史科各一圓八十錢、寄宿舍へ入るものは食費四圓半、舍費五十錢を要す

◎女子學院

▲所在地及校長　麹町上二番町、矢島楫子女史

▲目的　淑良なる女子を養成するにあり

▲學科　他の高等女學校に同じ

▲學費　束修二圓、月謝二圓、寄宿舍に入るものは食費五圓を要す

◎帝國女學校

▲所在地及校長　神田錦町三丁目、永井直吉氏

▲目的　女子に必要なる普通中等の學術を授け女子の性情に適切なる美術的技能を養成し、且つ各種女學校の教員を養成するに在り

▲學科　普通女學部（高等女學科、補助科）美術部及工藝部（普通科、本科、研究科）教員養成所（前期、後期）

▲修業年限及學年　普通部（高等女學科四ヶ年、補習科一ヶ年）美術部及工藝部（普通科、本科共に各二ヶ年）教員養成所（前期、後期各一ヶ年）

▲學費　入學金一圓、月謝普通女學部一圓五十錢、本科、研究科各二圓、教員養成所前期一圓半、後期二圓寄宿舍に入るものは食料六圓、舍費六十錢

▲摘要　通學生の設けあり何人にても隨意聽講することを得

授業料二十錢

◎日本正則女學校

▲所在地及校長　神田小川町、烏海ひで子女史

▲目的　女子に必須なる高等普通教育を授け女子の德性を涵養するにあり

▲學科　本科、高等科、裁縫專修科（普通科、高等科）あり

▲修業年限及學年　本科四ヶ年、高等科一ヶ年、裁縫專修科二ヶ年

▲入學資格　本科は高等小學第二年修業せしもの、高等科は本科卒業と同一の學力を有するもの

▲學資　入學金五十錢、月謝本科一圓半、高等科二圓、裁縫科一圓、寄宿舍に入るものは食料五圓、舍費一圓半を要す

◎興風女學校

▲所在地及校長　神田駿河臺袋町、山田倉太郎氏

▲目的　女子は須要なる高等普通の學藝を授け婦德を養ふにあり

▲學科　本科、專修科、隨意科

▲修業年限及學年　本科三ヶ年、專修科二ヶ年

▲入學資格　高等小學第二年修業せしもの

▲學費　入學金二圓、月謝本科二圓、專修科一圓半、隨意科（點茶及挿花各五十錢、音樂七十錢）寄宿舍に入るものは食料五圓半舍費一圓半

◎高等女子實修學校

▲所在地及校長　[illegible]町四番地、山脇房子女史

▲目的　女子に必須なる高等普通教育を施すに在り

▲修業年限及學年　三ヶ年、四月一日に始り翌年三月末に終る

▲入學資格　高等小學四年卒業生、又は高等女學校二學年修了せるもの若くは之と同等以上の學力あるもの

▲學費　入學金一圓半、月謝一圓半

◎東洋英和女學校

▲所在地及校長　麻布東鳥居坂町、マイラ、アビー、ヴァーセー女史

▲目的　キリスト教主義を基とし日常必須なる諸科を教授し才德優良なる婦女子を養成するに在り

▲學科　豫科、本科、高等科とし別に幼稚科を置く

▲修業年限及學年　豫科三ヶ年、本科四ヶ年、高等科二ヶ年、幼稚科四ヶ年

▲入學資格　豫科は尋常小學卒業生若くは之と同等の學力を有するもの、本科へ入學者は相當の試驗を要す

▲學資　入學金二圓、月謝豫科及幼稚科一圓、本科一圓三十錢、高等科一圓五十錢、寄宿舍に入るものは食料四圓、雜費八十錢を要す

▲摘要　メソヂスト派に屬し土曜日を休み日曜日は教會堂にて說教あり

◎立教女學校

▲所在地及校長　京橋區明石町、小林彦五郎氏

▲目的　女子の身體上並に精神上の發育を完全圓滿ならしむるにあり

▲學科　本科、研究科、家政裁縫科

▲修業年限及學年　本科五ヶ年、研究科二ヶ年、家政裁縫科二ヶ年、四月に始り翌年三月に終る

▲入學資格　高等小學二年修業せるもの若くは之と同等の學力あるもの本科一年級に入る、本科五年級卒業生と同等の學力あるものは研究科第一年及家政裁縫一年級に入る、人の妾たるものは入學を許さず

▲學資　入學金一圓、月謝各科共各二圓、寄宿舍に入るものは食費五圓、舍費五十錢

▲摘要　校内に圖書館あり生徒の閲覽に供す

◎普連土女學校

▲所在地及校長　芝區功運町、海部忠藏氏

▲目的　女子に普通の學藝を教授し智識を研磨し道義を啓發し身體を健全にし智德體の三育を實踐的に施行するにあり

▲學科　豫科、本科、高等科

▲修業年限及學年　豫科四ヶ年、本科五ヶ年、四月始り翌年三月終る

▲入學資格　入學試驗を要す

▲學費　入學金二圓、月謝豫科一圓、本科一、二、三年二圓三十錢、四、五年二圓五十錢

◎女子語學校

▲所在地及校長　京橋區築地明石町

▲目的　クリスト主義にして女子に必須なる高等普通の學科を授け、女子自ら能力を養成し將來國民の賢母良妻となる責を盡すに在り

▲學科　本科、豫科、選科、專修科、外國普通科とす

▲修業年限及學年　本科及豫科各四ヶ年、外國普通科（佛科十ヶ年、英獨科各九ヶ年）毎年四月に始り翌年三月末日に終る

▲入學資格　本科に入るものは高等小學卒業生若くは之と同等の學力あるもの

▲學費　束脩二圓、月謝豫科尋常五十錢、高等一圓半、本科二圓、外國語科一圓半、專攻科二圓、選科五十錢

◎明治女學校

▲所在地及校長　北豐島郡巣鴨村、吳くみ子

▲目的　汎く女德を發育するを旨とし學科藝術の中凡て女子の教育に必要なるものを授け卒業者をして淑女良妻賢母たらしめんとするにあり

▲學科　普通、豫科、專修科に別つ

▲修業年限及學年　普通科三ヶ年、豫科一ヶ年、專修科三ヶ年、

▲入學資格　他の高等女學校に準ず

▲學費　束脩二圓、月謝豫科普通科八圓、專修科十圓

◎淑德女學校

▲所在地及校長　小石川表町、黑田眞洞氏

▲目的　我國固有の國風によりて女子の淑德を養成し并せて女子に必用なる學術技藝を授け日新の智識と實用の才とを養ふに

あり

▲學科　正科及選科とす別に手藝專修科あり

▲修業年限及學年　正科選科各四ヶ年、專修科二ヶ年、每科四月に始り翌年三月に終る

▲入學資格　高等小學二年修業せしもの、若くは之と同等の學力ある十四歳以上の者

▲學費　入學金一圓、月謝正科一圓半、選科一圓三十錢、手藝專修科一圓、寄宿舍に入るものは賄料五圓半、舍費一圓

◎高等女子英佛學校

▲所在地及校長　神田仲猿樂町、オギスチン、ウロセフ女史

▲目的　本科、專科(佛語、英語)

▲修業年限及學年　六ヶ年、四月より始り翌年三月に終る

▲入學資格　尋常小學卒業生若しくは之と同等以上の學力あるもの、專科は此限りに非ず

▲學費　入學金一圓、月謝三年級迄一圓半、四年級より二圓專科外國語一科に付二圓

▲摘要　寄宿舍は十七歳未滿のもの限り入舍せしめ食費和食五圓、和洋折衷八圓、洋食十五圓、外に舍費實費を要す

◎駿河臺英和女學校

▲所在地及校長　神田駿河臺袋町、キダー女史

▲目的　基督主義によりて英語學及和漢普通の學科を授け優美雅温なる貴女を養成するにあり

▲學科　豫科、正科の二とす

▲修業年限及學年　豫科四ヶ年、本科四ヶ年

▲入學資格　年齢十三年以上にして高等小學卒業者若くは之と同等の學力を有せるもの

▲學費　入學金一圓、月謝本科一圓、豫科六十錢 英語を修するときは一圓、寄宿舍に入るものは食費四圓を納むべし

◎靜修女學校

▲所在地及校長　小石川江戸川町、渡邊筆子女史

▲目的　基督教主義にして女子の德性を涵養し自ら資ふるに必要なる學藝を授くるに在り

▲學科　普通科及高等科とす

▲修業年限及學年　普通科四ヶ年、高等科二ヶ年

▲學費　束修二圓、月謝二圓、寄宿舍に入るときは食費六圓、舍費五十錢

▲摘要　寄宿舍は家庭に代つて生徒を監督すと云ふ

専門女學校の部

◎日本女子大學校

▲所在地及校長　小石川高田豐川町、成瀨仁藏氏

▲目的　我邦の女子に適實なる高等學藝を授け日進の社會に適れて其職務を完ふすべき淑女、貞妻、賢母を養成するにあり

▲學科　豫科(普通、英語)撰科、本科(家政部、文學部、教

育部、體育部、軍備部、音樂部、理化部）

▲修業年限及學年　本科研究科共二三ヶ年、英語科二ヶ年、普通科一ヶ年、四月一日に始り翌年三月卅一日に終る

▲入學資格　本校附屬高等女學校卒業生若しくは修業五ヶ年以上の官公私立高等女學校及師範校卒業生は無試驗、然らざるものは入學試驗を要す

▲學費　入學金二圓、授業料一學年二十七圓半、校費一學年五圓半、定期受驗料一圓半、臨時受驗料二圓、特待生の設けあり

▲摘要　進歩せる西洋の家族制度に則れる寄宿舍あり（食費六圓、寮費一圓）毎月數回朝野諸名家の科外講演あり

◎女子高等師範學校　（官立）

▲所在地及校長　本鄕湯島三丁目、高嶺秀夫氏

▲目的　師範學校女子部及高等女學校の教員たるべき者を養成し、兼て女子普通教育及幼兒保育の方法を研究するに在り

▲學科　文科、理科、技藝科とす、又研究科（本校所設の學科目中一科又は數科目を專攻せんとする者の爲に設く）選科（文科の國語、漢文、歷史、地理、理科の地文學、數學、物理、化學、博物、技藝科の家事、習字、圖畫の中一科目若くは數科目を選びて學修せんとするもの丶爲に設く）專修科（女子部師範學校、高等女學校教員の缺乏を充たす爲めに特別の必要ある場合に開く）あり

▲修業年限及學年　四ヶ年、四月一日に始り翌年三月卅一日に終る、研究科は二ヶ年以内、選科は二年乃至四年、專修科は二ヶ年

▲入學資格　（一）身體健全品行方正にして教師たるに適當と認むるもの（二）女子師範學校師範學校女子部修業年限四ヶ年の官立高等女學校卒業生及之と同等の學力を有するもの（三）年齡十七年以上二十二年未滿にして夫を有せざるもの、以上の資格を有する者に就き地方長官之を薦擧し、學校長其中より選拔す、其外試驗の上入學を許さる丶ことあり

▲學費　官費

▲摘要　專修學には自費生あり、又募集の期限一定せず

◎東京府女子師範學校　（官立）

▲所在地及校長　小石川竹早町、林吾一氏

▲目的　師範教育會に依り東京府小學校教員を養成するに在り

▲學科

▲修業年限及學年　本科三ヶ年、四月始り翌年三月終る

▲入學資格　（一）身體健全品行方正にして小學教員たるの志操確實なるもの（二）東京府に本籍を有し若しくは全戶寄留のものにして家事に係累なきもの但し當分の內は全戶にあらざる寄留者も入學し得（三）尋常小學校准教員免許狀を有し、若くは之と同等以上の學力を有するもの（四）十五年以上二十年未滿のもの但し特別の事情あるときは二十五年未滿のもの、以上四項の合格者

▲學費　現品又は現金を以て支給せらる

▲摘要　生徒に第一種郡市長の薦擧に係るもの、第二種直に學校に出願するものとあり

◎東京音樂學校　（官立）

▲所在地及校長　上野公園地、高嶺秀夫氏

▲目的　汎く音樂を教授し及攻究するに在り

▲學科　豫科、本科、研究科、師範科、選科とす

▲修業年限及學年　豫科一ヶ年、本科三ヶ年、研究科二ヶ年、甲種師範科(中等學校教員)三ヶ年、乙種師範科(小學教員)一ヶ年、九月十一日に始り翌年九月十日に終る、甲種師範科は四月一日に始り翌年三月三十一日に終る

▲入學資格　豫科年齡十四年以上にして入學試験科目(國語、日本地理歴史、算術、英語、唱歌、體操)に合格するもの、本科第一年は豫科卒業生若くは之と同等以上の學力を有するもの、研究科は本科卒業生中學術優等にして將來進歩の見込あるもの、師範科は滿十七年以上にして甲種は修業年限四年以上の高等女學校卒業生にして試問(唱歌、國語若くは英語)體格に合格したるもの、若くは之と同等以上の學力を有するもの、乙種は高等小學卒業生にして體格及唱歌の試驗に合格したる者、若くは同科以上の學力を有する者

▲學費　一學年 豫科十五圓、本科二十圓、選科十圓乃至五十圓

▲摘要　研究生は學術研究上に要する實費を補助し、又科費を支給せらる、甲種師範學生には一ヶ月六圓乃至八圓の學費を支給せらるべし

◎共立女子職業學校

▲所在地及校長　神田一橋通町、手島精一氏

▲目的　女子に適應せる技藝職業並に必要なる學科を授く

▲學科　甲科(二科以上)乙科(一科に限り選修)に分つ、術科(裁縫、編物、刺繍、造花、圖畫)の外に學科を合せ修むるものを本科生とし、術科のみを修むるものを選生とす

▲修業年限及學年　甲科三ヶ年、乙科二ヶ年、四月一日に始り翌年三月卅一日に終る

▲入學資格　甲科は年齡十二年以上にして高等小學を卒業したるもの、乙科は年齡十五年以上にして國民教育を了りたるもの

▲學費　甲科一學期二十一圓六十錢、乙科一學期十五圓六十錢、束修甲科一圓半、乙科一圓、寄宿舍に入るものは會費食料とも六圓半

▲摘要　製作品は三越吳服店にて販賣の勞を採る、又宮內省より御用を命せらるゝことあり、毎年展覽會を開く、本校內に割烹科、裁縫教員養成所、造化別科生の設けあり

◎女子美術學校

▲所在地及校長　本郷弓町二丁目、佐藤靜子女史

▲目的　女子の德性智識を涵養し兼て女子に適當なる優美の藝術を教授し、內に在ては良妻賢母たり外に處しては文明を稗補するの技術家及教育家たるものを養成するに在り

▲學科　日本畫科、西洋畫科、彫塑科、蒔繪科、刺繍科、編物科、造花科、裁縫科に分ち各本科、選科の別あり

▲修業年限及學年　各科共に本科は普通科三ヶ年、高等師範科不定、高等科二ヶ年なり、又選科は普通科一ヶ年乃至三ヶ年、高等科一ヶ年乃至二ヶ年、編物科に限り五ヶ月速成科を置く、四月一日に始り翌年三月卅一日に終る

▲入學資格　本科普通科高等小學四年卒業者、本科高等科は本科普通科卒業生及府縣立女學校卒業若くは之と同等以上の學力を有

し實技の試驗に合格するもの、選科普通科は尋常小學卒業生にして十四年以上、選科高等科は選科普通科卒業生

▲學　費　入學金二圓、授業料一學年本科選科共普通科二十四圓、高等科三十圓、寄宿舍に入るものは宿料月七圓を要す

◎女子工藝學校

▲所在地及校長　豐多摩郡澁谷村常盤松御料地、下田歌子女史

▲目　的　女子に適當なる工藝を授け並せて修身齊家に必要なる實業を修めしめ能く自營の道を立つるに足るべき教育を施すにあり

▲學　科　本科、專科、撰科、補習科とす

▲修業年限及學年　本科、專科、補習科各二ヶ年、四月一日に始り翌年三月卅一日に終る

▲入學資格　高等小學二學年修了せしもの若くは之と同等の學力を有するもの、專科は此限りにあらず

▲學　費　月謝本科一、二年及撰科一圓中、本科三年及補習科二圓、專修科の內幾能一圓、他七十五錢

▲摘　要　帝國婦人協會の所轄なれば寄宿舍其他略實踐女學校に同じ

◎第一女子技藝學校

▲所在地及校長　麴町飯田町四丁目、寺田勇吉氏

▲目　的　專ら普通なる家庭の女子として必要なる技藝學術を授くるに在り

▲學　科　本科、專修科の二とす

▲修業年限及學年　本科、專修科共一ヶ年

▲入學資格　高等小學二學年を修業したるもの、若くは之と同等の學力あるもの

▲學　費　月謝七十錢

◎第二女子技藝學校

▲所在地及校長　本所外手町開發小學校內

▲摘　要　第一女子技藝學校と共に東京市教育會の附屬にして總て同一なりとす

◎下谷女子技藝學校

▲所在地及校長　下谷坂本四丁目、主幹嘉悅孝子女史

▲目　的　女子をして日常必須の知識を得せしめ益々女德を進めて良妻賢母の素養を作り邦國をして圓滿なる家庭を以て滿たしめんことを謀るにあり

▲學　科　本科、專修科に分つ

▲修業年限及學年　本科、專修科共二ヶ年

▲入學資格　高等小學二學年を修めたるもの若くは之と同等以上の學力あるもの、專修科は一定の學力を要せず

▲學　費　月謝本科一圓、專修科六十錢

▲摘　要　救急療法、看護法、繃帶術の科外講演あり

◎日本女子美術學校

▲所在地及校長　本鄉駒込千駄木林町、島田文春氏

女子に對して普通高等の學術技藝を授け智德の涵養に力め良妻賢母

の要員を養す

▲目的　美術部（日本畫、西洋畫、彫刻、圖案）美術工藝部（裁縫、編物、造花）に分つ

▲修業年限及學年　美術部は普通科二ヶ年高等科二ヶ年研究科一ヶ年美術工藝部は普通科高等科研究科各一ヶ年

▲學費　月謝普通科一圓中、高等科及研究科各二圓

◎東京裁縫女學校

▲所在地及校長　本鄕東竹町、渡邊辰五郞氏

▲目的　和洋裁縫其他女子に必須なる技藝學術を敎授し、以て優良なる婦女子を養成するにあり

▲學科　本科、普通科速成科、高等速成科、普通洋服專攻科及隨意科を置く

▲修業年限及學年　本科二ヶ年、他は各出席日數百八十日以上尤も隨意科は此限りにあらず

▲入學資格　本科は高等小學二年修了せしもの、普通速成科は高等小學二年修了と同等以上の學力ある十七歳以上、高等速成科は本科若くは普通科卒業生及小學校裁縫科正敎員の資格あるもの、洋服專攻科は本校高等速成科卒業生

◎學費　入學金一圓、月謝普通速成科一圓半、高等速成科二圓、洋服專攻科三圓

◎和洋裁縫女學校

▲所在地及校長　麴町飯田町三丁目、堀越千代子女史

▲目的　女子の日常尤も須要なる和服の裁縫を主とし且つ家庭主義により生徒の品性を陶冶し、温良貞淑着實勤儉、將來一家の良妻賢母となりて善良なる家庭を作ると共に社會的女性たらしめんとするに在り、尙ほ更に文部省及東京府の裁縫科敎員檢定試驗を受けんとするものを養成す

▲學科　普通科甲科、普通科乙科、速成高等科、高等科洋服部、高等科和服部、中學科、試驗豫備科、別科とす

▲修業年限及學年　普通甲科一年半、普通乙科二年半、速成科八ヶ月中學科一ヶ年、高等科和服部四ヶ月、高等科洋服部十ヶ月

▲學費　束修各科一圓、普通甲科一圓二十錢、普通乙科一圓、中學科一圓四十錢、速成科一圓五十錢、高等科及試驗豫備科各一圓六十錢、

◎鳥海裁縫女學校

▲所在地及校長　神田小川町、鳥海ひで子女史

▲目的　本邦女子に適切なる和洋裁縫を敎授し兼て社會的德性を養成するに在り

▲學科　本科、速成科、高等科、補習科

▲修業年限及學年　本科一ヶ年、速成科六ヶ月、補習科六ヶ月、高等科六ヶ月、本科は四月始り、他は每年四月及十月の兩度に開始す

▲入學資格　本科十五歳以上高等小學修業の學力あるもの、速成科は十七歳以上高等小學四年卒業の學力あるもの、高等科は本校の本科及速成科卒業以上の學力あるもの、補習科は高等科卒業以上の學力あるもの

▲學費　入學金一圓、月謝本科一圓、速成科一圓半、高等科及補習科二圓

◎戸板裁縫女學校

▲所在地及校長　芝公園地十一號、戸板せき子女史

▲目　的　一般婦女子に裁縫術を教授し並せて裁縫專科教員たらんと欲する者に教授法を知得せしむるに在り

▲學　科　前期、後期に分つ

▲修業年限及學年　六ヶ月にして前期後期各五ヶ月とす、甲乙の二部に區別し甲部は每年一月に始り、六月に終り又七月に始り十二月に終る、乙部は每年四月に始り九月に終り又十月に始り翌年三月に終る

▲入學資格　年齡十五年以上の高等小學卒業者若くは之と同等以上の學力あるもの

▲學　科　束脩二圓、月謝一圓半

▲摘　要　平素品行方正にして成績優良なるものは優待生として月謝を免除す

◎女子裁縫高等學院

▲所在地及校長　神田一ツ橋通帝國教育會內、小出新次郎氏

▲目　的　裁縫教員を養成すると共に普通一般の女子をして日常必須なる裁縫術を授け兼て普通教育を施すに在り

▲學　科　本科、教員部普通科、教員部高等科、速成科

▲修業年限及學年　本科二ヶ年、教員部二ヶ年、速成科六ヶ月

▲入學資格　本科は年齡十三年以上の高等小學四學年卒業のもの、若くは之と同等の學力あるもの、教員部普通科は年齡十八年以上の高等小學卒業者にして且羽織までの裁縫を修業せしもの、教員部高等科は普通科修了生

▲學　費　束脩一圓、月謝本科一年一圓、二年一圓三十錢、教員部普通科一圓半、高等部一圓八十錢、速成科一圓半、

◎青山女子手藝學校

▲所在地及校長　赤坂區青山

▲目　的　女子に適切なる技藝を授け自立の道を得せしめ品行方正なる婦德を培養するに在り

▲學　科　專修部(裁縫、刺繡、彫刻の三科)普通部(普通科)

▲修業年限及學年　專修科五ヶ年、普通科三ヶ年、四月に始り翌年三月に終る

▲入學資格　高等小學三學年修業以上の學力を有し年齡十三年以上のもの

▲學　費　束脩一圓、月謝普通科一圓半、專修科一圓

◎東京技藝學校

▲所在地及校長　芝區三田四國町、棚橋女史

▲目　的　女子に須要なる技藝教育をなすに在り

▲學　科　普通科、選科、別科

▲修業年限及學年　各科何れも二ヶ年卒業、每年四月一日に始り翌年三月末に終る

▲學　資　入學金五十錢、月謝八十錢兩科兼修一圓二十錢

◎女子商業學校

▲所在地及校長　神田鍋町二丁目、和田垣謙三氏

▲目　的　女子をして堅實なる經濟思想、圓滿なる常識を涵養

實施せしむる爲めに適切なる職業教育を施し、家庭の整理者、獨立者として其本分を完ふする婦人を養成するに在り

▲學科　普通科(豫科、本科)高等科

▲修業年限及學年　普通科豫科一ヶ年、本科二ヶ年、高等科二ヶ年、速成科一ヶ年、四月より始り翌年三月に終る

▲入學資格　豫科は高等小學二年修業せるもの、本科は高等小學卒業生及び之と同等の學力あるもの、高等科は本科卒業生、又は高等女學校卒業生若しくは同等以上の學力あるもの

▲學費　入學金二圓、月謝豫科一圓半、本科二圓、高等科二圓半、速成科二圓

▲摘要　實用的染色並に配色法、割烹の科外教授をなすと云ふ

◎女子英學塾

▲所在地及校長　麹町區五番町、津田梅子女史

▲目的　女子をして專門的に英語學を研究せしむるに在り

▲學科　英語科を本科、師範科、選科の三に分つ

▲修業年限及學年　各科各三ヶ年とす、每年四月に始り翌年三月に終る

▲入學資格　本科及師範科は滿十六年以上の女子にして(一)修業年限四ヶ年以上の高等女學校卒業者若くは(二)專門學校入學者檢定の規則により修業年限四ヶ年以上の高等學校の卒業者と同等以上の學力を有するものと檢定せられたるものにして、英語の入學試驗に合格したるもの但し英語の學力のみ不十分なる者の爲には本塾特に二ヶ年以内の豫備科を設く

▲學費　入學金二圓、一學期(一ヶ年三學期とす)十圓、豫備科八圓

▲摘要　卒業生は無試驗英語教員となる特典あり、是れ私立學校中唯一本塾あるのみ

◎櫻井女塾

▲所在地及校長　本鄉向岡彌生町、櫻井ちか子女史

▲目的　女子をして專門的に英語を教授するに在り

▲學科　英語豫科、本科、高等科、隨意科(和漢文、裁縫、編物、ピアノ、オルガン)

▲修業年限及學年　豫科一ヶ年、本科二ヶ年、高等科一ヶ年

▲入學資格　高等小學卒業生若くは之と同等以上の學力ある女子

▲學費　束脩は英語科二圓、隨意科一圓、月謝本科豫科一圓半、高等科二圓半、裁縫科八十錢、編物科五十錢、和漢文科五十錢、ピアノ二圓、オルガン一圓

◎東洋女醫學校

▲所在地及校長　牛込市ケ谷河田町、鷲山彌生女史

▲目的　學說と實地の並行を同一にし女子に醫學を教授するに在り

▲學科　前期學科、後期學科に分つ

▲修業年限及學年　前期學科一ヶ年半、後期學科二ヶ年半

▲入學資格　年齡十六歲以上三十五歲以下にして高等小學卒業以上の學力を有するもの

▲學　　費　入學金三圓、授業料前期分三十圓、後期分三十六圓

◎産婆學校

▲所在地及校長　神田猿樂町水原産科病院內、水原漸氏
▲目　　的　産婆を養成し産婆に就き實地を研究せしむるに在
▲學　　科　解剖、生理、産婆學、實地演習、
▲修業年限及學年　一ヶ年卒業、四月及十月開始、
▲入學資格　高等小學生
▲學　　費　束修一圓、月謝一圓、寄宿舍費十錢、食費五圓

◎東京産婆講習所

▲所在地及校長　神田駿河臺袋町、濱田玄達氏
▲目　　的　主として純良篤實なる産婆を養成し將來の産婆の改良を圖るに在り、
▲學　　科　解剖、生理、産婆學、實地演習、
▲修業年限及學年　一ヶ年卒業、四月及十月開始
▲入學資格　高等小學卒業若くは之と同等の學力ある十七歳以上の女子
▲學　　費　入學金一圓半、月謝一圓、寄宿舍費、一圓半、食費四圓半、（給費を設く）

◎東京府教育會附屬教員練習所

▲所在地及校長　神田區神田橋外
▲目　　的　小學校の本科教員及專科教員を養成するに在り
▲學　　科　小學校本科教員科、小學校家事科教員科、小學校商業科教員科、小學校手工科教員科の四とす
▲修業年限及學年　本科教員科は豫科六ヶ月本科一ヶ年正教員養成科一ヶ年、家事科教員科は豫科六ヶ月本科及研究科各一ヶ年、商業科教員科は豫科本科各六ヶ月、手工科教員科は六ヶ月とす、四月若くは十月に開始し三月若くは九月終了す
▲入學資格　豫科は修業年限四ヶ年の高等小學卒業者又は之と同等以上の學力あるもの、本科は豫科卒業者又は之と同等以上の學力あるもの、研究科は家事科教員科卒業者又は之と同等以上の學力あるもの、正教員養成科は尋常小學校准教員免許狀を有する者又は之と同等以上の學力ある者、商業豫科は本科教員科の本科卒業者又は之と同等以上の學力を有するもの、商業本科は商業豫科修了者又は之と同等以上の學力あるもの、手工科は小學校本科正教員小學校准教員及尋常小學校本科正教員免許狀を有するもの又は之と同等以上の學力あるもの
▲學　　費　入學金五十錢、月謝本科教員科（豫科八十錢、本科一圓、正教員養成科一圓三十錢）家事科教員科（豫科八十錢、本科一圓、研究科一圓二十錢）商業科教員科六十錢、手工科教員科六十錢
▲摘　　要　本教員練習所卒業生は卒業すると同時に東京府小學校教員の資格を得るの例あり

◎女子音樂傳習所

▲所在地及校長　麴町九段上和洋裁縫女學校內、堀越千代子女史

▲目　的　專ら小學校音樂科教員を養成するに在り

▲學　科　甲種本科（小學校專科正教員）乙種本科（尋常小學校教員若くは幼稚園保姆）

▲修業年限及學年　三ヶ月

▲學　費　月謝本科一圓半、乙種本科一圓、樂器使用料三十錢、選科唱歌六十錢樂器八十錢二科兼修一圓二十錢

◎女子計算員養成所

▲所在地及校長　神田區裏猿樂町四番地

▲目　的　計算事務に必要なる學術を授け以て家計整理、銀行會社商店等の會計事務員たるべきものを養成するに在り

▲學　科　家計簿記、貯金銀行簿記、珠算、金錢取扱方

▲修業年限及學年　甲三ヶ年、乙五ヶ年、丙八ヶ年

▲入學資格　高等小學卒業生或は之と同等の學力を有するもの

▲學　費　月謝甲二圓、乙一圓半、丙一圓、兼修一圓、所費二十錢

◎成女學校料理法講習會

▲所在地　麹町區下二番町成女學校內

▲講習科　日本料理、西洋料理、支那料理

▲講習期限　十五週間、各科共約十五回卒業

▲講習費　一科二圓半、二科兼修三圓半、三科兼修五圓、每會料理費二十五錢內外

▲講　師　松本常次郞氏（日本料理）池戶鐵次郞氏（西洋料理）岡田表十郞氏（支那料理）

◎女子美術學校附屬料理法講習所

▲所在地　本鄕弓町女子美術學校內

▲講習科　日本料理科、西洋料理科、支那料理科

▲講習期限　三ヶ月、入學年三回願書差出期春季一月廿五日限、夏季四月廿五日限、秋季八月廿五日限

▲講習費　日本料理及西洋料理各三圓六十錢、支那料理二圓半、日西兼修七圓、日支兼修六圓、三科兼修九圓、材料實費一回二十錢內外

▲講　師　赤堀峯吉氏（日本料理）木村留吉氏（西洋料理）楊德山氏（支那料理）

◎女學校出身者の收入

女子大學を始め女子職業學校、女子美術學校、東京裁縫女學校其他女子高等師範東京音樂學校の卒業生にして地方女學校の招聘に應じて赴任する人々の月給額は大略左の如しと。

女子職業學校		自十七圓至二十圓
女子美術學校		自二十圓至廿二圓
東京裁縫女學校		自十五圓至廿二圓
日本女子大學校		自二十圓至卅二圓
女子高等師範（本科）		自三十圓至卅五圓
同　上（選科）		自廿五圓至三十圓
東京音樂學校（甲種師範）		自廿五圓至卅五圓
女子英學塾		自廿圓至廿五圓
女子計算員養成所		自五圓至十五圓
寫眞學校女子部		自廿圓至三十圓
女子體操音樂學校		自十五圓至廿圓
秋穗割烹教授所	○	自十二圓至廿圓
博愛看護婦會	○	日當五十錢以上
東京保姆養成所	○	自八圓至十五圓

右の中後段の○印ある分は何れも雇主方へ泊り込みにて月給（若くは日當）の外別に食費と云ふものあり。

五月號記事要目

（五月五日發行）

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁	…金二十錢
四册（三ヶ月分）……	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……	前金二圓八十錢

内（定刊數……十二册 / 增刊四回…一、四、七、十月價格同一）

郵稅	
一册	二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	割引 四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引 三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引 二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引 二十三圓

▲等級の位置〻切日等御照會次第御報可致候

註文規畧

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅九年四月十五日發行　第六卷第六號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

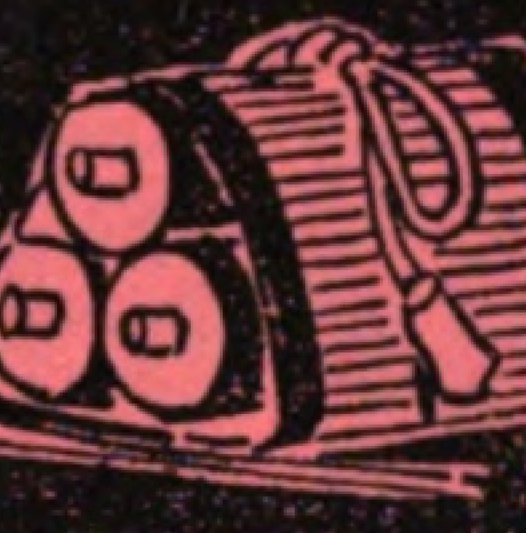
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番 千十八番

本局　二千六百二十番 三千二百二十九番

文界の新曙光

文章世界



第壹號賣切れ

第壹卷 **第貳號** 四月十五日發行 正價金貳拾錢 郵税貳錢

年刊十二冊◉外增刊發行◉菊判美本▲本文二百四十頁▲寫眞版
光澤紙刷四頁普通四頁水彩畫二枚挿入◉正價一冊貳拾錢郵税貳錢
四冊金七拾五錢八冊金壹圓四拾五錢十六冊金貳圓八拾錢外要郵税

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女（後付の一）

(後付の二)

毎編專門大家講話◎講話諸先生寫眞挿入

醫學博士 賀古鶴所先生
醫學博士 田代義德先生
醫學博士 筒井八百珠先生
醫學博士 長與稱吉先生
醫學博士 中濱東一郎先生
醫學博士 井上通泰先生
醫學博士 井上善次郎先生
醫學博士 大澤謙二先生
醫學博士 大澤岳太郎先生
醫學博士 呉秀三先生
醫學博士 栗本東明先生
ドクトル 富士川游先生
醫學博士 近藤次繁先生
醫學博士 淺川範彦先生
醫學博士 青山胤通先生
醫學博士 朝倉文三先生
醫學博士 佐々木政吉先生
醫學博士 木下正中先生
醫學博士 桐淵鏡次先生
醫學博士 木村德衛先生
醫學博士 北島多一先生
醫學博士 北里柴三郎先生
醫學博士 三浦守治先生
醫學博士 三輪信太郎先生
醫學博士 三輪德寛先生
醫學博士 三島通良先生
醫學 宮本叔先生
醫學博士 弘田長先生
醫學博士 森林太郎先生
醫學博士 瀬川昌耆先生

眼科衛生談(其二)……井上博士
衛生雜話……七件

第參編

口繪 緒方博士、富士川博士、三輪博士、井上博士、(肖像)

日本の室内空氣に就て……緒方博士
轉地療養の話(其三)……富士川ドクトル
小兒の病氣に就て二三の注意……三輪博士
小兒の衛生に就て……弘田博士
遺尿症に就て……朝倉博士
眼科衛生談……井上博士
衛生雜話……六件

第四編

口繪 朝倉博士、井上博士(肖像)

腸胃の話……井上博士
耳の攝生……岡田博士
乳兒の衛生に就て……緒方博士
狐憑とヒステリーとの關係……呉博士
眼鏡の話……井上博士
衛生雜話……六件

第五編

口繪 三輪博士、岡村博士(肖像)

創傷の話……三輪博士
神經の攝生に就て(其一)……呉博士
「チフテリア」の話……宮本學士
皮膚の衛生……岡村博士
雜錄……十三件

姙娠中の攝生……緒方博士
便秘の話……井上博士
雜錄……十六件

第八編

口繪 木村醫學博士 緒方醫學博士(肖像)

講話

婦人姙孕力の話(第一) 醫學士 伊庭秀榮先生
肝臓の話 醫學博士 木村德衛先生
分娩時の攝生 醫學博士 緒方正淸先生
色盲の話 醫學博士 井上通泰先生
小兒の身體上の監視幷に感冒の注意 醫學博士 瀬川昌耆先生

雜錄

○人工滋養品の話
(一)肉製及蛋白性滋養品
●刺戟作用を主とするもの●營養力を主とする物●可溶性蛋白粉●消化蛋白

本町三丁目 博文館

(後付の三)

女(後付の五)

受驗問答叢書全部完成

宮川大壽君編

第三十六編

新撰民法問答

全一册袖珍金文字入
正價金貳拾錢
郵税四錢

諸法律中最も浩瀚なるものは民法と爲す、疑問に富み、解釋に難く、記憶に便ならざるは人の知る所の如し、宮川氏の此著問題を撰ぶこと甚だ豊に之を說くこと最も簡明、而して之に詢あり、說に力あり、讀むに倦厭を生せず、容易に其理義に導くことを得、且つ之を記憶するに便なり、是れ改法者の良師友殊に受驗準備の爲めには其好顧問者たり、乃ち之を大方諸彥の坐右に薦む

左川編述 櫻桃增訂 ●一編 改訂增補 新撰日本地理問答

宮田修君編 ●二編 新撰日本歷史問答

武田櫻桃君編 ●三編 新撰世界地理問答

松原岩五郎君編 ●四編 新撰東洋歷史問答

寺崎留吉君編 ●一八編 新撰鑛物地質問答

德谷豐之助君編 ●一九編 新撰心理論理問答

上村貞子君編 ●二〇編 新撰和英文典問答

志岐守二君編 ●二一編 新撰農業要項問答

全部三十六册洋裝袖珍
紙皮金文字入上製
正價一册金貳拾錢郵税四錢宛

前金

●十册金壹圓八拾錢
●貳十册金參圓八拾錢
●卅六册金五圓四拾錢
▲郵税一册四錢宛

發兌元
東京市日本橋區
本町三丁目
博文館

女（後付の六）

長谷川誠也君編 ●五編 新撰西洋歷史問答

鷹野勇雄君編 ●六編 新撰國文問答

大田才次郎君編 ●七編 新撰漢文問答

竹貫登代多君編 ●八編 新撰算術問答

竹貫登代多君編 ●九編 新撰代數問答

竹貫登代多君編 ●一〇編 新撰幾何問答

武田權桃君編 ●一一編 新撰化學問答

寺田留吉君編 ●一二編 新撰物理學問答

寺崎留吉君編 ●一三編 新撰動植物學問答

木村定次郎君編 ●一四編 新撰地文天文問答

中村重造君編 ●一五編 新撰法制經濟問答

小野柘君編 ●一六編 新撰文官普通及裁判所書記試驗問答

永廻藤一郎君編 ●一七編 新撰倫理教育問答

森美文君編 ●二二編 新撰英話會話作文問答

相澤衎八君編 ●二三編 明治三十六年文官高等試驗答案集

濱田四郎君編 ●二四編 新撰商業要項問答

藤井憲君編 ●二五編 新撰獨逸文典問答

加野友次郎君編 ●二六、七編 新撰工業要項問答(上下二冊)

西村眞次君編 ●二八編 新撰作文問答

首藤環君編 ●二九編 新撰衞生生理問答

近藤正一君編 ●三〇編 新撰家事問答

法學士辻宏吉君編 ●三一編 新撰憲法行政法問答

太田法學士編 ●三二編 新撰商法問答

土屋法學士編 ●三三編 新撰國際公私法問答

石原法學士編 ●三四編 新撰刑法問答

清水法學士編 ●三五編 新撰民刑訴訟法問答

西郁貞君閲並序
河村吉之助君編並書
●初學手紙の文
正價參拾五錢
郵税六錢
全二冊大判和紙木版　紙數百枚

下田歌子女子著
坂正臣君書
●女子用文習字帖
正價八拾錢
郵税八錢
全二冊大判和紙木版　紙數百四十四枚

橘千蔭君著
●高等女子習字帖　烏丸帖
正價參拾五錢
郵税四錢
全一冊大判和紙木版　紙數二十八枚

橘千蔭君著
●假名習字帖　新百人一首
正價參拾錢
郵税四錢
全一冊大判和紙木版　紙數五十一枚

發兌元
東京日本橋區本町
博文館

大和田建樹君著
小野鵞堂君書
●明治女子書翰文
正價四拾錢
郵税四錢
全一冊大判和紙木版　紙數百枚

大和田建樹君著
巖谷一六居士書
●明治書翰文
正價參拾錢
郵税四錢
全一冊大判和紙木版　紙數壹百枚

吉田晩稼君著
●吉田晩稼　楷書千字文
賣價貳拾五錢
郵税四錢
全一冊半紙判和紙木版　紙數三十五枚

依田學海君著
巖谷一六君書
●新撰應用書翰
正價參拾五錢
郵税四錢
全一冊大判和紙木版　紙數八十五枚

女へ(後付の八)

紅葉山人　尾崎德太郎君遺著

紅葉全集

全部六冊總紙數五千六百頁全部完成

洋裝大判　總クロース　上製　金文字金模樣表紙

正價一冊壹圓八拾錢　小包送料一冊拾五錢宛

全部六冊正價金拾圓　全部小包料金八拾錢

麗、春日の如く、清、秋月の如きもの吾紅葉山人の文章也。山人一生を文章に托し、奇想縦横字々爽快を極めざるなし。曾て文壇革新の急先鋒となりて硯友社を創め、後群英を伴ふて藻社の名一世を壓す。山人が明治文學に寄與するの勞天下の齊しく知る所にして、仰いで以て泰斗と爲すは之が爲め也。今や山人逝て、文壇頓に寂々たり。山人の逝くや命也。而も山人の精神は萬古常に新也。蓋し山人の文章の如きは傳へて以て後代に貽し、長く河嶽に藏すべし、則ち親朋同人相謀りて十千萬堂を營み、凡そ山人が述作に係るものは、其長と短とを問はず、悉く之を網羅して完璧と爲し、名けて紅葉全集といふ。思ふに七寶の散りて點數ぜるは聯れて一環と爲すの美に若かず、全集分ちて六、其作年の順を追ふて之を收め、聊鑑みて江湖の文を愛し才を憐むの淑女紳士諸君に薦む。

目次

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女學世界定期增刊 女玉手箱

（明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可） 第六卷第六號 （明治卅九年四月十五日發行 每月一回五日發行）



（定價金貳拾錢）

（博文館印刷所印行）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊸
明治39年4月（第6巻第5号、第6巻第6号）

2008年7月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3382-6　C3321